

18は珪質岩製の大型削器類。両側縁に抉り状の整形を施し、下側縁に鋭利な縁辺をとどめる。19は微細剥離を有する剥片。背面左側縁に刃こぼれ状の微細剥離が見られる。

⑤石皿類 (20・21)

表面に磨り、敲き、凹みが見られる。

第4節 VII層検出遺構と遺物

1 VII層検出遺構と遺物の出土状況

VII層では屋代遺跡群②f区と②i区で土坑が8基(表89)検出されているが、遺物は出土していない。掲載した土器(図版407-102~130)は全て古墳時代~古代の遺構に混入していたものである。

2 VII層出土遺物

(1) 土器 (表90) (図版407)

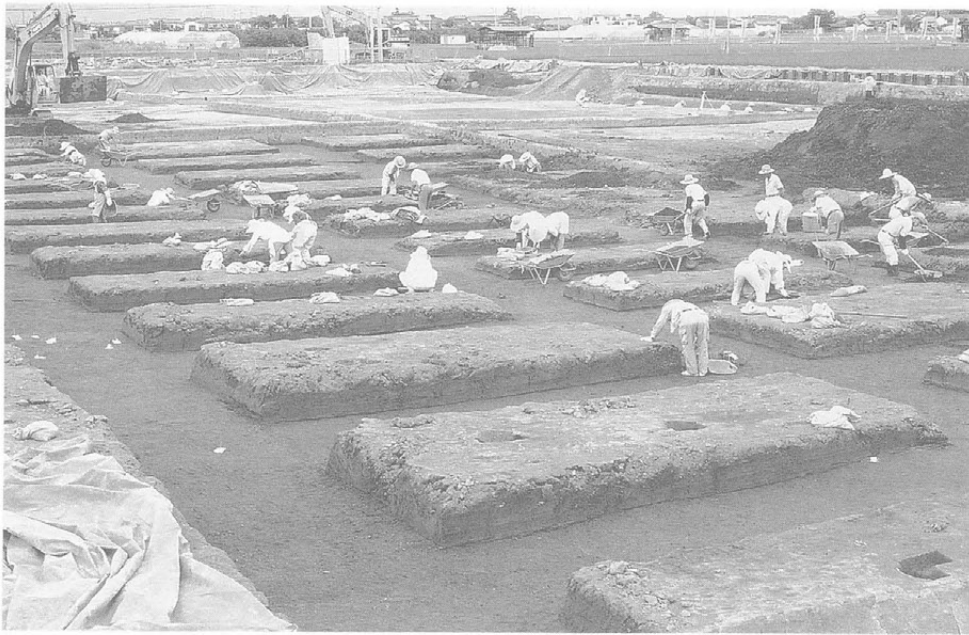
隆帯文土器の107は隆帯の上下を沈線で挟み、隆帯上には横方向の短線を加える。中ノ沢中相か。103は口縁に小さな突起を貼付し、隆帯上と同様の圧痕加える。隆帯が突起と接しないので中ノ沢新相か。106は隆帯の位置が口縁からだいぶ離れており、隆帯上のD字状圧痕とともに少々異相。佐野1式の範疇かと思われる104、111~114は、比較的狭い文様帯をもつ浅鉢らしいが、モチーフはよくわからない。114のモチーフは北陸方面との関連を考えるべきだろう。105は小形の精製土器で赤塗、弧線の内側は施文されるが欠損して不明である。

108は口縁部にB突起を模倣したかと思われる彫刻的な加飾をもつ浅鉢。上下を2条沈線で画した主要な文様帯は画面が広く、その上下の境界線から弧線を垂下させて入組文を構成する。これが接すれば大洞B2式のモチーフになるだろうが、そうはしていない。縄文帯の一角に境界線に接する三叉文を配し、全体としても入組文を意識した構図となっている。境界線より下はミガキで仕上げる。117~120は同一個体の可能性があり、口縁部で屈曲し体部が丸く張り出す。壺形になるのかどうか。体部は無文でミガキが顕著、口縁部には直線化した羊歯状文が描かれる。口唇部には単純な圧痕が付加され、所々に二山の突起が貼付される。大洞BC式に関連しそうだ。121~123も同一個体の可能性がある浅鉢。やはり羊歯状文が描かれ、口縁部の圧痕から小さな弧線が垂下する。B突起の模倣かと推測する。破片が小さく時期の判断は付かない。116を含めこれらの亀ガ岡式関連土器は、口縁部の装飾が本来の形態ではないので、在地製作の模倣品だと判断される。109と110も亀ガ岡式との関連が考慮される。全面に施文した浅鉢で楕円らしい構図と三叉文を組み合わせる。大洞C1式の弧線モチーフと関連があるのかどうか。102は口縁部が外傾して開き、体部が丸い壺で、体部の撚糸文が特徴的である。口縁部は4条の幅広い沈線で埋め、突起を付加して小波状とした口縁部には突起をつなぐ低い隆帯が貼付され、口端との間には1条沈線が突起をつないでいる。突起の直下は三叉状の空白部となる。内面には1条の凹線が突起をつなぐように巡り、突起直下は三叉状の凹部となる。内面の顕著なケズリが特徴的だ。大洞C2式の仲間新潟を含め東北方面からの搬入品の可能性もあろう。

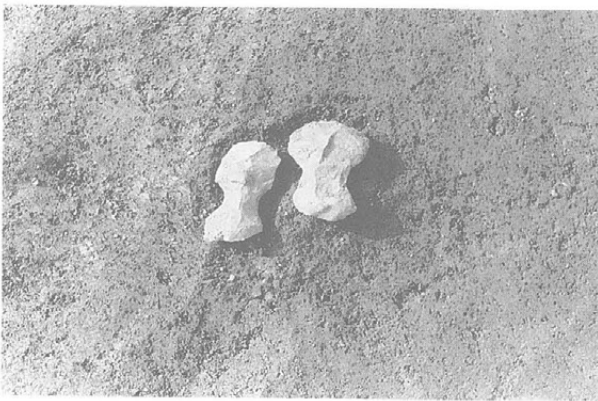
124は内面にかえりの付く蓋か。無文でミガキが顕著だが、御経塚式などにはない形態だ。125は口縁部が内屈する鉢で、赤塗。口縁部文様帯の上端と下端に1条の沈線を描き、口縁内面にも1条沈線を描く。女鳥羽川式であろう。129は工字文をもつ鉢または壺で、ミガキが顕著である。浮線文土器ではなく、大洞A式に関連するだろう。130は変形工字文をもち、その沈線は深く鋭角的に切り込まれる。浅鉢ではな

かろうか。長野盆地では最近類例が増加している。126～128は3条の沈線を持ち、内湾して立ち上がる器形である。口縁部に小さな突起をもつ。浮線文土器の甕か深鉢にしては器形が異様である。

なお、図は掲載しないが、加曾利B2式並行期前半の磨消縄文深鉢が1点出土している。



更埴条里遺跡J地区VII層掘り下げ風景



更埴条里遺跡F地区VIII層打製石斧出土状況



更埴条里遺跡J地区深掘りトレンチ検討風景

第9章 微化石と動・植物遺体の分析

第1節 縄文時代の動・植物相の復原

分析のねらい 屋代遺跡群の集落主体部は、北側を流れる旧千曲川によって形成された自然堤防上に立地している。このような場所を選択し、拠点的な大集落を営んだ背景はどこにあったのか。屋代遺跡群ではこの基本的な問題を遺跡調査の課題の一つとし、a 遺跡内外の自然環境の復元と人々の介入の様相の調査、b 各種原材料の調達の実態の解明、c 食物リストの作成、という具体的な3項目を掲げて、現場での資料採集や整理作業を行ってきた。

自然環境の復元 遺跡周辺の自然環境の復元のために、まず更埴条里遺跡A～K地区におけるⅧ層～Ⅻ層採取サンプルを基に、植物珪酸体（プラント・オパール）・珪藻分析を行った（第2節1）。また屋代遺跡群⑤a区と更埴条里遺跡のJ区では、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した（第2節2）。

食物リストの作成 集落内に残存している自然遺物には、周辺の自然環境を反映するものの他に、①食糧、②建物の構築材、③燃料材などを目的として人為的に運び込まれたものがあると推測される。遺跡に残るこのような自然遺物の、当時の状況になるべく近い組成を復元するために、それらの収集方法としてまず、現地採取を行い、並行して遺構内土壌を採集し、整理時に現場段階で見落とされがちな微細資料を拾い出すことにした。特に後者は、分層によって廃棄層の単位を比較的細かく捉えられた住居跡を2軒（SB5311・5341）選び、その埋土の1/4すべてを、他の住居跡については炉内の灰・焼土層・埋甕内土を中心に採集し、最終的には土嚢袋300個分をサンプリングした。整理作業段階で各土嚢袋から2000ccずつ二次サンプリングを行い、そのうち200ccはウォーターフローテーション→0.5mmメッシュ→0.25mmメッシュの篩による水洗選別を行い、残りの1800ccは同工程を0.5mmメッシュまで行った。これらを作業員が実体顕微鏡下でクリ・クルミ・種子類・魚骨・獣骨・貝・不明片などに分類した状態で専門家に送付した。このうち、水洗選別による種実・炭化材の分析結果を中心に第3節に、現地採取による炭化材の分析結果を第4節に、水洗選別による魚骨の鑑定結果を第5節に、現地採集の動物骨の鑑定結果を第6節1に、水洗選別による動物骨の鑑定結果を第6節2に掲載した。

遺跡の居住者 遺跡居住者の身体的な特徴は、より直接的に諸活動の実体を解明する手がかりとなることが予想される。屋代遺跡群の縄文時代に該当する人骨は現場段階で確認されたものと、回収された骨・骨製品の中から新たに発見されたものを含めると16体に上る。第7節ではこのような人骨についての総合所見を掲載した。

漆を素材にした作業 漆が付着した土器は洗浄後、接合段階で抽出された。漆付着土器の存在は、当時の人々の工芸技術の解明に加え、原材料調達のための周辺の自然環境への関与を考える手がかりになるという点でも重要である。第8節ではこのような漆付着遺物に関する考察を掲載した。

第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）・珪藻・花粉分析

1 更埴条里遺跡の縄文時代における微化石分析

株式会社 古環境研究所

松田隆二

(1) 目的

ここでは、更埴条里遺跡の縄文時代における稲作および堆積環境について、プラント・オパール（植物珪酸体）分析と珪藻分析から検討を行った。

(2) 試料

試料は、A地区のA地点（Ⅸ層）、B地区のB地点（Ⅷ層、Ⅸ層）、C地区のC地点（Ⅷ層、Ⅸ層）、D地区のD地点（Ⅷ層、Ⅸ層）、E地区のE地点（Ⅷ層、Ⅸ層）、F地区のF地点（Ⅷ層、Ⅸ層）、G地区のG地点（Ⅷ層、Ⅸ層）、G'地点（Ⅷ層）、H地区のH地点（Ⅷ層）、東壁地点（Ⅷ層、Ⅸ層、X層、XI層）、I地区のI地点（Ⅷ層、Ⅸ層）、I北壁地点（Ⅷ層、Ⅸ層、XII層）、J地区のJ地点（Ⅷ層、Ⅸ層、X層、XI層、XII層）、K地区のK地点（Ⅸ層）において採取された49点である。このうち、プラント・オパール分析にはすべての試料が、珪藻分析にはI地区北壁の試料が分析の対象となった。

(3) 方法

A プラント・オパール分析

弥生・古墳時代編第4章第2節1に示した。

B 珪藻分析

古代2、中・近世編第6章第2節1に示した。

試料標本とプレパラートは、すべて株式会社古環境研究所に保管されている。

(4) 分析結果

A プラント・オパール分析

結果を表92・93・94、図51・52に示す。機動細胞起源のプラント・オパールについて同定を行った結果、イネ、キビ族（ヒエ属型）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科の各分類群が検出された。このうち、イネはE地点のⅧ層、H地区東地点のⅧ層とⅨ層から検出されているが低い密度である。キビ族はD地点のⅧ層、E地点のⅧ層とⅨ層、J地点のⅧ層より検出されているが低い密度である。ヨシ属は各地点のⅧ層、Ⅸ層、X層、XI層およびXII層よりほとんどが高密度で検出されている。ウシクサ族は部分的に検出されるのみである。タケ亜科はすべての試料から検出され、I地点、I地区西壁地点およびJ地点のⅨ層では高い密度である。

B 珪藻分析

結果は『古代2、中・近世編』第9章第2節1の表55、図49に一括して示した。検出された珪藻化石は、63分類群23属46種である。XII層下部では、検出された珪藻化石は50個前後と少ないが、湖沼浮遊生指標種群の *Melosira granulata* や湖沼沼沢湿地指標種群の *Melosira italica* などが特徴的に出現する。ま

表92 更埴条里遺跡VIII～XII層におけるプラント・オパール分析結果（A地点～H地点）（単位：10²個/g）

分類群	調査区 試料	A地点		B地点		C地点		D地点		E地点		F地点		G地点		G'地点		H地点	
		IX層	VII層	IX層	VII層	IX層	VII層	IX層	VII層	IX層	VII層	IX層	VII層	IX層	VII層	IX層	VII層	IX層	VII層
イネ		0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0
キビ族		0	0	0	0	0	0	5	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヨシ属		6	161	10	42	15	44	45	79	14	62	42	60	61	48	46			
ウシクサ族		0	10	0	0	0	5	7	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	9
タケ亜科		45	80	76	85	46	11	15	39	21	15	34	34	79	113	9			

表93 更埴条里遺跡VIII～XII層におけるプラント・オパール分析結果（H東地点～K地点）（単位：10²個/g）

分類群	調査区 試料	H東地点								I地点		J地点			K地点						
		VII層1	VII層2	VII層3	IX層1	IX層2	IX層3	IX層4	X層	XI層	VII層	IX層	VII層	IX層1	IX層2	IX層3	X層	XI層	XII層	IX層	
イネ		9	0	14	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
キビ族		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヨシ属		58	53	36	27	8	0	0	25	67	30	26	23	8	18	36	47	7	57	16	
ウシクサ族		0	0	0	0	8	0	0	0	7	0	0	7	0	18	36	9	7	8	0	
タケ亜科		29	37	58	68	69	15	37	17	52	19	160	130	625	502	155	18	45	57	84	

表94 更埴条里遺跡VIII～XII層におけるプラント・オパール分析結果（I西地点）（単位：10²個/g）

分類群	調査区 試料	I西地点															
		VII層	IX層1	IX層2	IX層3	IX層4	IX層5	IX層6	IX層7	IX層8	IX層9	IX層10	XII層1	XII層2	XII層3	XII層4	
イネ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
キビ族		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ヨシ属		27	29	17	0	16	23	15	8	0	8	7	31	8	15	28	
ウシクサ族		0	9	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
タケ亜科		64	158	78	93	76	55	30	40	15	16	7	31	8	7	14	

た、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys*、中～下流性河川指標種群の *Melosira varians* なども出現している。

(5) 縄文時代の農耕と環境

XII層は、I地区西壁地点とJ地点の2箇所が分析の対象となった。いずれもヨシ属のプラント・オパールが高い密度で検出され卓越する。なお、I地区のXII層からは、湖沼浮遊生指標種群や湖沼湿地指標種群さらに中～下流性河川指標種群の珪藻が出現している。こうしたことから、XII層は水深のある沼あるいは池といった環境が想定され、浅い所にはヨシなどが生育していたと推定される。なお、河川の流れ込みもあったと推定される。XI層ではH地区東壁地点とJ地点について分析を行ったところ、H地区東壁地点でヨシ属の卓越がみられた。このことから、H地区についてはヨシの繁茂する湿地であったと推定される。X層ではXI層同様H地区東壁地点とJ地点について分析を行った。ここでは両地点ともにヨシ属が卓越することから、H地区とJ地区はヨシの繁茂する湿地であったと推定される。IX層はすべての地区に堆積している。ここでは全域でヨシ属が検出されている。D地点、F地点およびG地点では高い密度である。したがって、IX層の時期は調査区のほぼ全域が湿地あるいはそれに近い環境であったと考えられる。なお、I地点、I地区西壁地点それにJ地点ではタケ亜科が高密度で検出されていることから、I地区とJ地区については調査区もしくは近傍にタケ亜科が多く生育していたと推定される。VIII層はA～J地区にかけて堆積している。ここでは、全域でヨシ属のプラント・オパールが検出されており、H地区以南ではいずれも高い密度である。こうしたことから、VIII層堆積時はほぼ全域がヨシの繁茂する湿地であったと推定される。

さて、E地点のVIII層とH東地点のVIII層、IX層からはイネのプラント・オパールが検出されている。しかし、いずれも1,000個/g前後の低い密度であり、なおかつE地点のVIII層とH東地点のVIII層については直上のVII層が高密度であることから、これらについては上層や他所からの混入と判断される。したがって、VIII層の堆積以前に本遺跡において稲作の営まれていた可能性は考えにくい。

なお、D地点のVIII層、E地点のVIII層とIX層およびJ地点のVIII層よりキビ族（ヒエ属型）が検出されているが、いずれも1,000個/g未満の低密度である。なお、ヒエ属は栽培種のヒエと野生種のイヌヒエとに分

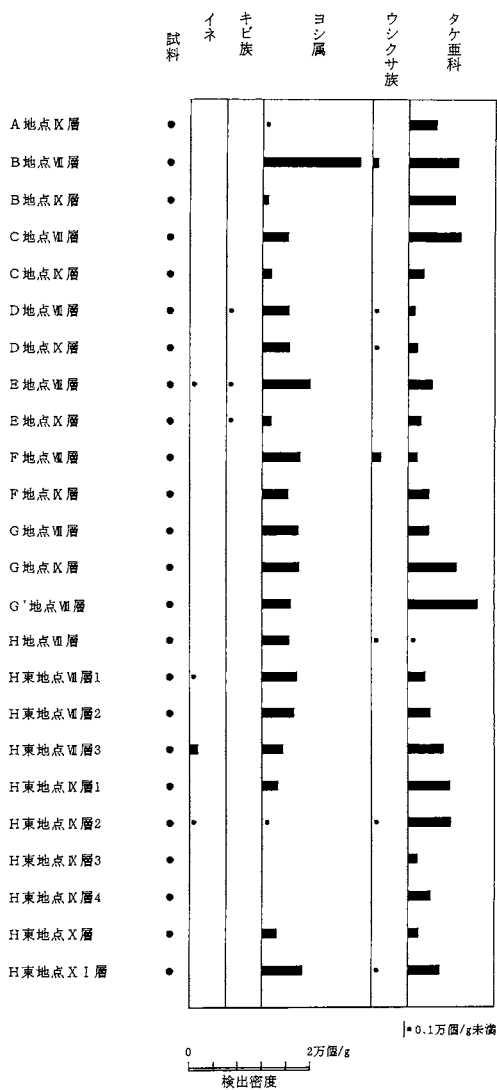


図51 更埴条里遺跡Ⅶ～ⅩⅡ層における
プラント・オパール分析結果(1)

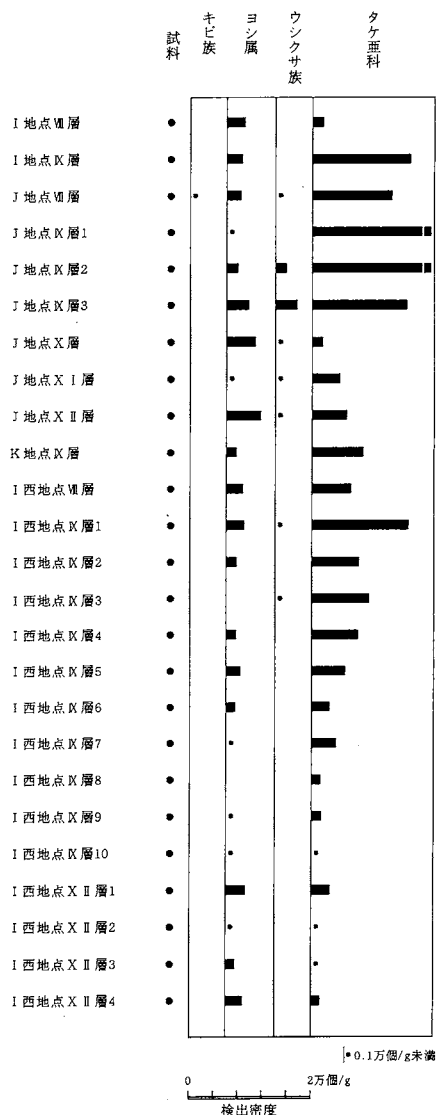


図52 更埴条里遺跡Ⅶ～ⅩⅡ層における
プラント・オパール分析結果(2)

類されるが、プラント・オパール分析では現在のところ両者を識別することは困難である。したがって、これらの層においてヒエ属が生育していた可能性が考えられるが、それが栽培されていたものなのか、雑草なのかについては不明である。

参考文献

安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42、p.73-88.
 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 p.1-20.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代 農耕追求のための基礎資料として—」『考古学と自然科学』20 p.81-92.
 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 p.15-29.
 藤原宏志 1979 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定」『考古学と自然科学』12 p.29-41.
 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17 p.73-85.

2 縄文時代の古環境

パリノ・サーヴェイ株式会社

田中義文・辻本崇夫

当社ではこれまで、更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古環境復元を目的として、微化石分析（珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析）を実施してきた。その中で今回は、縄文時代を中心とした古環境について述べる。縄文時代を対象とした調査は、主に屋代遺跡群の⑤a区と更埴条里遺跡のJ区で実施した。縄文時代層はシルト～砂が主体であり、非常に厚い。また、遺構・遺物は概して少なく、土器片や焼土などが検出された。

分析手法の選択 分析手法としては、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を選択した。珪藻化石は、植物プランクトン的一种で、適応範囲が広く、水分と光が存在するところであれば、様々な環境下に生育可能である。珪藻には多くの種類があり、海、川、湖、陸地（土の上）などの場所で、それぞれ特有の種類が住み分けを行っている。珪藻は珪酸質の殻を作るが、殻の形状が種類によって異なる。珪藻が死ぬと無機物とともに堆積するが、珪酸質であるため残りやすい。そこで、堆積物中の珪藻化石の種類構成を調べることにより、過去の水域環境を推定することができる。また、花粉は顕花植物に作られる、雄性の生殖細胞である。花粉は多量に検出され、植物によって形態が異なり、外膜が物理・科学的に安定し、土壌中に埋没しても残りやすい。そこで、堆積物中の花粉化石の組成を調べることにより、過去の古植生を復元することができる。さらに、植物珪酸体は植物の細胞内に沈着した珪酸分で、特にイネ科植物に顕著に作られる。植物珪酸体の形状は様々であるが、特にイネ科植物で種類毎に特徴的な珪酸体をもつ。そこで、堆積物中の植物珪酸体の組成を調べることにより、古植生、特にイネ科植物の生育状況に関する情報を得ることができる。

分析方法 微化石を取り出す場合には、各微化石の粒径、比重などの物理・化学性を利用して、不要物を取り除いていく。珪藻化石の場合は、土壤数gに対して、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に処理を施す。これを希釈して、カバーガラス上に滴下し乾燥させた後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。花粉分析の場合は、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入して、プレパラートを作製する。植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリウラックスで封入し、プレパラートを作製する。

縄文時代の古環境 基本土層のVII層より下位が、縄文時代に相当する。珪藻化石群集をみると、種類数が非常に多く、様々な場所に生育する珪藻が堆積物中に混在する組成を示す。これらは、広大な集水域をもつ千曲川流域に存在する、様々な水域環境の場所からもたらされたと考えられ、調査地点付近の組成を反映していないと思われる。また、自然堤防上の花粉化石は保存が悪く、ほとんど検出されず、植物珪酸体も検出個数が少ない。この原因として、堆積速度や堆積後の続成作用などに起因していると思われるが、詳細は不明である。これらを考慮し、他の情報も加味した上で、当時の古環境について検討する。

微化石分析の成果や、遺構の立地状況からみた古環境変遷は、次のように考えられる。XV層より下位では遺物が若干出土し、焼土も検出されているが数は少ない。この時期は、まだ自然堤防I群の発達段階であり、自然堤防が安定していないので、自然堤防上で定常的な生活を営むことは難しかったと考えられ

表95 屋代遺跡群⑤a区の植物珪酸体結果

種 類	北壁セクション																																				
	I	VII-1			VII-2		VII-3		VII-4		VII-5		VII-6		VII-7		VII-8		VII-9		VII-10		VII-11		VII-12		VII-13		VII-14		VII-15		VII-16		VII-17		VII-18
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18																			
イネ科葉部短細胞珪酸体																																					
イネ族イネ属	25	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
キビ族ヒエ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
キビ族キビ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
キビ族チゴザサ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
キビ族	26	3	1	-	1	-	4	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-																			
タケ亜科ネザサ節	6	3	-	1	3	-	9	-	9	1	1	4	2	1	1	7	1	-																			
タケ亜科	8	14	3	3	3	-	25	-	11	4	5	-	3	1	19	9	7	2																			
ヨシ属	32	10	1	-	4	1	51	-	5	-	3	-	3	3	7	20	14	2																			
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-																			
ウシクサ族ススキ属	32	19	1	-	2	-	10	-	2	1	-	-	-	-	2	2	2	-																			
イチゴツナギ亜科	17	9	-	-	1	12	-	5	1	4	6	2	4	3	30	20	6	6																			
不明キビ型	89	43	1	-	3	-	40	3	4	8	8	-	2	1	10	9	3	2																			
不明ヒゲシバ型	40	36	-	1	4	-	36	-	10	5	7	-	2	2	17	17	13	3																			
不明ダンチク型	21	19	-	3	6	-	30	1	4	5	5	-	-	-	16	5	4	4																			
イネ科葉身機動細胞珪酸体																																					
イネ族イネ属	42	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
キビ族	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
キビ族クマザサ属	1	-	-	-	-	2	-	7	-	4	1	11	19	-	9	8	-	-																			
タケ亜科ネザサ節	8	16	-	-	2	-	7	-	4	1	11	19	-	-	9	8	-	-																			
タケ亜科	2	11	-	-	1	1	9	-	6	1	6	-	1	-	13	22	3	1																			
ヨシ属	7	5	-	-	1	5	-	1	1	1	2	10	-	-	1	4	1	4																			
ウシクサ族	22	13	-	-	1	1	2	1	1	-	1	-	-	-	2	-	-	-																			
シバ属	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-																			
不明	35	22	-	3	-	-	9	-	8	6	16	-	1	-	13	2	-	9																			
合 計	300	158	7	8	26	2	218	4	48	27	34	12	14	13	75	99	64	19																			
イネ科葉部短細胞珪酸体	120	70	0	3	4	4	34	1	21	9	36	30	2	0	40	36	4	14																			
イネ科葉身機動細胞珪酸体	420	228	7	11	30	6	252	5	69	36	70	42	16	13	115	135	68	33																			
組 織 片																																					
イネ属穎珪酸体	6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
イネ属短細胞列	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
イネ属機動細胞列	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
キビ族短細胞列	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			

種 類	北壁セクション										中央部深掘セクション									
	X II	X II	X II	X III	X III	X III	X IV	X IV	X IV	X IV	X	X	X	X	X	X	X	X		
試料番号	-1	-2	-3	-1	-2	-3	-1a	-1b	-2	-3a	-3b	V-1	V-2	VI-1	VI-2	VI-1	VI-2	VII-1	VII-2	
イネ科葉部短細胞珪酸体																				
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族キビ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族	-	1	-	2	-	2	-	-	1	1	-	1	3	1	-	2	-	-	-	
タケ亜科ネザサ節	-	-	1	3	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科	-	1	15	4	1	1	4	1	-	5	-	5	1	-	3	3	3	3	3	
ヨシ属	-	9	3	31	16	39	4	5	-	28	-	19	14	20	14	21	20	20	20	
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	-	1	-	4	5	5	-	-	1	8	2	4	9	25	18	21	16	16	16	
イチゴツナギ亜科	2	3	5	8	6	6	6	20	1	2	-	2	1	5	-	2	3	3	3	
不明キビ型	1	3	1	21	5	12	2	5	1	9	-	12	12	84	39	42	64	64	64	
不明ヒゲシバ型	1	6	4	31	2	23	8	8	-	22	-	7	10	22	22	14	22	22	22	
不明ダンチク型	2	3	2	18	7	7	7	6	1	6	-	12	6	8	4	7	7	7	7	
イネ科葉身機動細胞珪酸体																				
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族クマザサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科ネザサ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	6	3	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	4	5	3	2	-	-	-	-	-	
ヨシ属	2	-	-	1	2	-	1	2	-	1	6	12	6	1	2	2	1	1	1	
ウシクサ族	5	-	-	2	5	-	-	-	-	1	2	-	1	1	-	1	1	1	1	
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明	6	-	1	-	6	-	-	1	-	1	-	5	6	5	1	7	13	13	13	
合 計	6	27	31	122	42	95	31	46	4	81	3	62	54	167	101	110	137	137	137	
イネ科葉部短細胞珪酸体	14	0	1	5	15	0	1	3	0	3	12	27	21	10	5	10	15	15	15	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	20	27	32	127	57	95	32	49	4	84	15	89	75	177	106	120	152	152	152	
組 織 片																				
イネ属穎珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

る。XIV層～XII-2層は、縄文時代中期に相当する。この時期になると、自然堤防の高い場所に集落が営まれるようになる。このことから、自然堤防や流路が固定化されてきたものと考えられる。縄文時代後期に相当するXII-1～IX層になると再び河川の活動が活発になり、氾濫の影響をうけ、その後VII層（縄文時代晩期）まで続く。縄文時代後・晩期～古代の時期は、気候が悪化し冷涼・多雨になったことが各地の分析調査成果で明らかにされており、古気候学では「ネオグレイシェーション」(Denton and Karlen 1973)、日本では「弥生の小海退」と呼ばれている。このような河川活動の活発化は、気候変動が原因の一つと考えられる。このような気候変化は、花粉化石群集の変化にも現れている。更埴条里・屋代遺跡群の後背湿地における分析調査成果や近隣の川田条里遺跡の分析調査成果をみると、縄文時代終末から古代にかけて、モミ属やツガ属が増加する。これは周囲の山地で多雨気候を好む温帯針葉樹が増加したためと考えられるが、この群集の変化は、関東平野、大阪平野など各地で確認されている。ただし、北信の多雪地域では、ブナ属が増加したとされていることから（那須・野尻湖花粉グループ1992）、本地域とは様相が異なっていたようである。

川田条里など他遺跡の花粉分析結果も含めて概観すると、コナラ亜属、ブナ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属などの広葉樹や、モミ属やツガ属などの針葉樹が検出されるが、際立って多い種類はみられない。ナラ類やブナ属などは後背山地に、クルミ属やクマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属は溪谷や河畔に、モミ属やツガ属は山地に温帯針葉樹林としてそれぞれ生育していたと考えられる。花粉化石に優占する種類が認められなかったのは、珪藻分析結果でも述べたように、集水域が広く、局地性を反映しにくいと推測される。また、植物珪酸体組成からは、自然堤防上でタケ類やウシクサ属などからなる草地が、低地でヨシ属など水生植物主体の草地（湿地）が存在したと推測される。

なお、VI層より上位では、ほとんどすべての地区でイネ属由来の微化石が普遍的にみられるため、稲作が行われたことを想定しているが、更埴条里遺跡のB区をはじめとする一部の地点では、II層～XI層においてイネ属の花粉化石と植物珪酸体が検出された。すなわち、縄文時代の堆積層でもイネ属化石が検出されたことになる。しかし、考古学的な調査で水田遺構が確認されていないことから、今回は結果を述べるととどめておく。今後事例を蓄積し、再検討する必要がある。

引用文献

- Denton, G. H. and Karlen, W. 1973 「Holocene climatic variations—their pattern and possible cause.」『Quaternary Research.』3
- 那須孝悌・野尻湖花粉グループ 1992 「野尻湖周辺における最終氷期の古植生の古気候変遷」『月刊地球 野尻湖周辺の自然史—最終氷期以降の古環境—』p.50-55 海洋出版株式会社

第3節 屋代遺跡群の縄文時代の大型植物遺体群

国立歴史民俗博物館 辻 誠一郎

国立歴史民俗博物館 住田 雅和

国立歴史民俗博物館 辻 圭子

はじめに

屋代遺跡群で集中的に確認された縄文時代中期の竪穴住居跡の植物遺体群について検討を行った。植物遺体群は、住居跡内の堆積物と埋甕内の堆積物からフローテーション法と水洗選別法の両法によって得られたものである。処理された堆積物からは種実類以外に木炭なども選別されている。本来、植物遺体群の内容を見るには、木炭をはじめすべての植物遺体群および植物以外の遺物・遺体群とのかかわりを検討しなければならないが、今回は種実類のみしか検討できなかった。種実類以外の遺物・遺体の内容については別の項目で表示・記述されるので、ここで対象とした種実類と併せて全体の組成を検討していただきたい。

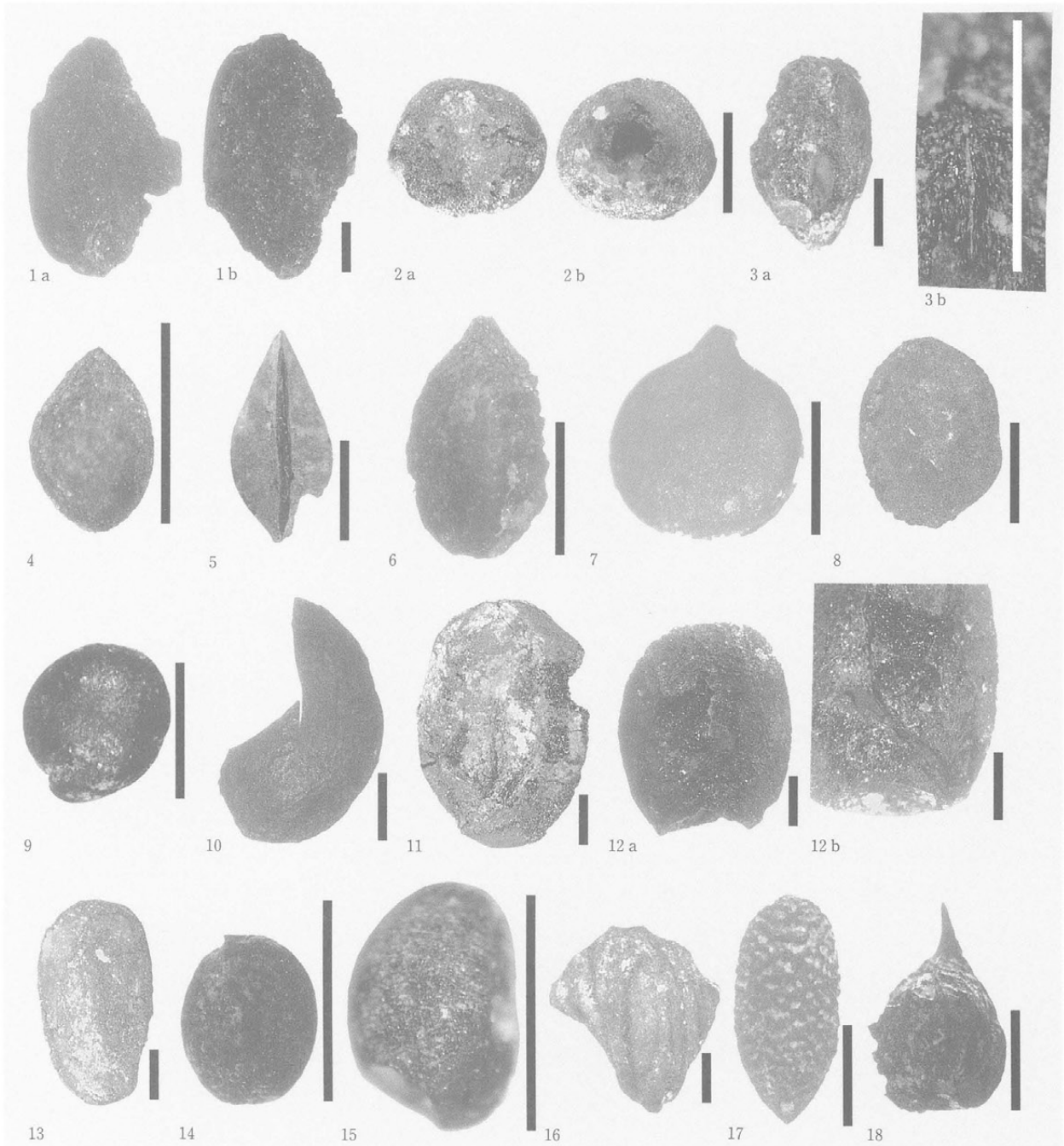
1 植物遺体群の産出状況

A 竪穴住居跡の植物遺体群

竪穴住居跡の住居内堆積物および埋甕内堆積物から産した植物遺体群は、表94に示すように、炭化種実類が24分類群に、また、未炭化種実類が10分類群に同定された。炭化種子でも今のところ同定できないものについては不明種子として一括した。表では未炭化種実類を別に示したが、それらは新鮮な色彩を保持しており、かつ種実の表面がほとんど痛んでいないため、現地での堆積物試料採取時あるいは選別時に紛れ込んだ現生のもものと判断されたためである。これらの分類群の種実類は小型のものが多く、とくに多数の堆積物から産したキク科果実は風散布によって容易に紛れ込みやすいものである。これらは縄文時代の植物遺体群としては扱わないことにする。炭化種実類でも上位の堆積物からの混在の可能性のあるものがあるが、明確な判断の根拠に乏しいので、ここでは縄文時代の資料としておきたい。

植物遺体群には次のようないくつかの特徴が見いだせる。①コムギ属やキビといった穀類の炭化胚乳が含まれる。②オニグルミ炭化核の産出頻度が高く、住居内と埋甕のいずれからもふつうに認められる。とりわけ埋甕からの産出が目立つ。③クリ、キハダ、トチノキ、ブドウ属、ミズキ、ニワトコ属といった木本類はいずれもこれまでに各地の縄文時代の遺跡から炭化種実類として記録されているもので、食用をはじめ有用植物として利用された可能性の高いものである。④カラムシ属、ギシギシ属、タデ属、アカザ属、マメ科などの草本類は、人間の攪乱によってできる荒地あるいは日当たりのよい環境に繁茂する雑草に含まれるものが多いが、一方では資源としての利用価値のある有用植物でもある。

これらの植物群の中で、とくにオニグルミ核の産出は住居内および埋甕内の植物遺体群を特徴づけるものとして注目される。オニグルミの食料としての利用が一般的であったことは各地の縄文時代の遺跡の事例から明らかであるが、近年では、秋田県大館市の池内遺跡の縄文時代前期遺物包含層から彫刻を施したオニグルミ核が産するなど、食用以外の核の利用についても考える材料が得られるようになってきた。今回のように、住居内から炭化核としていくつもの遺構から産したことは、単に食用とされた残り物の核が偶然に燃焼にあったのではないことを示唆している。オニグルミの炭化核は、時代は異なるが、屋代遺跡群では古代の祭祀場から炭化したオニグルミ核が産しており、祭祀にあたって火をうけた可能性が指摘さ



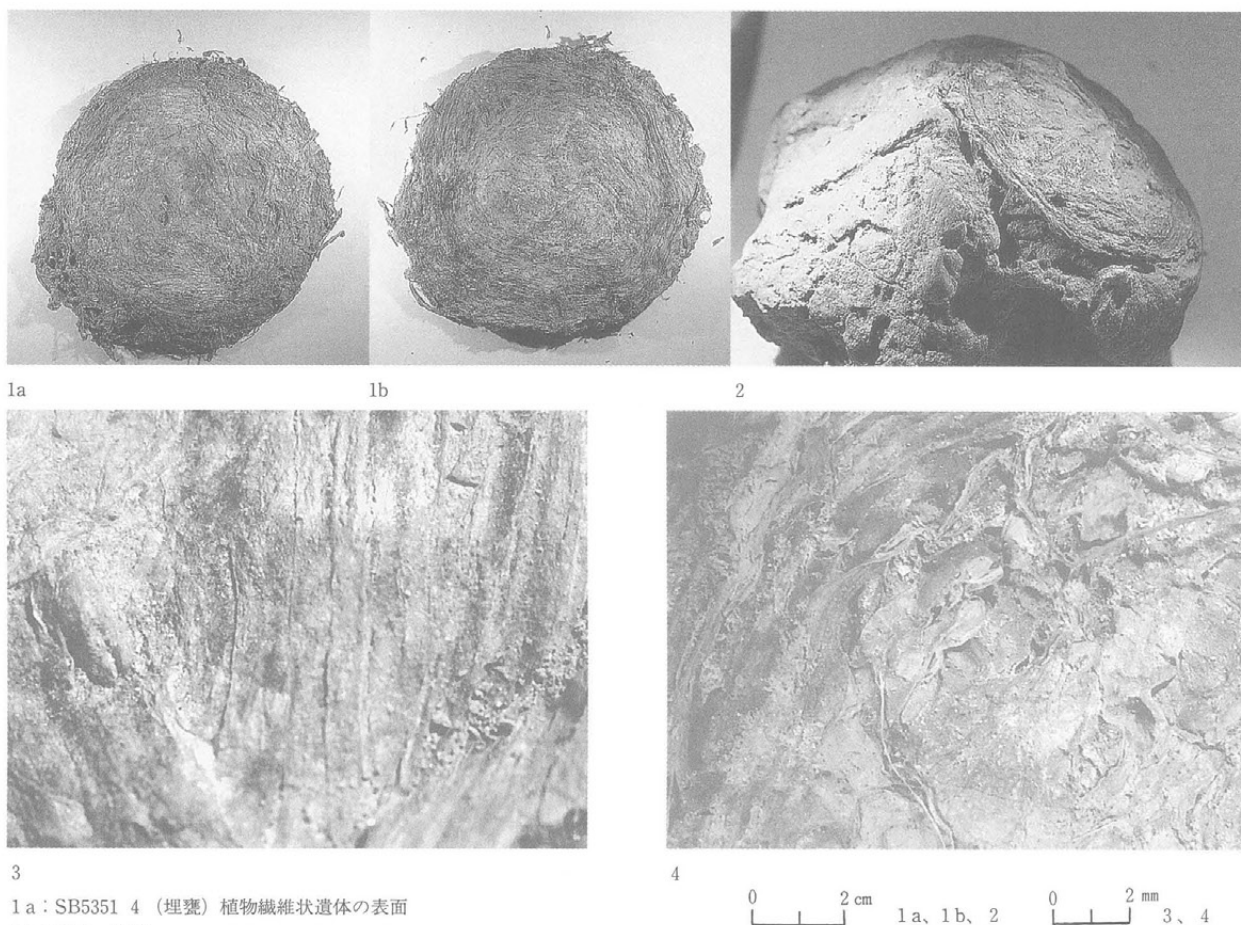
1. コムギ属炭化胚乳 SB5311 D-2層 No.2 2. キビ炭化胚乳 SB5311 D-2層 No.3 3. イネ科炭化胚乳 SB5311 D-2層 No.2 4. カラムシ属炭化果実 SB5311 D-4層 No.4 5. ギシギシ属炭化果実 SB5311 D-1層 No.1 6. タデ属A炭化果実 SB5311 D-4層 No.6 7. タデ属B炭化果実 XIV-1b SQ7003 3層 No.6-2土器 I-21 8. サナエタデ近似種炭化果実 SB5311 D-2層 No.14 9. アカザ属炭化種子 SB5311 D-2層 No.2 10. キハダ炭化種子 SB5311 D-4層 No.3 11. マメ科A炭化種子 SB5311 D-4層 No.5 12. マメ科B炭化種子 SB5311 D-4層 No.8 13. マメ科C炭化種子 SB5319 埋藏 14. スミレ属炭化種子 SB5311 D-2層 No.2 15. チョウジタデ属近似種炭化果実 SB5338 2 16. ミズキ炭化核 SB5311 D-1層 No.5 17. ニワトコ属炭化種子 ST5124 P2 (SK5516) 1層 No.3 18. 炭化鱗球 SB5341-A ※スケールは1mm

図54 屋代遺跡群の縄文時代の大型植物遺体

れている。縄文時代においても食用としてでなく、核を火にかけるという用い方があった可能性がある。一方、埋甕内のオニグルミの炭化核片はとくに注目される。埋甕内からこれほどのオニグルミ炭化核が産したことは、炭化核が偶然紛れ込んだのではなく、意図して埋甕に入れられたことを示唆するものであろう。埋甕のどの位置にどのような状態で埋もれていたかが定かでないが、埋葬時の副葬品の一つであった可能性があり、埋甕内の他の遺物・遺体群と併せて考えておく必要があるだろう。

B 埋甕の底部に敷きつめられた植物繊維状遺体

住居跡遺構SB5351から出土した4（埋甕）（図版326-4）およびSB5316から出土した1（埋甕）（図版256-1）の底部には、繊維状の植物遺体が敷きつめられていた。図55に示すように、径2～3mmの葉・茎状の植物遺体がまとまって底部に敷きつめられており、下面は不規則であるが、上面は円を描くように丸められており、意図的に敷きつめられたものと考えられる。丸められた植物遺体は径6.5～7mmの平らな円形で、皿形を呈する。SB5316の1（埋甕）のように、シルト質の堆積物によって充鎮されているため、この加重によって偏平となった可能性もある。これまでに該当する組織が見当たらないので、分類群および組織の同定には到っていないが、少なくとも2つの埋甕では同じ植物を利用していると見られ、また上記のようなオニグルミ炭化核を伴うという特異な産出状況を考慮すると、埋甕のもつ意味や植物利用の目的を明らかにするためにも今後の詳細な調査が求められる。



1 a : SB5351 4（埋甕）植物繊維状遺体の表面
 1 b : 同上 裏面
 2 : SB5316 1（埋甕）植物繊維状遺体と内容物
 3 : 1 a の拡大
 4 : 1 b の拡大

図55 埋甕内植物繊維状遺体

表96 屋代遺跡群の水洗選別およびフローテーションで得られた大型植物遺体産出表

炭化植物遺体	<住居>	<住居>
コムギ属胚乳	SB5311 D 4層(3層)No.6	SB5311 D 1層 No.2
<住居>	タデ属果実B	SB5311 D 2層 No.1、No.2
SB5311 D 2層 No.2	<その他>	SB5311 D 4層(3層)No.3、4、5、6、
キビ胚乳	XIV-1b層 SQ7003 ③層 No.6-2	8、11
<住居>	土器 I 21の下の土サンプル	<埋糞>
SB5311 D 2層 No.3	サナエタデ近似種	SQ5529(XII(2)層 一括 No.29)
イネ科炭化胚乳	<住居>	SQ5551(S9 一括土器 No.51)
<住居>	SB5311 D 2層(3層)No.14	<その他>
SB5311 D 2層 No.2	アカザ属種子	ST5101内(SX5512 落込み No.2、No.67、
SB5311 D 4層(3層)No.12	<住居>	(No.5?))
オニグルミ核	SB5311 D 1層 No.1	XIV-1b層 SQ7003 ③層No.6-2
<住居>	SB5311 D 2層 No.2	土器 I 21の下の土サンプル
SB5311 D 1層 No.2~5、7	<埋糞>	
SB5311 D 2層 No.1~5	SB5336 3(埋糞 No.2)	未炭化植物遺体
SB5311 D 4層(3層)No.1~8、10、13、	スベリヒユ近似種種子	イネ科類
14	<埋糞>	<住居>
SB5341 A	SB9001 埋土 I 25	SB5311 D 4層(3層)No.10
SB5341 A 2層(3層)	土器No.1の内容物	<その他>
SB5341 A 2層(3層)①、②		SQ5534a(SQ34)
SB5341 2層(3層)	キハダ種子	オヒシバ胚乳
SB5341 A 4層(4-1層)	<住居>	<住居>
SB5341 A 5層(4-2層)①、②	SB5311 D 2層 No.2	SB5311 D 4層(3層)No.8
SB5341 A 南① 5層(4-2層)	SB5311 D 4層(3層)No.3、No.7	<埋糞>
SB5341 A 南② 5層(4-2層)	トチノキ種皮	SQ4803b(S21 No.1 埋糞B)
SB5341 A 南③ 5層(4-2層)	<埋糞>	SQ4803b(S21 No.1)III層内部土壌
ST5124 P2(SK5516)1層 No.1、3、4	SB5316 3(埋糞 No.2)	エノコログサ属類
ST5124 P3(SK5517)1層	マメ科A種子	<埋糞>
ST5124 P3(SK5517)3層	<住居>	SQ4803b(S21 No.1 埋糞B)
SF5130(SK5519)南東 1層	SB5311 D 2層 No.4	SQ4803b(S21 No.1)III層内部土壌
ST5123 P4(SK5532)1層	SB5311 D 4層(3層)No.5	
ST5123 P4(SK5532)2層 No.1	SB5311 D 4層(3層)No.6	イネ類
ST5103b P4(SK5560)No.2	SB5311 D 4層(3層)No.14	<住居>
<埋糞>	マメ科B種子	SB5337 12(埋糞B)
SB5325 3(埋糞 No.1)	<住居>	SQ5539(一括 No.39)
SB5336 1(埋糞 No.1)	SB5311 D 4層(3層)No.8	<その他>
SB5336 2(埋糞 No.2)	<埋糞>	ST5101(SX5512 D 落込み1層)No.12
SB5337 12(埋糞B)	SB5316 3(埋糞 No.2)	ミズ属果実
SB5345 1(埋糞 No.1)①、②	<その他>	<住居>
SB5345 3(埋糞 No.2)	XIV-1b層 SQ7003 1 I 21集中	ST5124 P3(SK5517)1層
SB5346 2(埋糞B)	マメ科C種子	ヒユ属種子
SB5352 埋糞 No.2	<埋糞>	<埋糞>
SQ5551(S9 一括土器 No.51)	SB5319 埋糞の中の土	SB5316 7(埋糞 No.6)
SQ5529(XII(2)層 一括 No.29)	ブドウ属種子	ザクロソウ属近似種
SB5316 1(埋糞 No.1)	<埋糞>	<埋糞>
SB5316 3(埋糞 No.2)	SB5324 3(土器No.126 埋糞)	SB5336 2(埋糞 No.2)
SB5316 5(埋糞 No.4)	スマレ属種子	ナデシコ科種子
SB5319(埋糞)	<住居>	<住居>
SQ5542(XII(2)層-1 N23 一括42-04)埋糞	SB5311 D 2層 No.2	ST5124 P2(SK5516 1層 No.3)
内土	<埋糞>	<埋糞>
SX5502(XII(2)層 一括 No.40)埋糞内土	SQ5529(XII(2)層 一括 No.29)	SQ4803b(S21 埋糞 No.1)
<その他>	チョウジタデ属近似種	アブラナ科種子
SX5501(落込み No.1)	<埋糞>	<住居>
ST5103a(SX5505 D 落込み No.5)	SB5338 2(埋糞 No.2の中の土)	SB5311 D 4層(3層)No.11
包含層サンプル6 XII層 N23J2-2	ミズキ核	SB5341 A 4層(3層)②
II21 XIV-1b SQ7003 骨No.2周辺土	<住居>	<埋糞>
クリ果皮	SB5311 D 1層 No.5	SQ5529(XII(2)層 一括 No.29)
<住居>	シソ科果実	キク科果実
SB5311 D 2層 No.5	<炉>	<住居>
SB5341 A 南① 5層(4-2層)	SB5353 炉灰	SB5311 D 1層 No.1
SB5341 A 南② 5層(4-2層)	ニワトコ属種子	SB5311 D 1層 No.7
SB5341 A 南③ 5層(4-2層)	<住居>	SB5311 D 4層(3層)No.8、No.14
ST5124 P2(SK5516 1層)No.3、No.4	SB5311 D 4層(3層)No.8	SB5341 A 5層(4-2層)②
カラムシ属果実	SB5341 A 2層(3層)①	SB5341 A 南② 5層(4-2層)
<住居>	SB5341 3層(3層)	SB5341 A 南③ 5層(4-2層)
SB5311 D 2層 No.2	ST5124 P2(SK5516)1層 No.3、No.4	ST5124 P2(SK5516)1層 No.3
SB5311 D 4層(3層)No.4	SB5341 A 2層(3層)	ST5123 P4(SK5532)1層
<埋糞>	SK7664 2層中	ST5103b P4(SK5560)No.2
SB5316 1(埋糞 No.1)	<埋糞>	SB5317
<その他>	SQ5529(XII(2)層 一括 No.29)	<埋糞>
SX5501(落込み No.1)	<その他>	SB5325 3(埋糞 No.1)
ギシギシ属果実	SQ5532(SQ32)	SB5316 8(埋糞 No.3)
<住居>	鱗球	SB5323 1(埋糞)
SB5311 D 1層 No.1	<住居>	<その他>
タデ属果実A	SB5341 A I 18	SX5501(落込み No.1)
	不明種子	SQ5531(SQ31) ※ ()内は旧名称

2 注目すべき植物群

A コムギ属 (図54-1)

炭化胚乳が産した。表面が磨滅し、先端部が破損し、保存は悪い。表面は側面の一部に残存するのみである。長さは5.5mmであるが、本来は6mm以上、側面観は長楕円形であったと予測される。横断面は三角形片凸レンズ形である。

B キビ (図54-2)

炭化胚乳が産した。側面観は三角状円形で、長さ1.4mm、幅1.5mm、横断面の概形は楕円形だが、一面の禾跡の溝が緩やかに窪む。禾跡の溝は緩やかで、基部から全長の半ばにまで続く。表面は網目状を呈する。

C イネ科 (図54-3)

炭化胚乳が産した。側面観は長さ3mmの倒卵形、横断面は短楕円形。保存が良くないので胚乳の形状の観察は困難だが、一部残存する穎や胚の跡と思われる長楕円形の窪みからイネ科胚乳と同定される。

D クリ

炭化果実が産した。小さな破片のみが産した。破片全体が平坦であり、表面に縦方向に規則的に伸びる細かな溝があることからクリに同定できる。

E カラムシ属 (図54-4)

炭化種子が産した。側面観は長さ0.9~1mmほどのいびつな広卵形、左右非対称で先端は尖る。横断面は両凸レンズ形。表面には小穴が規則正しく並ぶ。

F ギシギシ属 (図54-5)

炭化果実が産した。側面観は長さ2.3mmの長卵形、上半部は直線的。三稜型だが、稜が突出し翼状となるため、横断面は三足の星形となる。表面はざらついた質感があるが平滑。中心部もほとんど肥大せず、未熟果と思われる。

G タデ属A (図54-6)

炭化種子が産した。側面観は長さ2mm、先端が突出した楕円形。基部は平坦である。横断面は両凸レンズ形。表面は不明瞭な網目を呈する。

H タデ属B (図54-7)

炭化種子が産した。長さ1.6mm、幅1.5mm、側面観は円形。横断面は長方形状楕円形。表面は皺状の隆起による不規則な網目を呈する。

I サナエタデ近似種 (図54-8)

炭化果実が産した。長さ1.5mm、側面観は短楕円形、先端部に柱頭がとれた跡がある。偏平で周辺部が厚く、中央部はやや薄い。

J アカザ属 (図54-9)

炭化種子が産した。長さ1.2mm、側面観は短楕円形、断面は片凸レンズ形。基部は少し窪み、片側がやや突出する。基部から側面の中心へ向け浅い谷が走る。表面は長方形の鱗状の構造が放射状に埋める。

K キハダ (図54-10)

炭化種子が産した。長さ3.8mmの欠損した破片である。

L マメ科A (図54-11)

炭化種子が産した。側面観は長さ4~5.2mmほどの基部側が寸詰まりの卵形もしくは楕円形。横断面はほぼ円形。子葉の分断面では外側に数mmほどの層があり、その内側では横方向の構造が目立つ。先端側に

胚跡と思われる窪みが残存する。形状は一側面寄りに広く浅い溝が幅を狭めつつ曲がって、反対側の側面に開く。

M マメ科B (図54-12)

炭化種子が産した。長さ4.5mm、側面観は長方形状楕円形。基部にクレーター状の窪みがある。焼け膨れた跡がある。比較的深く細い溝が中心線から45°の角度で伸び、クレーター状の窪みのすぐ横に穴が開く。

N マメ科C (図54-13)

炭化種子が産した。側面観は長さ4.6mmの倒卵形、断面は楕円形。保存が悪いため明瞭ではないが、子葉の跡は中心線の一側面側に幅広く残り、先端は緩やかに曲がり、幅をあまり狭めないで反対側面にぬける。0.1mmほどの外層と内層が認められる。

O スミレ属 (図54-14)

炭化種子が産した。側面観は長さ1mmほどの楕円形、先端部のみが突出して尖り、一方向へ湾曲する。横断面は円形。表面には円形の網目が並ぶ。

P チョウジタデ属近似種 (図54-15)

炭化果実が産した。長さ1.1mm、側面観は倒卵形、横断面は円形。基部は中心線からずれ、斜め向きとなり、ほぼ種子幅ほどのクレーター状で中心部に突起がある。縦断面は基部の側に飛び出た片凸レンズ形である。表面は横長の網目を呈する。

Q ミズキ (図54-16)

炭化核。破片であるが、表面の縦方向に伸びる畝状の彫紋からミズキに同定される。

R ニワトコ属 (図54-17)

炭化種子が産した。長さ2.1~2.6mm、側面観は長倒卵形から倒卵形、基部に小穴がある。横断面は両凸レンズ形、縦方向に反り返る。表面は円形突起が融合した畝状突起が横方向に配列する。本遺跡から産した炭化種子は比較的細長い、硬質の壁が炭化によって膨脹することは考えにくく、原形も長かったと思われる。

S 鱗球 (図54-18)

長さ約2mm、概形はやや反り返った涙滴形、先端部は細く伸び、側面にはきれいな曲面のへこみがある。ノビルなどの植物の親鱗球の周囲に付いた鱗球と見られる。



現場指導

第4節 炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社
高橋 敦

試料 試料は、竪穴住居跡等から出土した炭化材142点（試料番号1・3～142）である。このうち、試料番号98は2点に分けられていたため、それぞれについて樹種同定を行う。

方法 木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて、木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

結果 樹種同定結果を、表95に示す。試料番号98の1試料には2種類が認められた。また、試料番号21は種実であったが、保存が悪く、種類は不明であった。炭化材試料には保存状態が悪いものが多く、樹種の同定に至らないものも多かった。それらの試料については、観察できた範囲で結果を記し、組織の観察ができなかった場合には不明とした。その他の試料は、針葉樹2種類（ヒノキ属・カヤ）、広葉樹9種類（オニグルミ・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・ヤマグワ・カツラ・トチノキ・カエデ属・アワブキ属）とイネ科に同定された。なお、木材組織と写真図版については、総論編に掲載することとし、本稿では割愛する。

炭化材の種類構成 炭化材には、合計11種類が認められ、クリが最も多い。時期別に見ると、縄文時代中期中葉以前の試料では不明1点を除く3点が3種類に同定され、試料数に対して種類数が多い。縄文時代中期前葉では遺構によってやや種類構成が異なり、ヤマグワやクリの利用が目立つ。縄文時代中期中葉では調査した全点がクリであり、クリの利用が圧倒的に多い。この結果から、時期によって用材に違いがあり、縄文時代前期前葉以降クリの利用が多いことが指摘できる。

縄文時代の住居構築材にクリが多く見られることは、これまでも指摘されている（千野1983・1991、高橋・植木1994）。本地域周辺では、小諸市郷土遺跡で縄文時代中期中葉～後期前半の住居跡の床面直上から出土した炭化材に、クリが認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社1993）。一方、御代田町下弥堂遺跡では、縄文時代前期初頭の住居跡から出土した炭化材について樹種同定が行われており、多くはコナラ節で、クリ近似種が1点認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社1994a）。これらの結果は、本遺跡でクリが多くなる時期とも一致しており、用材の変化が本地域の広い範囲で見られたことが推定される。

クリが多く利用された背景には、クリの栽培による果実と木材の安定した供給があった可能性が指摘されている（千野1983）。また、クリ材が強度や耐朽性に優れていることも、選択された理由の一つと考えられる。現在栽培されているクリは、9年生～10年生以後から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は年毎に収量が減少する（志村1984）。このことから、収量の落ちた老木を伐採して用材としていたことが推定されている。なお、青森県三内丸山遺跡では、花粉分析結果やDNA分析からクリ栽培の可能性が指摘されており（辻1997、佐藤1997）、その開始時期は東日本で縄文時代前期頃からと考えられている（山田1999）。しかし、本地域では資料の蓄積段階であり、詳細は不明である。今後の検討課題としたい。

SB5345における用材 SB5345は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡で、床面は五角形を呈し、中央に炉を持つ。縄文時代中期の関東地方、中部地方、北陸地方などでは、床面が円形・方形・長円形となる住居が多いが、五角形を呈する住居も希に見られる（石野1990）。床面の平面形の違いは、住居の建築様式や上屋構造の違いを示していると考えられているが、それが住居の用途などどのように関わっているのか明確ではない。

表97-1) 炭化材の樹種同定結果

番号	遺跡	地区	層位	遺構	出土位置・試料名	時期	樹種
1	BYS	②f	1X層	E4トレ上面	炭化材試料D	縄文時代晩期	広葉樹
3	BYS	④f	XII(1)層	SF4801	炭	縄文時代後期	ケヤキ
4	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5304	床直上炭	縄文時代中期後葉	不明
5	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5308	覆土炭	縄文時代中期後葉	不明
6	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5311	6層	縄文時代中期後葉	広葉樹
7	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5313	IS-7木	縄文時代中期後葉	不明
8	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5316	調査中周辺一括炭化物	縄文時代中期後葉	コナラ属コナラ亜属コナラ節
9	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5316	炉上の炭化物	縄文時代中期後葉	クリ
10	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5319	炉掘り込み底部炭	縄文時代中期後葉	不明
11	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5320	埋土トレンチIN-19]6-9	縄文時代中期後葉	クリ
12	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5328	炭	縄文時代中期後葉	クリ
13	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5332	炉2層灰	縄文時代中期後葉	不明
14	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5332	炉2層灰	縄文時代中期後葉	不明
15	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5335	覆土SF5179の炭の層	縄文時代中期後葉	カヤ
16	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5335	東壁セクション5層焼土下	縄文時代中期後葉	クリ
17	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5337	炉床(底)炭	縄文時代中期後葉	不明
18	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5338	P10	縄文時代中期後葉	クリ
19	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5338	床面材 C14-9	縄文時代中期後葉	クリ
20	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5340	P21の炭 C14-6	縄文時代中期後葉	クリ
21	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5340	炉の中の炭 14C-7	縄文時代中期後葉	種実(種類不明)
22	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5341	IS-14炉2層上面 No.1	縄文時代中期後葉	クリ
23	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5341	IS-14炉2層上面C14-8 No.2	縄文時代中期後葉	クリ
24	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5341	A 3層	縄文時代中期後葉	クリ
25	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 C-14-1 No.1	縄文時代中期後葉	クリ
26	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 C-14-3 No.2	縄文時代中期後葉	クリ
27	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.2	縄文時代中期後葉	広葉樹
28	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.3	縄文時代中期後葉	クリ
29	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	炉内木材 No.3	縄文時代中期後葉	クリ
30	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 14C-2 No.4	縄文時代中期後葉	クリ
31	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	炉内木材 No.4-2	縄文時代中期後葉	クリ
32	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.6	縄文時代中期後葉	クリ
33	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.7	縄文時代中期後葉	クリ
34	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.8	縄文時代中期後葉	クリ
35	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.9	縄文時代中期後葉	クリ
36	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.10	縄文時代中期後葉	クリ
37	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.11	縄文時代中期後葉	クリ
38	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.12	縄文時代中期後葉	クリ
39	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.13	縄文時代中期後葉	クリ
40	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.14	縄文時代中期後葉	クリ
41	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.15	縄文時代中期後葉	クリ
42	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.18	縄文時代中期後葉	クリ
43	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.19	縄文時代中期後葉	クリ
44	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.20	縄文時代中期後葉	クリ
45	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.24	縄文時代中期後葉	広葉樹
46	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.25	縄文時代中期後葉	クリ
47	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.27	縄文時代中期後葉	広葉樹
48	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.28	縄文時代中期後葉	広葉樹
49	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.31	縄文時代中期後葉	広葉樹
50	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.32	縄文時代中期後葉	広葉樹
51	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.33	縄文時代中期後葉	広葉樹
52	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.35	縄文時代中期後葉	クリ
53	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 カベ14C-4 No.36	縄文時代中期後葉	クリ
54	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 カベ14C-5 No.37	縄文時代中期後葉	クリ
55	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.41	縄文時代中期後葉	クリ
56	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.42	縄文時代中期後葉	クリ
57	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.43	縄文時代中期後葉	クリ
58	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.45	縄文時代中期後葉	クリ
59	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.46	縄文時代中期後葉	クリ
60	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.48	縄文時代中期後葉	クリ
61	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.49	縄文時代中期後葉	クリ
62	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.50	縄文時代中期後葉	不明
63	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.51	縄文時代中期後葉	クリ
64	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.53	縄文時代中期後葉	不明
65	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.54	縄文時代中期後葉	クリ
66	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.55	縄文時代中期後葉	クリ
67	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.59	縄文時代中期後葉	広葉樹
68	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.62	縄文時代中期後葉	広葉樹
69	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.63	縄文時代中期後葉	クリ
70	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.64	縄文時代中期後葉	広葉樹
71	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.65	縄文時代中期後葉	クリ
72	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.66	縄文時代中期後葉	広葉樹
73	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.67	縄文時代中期後葉	広葉樹
74	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.69	縄文時代中期後葉	クリ
75	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.70	縄文時代中期後葉	クリ
76	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.71	縄文時代中期後葉	クリ
77	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.72	縄文時代中期後葉	クリ
78	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.73	縄文時代中期後葉	クリ
79	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.74	縄文時代中期後葉	クリ
80	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.75	縄文時代中期後葉	クリ
81	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.76	縄文時代中期後葉	クリ
82	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.77	縄文時代中期後葉	クリ
83	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No.78	縄文時代中期後葉	クリ

※「番号」は遺構図版の「樹」番号に対応

表97-(2) 炭化材の樹種同定結果

番号	遺跡	地区	層位	遺構	出土位置・試料名	時期	樹種
84	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No. 79	縄文時代中期後葉	クリ
85	BYS	⑤b	XII(2)層	SB5345	木材 No. 80	縄文時代中期後葉	クリ
86	BYS	⑤a	XII(2)層	SB6702	炭	縄文時代中期後葉	不明
87	BYS	⑤a	XII(2)層	SB6702北	炉址第2層(焼土層)	縄文時代中期後葉	不明
88	BYS	⑥b	XII(2)層	SF9007	No. 1	縄文時代中期後葉	カヤ
89	BYS	⑥b	XII(2)層	SF9007	No. 2	縄文時代中期後葉	広葉樹
90	BYS	⑥b	XII(2)層	SF9007	サンプル	縄文時代中期後葉	クリ
91	BYS	⑤b	XII(2)層	SK5531	一括3層 No. 26	縄文時代中期後葉	不明
92	BYS	⑤b	XII(2)層	SK5535	IS-13A下面 No. 14	縄文時代中期後葉	クリ
93	BYS	⑤b	XII(2)層	SK5535	IS-13B下面 No. 23	縄文時代中期後葉	クリ
94	BYS	⑤b	XII(2)層	SK5773	木	縄文時代中期後葉	オニグルミ
95	BYS	⑤b	XII(2)層	SK5799	木	縄文時代中期後葉	クリ
96	BYS	⑥b	XII(2)層	SD8041		縄文時代中期後葉	不明
97	BYS	⑤b	XII(2)層	11N25 J5-3	植物炭化物	縄文時代中期後葉	不明
98	BYS	⑥b	XII(2)層	IN3 J27	炭	縄文時代中期後葉	ヒノキ属
					炭	縄文時代中期後葉	トチノキ
							アロブキ属
99	BYS	⑥b	XII(2)層	II24 J3-6	炭化物	縄文時代中期後葉	クリ
100	BYS	⑥b	XII(2)層	I021-C	1層	縄文時代中期後葉	不明
101	BYS	⑤b	XIII層	SK5932	IN-25	縄文時代中期中葉	クリ
102	BYS	⑤b	XIII層	SK5932	IN-25	縄文時代中期中葉	クリ
103	BYS	⑥a	XIII層	SK7664	3層中	縄文時代中期中葉	クリ
104	BYS	⑤b	XIV層	SB5401	炭化物 14C-10	縄文時代中期前葉	クリ
105	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 14C-12 No. 1	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
106	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 14C-11 No. 2	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
107	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	下の床直の炭化物	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
108	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 3	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
					床面炭化物 No. 4	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
109	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	下の床直の炭化物集合部分	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
110	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	C14-13 No. 4		
111	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 5	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
112	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 6	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
113	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 7	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
114	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 8	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
115	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 9	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
116	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 10	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
117	BYS	⑤b	XIV(1)層	SB5412	床面炭化物 No. 11	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
118	BYS	⑤b	XIV(3)層	SB5409	炭試料C	縄文時代中期前葉	コナラ属コナラ亜属コナラ節
119	BYS	⑤b	XIV(3)層	SB5409	炭試料D	縄文時代中期前葉	コナラ属コナラ亜属コナラ節
120	BYS	⑥a	XIV層	SB7501	第1床面直上の埋土中	縄文時代中期前葉	広葉樹
121	BYS	⑥a	XIV層	SB7501	第1床面上炭化物試料	縄文時代中期前葉	イネ科
122	BYS	⑥a	XIV層	SB7501	第1床面上炭化物試料	縄文時代中期前葉	クリ
123	BYS	⑥a	XIV層	SB7502	埋土 炭化物C14-15	縄文時代中期前葉	クリ
124	BYS	⑤b	XIV(1)層	SK5912	炭化物	縄文時代中期前葉	クリ
125	BYS	⑤b	XIV(2)層	SK5935	炭化物 No. 1	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
126	BYS	⑤b	XIV(2)層	SK5935	炭化物一括	縄文時代中期前葉	クリ
127	BYS	⑤b	XIV(2)層	SK5936	炭化物五領ヶ台 No. 1	縄文時代中期前葉	カエデ属
128	BYS	⑤b	XIV(3)層	SK5914	炭化物五領ヶ台	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
129	BYS	⑤b	XIV(3)層	IX-19	炭化物五領ヶ台 No. 1	縄文時代中期前葉	広葉樹
130	BYS	⑤b	XIV(3)層	IO-6	炭化物五領ヶ台 C14-16 No. 1	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
131	BYS	⑤b	XIV(3)層	IN-15	炭化物 C14-17 No. 2	縄文時代中期前葉	ケヤキ
132	BYS	⑤b	XIV(3)層	IN-15	炭化物 No. 3	縄文時代中期前葉	広葉樹
133	BYS	⑥a	XIV(3)層	IM-10	炭 No. 1	縄文時代中期前葉	カツラ
134	BYS	⑥a	XIV(1)層	II-21 J3-3	炭	縄文時代中期前葉	クリ
135	BYS	⑥a	XIV(1)層	II-21 J5-7	SQ7003グリッド一括-2	縄文時代中期前葉	クリ
136	BYS	⑥a	XIV(1)層	II-21 J6-7	炭化物層試料	縄文時代中期前葉	広葉樹
137	BYS	⑥a	XIV(2)層	II-21 J6-7	炭化物層中炭含む	縄文時代中期前葉	クリ
138	BYS	⑥b	XV(1)層	IN-2	炭化物試料 No. 1	縄文時代中期前葉	ヤマグワ
139	BYS	⑤b	XV(1)層	IO-6 SQ59	SQ59	縄文時代中期前葉以前	カエデ属
140	BYS	⑥b	XV(1)層	上層中	炭化物試料	縄文時代中期前葉以前	カツラ
141	BYS	⑥a	XV層	上面	炭化物 No. 1	縄文時代中期前葉以前	ヤマグワ
142	BYS	⑥a	XVI層	上面	上面炭化物 No. 2	縄文時代中期前葉以前	不明

※「番号」は遺構図版の「樹」番号に対応

炭化材は、壁面に見られる板状のものや、床面に出土した丸太などがある。前者は壁板材、後者は垂木や上屋構造の一部が炭化、残存したものと考えられる。試料は、種類不明の試料(広葉樹・不明)を除く全てがクリであり、部位に関わらずクリが利用されていたことがうかがえる。壁板材は、断面調査の結果、厚さ約5~7mmで、試料を観察した限りでは、いずれも板目板状となる。クリの材質等を考慮すれば、年輪を利用して板目板を製作していた可能性がある。こうした板材の存在は、いわゆる壁立式平地住居などに見られ、今回の資料とも類似する(宮本1998)。しかし、今回の板材が、住居使用時にどのような役割を持っていたのか、現時点で詳細は不明である。

今回のような板材については、樹種同定を行った例は少なく、その用材などについて詳細は不明である。富山県桜町遺跡では、高床建物の部材に、クリの横棧にスギの帯板を網代状に編んだ壁材が見られ(伊藤1999)、板材に板の加工が容易な針葉樹材のスギが選択されていた様子がうかがえる。しかし、この

場合の板材は非常に薄く削いだものであり、今回の板材とは用途や技法が異なる。今回の板材については、クリ材の入手が容易であったこと、年輪界を利用することで板材が比較的作りやすかったこと、耐朽性に優れており土の中に打ち込んでも長期間利用できたこと等が、利用された背景に考えられる。

床面から出土した炭化材は、住居の中心から放射状に伸びているものや、それと直行方向のもの等がある。これらが住居使用時の状況を示しているとするれば、前者が垂木、後者が横木の可能性がある。しかし、壁板材がこれらの部材とどのように関わっていたのか、現時点では不明であり、これらの部材についても垂木や横木とは異なった部材の可能性もある。しかし、いずれもクリが利用されていることから、入手が容易なだけでなく、強度や耐朽性なども考慮した用材が行われていたと考えられる。

他の時代との比較 本地域周辺では、主に古墳時代～平安時代の住居構築材について多くの調査例が知られている（パリノ・サーヴェイ株式会社1988・1989a・1989b・1991・1992・1994b・1994c）。これらの結果を見ると、基本的にはクヌギ節・コナラ節が多く見られ、縄文時代の用材とは明らかに異なる。時代によって用材が異なる傾向があることは、千野（千野1991）でも指摘されており、本地域の結果とも一致する。これらの変化の背景には、稲作の導入などによるクリ栽培の衰退なども考えられる。しかし、用材は地域によっても異なり、古墳時代でもクリが多く出土した住居跡が知られている（高橋ほか1995）。住居構築材の用材には、周辺植生や生業などが関わっていると考えられており、今後さらに周辺の古植生や他の木製品の用材などを総合的に検討して詳細を明らかにしたい。

引用・参考文献

- 千野裕道 1983 「縄文時代のクリと集落周辺植生—南関東地方を中心に—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』II p.25-42
- 千野裕道 1991 「縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺物化の検討—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』X p.215-249
- 伊藤隆三 1999 「縄文の集落と有機質遺物」『季刊考古学』68 p.91-92 雄山閣
- 石野博信 1990 「日本原始・古代住居の研究」p.435 吉川弘文館
- 宮本長二郎 1998 「縄文時代建築の種類と構造」『季刊考古学』64 p.55-58 雄山閣.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1988 「十二遺跡出土炭化材の樹種同定」『鑄師屋遺跡群 十二遺跡』p.393-399 御代田町教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1989a 「根岸遺跡出土炭化材の樹種同定」『鑄師屋遺跡群 根岸遺跡』p.291-293 御代田町教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1989b 「和田原遺跡出土炭化材同定」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集「和田原・鎌田原」』p.83-88 小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1991 「関口A・B遺跡出土材の樹種同定」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口A・関口B・下柏原」』p.245-254 小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1992 「下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告」『佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集「国道141号線関係遺跡（本文編）」』p.355-391 佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財センター.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1993 「郷土遺跡出土炭化材の同定」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集「郷土」』p.52-57 小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1994a 「炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定」『下弥堂—縄文前期初頭の集落遺跡調査一』p.146-150 長野県御代田町教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1994b 「H-4号住居址から出土した炭化構築材の樹種」『塩野西遺跡群 塚田遺跡』p.344-353 長野県御代田町教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1994c 「過去の植物利用について」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原」』p.613-624 小諸市教育委員会.
- 佐藤洋一郎 1997 「DNA分析でよむクリ栽培」『縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える』p.63-173 岡田康博・NHK

青森放送局編 NHK出版.

- 志村 勲 1984 「クリの生育特性」『農業技術体系 果樹編5 クリ基礎編』p.11-16 社団法人農山漁村文化協会.
- 高橋 敦・植木真吾 1994 「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYNO』2 p.5-18 パリノ・サーヴェイ株式会社.
- 高橋 敦・馬場健司・橋本真紀夫 1995 「行幸田畑中B遺跡に関する自然科学分析調査」『渋川市発掘調査報告書第48集「行幸田畑中B遺跡」』p.35-52 群馬県渋川市教育委員会.
- 辻 誠一郎 1997 「三内丸山を支えた生態系」『縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える』p.174-188 岡田康博・NHK青森放送局編 NHK出版.
- 山田悟郎 1999 「ク리를管理し北海道まで広げた縄文人」『最新縄文学の世界』p.96-103 小林達雄編 朝日新聞社.



SB5412 炭化材の検出



SB5345 炉内材

第5節 屋代遺跡群出土の魚類遺存体

千歳サケのふるさと館
高橋 理

はじめに

屋代遺跡より出土した魚類遺存体について報告する。遺物のサンプリング法および土壌水洗法については本文を参照されたい。

出土魚類遺存体

同定を試みた魚類遺存体は次のとおりである。また、時期・遺構ごとの出土は表96に示した。遺物はすべて被熱しており、細片化・変形をきたしているものが多い。

硬骨魚綱 Osteichthyes

サケ科 Salmonidae non. det.

コイ科 Cyprinidae non. det.

ドジョウ科 Cobitidae non. det.

他不明硬骨魚綱

若干のコメント

出土した魚類はサケ科魚類およびコイ科魚類が多い。サケについては現在の分布みるとサクラマスなどの遡上型とイワナ・ヤマメなどの河川型種の生息が確認されている(清水他1997)。遺存体では脱落歯および歯の植立した歯槽部があるが、著しく湾曲した特徴から、産卵のために遡上した個体が捕獲されたことを示している。歯や椎骨などの骨格からサクラマスとサケ(シロザケ)を判別することはできない。サクラマスとすると夏期、サケとすると秋期をはじめとするサケ漁が行われたことになるだろう。サケ科の椎骨は小型の個体が多く、イワナ・ヤマメあるいはサケの稚魚などの可能性がある。いずれにしても河川資源としてサケ科魚類が利用されていたことがわかる。

コイ科魚類についても種の同定までにはいたらないが、現在この地域に分布するフナ、ウグイ、ニゴイなどが利用されていたと考えられる。またごく小型の椎骨などがみられ、前記種の稚魚やアブラハヤなどの小型のコイ科魚類が考えられる。

遺構の時期的な位置づけにしたがって遺物をみると、五領ヶ台期ではサケやドジョウなどがごく少量みられるにすぎない。しかし、加曾利E III古期ではサケ科・コイ科・ドジョウ科のすべてがみられ、先述のようにサケの脱落歯や歯槽などが含まれることから、遡上したサケ科魚類がかなり積極的に利用されたことを示している。これらの漁労活動は、加曾利E III新期にはふたたび低調となったらしい。このような河川資源の利用の変遷は、狩猟活動のそれと比較し、屋代遺跡における生業活動の総体のなかで再度考察されるべきものである。

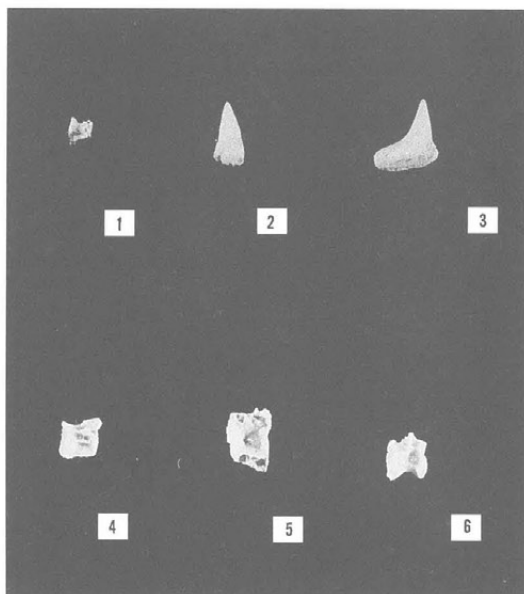
謝辞と若干の提言

筆者に今回の分析の機会を与えられた担当者の方、スタッフの方々にお礼申し上げます。

表98 屋代遺跡群出土魚類遺存体観察表

区	遺構名	時期	種名	出土動物遺存体			備考
				部位	残存部位	数量	
6b	SQ7003炭層2層	五領ヶ台	ドジョウ科 Cobitidae sp.	椎骨		1	被熱
6b	SB9012埋甕炉灰サンブル	五領ヶ台	サケ科 Salmonidae sp.	尾椎棘突起	基部破片	1	被熱
6b	SF9021	五領ヶ台	不明	部位不明	破片	1	被熱?
5b	SB5341-A 2層(3層)	加曾利E.III古	コイ科 Cyprinidae?	椎骨		1	被熱
5b	SB5341-A 4層(4-1層)	加曾利E.II新~III古	コイ科 Cyprinidae sp.	椎骨		1	被熱
5b	SB5341-A 4層(4-1層)	加曾利E.II新~III古	硬骨魚綱 Osteichthyes sp.	椎骨		1	被熱
5b	SB5311-D 1層2	加曾利E.III古	硬骨魚綱 Osteichthyes sp.	椎骨		1	被熱
5b	SB5311-D 1層4	加曾利E.III古	硬骨魚綱 Osteichthyes non det.	棘など		3	微細片 被熱
5b	SB5311-D 1層4	加曾利E.III古	硬骨魚綱 Osteichthyes sp.	椎骨		1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)3	加曾利E.III古	ドジョウ科 Cobitidae sp.	椎骨		1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)6	加曾利E.III古	コイ科 Cyprinidae sp.	椎骨	尾椎	1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)6	加曾利E.III古	サケ科 Salmonidae spp.	歯	脱落歯	2	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)7	加曾利E.III古	コイ科 Cyprinidae sp.	椎骨	側隆線一部確認	1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)8	加曾利E.III古	硬骨魚綱 Osteichthyes sp.	椎骨		1	ごく小型 壳形 コイ科 Cyprinidae?
5b	SB5311-D 4層(3層)8	加曾利E.III古	サケ科 Salmonidae?	歯および齒槽		1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)14	加曾利E.III古	コイ科 Cyprinidae?	椎骨		1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)14	加曾利E.III古	硬骨魚綱 Osteichthyes sp.	椎骨		1	微細椎骨
5b	SB5311-D 4層(3層)16	加曾利E.III古	コイ科 Cyprinidae?	椎骨		2	被熱
5b	SB5332 埋甕内	加曾利E.III古	不明	部位不明	破片	8	被熱 微細片
5b	SB5345 1 (No.1埋甕)	加曾利E.III古	硬骨魚綱 Osteichthyes sp.	椎骨		1	被熱
5b	SB5316 炉内灰・焼土	加曾利E.III新	サケ科 Salmonidae spp.	歯		2	被熱
5b	SB5316 炉内灰・焼土	加曾利E.III新	コイ科 Cyprinidae non det.	椎骨	脱落歯	11	被熱
5b	SB5338 2 (No.2埋甕)	加曾利E.III新	硬骨魚綱 Osteichthyes?	椎骨		4	被熱?
5b	SQ5531 (SQ31埋甕)	加曾利E.III新~E.IV	不明	部位不明	破片	1	被熱
5b	SQ5551 (S9一括埋甕)	加曾利E.III新~E.IV	硬骨魚綱 Osteichthyes sp.	椎骨	破片	1	被熱
5b	ST5124 P2(SK5516)1層4	加曾利E.III	コイ科 Cyprinidae sp.	椎骨		1	被熱

※遺構名の()は旧名称



1：ドジョウ科魚類 椎骨
 2、3：サケ科魚類 歯
 4～6：コイ科魚類 椎骨
 ※スケールは3倍

図56 屋代遺跡群出土魚骨

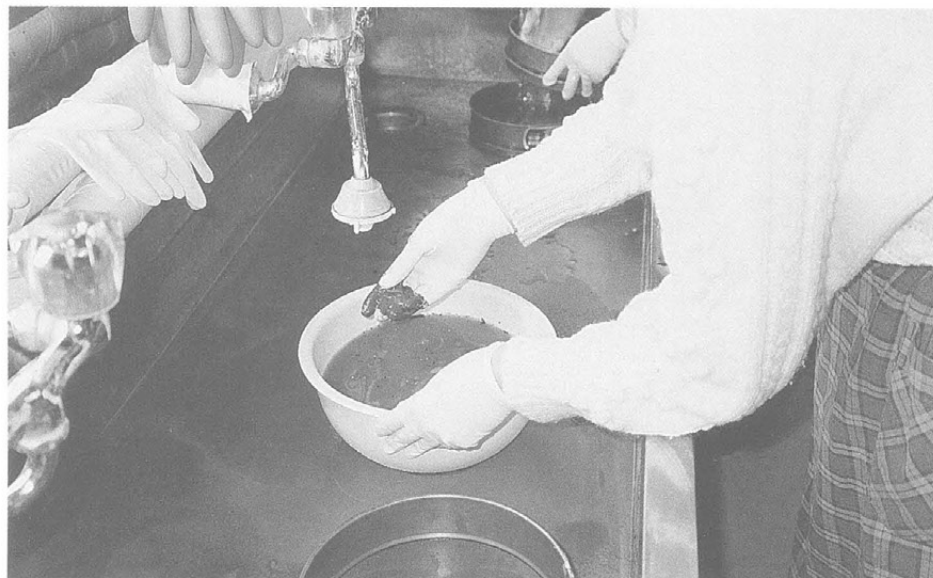
今回の調査では、微細な動植物遺存体までの検出を目的として、フローテーションおよび最小0.25mmのメッシュを用いて水洗選別を行っている。魚類遺存体の面からは、この方法は特に有効であったといえる。微細なドジョウ科の椎骨やサケの脱落歯の検出は、通常のハンドピックでは回収率が極端に落ちる。今回多量に検出された哺乳類(?)の海面骨骨梁片も同様のことがいえる。

サケ科魚類に関していえば、遺跡や遺構によっては椎骨しか「ない」場合や、椎骨・歯・歯槽・鱗までもがある場合の両方のケースがあり、遺跡・遺構の性格を考えるにあたりそれぞれが重要な意味をもってくる(高橋・太子1998)。「ない」と「見つからない、回収できない」とでは解釈に計り知れない影響をおよぼす。時間や労力の配分との兼ね合いを持たせながら、このような手法が調査・整理に積極的に導入されることによって、さらなる成果を期待できるものとする。

引用・参考文献

清水義雄他 1997 「魚介類」『見る知る 信州の自然大百科』pp.196-213 郷土出版社。

高橋 理・太子夕佳 1998 「10 千歳市キウス4 遺跡出土動物遺存体」『千歳市 キウス4 遺跡(2)』(勸北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第124集 pp.345-356)



サンプル土を洗う

第6節 動物遺存体

1 上信越自動車道屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体

獨協医科大学第1解剖学教室 櫻井秀雄・芹澤雅夫
 京都大学霊長類研究所 茂原信生

(1) はじめに

上信越自動車道屋代遺跡 (BYS) 群は長野県更埴市にある遺跡で、平成4年から5年にかけて上信越自動車道の建設工事に伴って、長野県埋蔵文化財センターによって発掘・調査された。この遺跡は縄文時代から江戸時代に至るまでの層を含んだ複合遺跡である。本編は縄文時代の遺物に関する報告である。

(2) 出土動物骨のリスト (表99)

出土した動物は哺乳類と鳥類である。ここで出土している哺乳類は遺跡からは一般的に出土するものである。哺乳類は4目8科8種、鳥類は2目2科である。

哺乳綱 Mammalia

兔目 Lagomorpha

ウサギ科 Leporidae

ノウサギ *Lepus brachyurus*

食肉目 Carnivora

クマ科 Ursidae

ツキノワグマ *Selenarctos thibetanus*

イヌ科 Canidae

ホンドキツネ *Vulpes vulpes japonica*

イタチ科 Mustelidae

ホンドテン *Martes melampus melampus*

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ (あるいはブタ) *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus*

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

鳥綱 Aves

コウノトリ目 Ciconiformes

サギ科 Ardeidae の一種 (種不明)

表99 屋代遺跡群から出土した縄文時代の獣骨点数の時代推移

時期	種別	シカ	イノシシ	ウマ	ウシ	クマ	テン	トリ	ウサギ	キツネ	イヌ	ヒト	不明	時代別計
中期前葉		108	108			1	1					38	341	597
中期中葉		1	1										11	13
中期後葉		52	276	1	1			10	3	1		34	666	1044
後期													5	5
縄文 (時期不明)			10										36	46
種合計		161	395	1	1	1	1	10	3	1	0	72	1059	1705

ガンカモ目 Anseriformse

ガンカモ科 Anatidae の一種 (種不明)

(3) 動物遺存体の出土状況

出土した動物骨の保存状態は良い。遺跡が低湿地性であることも一因であるが、焼かれた骨が多いことがその要因である。焼かれていることで、土壌に吸収されることなく保存されたが、骨自体はかなり細かい破片になり、同定できないものが多い。時期別に出土量を区分すると中期前葉と中期後葉に集中して出土している。中期中葉と後期からはごく少量の出土のみみられただけである。総点数は1705点である(不明の骨については、1袋を1点として数えている)。焼かれた骨はこのうち1069点で全体の63%を占める。ヒトの骨と不明骨を除く同定された動物骨は575点で、同定率は35%である。同定された骨はイノシシ(396点 69%)が最も多く、次いでニホンジカの161点(28%)である。この2種で全体の97%を占めている。次に種を同定できないものも含むが、トリが10点(1.7%)、さらにノウサギが3点(0.5%)、そしてウシ・ウマ・クマ・テン・キツネが各1点である。

ウシとウマは後代からの混入と考えられる。松井(松井1992)は、ウシとウマは、弥生時代末まで日本には入っていないと報告している。

(4) 出土動物骨の種別の状況

A イノシシ

イノシシは縄文中期全体を通して最も多く出土している。同定された点数は396点である。ほぼ全身の骨格にわたる部位が確認されているが、破片が多い。保存の良好な部位、あるいは完全に近い状態で出土している部位は単骨や指の骨である。同定された部位では頭蓋骨が最も多い。完全なものではなく、保存の良いものは写真に掲載した。頭蓋骨に次いで出土数の多かった歯は、性質上そもそも残りやすい上に、他の部分に比べ、小片でも確認されやすいことから点数が多い結果となった。若い個体の骨は36点検出された。全体からすると特に多い量ではない。幼体(瓜坊)から1歳未満と思われる発育段階の個体はほとんどなく、骨端の癒合が不完全な亜成獣の骨である。焼けている骨は276点でイノシシの骨中では70%を占める。

B ニホンジカ

ニホンジカはイノシシに次いで出土量が多い。出土点数は161点で同定されたうちの28%になる。イノシシと同様にほぼ全身の骨が検出されているが、いずれも小片が多い。四肢の長骨と頭蓋骨の出土量が全体の出土比率から考えるとかなり少ないが、全体量が少ないことによる偏りも考慮すべきだろう。椎骨の出土量が少ないことも同様の状況が考えられるが、焼けている骨が少ないことから消失したことも充分考えられる。また、解体・廃棄の習慣を考慮すれば集落外での処分もあるだろう。保存状態の良い完全な形

に近いものは、指骨や関節骨の単骨がほとんどである。焼けている骨は56点確認された。同定されたニホンジカの34.8%を占め、イノシシの半分の割合である。

C ノウサギ

ノウサギの骨は3点出土している。大腿骨が2点と脛骨が1点である。大腿骨は左右1点ずつ出土している。右は遠位骨端のみで、左は近位端部が残っている。脛骨は遠位骨端が出土している。いずれの骨も焼かれている。

D ツキノワグマ

ツキノワグマは右上顎の犬歯が1点出土している。歯冠から歯頸部分までで、歯根は残っていない。加工や切削した痕跡はなく、また焼けてもいない。

E ホンドキツネ

ホンドキツネは左下顎の犬歯が1点出土している。焼かれている。もともと古代遺跡からの出土量は非常に少ない種である。

F ホンドテン

ホンドテンは左下顎骨が1点出土している。P3付近からM3の遠心付近までの下顎体で、歯は残っていない。現生標本と比較したところ、雌雄差は歴然としており、当該出土骨はオスである。また現生のものとほぼ同大である。焼かれており、黒灰色を呈している。同県内の栃原遺跡では23例もの多量の出土が報告されている（宮尾他1980・1984）。

G ウシ

ウシは歯の破片が1点のみ出土している。歯種は不明である。中期後葉層から出土しているが、この1点の出土を以ってウシの存在の証左とするには情報量が少ない。やはり混入した骨と考えるべきだろう。

H ウマ

中心足根骨が1点検出された。ウシと同様に中期後葉層から出土している。ウシ同様に混入した骨と思われる。

I トリ

トリの骨は10点検出された。比較標本も十分な状況になく、科までの同定ができた骨は3点にとどまった。トリの左脛骨の遠位部が1点出土しているが、サギ科と同定された。ガンカモ科のトリと同定された2点は、左上腕骨と右尺骨が1点ずつである。左上腕骨は遠位半分が出土している。右尺骨は遠位骨端が欠損している。トリの骨はいずれも焼かれている。

(5) 出土動物と遺跡の特徴

本遺跡の縄文期における出土動物の特徴は次のようになる。

- 主たる出土動物は、イノシシとニホンジカで、点数では全体の97%を占める。
- 焼けている骨が全出土骨の6割以上を占める。
- 出土骨は大部分が細片化している。

以上のような状況から屋代遺跡の動物利用を考察すると、まずイノシシとニホンジカの出土割合の多さは縄文期の遺跡にはしばしば見られる一般的傾向と考えられ、特異な状況ではない。県内の同時代遺跡を概観すると、地域により出土動物の種類が増減することはあるが、中心となる動物はやはりイノシシとニホンジカである。本遺跡ではイノシシがニホンジカの倍以上の出土比率を示しているが、近隣の松代町の松原遺跡における出土状況（茂原・櫻井1998）や、篠ノ井遺跡群での出土状況（櫻井・茂原1997）、さらに戸倉町の円光房遺跡（金子1990）の出土状況を比較してみると本遺跡と非常に共通点が多く、興味深い。動物

骨の出土状況が狩猟活動を順当に反映している前提で考えるならば、遺跡における出土動物相は地理的な要因が大きく影響していることを示唆している。ニホンジカとイノシシの最少個体数を計算すると、ニホンジカが7でイノシシは9という結果になった。不明破片にこの2種の獣骨が相当量含まれるとしても、縄文全期を通しての捕獲量はそれほど多い数ではないといえる。潤沢に入手出来なかったことが利用状況にも大きく反映していると考えられる。食用後の骨についても加工出来ない部分は廃棄するのではなく、燃料への利用が図られたと考えられる。

時代順に獣骨の出土量を見てみると、中期中葉と後期に極端な落ち込みが見られる(表99)。集落の消長との関連性があるのか、堆積条件によるものなのか他の遺物の出土状況と併せて検討する必要があるかもしれない。

ウシとウマについては現在のところ、年代の判明しているもっとも古いものは、ウマでは岡山県の百間川遺跡から出土した4世紀末のもの(松井1987・1992)であり、ウシは東京の伊皿子貝塚から出たとされている弥生時代後期のもの(金子1981)である。ウシに関しては混入である可能性も指摘されている。長野県篠ノ井遺跡でも古墳時代前期層(4世紀後半)と比定されるウマが出土しており、ウマの移入時期の貴重な検討材料と考えられるが(櫻井・茂原1998)、本遺跡出土のウシ・ウマも含めて年代を決定するためには様々な方法による年代測定をする必要がある。

本遺跡は、中世にまで至る年代層を持つ遺跡であり、近世・中世からも多量の獣骨が出土している。これらの後代の動物遺存体との継続的な関りも含めて周辺遺跡との総合的な検討は後に刊行されるまとめの編で記載することにした。

引用・参考文献

- 宮尾嶽雄・西沢寿晃・鈴木茂忠 1980 「早期縄文時代長野県栃原岩陰遺跡出土の哺乳動物. 第1報 出土哺乳動物相」『哺乳動物学雑誌』8(3) p.181-188.
- 宮尾嶽雄・相見満・西沢寿晃 1984 「栃原岩陰遺跡出土動植物遺存体一昭和58年度一」『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』p.43-60
- 金子浩昌 1981 「第2号方形周溝墓西溝出土の家牛(Bos taurus)頭骨」『伊皿子貝塚遺跡』p.476-478
- 松井 章 1987 「養老厩牧令の考古学的考察一斃れ馬牛の処理をめぐって一」『信濃』39(4) p.231-256
- 金子浩昌 1990 「円光房遺跡における焼獣骨の調査」『円光房遺跡』戸倉町教育委員会 p.89-204、写真 p.356-373
- 松井 章 1992 「動物遺存体から見た馬の起源と普及」『日本馬具大鑑1；古代(b)』日本馬具大鑑編集委員会編、日本中央競馬会 p.33-44
- 櫻井秀雄・茂原信生 1997 「篠ノ井遺跡群出土の動物遺存体」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22 篠ノ井遺跡群成果と課題編』p.246-274.
- 茂原信生・櫻井秀雄 1998 「松原遺跡出土の獣骨」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4 松原遺跡 縄文時代』p.413-424

写真の説明

図版中の写真に添付されている図のシャド一部は写真のおおよその部位を示す。参照図の縮尺は図版の縮尺と一致しない。

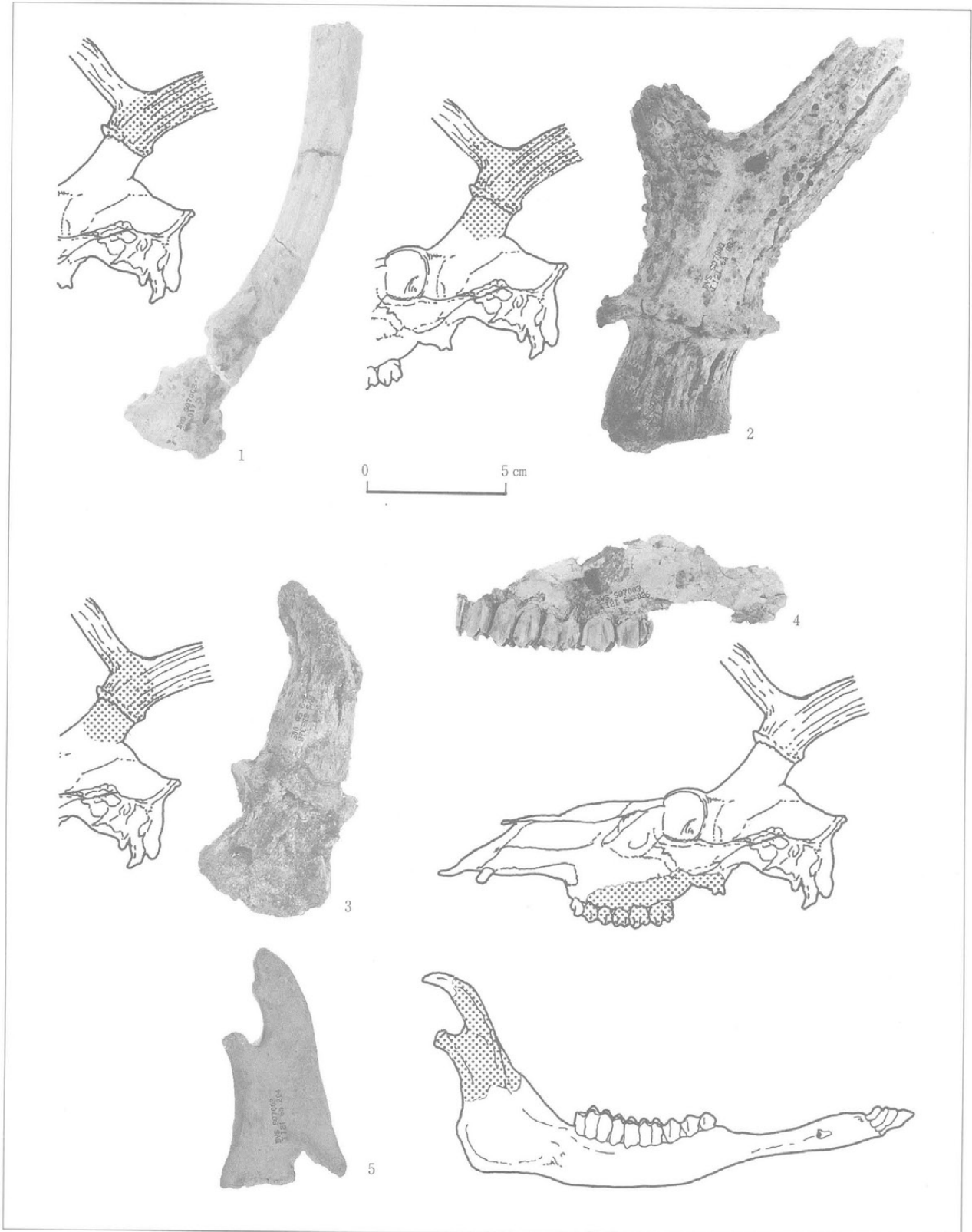


図57 屋代遺跡群出土のニホンジカ 1

1～3：左角、4：左上顎骨、5：右下顎枝

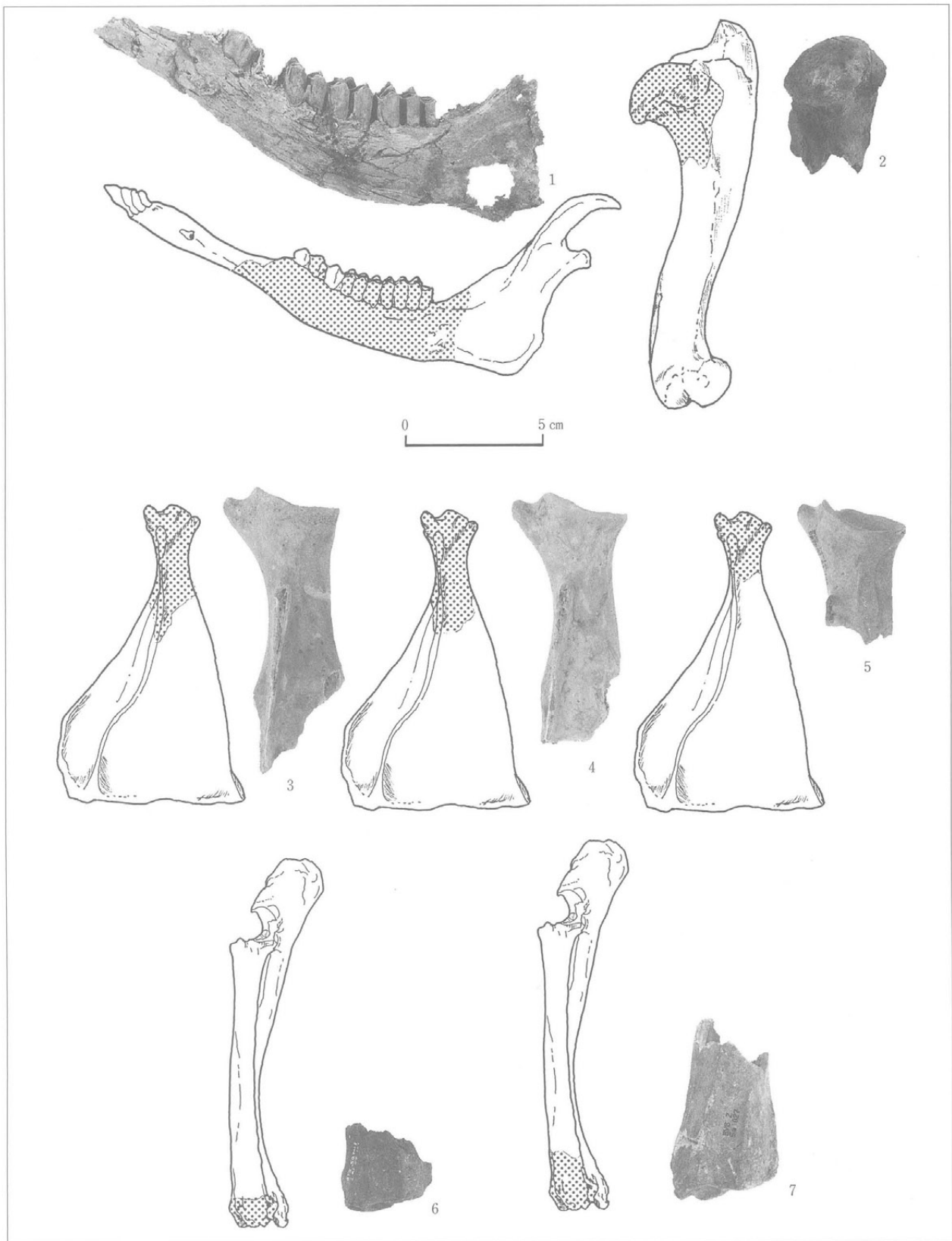


図58 屋代遺跡群出土のニホンジカ 2

1：左下顎骨、2：左上腕骨、3～5：右肩甲骨 6・7：左橈骨

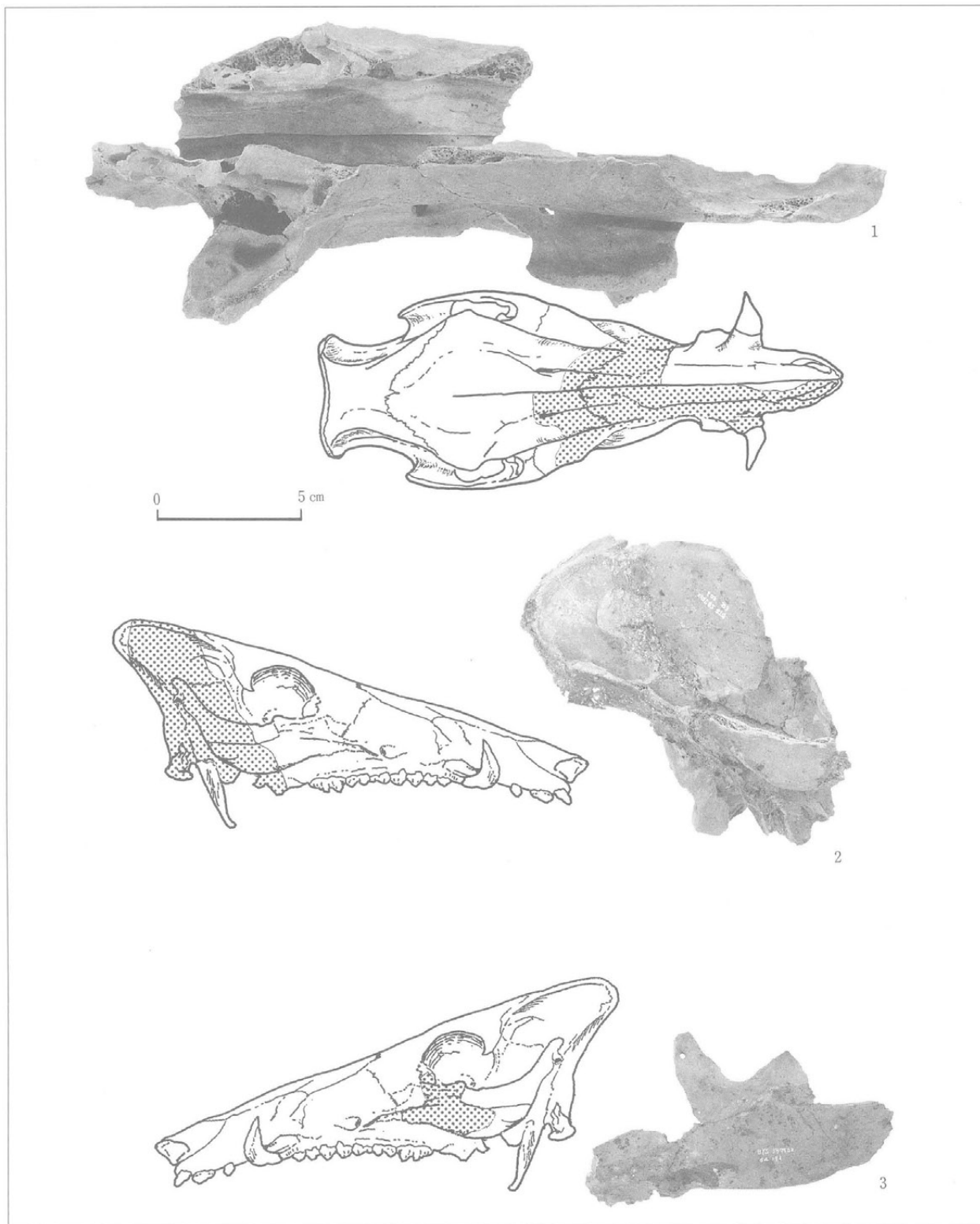


図60 屋代遺跡群出土のイノシシ 1

1：頭蓋骨、2：右側頭骨および頭頂骨、3：左頬骨

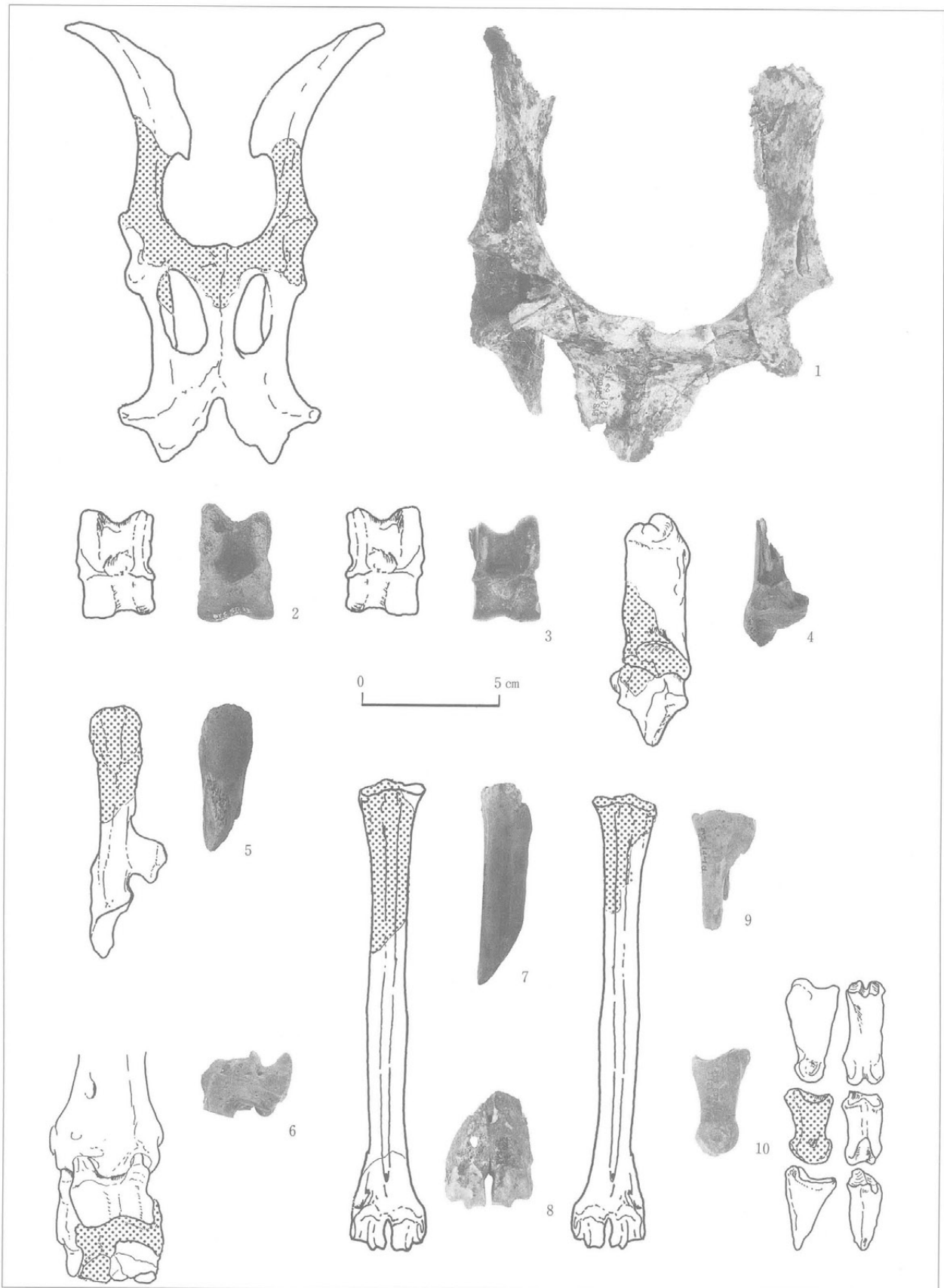


図59 屋代遺跡群出土のニホンジカ 3

1 : 骨盤、2 : 右距骨、3 : 左距骨、4 : 右踵骨、5 : 左踵骨

6 : 右C+IV足根骨、7・8 : 左中足骨、9 : 右中足骨、10 : 中節骨

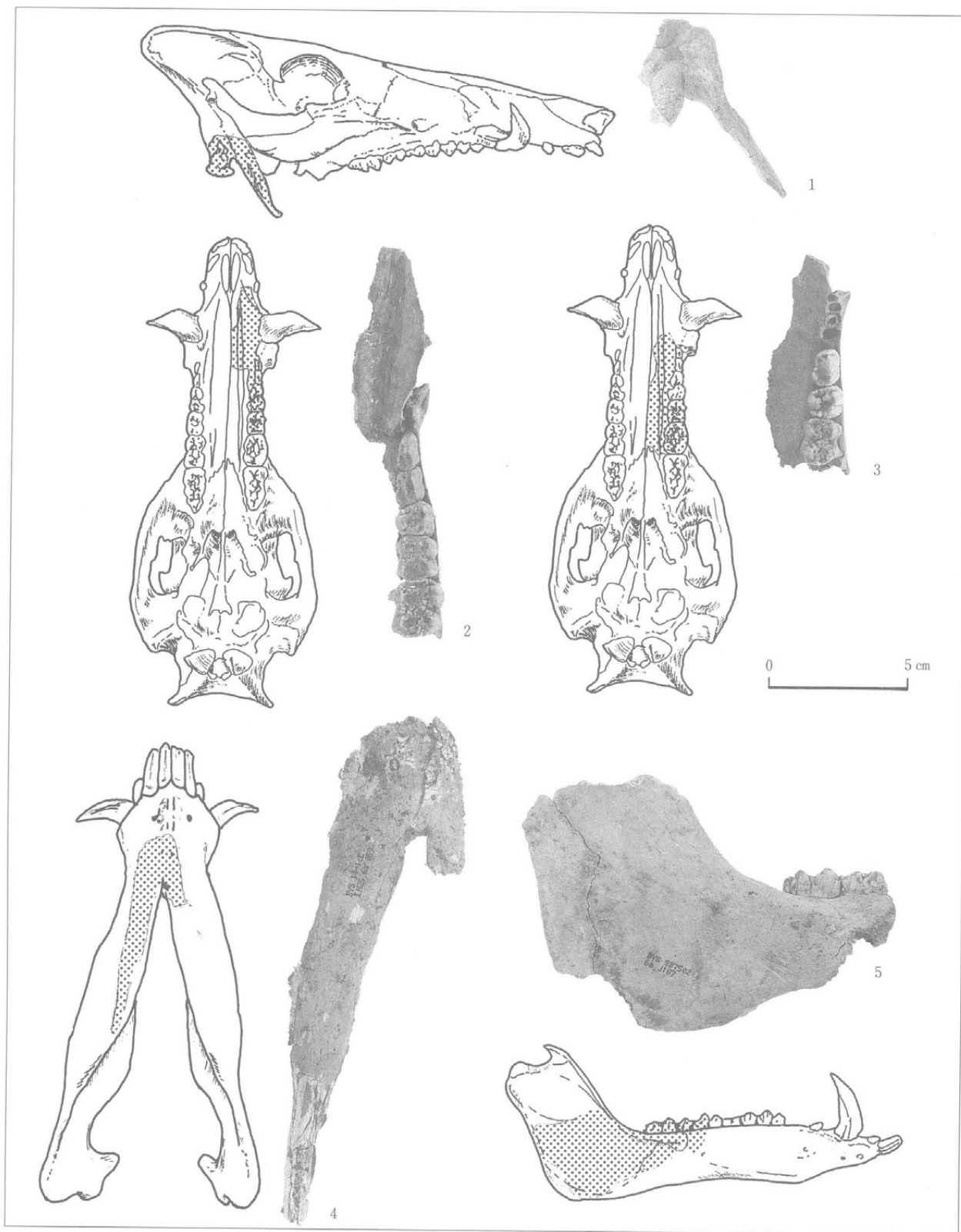


図61 屋代遺跡群出土のイノシシ 2

1 : 右後頭骨、2・3 : 左上顎骨、4 : 下顎骨底部、5 : 右下顎骨

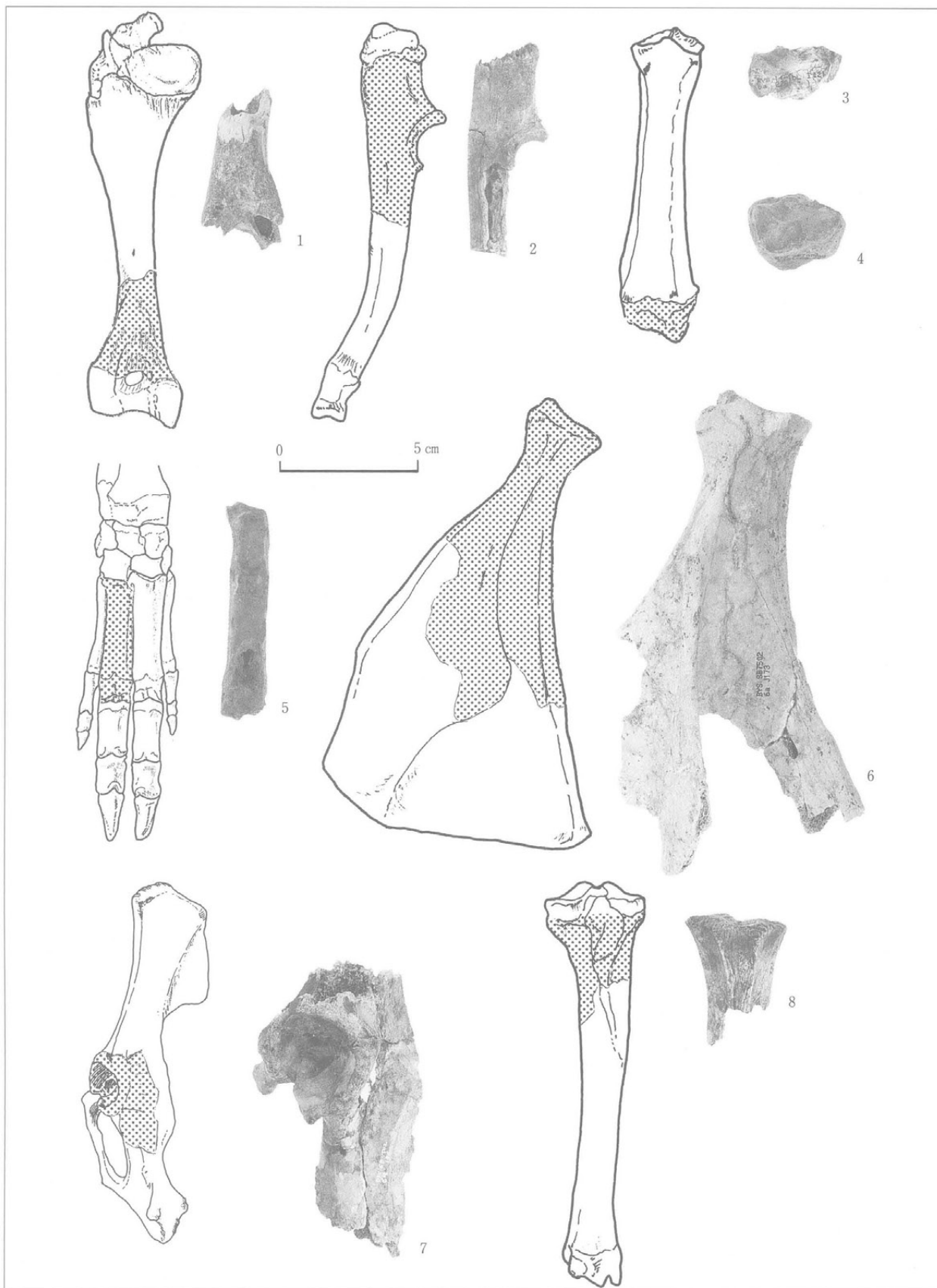


図62 屋代遺跡群出土のイノシシ 3

1 : 左上腕骨、2 : 左尺骨、3・4 : 右橈骨、5 : 右第IV中手骨
 6 : 右肩甲骨、7 : 左寛骨、8 : 右脛骨

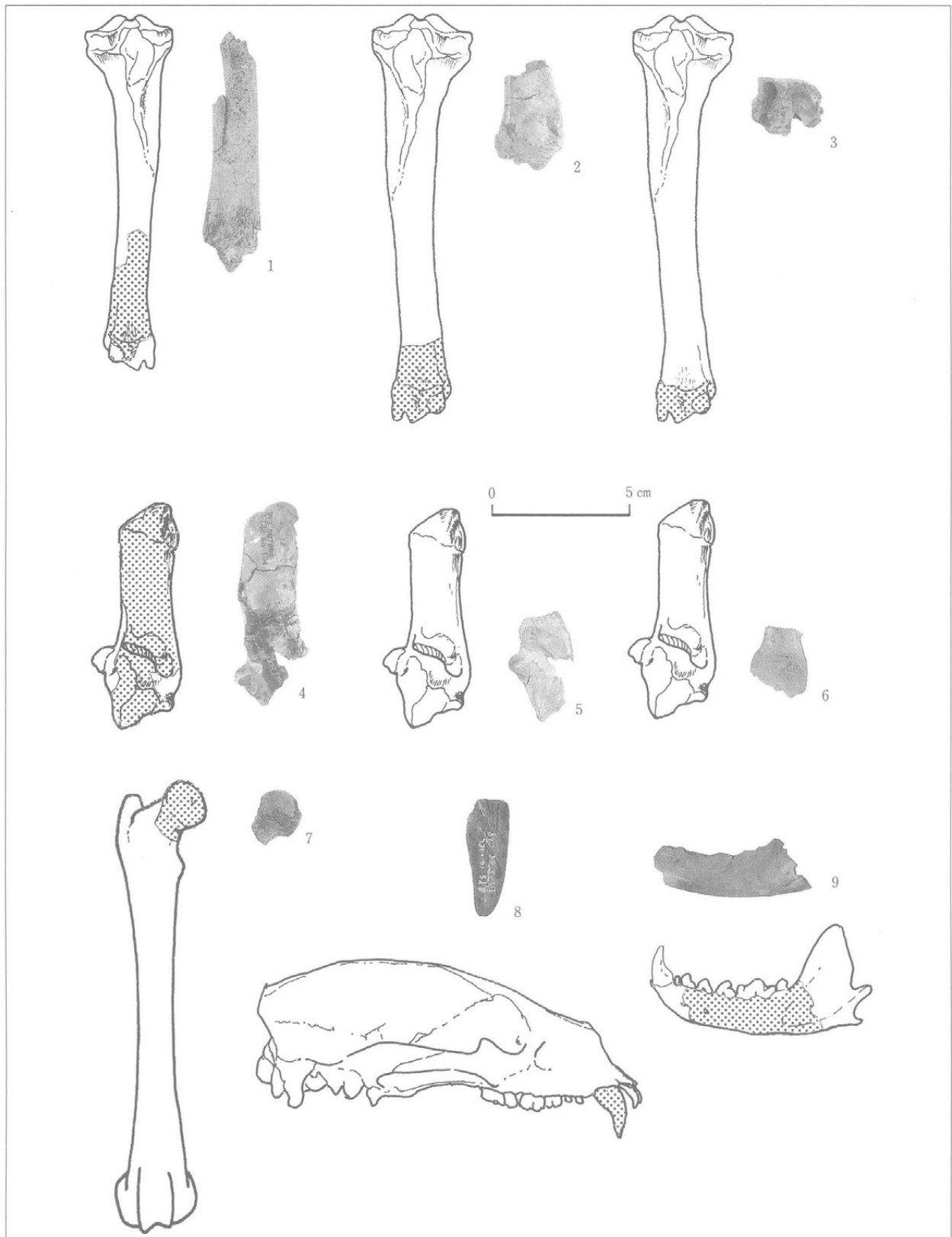


図63 屋代遺跡群出土のイノシシ・ニホンザル・ツキノワグマ・ホンドテン

(1～6：イノシシ、7：ニホンザル、8：ツキノワグマ、9：ホンドテン)

※8・9は等倍

1：右脛骨、2・3：左脛骨、4～6：右踵骨、7：右大腿骨、8：右上顎犬歯、9：左下顎骨

表100-(1) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覧

※ 種不明およびヒトについては、この表から除いてある。
ヒトの形質的特徴については、第7節に記載してある

XIV-3層 (中期前葉)

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左 右	上 下	状 態 1 2	c ph dh pe ps s ds de	数	備 考	
			地区	時代	台帳	大地区	中地区											小地区
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	422	第II中手骨		?	f			1	多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	470	橈側手根骨		l	c	1			多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	482	末節骨		?	f		1 1 1 1		多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	482	末節骨		?	f		1 1 1 1		多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	482	末節骨		?	f	1			多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	482	末節骨		?	f	1			多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	480	基節骨		?	f		1 1		多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	570	中心足根骨		l	f				多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	422	第V中手骨	遠位端	?	f			1	多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	481	中節骨		?	f		1		多数	焼骨
SK5938	旧SB5409 骨集中区		5b	—	40883	I		イノシシ	482	末節骨		?	f		1		多数	焼骨
XIV-3	上面		5b	—	41911	I	N20	イノシシ	302	歯片	M3	r	l	f			1	
XIV-3		1	6b	縄	11219	I	J21	種不明	410	肩甲骨		?	f				1	

XIV-2層 (中期前葉)

包含層	検出面	6a	縄	1015	I	I21	ニホンジカ	422	中手骨		?	f	<th>1</th> <th>1</th> <th>焼骨</th>	1	1	焼骨
包含層	検出面	6b	縄	16317	I		ニホンジカ	216	角	基部	?	f			1	カットマーク
包含層	上面	5b	—	20493	I	011 J76	ニホンジカ	482	末節骨		?	f		1	1	焼骨

XIV-1層 (中期前葉)

SB5408	4層最下部	1	5b	—	12356	I		ニホンジカ	399	歯片		?	?	f		13	動物の歯	
SB5412	2層中	1	5b	—	42939	I		イノシシ	218	上顎骨+ P4-M3	歯	r	u	f		1		
SB7502	C区、2層	4	6a	縄	11220	I		イノシシ	200	頭蓋骨+歯	右P2-P4, M3 左P3-M3	rl	u	f		1	老年	
SB7502	埋土		6a	縄	9173	I		イノシシ	410	肩甲骨		r	f	1		1	破片あり	
SB7502	1層		6a	縄	12221	I		イノシシ	482	末節骨		?	f		1 1 1 1	10	焼骨	
SB7502	1層		6a	縄	15298	I		イノシシ	230	下顎骨	下顎枝	r	f			1		
SB7502	1層		6a	縄	10190	I		ニホンジカ	410	肩甲骨		r	f		1 1	1		
SB7502	1層	一括-1	6a	縄	7139	I		イノシシ	218	上顎骨+歯片	P3-M1	l	u	f		1 1	1	8148
SB7502	1層	一括-10	6a	縄	7139	I		ニホンジカ	480	基節骨		?	f		1 1	1	8148	
SB7502	1層	一括-11	6a	縄	7139	I		ニホンジカ	450	尺骨	滑車 切痕部	l	f		1	1	8149	
SB7502	1層	一括-16	6a	縄	10192	I		イノシシ	423	2or5の中手骨 +中足骨		?	f			1		
SB7502	1層	一括-2	6a	縄	7139	I		イノシシ	422	第IV中手骨		r	c	1		1	7140	
SB7502	1層	一括-3	6a	縄	7139	I		ニホンジカ	570	C+IV足根骨		r	c	1		1	8141	
SB7502	1層	一括-4	6a	縄	7139	I		ニホンジカ	410	肩甲骨		r	f	1		1	8142	
SB7502	1層	一括-5	6a	縄	7139	I		ニホンジカ	410	肩甲骨		r	f	1		1	8143	
SB7502	1層	一括-6	6a	縄	7139	I		ニホンジカ	410	肩甲骨		r	f		1 1	1	8144	
SB7502	1層	一括-7	6a	縄	7139	I		ニホンジカ	573	中足骨		r	f		1 1	1	8145	
SB7502	1層	3	6a	縄	11203	I		イノシシ	210	後頭骨		r	f			多数		
SB7502	1層	5	6a	縄	10187	I		イノシシ	230	下顎骨+ M1-M3	下顎 枝、歯	r	l	f		1		
SB7502	1層	6	6a	縄	8157	I		種不明	180	肋骨		?	f			1		
SB7502	1層	7	6a	縄	8156	I		イノシシ	510	寛骨	白部	l	f			1		
SB7502	1層	01/01	6a	縄	10186	I		ニホンジカ	410	肩甲骨		l	f	1		1		
SB7502	1層	02/01	6a	縄	10191	I		イノシシ	220	頬骨+上顎骨 +P2-M2	歯	l	u	f		1		
SB7502	1層	02/01	6a	縄	10191	I		イノシシ	422	第III中手骨		l	c	1		1		
SB7502	1層	02/01	6a	縄	10191	I		イノシシ	230	下顎骨+M2	歯	l	l	f	1	1		
SB9009		2	6b	縄	10189	I		ニホンジカ	216	角片		?	f			多数		
SB9009		4	6b	縄	10190	I		ニホンジカ	410	肩甲骨		l	f		1	1		
SB9009		4	6b	縄	10190	I		ニホンジカ	410	肩甲骨		l	f		1 1	1		
SB9010		1	6b	縄	11204	I		ニホンジカ	573	中足骨	内側面	l	f		1 1	1	加工痕	
SB9010		2	6b	縄	11205	I		イノシシ	399	白歯片	歯片	?	f			多数		
SB9010	3層		6b	縄	17324	I		ニホンジカ	140	腰椎	椎体部	rl	f			1		
SB9010		10	6b	縄	13251	I		イノシシ	481	中節骨		?	c	1		2	焼骨	
SB9010		10	6b	縄	13251	I		イノシシ	482	末節骨		?	c	1		2	焼骨	
SB9010	2層		6b	縄	18341	I		ニホンジカ	423	中手骨or 中足骨		?	f			1	1	
SB9011	2層	3	6b	縄	6104	I		イノシシ	230	下顎骨縫合部 +M3-P3	歯	rl	l	f		1		
SB9012		1	6b	縄	16318	I		イノシシ	230	下顎骨+ 左下M3		lr	l	f		2	上下顎骨	

表100-(2) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覽

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c	p	h	p	e	s	d	s	d	e	数	備考	
			地区	時代	台帳	大地区	中地区																				小地区
SB9012		1	6b	縄	16318	I		ニホンジカ	218	上顎骨+ 左右P2-M3		l	r	u	f									2	上下顎骨		
SB9012		2	6b	縄	11210	I		ニホンジカ	573	中足骨		l			f			1	1					1			
SB9012		3	6b	縄	11209	I		ニホンジカ	570	C+IV足根骨	内側半分	r			f									15			
SB9012		4	6b	縄	11208	I		イノシシ	301	歯片	M3近心半	r	u		f									1	歯細片あり		
SB9015	IHSQ9001	6	6b	縄	12240	I		ニホンジカ	481	中節骨		?			f	1								2	焼骨		
SB9015	IHSQ9001	1	6b	縄	5095	I	I25	ニホンジカ	399	歯片		?	?		f									3			
SB9015	IHSQ9001	01/01	6b	縄	5099	I	I20	ニホンジカ	481	中節骨		?			f	1								1	12221 焼骨		
SB9015	IHSQ9001	03/01	6b	縄	5100	I	I20	ニホンジカ	481	中節骨		?			f	1								1	12222 焼骨		
SB9015	IHSQ9001	03/01	6b	縄	5100	I	I20	ニホンジカ	470	橈側手根骨		l			f									1	12222 焼骨		
SB9015	IHSQ9001	03/01	6b	縄	5100	I	I20	ニホンジカ	480	基節骨		?			f	1	1	1	1	1	1			1	12222焼骨, de半分欠け		
SB9015	IHSQ9001	05/01	6b	縄	5096	I		ニホンジカ	571	距骨		l			f									1	10196 加工痕		
SB9016	IHSQ9002		6b	縄	5094	I		イノシシ	140	腰椎		r	l		f									1			
SB9016	IHSQ9002		6b	縄	5094	I		イノシシ	110	椎体		r	l		f									1			
SK7670			6a	縄	16319	I	H25	イノシシ	301	歯片	M3	l	u		f									1			
SK7670	円周石内		6a	縄	3044	I		イノシシ	180	肋骨		?			f									1			
SK7676	埋土3層中		6a	縄	10200	I		ニホンジカ	422	中手骨		l			f	1	1							1			
SK9114			6b	縄	11220	I		イノシシ	399	歯片		?			f									3			
SQ7003	X IV-1b		6a	縄	16304	I	I21 J07	イノシシ	572	踵骨		r			f			1						2	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18342	I	I21 J16	イノシシ	302	歯片	大歯	r	l		f												
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18343	I	I21	イノシシ	399	歯片	乳歯	?			f												
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18344	I	I21	イノシシ	450	尺骨		l			f	1										焼骨	
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18344	I	I21	イノシシ	230	下顎骨	下顎 縫合部	r	l		f												
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18344	I	I21	イノシシ	482	末節骨		?			f	1										焼骨	
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18344	I	I21	イノシシ	520	大腿骨	骨頭	r			f			1								焼骨	
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18344	I	I21	イノシシ	302	歯片	I2	l	l		f												
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18344	I	I21	イノシシ	210	後頭骨	後頭顆	r			f												焼骨
SQ7003	X IV-1b		6a	縄	18346	I	I21	イノシシ	230	下顎骨	下顎 縫合部	r	l		f												
SQ7003	X IV-1b		6a	縄	10185	I	I21 J67	ニホンジカ	410	肩甲骨		r			f	1								1	破片15		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	18344	I	I21	ニホンジカ	210	後頭骨	鼓室部	r			f												焼骨
SQ7003	X IV-1b	土器NO. 37周辺	6a	縄	16301	I	I21	ニホンジカ	572	踵骨	距載関節	r			f			1	1					1			
SQ7003	X IV-1b		6a	縄	2026	I	I21 J75	ニホンジカ	218	上顎骨+ P3-M3	歯片	r	u		f									1			
SQ7003	X IV-1b		6a	縄	10184	I	I21 J75	ニホンジカ	399	歯片		?	?		f									1			
SQ7003	X IV-1b	一括-1	6a	縄	2030	I	I21 J57	ニホンジカ	301	歯片	P2-M2	l	u		f									5			
SQ7003	X IV-1b	一括-1	6a	縄	10182	I		ニホンジカ	399	歯片		?	?		f									4	10183		
SQ7003	X IV-1b	土器12	6a	縄	10189	I		イノシシ	480	基節骨		?			f	1								2			
SQ7003	X IV-1b	1	6a	縄	1019	I	I21	イノシシ	200	頭蓋骨+ M2, M3, P2-P4	歯	r	u		f									1			
SQ7003	X IV-1b	3	6a	縄	4075	I	I21	ニホンジカ	218	上顎骨+ M1-M3	歯片	l	u		f												多数
SQ7003	X IV-1b	3	6a	縄	4075	I	I21	ニホンジカ	200	頭蓋骨片		?			f												多数
SQ7003	X IV-1b	4	6a	縄	9175	I	I21	ニホンジカ	510	寛骨		l			f									1			
SQ7003	X IV-1b	10	6a	縄	15297	I	I21	イノシシ	570	中心足根骨		l			c	1								1	焼骨		
SQ7003	X IV-1b下		6a	縄	11210	I	I22 J24	イノシシ	230	下顎骨+M2	下顎枝+ 歯	l	l		f									1			
SQ7003	X IV-1b炭		6b	縄	4080	I	I21 J35	イノシシ	302	歯片	I2	l	l		f									1			
SQ7003	X IV-1b炭		6b	縄	5081	I	I21 J36	イノシシ	430	上腕骨		r			f									1			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5083	I	I21 J17	イノシシ	422	中手骨		?			f			1	1					41	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5088	I	I21 J48	イノシシ	481	中節骨		?			c	1								28	15300、焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5088	I	I21 J48	イノシシ	210	後頭骨	後頭顆	r			f									28			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5088	I	I21 J48	イノシシ	480	基節骨		?			c	1								28	15300、焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	6104	I	I22 J11	イノシシ	572	踵骨		r			f			1						5	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6b	縄	6111	I	I21 J26	イノシシ	570	第IV足根骨		l			f									20	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	6115	I	I21 J18	イノシシ	570	第IV足根骨		l			f									88	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	6115	I	I21 J18	イノシシ	422	中手骨		?			f			1						88	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	6116	I	I21 J02	イノシシ	301	歯片	大歯	l	u		f									1			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	7123	I	I21 J36	イノシシ	481	中節骨		?			f			1						38	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	7125	I	I22 J11	イノシシ	572	踵骨	距載関節	r			f										60	焼骨	
SQ7003	X IV-1b炭		6b	縄	11208	I	I21 J17	イノシシ	301	歯片	I1	r	u		f									1			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	11211	I	I16 J66	イノシシ	230	下顎骨+ P2, P3	歯	l	l		f												多数
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	14275	I	I16 64	イノシシ	301	歯片	M3	l	u		f									1			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	4079	I	I21 J37	ニホンジカ	230	下顎骨+歯片	P2-P3	l	l		f									13			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5082	I	I21 J27	ニホンジカ	216	角片		r			f									1	焼骨		
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5084	I	I21 J26	ニホンジカ	530	脛骨		r			f				1	1				1			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5085	I	I21 J47	ニホンジカ	573	中足骨		l			f			1	1					4			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄	5085	I	I21 J47	ニホンジカ	573	中足骨		?			f				1					4			
SQ7003	X IV-1b炭		6a	縄																							

表100-(3) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覽

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左 右	上 下	状態 1	状態 2	c p h d h p e p s s d s d e	数	備考			
			地区	時代	台帳	大 地区	中 地区												小 地区		
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	301	歯片	M3	r	u	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	301	歯片	P4	r	u	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	301	歯片	P3	r	u	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	301	歯片	P4	l	u	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	301	歯片	M3	l	u	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	301	歯片	M2	l	u	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	399	歯片		?	?	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5089	I	I21	J35	ニホンジカ	301	歯片	P3	l	u	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5092	I	I21	J18	ニホンジカ	571	距骨		l		f			8			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5099	I	I21	J28	ニホンジカ	302	歯片	P3, P4	r	l	f			1			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5099	I	I21	J28	ニホンジカ	230	下顎骨		?		f			1	5099右下顎の一部		
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	5099	I	I21	J28	ニホンジカ	230	下顎骨+歯片	M2	r	l	f			1			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	6105	I	I22	J11	ニホンジカ	399	歯片		?	?	f			多数			
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	6107	I	I21	J47	ニホンジカ	440	橈骨		l		f			1 1	116	焼骨	
SQ7003	XIV-1b炭		6b	縄	6111	I	I21	J26	ニホンジカ	482	末節骨		?		f			1	20	焼骨	
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	6117	I	I21	J16	ニホンジカ	481	中節骨		?	c	l				28	焼骨	
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	6117	I	I21	J16	ニホンジカ	572	踵骨		l		f			1	28	焼骨、若年	
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	6117	I	I21	J16	ニホンジカ	481	中節骨		?		f			1	28	焼骨	
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	7123	I	I21	J36	ニホンジカ	481	中節骨		?		f			1 1	38	焼骨	
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	11204	I	I21	J27	ニホンジカ	230	下顎骨	下顎枝	r		f				1		
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	12240	I	I21	J35	ニホンジカ	470	第三手根骨		r		c	l			48	焼骨	
SQ7003	XIV-1b炭		6a	縄	16305	I	I21	J36	ニホンジカ	572	踵骨	距載関節	l		f			1 1	5		
SQ7003	XIV-1b炭	一括-1	6a	縄	13242	I	I21	38	ニホンジカ	302	歯片	M2	l	l	f				1	13244	
SQ7003	XIV-1b炭	一括-1	6a	縄	13242	I	I21	38	ニホンジカ	570	C+IV足根骨		l		f				1		
SQ7003	XIV-1b炭	一括-1	6a	縄	5094	I	I21	J47	イノシシ	571	距骨		r		f				26	12232	
SQ7003	XIV-1b炭	一括-1	6a	縄	1017	I			ニホンジカ	216	角片		l		f				1		
SQ7003	XIV-1b炭	一括-1	6a	縄	4077	I	I21	J37	ニホンジカ	480	基節骨		?		c	l			1		
SQ7003	XIV-1b炭	一括-2	6a	縄	5090	I	I21	J27	イノシシ	450	尺骨		r		f			1 1	1		
SQ7003	XIV-1b炭	一括-2	6a	縄	5090	I	I21	J27	イノシシ	440	橈骨		r		f			1	1	12229、若年	
SQ7003	XIV-1b炭	一括-2	6a	縄	1017	I			ニホンジカ	216	角片		?		f				1	1	焼骨
SQ7003	XIV-1b炭	一括-3	6a	縄	5094	I	I21	J47	ニホンジカ	481	中節骨	縦半分	?		f			1 1 1 1	26	12233	
SQ7003	XIV-1b炭	一括-4	6a	縄	5090	I	I21	J27	イノシシ	301	歯片	M3	l	u	f				1	12231	
SQ7003	XIV-1b炭	2	6a	縄	16317	I	I21		イノシシ	230	下顎骨+M2-M3	歯	l	l	f				3		
SQ7003	XIV-1b炭	10	6a	縄	15296	I	I21		ニホンジカ	572	踵骨		l		f			1	1	若年	
SQ7003	炭化層凹部	10	6a	縄	2028	I			ニホンジカ	216	角		?		f				1		
SQ7003	旧土器集中1炭層		6a	縄	14274	I	H25	J18	イノシシ	399	歯片		?		f				8		
SQ7003	旧土器集中1炭層		6a	縄	14280	I	H25	J16	イノシシ	399	歯片		?		f				7		
SQ7004	上		6a	縄	4071	I			ニホンジカ	480	基節骨		?		f			1	19	焼骨	
XIV-1a			6a	縄	10198	I	I21	J11	イノシシ	470	橈側手根骨		r		f				1	1	焼骨
XIV-1b			6a	縄	13248	I	I21	J41	イノシシ	470	種子骨		?		c	l			110	110	焼骨
XIV-1b			6a	縄	13248	I	I21	J41	イノシシ	470	種子骨		?		c	l			110	110	焼骨
XIV-1b			6a	縄	13248	I	I21	J41	イノシシ	482	末節骨		?		f			1	110	110	焼骨
XIV-1b			6a	縄	13256	I	H25	J53	イノシシ	470	第四手根骨		l		f				1	1	焼骨
XIV-1b			6a	縄	14279	I	I21	J44	イノシシ	470	尺側手根骨		l		f				9	9	焼骨
XIV-1 a, b			6b	縄	17323	I	I24	J02	イノシシ	480	基節骨	近位端	?		f			1	1	1	焼骨、若年
XIV-1 a, b			6b	縄	17330	I	N04	J35	イノシシ	302	歯片	I2	r	l	f				1	1	骨角器?
XIV-1 a, b			6b	縄	14278	I	I24	J05	ニホンジカ	510	寛骨	白部	l		f				4	4	焼骨
XIV-1b			6b	縄	17327	I			ニホンジカ	570	C+IV足根骨	外側	r		f				2	2	焼骨、(H25-11)近の落込み内
XIV-1b	1	5b	-	42932	I	N18			イノシシ	399	歯片		?		f				7	7	
XIV-1b	1	5b	-	43941	I	N23			ニホンジカ	510	寛骨	白部	r		f				16	16	
XIV-1b	2	5b	-	42940	I	N18			イノシシ	399	歯片		?		f				2	2	
XIV-1b	2	5b	-	42933	I	N18			ニホンジカ	302	歯片	P4-M2	r	l	f				11	11	
XIV-1b	3	5b	-	42934	I	N18			イノシシ	301	歯片	M2	l	u	f				1	1	
XIV-1b	5	5b	-	42936	I	N18			イノシシ	301	歯片	P4-M3	l	u	f				1	1	
XIV-1a	22	5a	-	2023	I	M09			イノシシ	480	基節骨		?		c	l			2	2	焼骨
XIV-1b		6a	縄	1013	I	I21	J44		イノシシ	481	中節骨		?		f			1	2	2	
XIV-1b		6a	縄	3047	I	I21	J44		イノシシ	399	歯片	白歯	?		f				1	1	焼骨
XIV-1c		6a	縄	4066	I	I21	J45		イノシシ	110	椎骨	縦半分	r		f				1	1	
XIV-1b		6a	縄	12239	I	I23	J52		イノシシ	301	歯片	M2	l	u	f				4	4	
XIV-1b		6a	縄	13248	I	I21	J41		イノシシ	423	第2or5中手骨or中足骨		?		f			1 1	110	110	焼骨
XIV-1b		6a	縄	13248	I	I21	J41		イノシシ	423	第2or5中手骨or中足骨		?		f			1	110	110	焼骨
XIV-1b		6a	縄	13248	I	I21	J41		イノシシ	480	基節骨		?		f			1	110	110	焼骨
XIV-1b		6a	縄	13248	I	I21	J41		イノシシ	480	基節骨		?		f			1	110	110	焼骨、若年
XIV-1b		6a	縄	13248	I	I21	J41		イノシシ	480	基節骨		?		f			1	110	110	焼骨
XIV-1b		6a	縄	13248	I	I21	J41		イノシシ	480	基節骨		?		f			1	110	110	焼骨
XIV-1b		6a	縄	13248	I	I21	J41		イノシシ	423	第2or5中手骨or中足骨		?		f			1	110	110	焼骨、若年

表100-(4) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覧

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c	p	h	d	p	s	d	s	d	e	数	備考
			地区	時代	台帳	大地区	中地区																			
XIV-1a			6a	縄	13253	I	H25	J48	イノシシ	430	上腕骨	遠位端	l	f										1	1	焼骨
XIV-1b			6a	縄	13260	I	H25	J34	イノシシ	399	歯片	?	f											6	16309	
XIV-1b			6a	縄	14263	I	I21	J42	イノシシ	422	中手骨	?	f											1	80	焼骨、若年
XIV-1b			6a	縄	14263	I	I21	J42	イノシシ	423	第2 or 5 中手骨 or 中足骨	?	f											1	80	焼骨、若年
XIV-1b			6a	縄	14265	I	H25	J68	イノシシ	399	歯片	?	f											1		
XIV-1a			6a	縄	15282	I	I21	J54	イノシシ	423	第2 or 5 中手骨 or 中足骨	?	f											1	1	焼骨
XIV-1b			6a	縄	13251	I	H25	J48	テン	230	下顎骨	l	f											10	焼骨、♂ (大きさより)	
XIV-1b			6a	縄	3046	I	H24	J77	ニホンジカ	399	歯片	?	?	f										9		
XIV-1b			6a	縄	3048	I	I21	J44	ニホンジカ	423	中手骨 or 中足骨	?	f										1	15	焼骨	
XIV-1b			6a	縄	3049	I	H25	J77	ニホンジカ	399	歯片	?	?	f										7	16312	
XIV-1b			6a	縄	3050	I	H25	J77	ニホンジカ	399	歯片	?	?	f										1		
XIV-1c			6a	縄	3059	I	H25	J75	ニホンジカ	230	下顎骨	下顎底+ 縫合部	r	l	f									1		
XIV-1c			6a	縄	4065	I	I21	J33	ニホンジカ	430	上腕骨	l	f				1	1						1		
XIV-1b			6a	縄	9172	I			ニホンジカ	216	角片			f										多数		
XIV-1b			6a	縄	13250	I	H25	J57	ニホンジカ	399	歯片	?	?	f										12	16308	
XIV-1c		一括-1	6a	縄	2039	I	H25	J73	クマ	301	歯片	大歯	r	u	f									1		
XIV-1b		一括-2	6a	縄	1020	I	H25	J28	ニホンジカ	230	下顎骨+M2	歯	r	f										1	9176	
XIV-1b		一括-2	6a	縄	2036	I	I21	J56	ニホンジカ	480	基節骨		?	f				1	1					10	12228 焼骨、若年	
XIV-1b		4	6a	縄	2036	I	I21	J56	ニホンジカ	440	桡骨		r	f									1	10	1228焼骨	
XIV-1b		2	6a	縄	3056	I	H25		イノシシ	213	側頭骨	r	f											14		
XIV-1b		6	6a	縄	3055	I	H25		ニホンジカ	410	肩甲骨	l	f				1							2	焼骨	
XIV-1b		7	6a	縄	3057	I	H25		ニホンジカ	230	下顎骨+ P2-M3	歯	l	l	f									1	祭祀? 穴あり	
XIV-1b		08/01	6a	縄	3058	I	H25		イノシシ	410	肩甲骨	後縁	l	f								1		1		
XIV-1b		08/01	6a	縄	3058	I	H25		ニホンジカ	230	下顎骨+ M2, M3	歯	l	l	f									1		
XIV-1b			6b	縄	5089	I	I25	J55	ニホンジカ	216	角	?	f											1		
XIV-1c			6b	縄	14271	I	I25	J05	ニホンジカ	480	基節骨	近位端	?	f				1						9	焼骨	
XIV-1c			6b	縄	14271	I	I25	J05	ニホンジカ	480	基節骨	近位端	?	f				1						9	焼骨	
XIV-1c			6b	縄	14272	I	I20	J77	ニホンジカ	481	中節骨		?	f				1	1					70	焼骨	
XIV-1b			6b	縄	14275	I	I20	J51	ニホンジカ	399	歯片	?	?	f										55	17322	
XIV-1		先行トビ	6b	縄	11202	I	I20	J41	ニホンジカ	302	歯片	M3	r	l	f									3		
XIV-1b		炭	6b	縄	6109	I	I23	J06	ニホンジカ	482	末節骨		?	c	1									1	焼骨	
XIV-1b		炭	6a	縄	11209	I	I21	J17	イノシシ	399	歯片	臼歯	?	f										1	16318	
SQ7003		旧SB7500 (X III-3)	4	6a	縄	15294	I		ニホンジカ	230	下顎骨+歯片	P2-M3	r	f										1		
SQ7003		旧SB7500 (X III-3)	5	6a	縄	1010	I		ニホンジカ	440	桡骨		l	f									1	1	7	9165, 焼骨
SQ7003		旧SB7500 (X III-3)	5	6a	縄	1010	I		ニホンジカ	399	歯片		?	?	f									7	9166	

XIII-1.2層 (縄文中期中葉)

SK7664	XIII-2		6a	縄	8155	I			イノシシ	482	末節骨	?	e	1										47	焼骨
SD7500	XIII-1		6a	縄	1005	I			ニホンジカ	399	歯片	?	?	f										17	

XII-2層 (縄文中期後葉)

SB?	骨集中区		5b	-	22523	I			イノシシ	210	後頭骨	後頭骨底	r	l	f									62	焼骨	
SB?	骨集中区		5b	-	22523	I			イノシシ	210	後頭骨	後頭顆	l	f										62	焼骨	
SB5306	SB5006から 変更		5b	-	34762	I			イノシシ	530	脛骨		r	f									1	3	若年	
SB5306	SB5006から 変更		5b	-	34762	I			イノシシ	218	上顎骨	P2部	l	f									1	3	若年	
SB5306	骨集中		5b	-	511111-1	I			イノシシ	511	腸骨		右	f											62	焼骨
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	213	側頭骨	側頭線	r	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	410	肩甲骨		l	f				1						660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	220	頬骨		r	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	210	後頭骨	後頭顆部	r	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	215	前頭骨	頬骨 突起部	r	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	210	後頭骨	後頭顆部	l	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	212	蝶形骨		r	l	f									660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	215	前頭骨	眼窩部	r	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	450	尺骨		l	f					1					660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	213	側頭骨		l	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			イノシシ	218	上顎骨	P2部	r	f										660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41919	I			イノシシ	430	上腕骨		r	f								1	190	焼骨		
SB5306	骨集中		5b	-	41919	I			イノシシ	210	後頭骨	後頭顆部	l	l	f									190	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41919	I			イノシシ	213	側頭骨		r	f										190	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			ウサギ	520	大腿骨		r	f									1	660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			ウサギ	530	脛骨		l	f									1	660	焼骨	
SB5306	骨集中		5b	-	41908	I			ニホンジカ	430	上腕骨		l	f									1	660	焼骨	

表100-(5) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覧

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左右	上下	状態 1	状態 2	c ph dh pe ps s ds de								数	備考
			地区	時代	台帳	大地区	中地区									小地区									
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		イノシシ	530	脛骨			r	f				1					530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		イノシシ	215	前頭骨	眼窩部		l	f									530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		イノシシ	218	上顎骨	P1部	r	f										530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		イノシシ	218	上顎骨	P3部	r	f										530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		イノシシ	214	頭頂骨	項稜	l	f										530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		イノシシ	510	寛骨	臼部	r	f										530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		ウサギ	520	大腿骨		l	f				l	l					530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		トリ種不明	999	下腿骨		r	f										530	焼骨		
SB5306	骨集中区	5b	-	41918	I		ニホンジカ	570	C+IV足根骨		r	f										530	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	214	頭頂骨		r	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	215	前頭骨		l	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	215	前頭骨	眼窩部	l	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	214	頭頂骨		r	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	212	蝶形骨		rl	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	210	後頭骨		rl	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	213	側頭骨	鼓室部	l	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	219	切歯骨		l	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	230	下顎骨	歯槽部	r	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43944	I		イノシシ	214	頭頂骨	側頭窩	l	f										100	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43945	I		イノシシ	110	椎骨		rl	c				l						1	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	399	歯片		? ?	f										26			
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	214	頭頂骨		l	f										26	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	218	上顎骨+歯片	P2部、P2	l	u	f									26	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	213	側頭骨		l	f										26	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	214	頭頂骨		l	f										26	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	450	尺骨		r	f					1					26	焼骨、若年		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	220	頬骨		l	f										26	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	214	頭頂骨		r	f										26	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	220	頬骨		r	f										26	焼骨		
SB5307	10層	5b	-	43946	I		イノシシ	220	頬骨		r	f										26	焼骨		
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	213	側頭骨		r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	210	後頭骨	頸静脈突起	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	218	上顎骨	M1、M2部	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	170	胸骨		rl	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	218	上顎骨	M1、M2部	l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	218	上顎骨	大歯部	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	210	後頭骨	後頭顆	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	180	肋骨片		?	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	220	頬骨		l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	170	胸椎	棘突起	rl	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	110	椎骨片		?	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	120	頸椎		l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	210	後頭骨		l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	213	側頭骨	鼓室	l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	210	後頭骨	後頭顆	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	513	恥骨	前枝	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	513	恥骨	前枝	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	512	坐骨	坐骨結節	l	f												焼骨、若年	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	218	上顎骨	dp I-P3部	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	450	尺骨	滑車切痕部	l	f					1							焼骨、若年	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	219	切歯骨		l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	520	大腿骨	骨頭	r	f					1							焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	218	上顎骨	C-P2部	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	530	脛骨	遠位	l	f							1	1				焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	513	恥骨	前枝	l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	530	脛骨	遠位	r	f								1	1			焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	512	坐骨		l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	218	上顎骨	C-P2部	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	410	肩甲骨	後縁	l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501094	I		イノシシ	219	切歯骨	I2、I3部	l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	218	上顎骨	P4-M1部	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	217	鼻骨片		? ?	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	220	頬骨	側頭突起	l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	440	機骨		r	f												焼骨、若年	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	210	後頭骨	底部中央部	rl	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	200	頭蓋骨片		? ?	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	214	頭頂骨	中央部	rl	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	219	切歯骨	I3部	r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	214	頭頂骨		r	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	218	上顎骨	P3-M1部	l	f												焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	470	第IV手根骨		r	c				1								焼骨	
SB5307	10層骨集中	5b	-	501095	I		イノシシ	220	頬骨		r	f												焼骨	

表100-(6) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覧

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c ph dh pe ps s ds de	数	備考
			地区	時代	台帳	大地区	中地区										
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		イノシシ	110	椎骨片	椎体	r	l	f			焼骨、若年
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		イノシシ	213	側頭骨	鼓室部	r	r	f			焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		イノシシ	218	上顎骨	P2-P3部	r	r	f			焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		イノシシ	230	下顎骨	下顎枝	l	l	f			焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		イノシシ	219	切歯骨		l	l	f			焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501096	I		イノシシ	218	上顎骨		l	l	f			焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501096	I		イノシシ	512	坐骨	坐骨結節	r	r	f			焼骨、若年
SB5307	10層骨集中		5b	-	501096	I		イノシシ	572	踵骨	近位端	l	l	f	1		焼骨、若年
SB5307	10層骨集中		5b	-	501096	I		イノシシ	530	脛骨	骨幹部	r	r	f		1	焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501094	I		ガンカモ科 のSP	450	尺骨		r	r	f	1 1 1 1		焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501094	I		ガンカモ科 のSP	430	上腕骨	遠位半	l	l	f	1		焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		キツネ	302	歯片	犬歯	l	l	f			焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501094	I		トリ種不明	520	大腿骨		l	l	f	1 1		焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501094	I		トリ種不明	530	脛骨		l	l	f	1 1		焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		トリ種不明	450	尺骨	遠位半	r	r	f	1		焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501095	I		トリ種不明	530	脛骨		l	l	f		1 1	焼骨
SB5307	10層骨集中		5b	-	501094	I		ニホンジカ	230	下顎骨	下顎頭	r	r	f			焼骨
SB5310	上		5b	-	32739	I	011 J66	イノシシ	302	歯片	M2遠心半	r	l	f			6
SB5310			5b	-	41916	I		ニホンジカ	301	歯片		l	u	f			3
SB5310			5b	-	41916	I		ニホンジカ	301	歯片		l	u	f			3
SB5310	1層		5b	-	14374	I	011 J54	イノシシ	571	距骨		l	l	f			1
SB5311	A区、1層		5b	-	31703	I		イノシシ	440	桃骨		l	l	f		1	2
SB5311	A区、5層		5b	-	7226	I		イノシシ	423	II~IVの 中手骨 or中足骨		?	?	f		1 1	32
SB5311	D区、1層		5b	-	6187	I		ニホンジカ	399	歯片		?	?	f			69
SB5311	D区、1層		5b	-	6188	I		ニホンジカ	216	角片		?	?	f			13
SB5311	D区、1層		5b	-	9275	I		ニホンジカ	216	角片		?	?	f			12
SB5312			5b	-	3082	I		ニホンジカ	450	尺骨	滑車 切痕部	r	r	f	1		40
SB5312			5b	-	43949	I		ニホンジカ	216	角片		r	r	f			1
SB5312	B区、 1層下部		5b	-	3079	I		イノシシ	230	下顎骨	下顎角	r	r	f			11
SB5312	B区、2層 灰集中区		5b	-	6170	I		ニホンジカ	530	脛骨	近位外側	r	r	f	1		54
SB5313a	C区、1層		5b	-	1021	I		イノシシ	481	中節骨		?	?	f	1		16
SB5313a	炉、焼骨片 集中		5b	-	8242	I		ニホンジカ	520	大腿骨	外側	l	l	f		1	60
SB5313a	炉1、灰層		5b	-	8243	I		イノシシ	481	中節骨		?	?	f			多数
SB5313a	炉1、灰層上	1	5b	-	23556	I	S08	イノシシ	482	末節骨		?	c	l			3
SB5313b	1層下部		5b	-	16414	I		ニホンジカ	399	歯片		?	?	f			11
SB5313b	B区、2層		5b	-	23560	I		イノシシ	121	環椎	前関節窩	r	r	f			1
SB5316	埋方、	4	5b	-	11325	I		イノシシ	482	末節骨		?	?	f			1
SB5319	埋土下層		5b	-	14376	I	N24 J41	イノシシ	213	側頭骨	頬骨突起	r	r	f			1
SB5320	埋土上層		5b	-	2043	I	II N1 9 J48	イノシシ	530	脛骨		r	r	f		1	多数
SB5322	床面		5b	-	2049	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f			1
SB5325	柄部堀方		5b	-	8244	I		ニホンジカ	440	桃骨		r	r	f	1 1		6
SB5328			5b	-	39880	I		イノシシ	571	距骨	内側	l	l	f			5
SB5328		B-2	5b	-	1004	I		イノシシ	218	上顎骨+ P2-M3	歯	l	u	f			3
SB5328		B-3	5b	-	1005	I		ニホンジカ	216	角坐部+角		l	l	f			1
SB5328	埋土中		5b	-	1003	I		イノシシ	530	脛骨		l	l	f		1	40
SB5328	埋土中		5b	-	1003	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f			40
SB5328	埋土中		5b	-	1003	I		ニホンジカ	481	中節骨		?	?	f	1 1		40
SB5328	2層		5b	-	2040	I		イノシシ	481	中節骨	縦半分	?	?	f	1 1 1 1 1		2
SB5328	2層		5b	-	2041	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f			10
SB5328	2層		5b	-	15397	I		イノシシ	450	尺骨	滑車 切痕部	r	r	f	1		51
SB5329			5b	-	1015	I		イノシシ	230	下顎骨	下顎体	l	l	f			1
SB5329		8	5b	-	1013	I		イノシシ	230	下顎骨+M3		l	l	f			1
SB5332	埋土トレンチ		5b	-	38856	I	N25 J22	ニホンジカ	430	上腕骨		r	r	f		1	1
SB5332	埋土上		5b	-	21514	I	N25 J31	イノシシ	230	下顎骨	P2部	l	l	f			61
SB5332	埋土上		5b	-	21514	I	N25 J31	イノシシ	230	下顎骨	下顎頭	r	r	f			61
SB5332	炉、1層		5b	-	5137	I		ニホンジカ	480	基節骨	縦半分	?	?	f	1 1 1		27
SB5332	炉、1層		5b	-	5137	I		ニホンジカ	571	距骨		l	l	f			27
SB5335	床上炭		5b	-	21502	I		イノシシ	482	末節骨		?	c	l			5
SB5335	東壁トレンチ		5b	-	9286	I		ニホンジカ	450	尺骨	滑車 切痕部	l	l	f	1		1
SB5339			5b	-	8235	I		イノシシ	218	上顎骨+ M2、M3	歯	r	u	f			1
SB5340			5b	-	15385	I		イノシシ	482	末節骨		?	c	l			1
SB5340	2層	4	5b	-	2037	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f			13
SB5340	2層	7	5b	-	1032	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f			41
SB5340	2層	9	5b	-	5148	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f			27
SB5340	2層	13	5b	-	5165	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f			1

表100-(7) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覽

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左 右	上 下	状態 1	状態 2	c	p	h	pe	ps	s	ds	de	数	備 考	
			地区	時代	台帳	大地区	中地区																			小地区
SB5340	2層	19	5b	-	5160	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1		
SB5340	2層	36	5b	-	8257	I		イノシシ	230	下顎骨+歯片 (左右)	歯	r	l	f										1		
SB5340	2層	43.44	5b	-	481053	I		イノシシ	200	頭蓋骨		?		f												
SB5340	2層	43.44	5b	-	481053	I		ニホンジカ	218	上顎骨+ 右P4-M3、 左P3-M3		r	l	u	f											
SB5340	2層	45	5b	-	5146	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1		
SB5340	2層	51	5b	-	8248	I		イノシシ	218	上顎骨+歯片	歯	l	u	f										1		
SB5340	2層	54	5b	-	6167	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1	N054, N063同 シタッパー	
SB5340	2層	63	5b	-	6168	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1	N054, N063同 シタッパー	
SB5340	D区		5b	-	1024	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										21		
SB5340	炭範囲	1	5b	-	10313	I		ニホンジカ	230	下顎骨+歯片	M1, M2	r	l	f										1		
SB5340	炉、炭範囲	2	5b	-	10304	I		ニホンジカ	399	歯片		?	?	f										3		
SB5340	2層、炭範囲	16	5b	-	10300	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	20	5b	-	10306	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	21	5b	-	10305	I		イノシシ		下顎歯	M2, M3	l	l	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	24	5b	-	10298	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										4		
SB5340	2層、炭範囲	29	5b	-	10307	I		イノシシ	230	下顎骨+歯片		l	l	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	34	5b	-	10316	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	41	5b	-	10309	I		イノシシ	230	下顎骨+歯片		r	l	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	41	5b	-	10309	I		イノシシ	302	歯片	M3	l	l	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	42	5b	-	10308	I		イノシシ	230	下顎骨+歯片	切歯、 臼歯片	l	l	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	46	5b	-	10310	I		イノシシ	200	頭蓋骨片		?		f										1		
SB5340	2層、炭範囲	46	5b	-	10310	I		イノシシ	302	歯片	M2, M3	r	l	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	46	5b	-	10310	I		イノシシ	302	歯片	M2, M3	l	l	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	46	5b	-	10310	I		イノシシ	301	歯片	P3, P4	l	u	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	61	5b	-	10317	I		イノシシ	200	頭蓋骨+ 上顎歯		r	u	f										1		
SB5340	2層、炭範囲	66	5b	-	9296	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										23		
SB5340	炉の炭の中	4	5b	-	9279	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f										1		
SB5340	炉の炭の中	5	5b	-	9280	I		イノシシ	230	下顎骨+歯片		?	?	l	f									1		
SB5341	4層		5b	-	501083	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f												
SB5341	5層上、灰中		5b	-	1027	I		イノシシ	480	基節骨		?		f					1	1	1	1		47	焼骨、若年	
SB5341	5層上、灰中		5b	-	1027	I		イノシシ	481	中節骨		?		f					1					47	焼骨、若年	
SB5341	5層上、灰中		5b	-	1027	I		イノシシ	481	中節骨	縦半分	?		f					1	1	1	1		47	焼骨、若年	
SB5341	5層上、灰中		5b	-	1027	I		イノシシ	482	末節骨		?		f					1	1	1	1		47	焼骨	
SB5341	5層上、灰中		5b	-	1027	I		イノシシ	470	桃側手根骨		r	c	1										47	焼骨	
SB5341	5層上、灰中		5b	-	1027	I		イノシシ	480	基節骨		?		f					1					47	焼骨、若年	
SB5341	A区、2層		5b	-	1016	I		イノシシ	470	第三手根骨		l	f											33	焼骨44967	
SB5341	A区、2層		5b	-	1016	I		イノシシ	422	第三中手骨		r	f						1	1				33	焼骨44967	
SB5341	A区、2層		5b	-	1016	I		イノシシ	573	第II or V 中足骨		?		f					1					33	焼骨44967	
SB5341	上面		5b	-	7215	I		イノシシ	302	歯片	I2	r	l	f										14	焼骨	
SB5341	上面		5b	-	7215	I		イノシシ	480	第二or五指の 基節骨		?		c	1									14	焼骨	
SB5341	上面		5b	-	7215	I		イノシシ	480	基節骨	遠位端	?		f									1	14	焼骨	
SB5341	上面		5b	-	7215	I		イノシシ	423	第II or Vの中 手骨or中足骨	遠位	?		f							1	1		14	焼骨	
SB5341	1層		5b	-	2035	I	S13 J05	イノシシ	511	腸骨		r	f											32	焼骨	
SB5341	炉、7層		5b	-	2056	I		イノシシ	230	下顎骨	縫合部	r	l	f										118	焼骨	
SB5341	炉、7層		5b	-	2056	I		イノシシ	302	歯片	P4	l	l	f										118	焼骨	
SB5341	炉、7層		5b	-	2056	I		イノシシ	302	歯片	P3	r	l	f										118	焼骨	
SB5341	4層		5b	-	1018	I		ニホンジカ	410	肩甲骨	前縁	r	f										1	5	焼骨	
SB5341			5b	-	1026	I		イノシシ	481	中節骨		?		c	1									17		
SB5341			5b	-	1026	I		ニホンジカ	470	尺側手根骨		r	f												17	
SB5341			5b	-	1026	I		ニホンジカ	399	歯片		?	?	f											17	
SB5345	埋土B		5b	-	9289	I		イノシシ	230	下顎骨+ M1-M2	歯	r	l	f											1	
SB5345	埋土B		5b	-	9289	I		イノシシ	230	下顎骨+ P3-M3	歯	r	l	f											1	
SB5345	埋土B上層		5b	-	36819	I		イノシシ	302	犬歯	歯片	l	l	f										2	若年	
SB5345	10層、炉		5b	-	3086	I		イノシシ	423	中手骨or 中足骨		?		f								1		64	若年、焼骨	
SB5345	10層、炉		5b	-	3086	I		イノシシ	480	基節骨		?		f					1	1	1			64	若年、焼骨	
SB5345	10層、炉		5b	-	3086	I		イノシシ	423	中手骨or 中足骨		?		f									1		64	若年、焼骨
SB5345	10層、炉		5b	-	3086	I		イノシシ	573	第三中足骨		l	f						1	1					64	焼骨
SB5345	10層、炉		5b	-	3086	I		イノシシ	482	末節骨		?		f					1	1					64	焼骨
SB5345	10層、炉		5b	-	3086	I		イノシシ	570	第四足根骨		r	f												64	焼骨
SB5345	10層、炉		5b	-	3086	I		イノシシ	423	中手骨or 中足骨		?		f									1		64	若年、焼骨
SB5345	11層、炉		5b	-	3087	I		イノシシ	570	第三足根骨		l	c	1											82	焼骨

表100-(8) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覧

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左	下	状態 1 2	c	p	h	pe	ps	s	ds	de	数	備考	
			地区	時代	台帳	大地区	中地区																		小地区
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	480	基節骨	近位 関節面	?		f									82	若年、焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	570	中心足根骨		r		f									82	焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	571	距骨		r		f									82	近位外側、焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	570	中心足根骨		l		c	1								82	焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	573	第三中足骨		r		f	1								82	焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	570	第四足根骨		l		c	1								82	焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	572	踵骨		r		f				1					82	関節部、焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	571	距骨		r		f									82	近位外側、焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	470	尺側手根骨		l		c	1								82	焼骨	
SB5345	11層、炉		5b	—	3087	I		イノシシ	571	距骨	近位内側	l		f									82	焼骨	
SB5348	B-1		5b	—	1009	I		ニホンジカ	230	下顎骨+ M1-M3	歯	r	l	f											
SB5348	B-1 床面		5b	—	1014	I		イノシシ	302	M3	歯片	l	l	f									1		
SB5348	B-1 床面		5b	—	1014	I		イノシシ	230	下顎骨+M2	歯	r	l	f									1		
SB5350	南壁		5b	—	9272	I		イノシシ	399	歯	歯片	?	?	f									9		
SB9001	一括-2		6b	縄	12223	I		イノシシ	302	歯片	M3	l	l	f									4		
SB9001	セクションハット		6b	縄	3048	I		ニホンジカ	423	中手骨or 中足骨		?	?	f						1			14	焼骨	
SB9001	トレンチ		6b	縄	13246	I		ニホンジカ	482	末節骨		?		f									24	焼骨	
SB9001	2層		6b	縄	3046	I		イノシシ	572	踵骨		r		f			1						105	焼骨、若年	
SB9001	2層		6b	縄	3046	I		ニホンジカ	470	中間手根骨		r		c	1								105	焼骨	
SB9003			6b	縄	12235	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f									1		
SB9003			6b	縄	12238	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f									77	焼骨	
SB9003			6b	縄	12238	I		イノシシ	422	中手骨	遠位端	?		f							1		77	焼骨	
SB9003	炉		6b	縄	6115	I		ニホンジカ	480	基節骨	近位端	?		f			1						21	焼骨	
SB9003	1層		6b	縄	5086	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f									33	焼骨17325	
SB9003	1層		6b	縄	12239	I		イノシシ	480	基節骨	後肢2or5	?		c	1								41	焼骨	
SB9003	2層		6b	縄	1004	I		イノシシ	572	踵骨		r		f									9	焼骨	
SB9003	2層		6b	縄	1004	I		イノシシ	571	距骨		r		f									9	焼骨	
SB9006			6b	縄	6116	I		イノシシ	481	中節骨		?		f				1	1	1	1		178	若年、焼骨	
SB9006			6b	縄	6116	I		トリ種不明	999	後肢骨		l		f				1	1	1	1		178	焼骨	
SB9006	埋カノ		6b	縄	3060	I		トリ種不明	999	後肢骨	遠位半	l		f			1						1	焼骨	
SD9002			6b	縄	13253	I		イノシシ	481	中節骨	遠位端	?		f							1		2	焼骨	
SD9007			6b	縄	13242	I		イノシシ	399	歯片		?	?										3	焼骨4あり	
SF5116	そば		5b	—	7203	I	S09 J12	イノシシ	573	第II or V 中足骨		?		f			1						1	焼骨	
SF5130	上		5b	—	15389	I		イノシシ	213	側頭骨		l		f									3	焼骨	
SF5168			5b	—	20489	I		イノシシ	570	第四足根骨		l		f									19	焼骨	
SF5188			5b	—	9285	I		イノシシ	570	中心足根骨		l		f									8	焼骨	
SK4908			4	—	3047	I		ニホンジカ	481	中節骨		?		f					1	1	1		13	焼骨	
SK4908	底部		4	—	3046	I		イノシシ	440	腕骨		r		f			1						56	焼骨	
SK5506	1層		5b	—	20498	I		ニホンジカ	480	基節骨		?		f			1						2	焼骨	
SK5506	3層		5b	—	20490	I		ニホンジカ	571	距骨	近位内側	l		f									1	焼骨	
SK5537	1層		5b	—	17427	I		イノシシ	450	尺骨	滑車 切痕部	l		f				1					214	焼骨	
SK5550	2B層		5b	—	24564	I		イノシシ	422	中手骨	遠位端	?	?	f						1			8	若年、焼骨	
SK5560			5b	—	7217	I		イノシシ	430	上腕骨	大結節	r		f			1						33	若年、焼骨	
SK5560			5b	—	7218	I		イノシシ	430	上腕骨	骨頭	r		f			1						42	若年、焼骨	
SK5560			5b	—	22540	I		ニホンジカ	422	中手骨		l		f			1						75	若年、焼骨	
SK5579			5b	—	30681	I		ニホンジカ	482	末節骨		?		f			1						147	焼骨	
SK5591	1層		5b	—	15393	I		ニホンジカ	230	下顎骨	切歯部	l		f									3	焼骨	
SK5595			5b	—	1007	I		イノシシ	230	下顎骨+M2	下顎枝、 歯	r		f									1	焼骨	
SK5596			5b	—	7211	I		イノシシ	482	末節骨		?		f			1						2	焼骨	
SK5602			5b	—	8233	I	S07	イノシシ	399	歯片		?	?	f									8		
SK5602			5b	—	491076	I		イノシシ	200	頭蓋骨		r	l	c											
SK5603	下層		5b	—	2046	I		イノシシ	573	第II or V 中足骨		?		f							1		50	焼骨	
SK5613			5b	—	40882	I	N24 J33	ニホンジカ	399	歯片		?	?	f									19	焼骨	
SK9003			6b	縄	13255	I		ニホンジカ	470	中間手根骨		r		f									7	焼骨	
SK9004			6b	縄	1006	I	I24	イノシシ	510	寛骨	臼部	l		f									7	焼骨	
SK9023			6b	縄	1013	I		イノシシ	302	歯片	M2, M3	r	l	f									4	焼骨	
SK9070			6b	縄	6107	I		イノシシ	480	基節骨	後肢2or5	?		c	1								156	焼骨	
SK9070			6b	縄	6107	I		イノシシ	520	大腿骨	内側端	r		f							1		156	焼骨	
SK9070			6b	縄	6107	I		イノシシ	520	大腿骨	外側端	r		f							1		156	焼骨	
SK9070			6b	縄	6107	I		イノシシ	571	距骨		r		f									156	焼骨	
SK9071			6b	縄	9176	I		イノシシ	399	歯片		?	?	f									3		
SK9084			6b	縄	6108	I		ニホンジカ	302	歯片	M1-M3	l	l	f									1		
SQ4801		1118	4	—	4064	I		イノシシ	570	中心足根骨		r		f									3	焼骨	
ST5103b	旧SD5101 -1層		5b	—	31710	I		イノシシ	450	尺骨	滑車 切痕部	r		f				1					14	焼骨	
ST5103b	旧SD5101 -B区		5b	—	20499	I		イノシシ	210	後頭骨	後頭顆	r		f									3	焼骨	
X II -2			4	—	3055	I	X02	イノシシ	399	歯片		?	?	f									18		

表100-(9) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨一覧

遺構番号	層位 出土位置	取上 番号	台帳番号		地区名			種名	CODE	骨名	部位	左 右	上 下	状 態 1	状 態 2	c p h d h p e p s s d s d e	数	備 考	
			地区	時代	台帳	大地区	中地区												小地区
X II-2			4	-	4072	I X01 J02	ニホンジカ	399	歯片			?	?	f			7		
X II-2	下面		5b	-	7213	I S13 J03	イノシシ	213	側頭骨	頬骨突起	r		f				6	焼骨	
X II-2	下面		5b	-	11327	I S13 J57	イノシシ	480	基節骨			?	c	1			3	焼骨	
X II-2	1層		5b	-	11331	I S14 J42	ニホンジカ	480	基節骨			?	f		1		4	焼骨	
X II-2	1層		5b	-	16415	I S12 J41	イノシシ	214	頭頂骨	項稜	r		f				34	焼骨	
X II-2	1層		5b	-	16417	I S12 J16	イノシシ	214	頭頂骨		r		f				1	焼骨	
X II-2	上面		5b	-	17423	I S12 J76	イノシシ	230	下顎骨	縫合部	rl		f				1	焼骨	
X II-2	1層		5b	-	17425	I S09 J53	イノシシ	530	脛骨	近位内側	r		f			1	1	若年、焼骨	
X II-2	上面	12	5b	-	20496	I O11 J16	イノシシ	422	第三中手骨		r		f		1		1	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	399	歯片			?	?	f			多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	213	側頭骨	鼓室部	r		f				多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	218	上顎骨	P4-M3歯槽部	l		f				多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	218	上顎骨			?	f				多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	214	頭頂骨	項稜	l		f				多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	ニホンジカ	512	坐骨		r		f				多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	520	大腿骨	内側部	r		f			1	多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	230	下顎骨	切歯部	?		f				多数	焼骨	
X II-2	骨集中区		5b	-	21509	I O11	イノシシ	218	上顎骨	P4-M2歯槽部	r		f				多数	焼骨	
X II-2	2層		5b	-	22522	I S12 J03	イノシシ	399	歯片			?	?	f			15		
X II-2	上		5b	-	23544	I S08 T72	イノシシ	230	下顎骨	下顎枝	r		f				1	焼骨	
X II-2	1層		5b	-	24575	I S13 J05	イノシシ	213	側頭骨	鼓室部	r		f				4	焼骨	
X II-2	上面		5b	-	28659	I S08 J61	イノシシ	399	歯片			?	?	f			1		
X II-2	2層		5b	-	34761	I N24 J11	イノシシ	482	末節骨			?	f		1		1	焼骨	
X II-2			5b	-	34770	I S17 J北6	イノシシ	481	中節骨			?	c	1			1	焼骨	
X II-2	下面		5b	-	34772	I O11 J73	イノシシ	212	蝶形骨		rl		f				1		
X II-2	1層		5b	-	35789	I S13 J25	ニホンジカ	216	角片			?	f				1	焼骨	
X II-2	2層		5b	-	36820	I S14	ウシ	302	歯片	II	r	l	f				1	混入?	
X II-2	2層		5b	-	38841	I S07 J53	イノシシ	482	末節骨			?	c	1			3	焼骨	
X II-2	下面		5b	-	38855	I S08 J74	ニホンジカ	470	果骨		r		f				38	焼骨	
X II-2	上面		5b	-	38857	I S09 J43	イノシシ	530	脛骨		l		f			1	2	焼骨	
X II-2	下面		5b	-	40895	I S11 J08	イノシシ	399	歯片			?	?	f			1		
X II-2	下面		5b	-	41914	I S12 J02	イノシシ	399	歯片			?	f				4		
X II-2			5b	-	43942	I N15	イノシシ	399	歯片			?	?	f			1		
X II-2			5b	-	43954	I	イノシシ	399	歯片			?	?	f			9		
X II-2	1層		5b	-	45987	I S12 J31	ニホンジカ	399	歯片			?	?	f			56	撮落	
X II-2			6a	縄	17334	I I21 J67	イノシシ	440	橈骨		r		f			1	54	焼骨、若年	
X II-2			6b	縄	2021	I J21 J42	イノシシ	399	歯片			?	?	f			7		
X II-2			6b	縄	2022	I I25 J44	イノシシ	399	歯片			?	?	f			4	焼骨	
X II-2			6b	縄	3045	I I25 J33	ニホンジカ	481	中節骨			?	f			1	3	焼骨	
X II-2			6b	縄	3059	I N04 J51	イノシシ	571	距骨	近位外側	l		f				11	焼骨	
X II-2			6b	縄	4066	I I25 J35	イノシシ	571	距骨		l		f			1	3	焼骨、若年	
X II-2			6b	縄	4070	I I25 J01	サギ科のSP	999	脛骨	遠位端	l		f				4	焼骨	
X II-2			6b	縄	4075	I N05 J32	イノシシ	570	中心足根骨		r		f				3	焼骨	
X II-2			6b	縄	6120	I N04 J22	イノシシ	481	中節骨			?	f			1	4	焼骨	
X II-2			6b	縄	7128	I I24 J41	イノシシ		歯片	?	?	?	f				1		
X II-2			6b	縄	7133	I N10 J13	ニホンジカ	440	橈骨		l		f			1	2	焼骨	
X II-2			6b	縄	7134	I O01 J31	イノシシ	450	尺骨	滑車切痕部	r		f			1	5	焼骨	
X II-2			6b	縄	7135	I I25 J65	ニホンジカ	399	歯片			?	?	f			6	焼骨	
X II-2			6b	縄	7138	I I25 J75	ニホンジカ	423	中手or中足骨	遠位端	?		f			1	43	焼骨	
X II-2			6b	縄	8147	I N04 J27	イノシシ	450	尺骨	滑車部	r		f			1	1	焼骨	
X II-2			6b	縄	8156	I N05 J45	イノシシ	302	M3	歯片	l	l	f				1	炭化、焼骨	
X II-2			6b	縄	8157	I N05 J31	イノシシ	525	膝蓋骨		r		f				3	焼骨	
X II-2			6b	縄	8157	I N05 J31	イノシシ	481	中節骨			?	f			1	3	焼骨	
X II-2			6b	縄	9168	I N08 J71	イノシシ	481	中節骨			?	c	1			2	焼骨	
X II-2			6b	縄	9180	I N07 J73	イノシシ	571	距骨	近位外側	r		f				1	焼骨	
X II-2			6b	縄	10186	I N07 J37	イノシシ	450	尺骨	滑車切痕部	l		f				53	焼骨	
X II-2			6b	縄	10186	I N07 J37	イノシシ	440	橈骨		l		f			1	1	53	焼骨
X II-2			6b	縄	10186	I N07 J37	イノシシ	512	坐骨	結節部	r		f				1	53	焼骨
X II-2			6b	縄	11211	I	イノシシ	399	歯片			?	?	f				6	
X II-2			6b	縄	11214	I I25 J55	イノシシ	399	歯片			?	?	f				7	焼骨
X II-2			6b	縄	11217	I J21 J05	イノシシ	450	尺骨	滑車切痕部	l		f				1	3	焼骨
X II-2			6b	縄	12231	I I19 J78	ウマ	570	中心足根骨		l		c	1			1	混入?	
X II-2			6b	縄	14274	I I25 J76	イノシシ	399	歯片			?	?	f			8	焼骨	
X II-2			6b	縄	15283	I N07 J76	イノシシ	480	基節骨			?	f			1		3	焼骨
X II-2			6b	縄	15283	I N07 J76	イノシシ	470	尺側手根骨		r		f				3	焼骨	
X II-2			6b	縄	15295	I N08 J62	ニホンジカ	399	歯片			?	?	f				3	焼骨
X II-2			6b	縄	15296	I N04 J38	イノシシ	573	中足骨			?	f				1	4	焼骨、若年
X II-2			6b	縄	16309	I N04 J07	イノシシ	530	脛骨		l		f			1		1	焼骨、若年
X II-2			6b	縄	16310	I N12 J28	ニホンジカ	470	尺側手根骨		l		c	1				1	焼骨
X II-2	3トレンチ		6b	縄	16311	I J25	イノシシ	480	基節骨	遠位端	?		f				1	2	焼骨

2 水洗選別によって確認された動物遺存体

千歳サケのふるさと館

高橋 理

屋代遺跡の縄文時代の遺構より哺乳類が出土している（表101）。

(1) 出土動物遺存体リスト

哺乳綱 Mammalia

嚙歯目 Rodentia?

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae sp.

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa leucomystax*

その他不明の哺乳綱

(2) 所見

出土した哺乳類遺存体はほとんどすべてが被熱しており、また細片化している。齧歯目かと推定される切歯、臼歯などは被熱している例がむしろ少なく、これらが遺構や包含層に本来的に含まれていたものか、あるいはある時間のヒアタスをもって含まれるにいたったのかやや不明確である。

表101 屋代遺跡群の水洗選別によって確認された動物遺存体（哺乳類）観察表

区	遺 構 名	時 期	出 土 動 物 遺 存 体				備 考
			種 名	部 位	残存部位	数量	
6b	SQ7003炭層2層	五領ヶ台	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	7	被熱
6a	SQ7003 XIV-1b I-216-2	五領ヶ台	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	3	被熱
6b	SF9021	五領ヶ台	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	1	被熱
6b	SF9021	五領ヶ台?	嚙歯目 Rodentia?	下顎切歯		1	被熱なし
5b	SB5341-A 2層(3層)	加曾利E III古	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	7	微細片 被熱なし
5b	SB5341-A 4層(4-1層)	加曾利E II新~III古	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	2	被熱
5a	SB6701炉 3層	加曾利E II新	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	3	被熱
6b	SB9001 埋甕	加曾利E II	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	1	被熱
5b	SB5311-D 1層4	加曾利E III古	哺乳綱 Mammalia non det.	部位不明		2	被熱なし?
5b	SB5311-D 1層7	加曾利E III古	嚙歯目 Rodentia?	指趾骨	末節骨	1	被熱
5b	SB5311-D 2層83-1	加曾利E III古	イノシシ <i>Sus scrofa leucomystax</i>	歯	歯冠一部	1	被熱
5b	SB5311-D 2層83-1	加曾利E III古	哺乳綱 Mammalia non det.	部位不明		2	1点被熱、1点被熱なし
5b	SB5311-D 2層3	加曾利E III古	イヌ科 Canidae sp.	歯	犬歯歯冠	1	被熱なし
5b	SB5311-D 4層(3層)2	加曾利E III古	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)3	加曾利E III古	嚙歯目 Rodentia?	下顎切歯		2	被熱なし
5b	SB5311-D 4層(3層)3	加曾利E III古	嚙歯目 Rodentia?	歯	臼歯歯冠	1	被熱なし
5b	SB5311-D 4層(3層)3	加曾利E III古	哺乳綱 Mammalia sp.	指趾骨	末節骨	1	被熱
5b	SB5311-D 4層(3層)8	加曾利E III古	イノシシ <i>Sus scrofa leucomystax</i>	歯	第一前臼歯歯冠	1	被熱
5b	SB5346 2 (B埋甕)	加曾利E III古	嚙歯目 Rodentia?	歯		3	被熱なし
5b	SB5344 1 (No.3埋甕)	加曾利E III新	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	2	被熱
5b	SB5323 1 (埋甕内)	加曾利E III古	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	1	被熱
5b	SB5324 3 (No.126埋甕)	加曾利E IV	嚙歯目 Rodentia?	歯		1	被熱なし
5b	SQ5542 (一括42-15)	加曾利E III新~E IV	不明	骨格内部海綿骨	骨梁片	2	被熱

※遺構名の()は旧名称

第7節 高速道屋代遺跡群出土の縄文時代人骨

京都大学霊長類研究所

茂原 信生

1 はじめに

屋代遺跡群（更埴条里遺跡・屋代遺跡・窪河原遺跡）は、長野県更埴市にある遺跡で、隣り合った場所に位置する一連の遺跡である。この遺跡は、高速道長野線の建設工事にともない、平成3年から平成5年にかけて長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。本報告はその際に出土した人骨に関するものである。今回の人骨の報告では、これらの遺跡を一括して扱うことにする。

遺跡は、縄文時代から弥生時代、古墳時代、平安時代・中世に属する複合遺跡である。今回報告する人骨の属する年代は、このうち縄文時代のものである。

人骨の計測はマルチン法（馬場1991）にしたがい、歯の計測法は藤田（藤田1949）にしたがった。

2 人骨の特徴

人骨のほとんどは住居址から出土したものである。同じ住居址に2体埋葬されていた例が2例ある。ここで扱う人骨は、出土したすべての人骨ではなく、保存状態が悪くて特記することがないものなどは今回の報告からは除外した。縄文中期前葉人骨は8例、縄文中期後葉人骨は8例で、合計16例である。

表102 高速道屋代遺跡群（屋代遺跡、窪河原遺跡、更埴条里遺跡）から出土した縄文時代人骨の概要

	遺構	補番	時代	性別	年齢	主な特徴
高速道屋代遺跡	SB5401		縄文中期前葉	不明	不明	頭蓋骨片
	SB9009	No.1	縄文中期前葉	不明	少年?	10歳前後、屈葬（楕円形）
		No.2	縄文中期前葉	不明	成人	下肢骨のみ、扁平大腿骨
	SB9011	No.1	縄文中期前葉	女性?	成人	身長151.8cm、エナメル質減形成あり
		No.2	縄文中期前葉	女性?	成人	正面向き
		N13	縄文中期前葉	不明	青年	
		N03	縄文中期前葉	不明	不明	歯のみ
	SQ7003		縄文中期前葉	男性	3~5歳	乳歯列
	SB5319		縄文中期後葉	不明	成人?	左向きの埋葬
	SB5337		縄文中期後葉	不明	不明	幼くはない
	SB5338		縄文中期後葉	不明	壮年	イノシシ、シカの歯混在
	SB5340		縄文中期後葉	不明	不明	下肢骨?
	SB5350		縄文中期後葉	不明	不明	歯のみ、屈葬
SK5589		縄文中期後葉	不明	成人	右向き、屈葬	
SK5790		縄文中期後葉	不明	幼児ではない	屈葬	
SK5833		縄文中期後葉	男性	乳児	2歳前後	
SK5867		縄文中期後葉	不明	不明	下肢骨	

(1) 縄文時代中期前葉人骨

A 出土人骨の特徴

① SB5401人骨 (5b43948)

頭蓋骨のごく一部の破片である。骨の部位は不明である。

② SB9009人骨（第1号）(図64-1) (6bJ10191)

骨は残っているが、後で述べるように年齢が若い個体なので保存状態としてはよくない。頭蓋骨はうつぶせの状態（顔面を下に向けた状態）で胸部に載っている。上腕骨は左右を対称的にやや外側に肘を張り出

し、肘をほぼ直角に曲げて手を腹部であわせている。下肢は大腿骨を体幹側へ強く折り曲げやはりやや外側にしており、膝は上腕の肘よりも頭側に位置している。下肢は膝をやはり強く折り曲げて足を正中部であわせるようになっている。全体の形は頭部と骨盤を両端にした楕円形の形である。このような埋葬の形式は北村遺跡でも見られている。

頭蓋骨 下顎骨の骨内に未萌出の大白歯が見られる。歯種は不明だが大白歯である。

四肢骨 上腕骨の近位部は骨端と癒合しておらず、上腕骨の推定長は172mm前後であり、大腿骨長は260mm程度である。また、頭胴長はごく大まかな推定で57cmを越えない程度である。これらを総合して考えると、この個体は10歳程度と推測される (Ubelaker1989)。

性別 この個体の性別は不明である。

③ **SB9009人骨 (第2号)** (6bJ17331~17340)

同一住居内から出土した別個体である。この個体は上のものとは異なり、成人と思われる大腿骨および脛骨である。

右側が残っているが保存状態は悪い。大腿骨は途中が土圧でつぶれている。上部はつぶれておらず、扁平大腿骨の特徴が観察される。上部外側の殿筋隆起はよく発達している。他に、一部だけが残った四肢骨片が出土しているが同定できない。

④ **SB9011-1人骨** (6bJ18346~19367)

同一墓壙から2体が出土している。

顔を右に向けた屈葬である。骨の保存状態は悪い。左の上肢は肘をほぼ直角に曲げて、手を右の肘に置いており、右上肢は肘を深く曲げて手を胸に置いている。左の下肢は股関節・膝関節ともに強く曲げて膝を外側に向けて開いている。左側は保存が悪いが右とほぼ同じように外側に開いているらしい。

頭蓋骨 頭蓋冠はほとんど失われているが、残った部分で判断するときほど厚くない。乳様突起はふつうの大きさである。下顎枝角は大きい。

歯 歯は左右の第3大白歯が萌出しており、咬耗はモルナーの4度で小さな象牙質が露出している程度である。従って成人には達していたと思われる。第3大白歯の歯頸部付近にエナメル質減形成が認められる。これが形成されたのは12~13歳頃であろう。エナメル質減形成は、歯の歯冠の形成期 (胎児期から15歳くらいまで) に栄養不良や病気などのストレスによってエナメル質の石灰化が阻害され、それが線状あるいは斑点状にエナメル質の表面に残るものである (山本1988)。

四肢骨 骨端が破損して失われているものが多い。上腕骨は太い。三角筋粗面はよく発達している。左の寛骨の大坐骨切痕は鋭角で、男性的である。下肢骨は左の大腿骨と脛骨・腓骨が残っているが右はほぼ失われている。脛骨は扁平ではない。

左の上腕骨は発掘時の計測で270mmであり、右脛骨は328mmである。藤井の式 (藤井1960) を用いて計算した推定身長はそれぞれ148.6cmと155.0cmで、両者の平均は151.8cmである。この値は平本 (平本1977) が報告している縄文時代人の女性の平均値148.05cmをやや上回る程度であり、男性の平均値159.11cmを大きく下まわる。

この個体は、身長が縄文時代の女性の平均値と大差ないが、大坐骨切痕は男性的である。12~13歳の成長期に形成されたと思われるエナメル質減形成が認められる。

⑤ **SB9011-2人骨** (6bJ12224~12226) (図64-2~64-4)

同一墓壙から出土した別個体である。顔面を上 (正面) に向けている。頭蓋骨は額から底部に向けて土圧を受けてつぶれている。上・下顎とも第3大白歯までが萌出しており、咬耗もみられるので成人には達している。全体に小振りである。発掘時の図によれば、右の上肢は肘をやや曲げており、左上肢は前腕部

が消失している。下肢は主に左だけが残っているが詳細は不明である。

頭蓋骨 小さめであり、乳様突起は普通である。外後頭隆起はさほど発達していないようである。人字縫合は鋸歯状が明瞭であるのでさほど高齢ではないだろう。上・下顎とも前歯部はすべて歯が植立しており抜歯はみられない。

四肢骨 ほとんど残っておらず、特記すべきことはない。

年齢 この個体は体のつくりが全体に小ぶりであり、女性の可能性が高い。さほど高齢ではないが成人には達していたと思われる。

⑥ SB9011人骨 (6bJ6102)

頭蓋骨 左右の下顎骨だけが残っている。内側を上左右に開いた形で出土しており、頭蓋骨片と思われるものがその外側にわずかに残っている。正中部は左右ともに失われているが、下顎体後半部から下顎枝はのこっている。角前切痕はみられない。この時期にしばしばみられる下顎底が丸みを帯びているロッカー・ジョウである。

歯 歯は左の第3大臼歯のみが残っているだけである。歯冠だけが残っているのは左の上顎第2小臼歯である。

年齢 この個体は性別は不明である。年齢は第3大臼歯に大きくはないが咬耗がみられるので青年程度(20歳代)と推測される。

⑦ SB9011人骨 BYS⑥b XIV-1b層、N-03、骨No.1-2、94 (6bJ96105-12224)

ヒトの歯だけが残っている。上顎右犬歯歯冠、下顎右第1小臼歯歯冠が確認できる。ともに象牙質の小さな露出が観察される。詳細は不明である。

⑧ SQ7003人骨 (6aJ15292) (表104)

頭蓋骨と部位不明の四肢骨片である。頭蓋骨も実体は不明であるが、歯が少数出土している。

歯 乳歯列である。上顎では左右の第1および第2乳臼歯、下顎は左右の第1乳臼歯、および左右不明の第2乳臼歯が認められる。永久歯は下顎の左第1大臼歯、右犬歯および第1小臼歯と左右の中切歯、上顎では左中切歯、犬歯および右第1小臼歯が形成途中である。乳臼歯の咬耗はさほど進んではない。永久切歯の歯冠が形成途中であることから判断すると、3～5歳程度の幼児と考えられる。性別は不明である。ただし、左の下顎第1大臼歯は咬合面の形態は第1大臼歯のように見えずむしろ第3大臼歯のような形態である。切歯は縄文時代人の男性の平均値よりもやや大きめである。可能性としては男性である。

年齢 この個体は3～5歳程度の幼児である。性別は男性の可能性が高いと思われる。

B 中期前葉人骨のまとめ

人骨のほとんどは住居址から出土したものである。同じ住居址に2体埋葬されていた例が2例ある。埋葬姿勢では屈葬であるが、一部に全体の形は頭部と骨盤を両端にした楕円形の個体がある。このような埋葬の形式は明科村の北村遺跡でも見られている。縄文時代人骨の特徴である下顎底に丸みを帯びたロッカー・ジョウのものがみられる反面、下顎枝角が大きい個体も存在した。エナメル質減形成がかなりの頻度で観察された。1例で身長推定が可能であったが、男性で151.8cmで(SB9011)であり、この時代の男性としては小さい。

(2) 縄文時代中期後葉人骨

A 出土人骨の特徴

①SB5319 (5b484052)

頭蓋の一部だけが残っているが、保存状態は非常に悪く、詳細は不明である。左を向いて埋葬されてい

たと思われ、左右に土圧を受けてつぶれている。骨は普通の厚さであるので若い個体ではない。詳細は不明である。

② **SB5337** (5b471033)

頭蓋骨である。頭蓋冠の部分であるが表面は脱落していて保存状態は非常に悪い。骨は比較的厚いので、若い個体ではないという以外の詳細は不明である。

③ **SB5338** (5b491065～491071)

骨の保存状態は非常に悪く、観察は難しい。特徴的なことは、同じSB5338から焼かれていないイノシシの歯やシカの歯と一緒に出土していることである。人骨は頭蓋と四肢骨との位置が自然位に近いので集積されたものではなく、埋葬されたものであろうが埋葬姿勢などは不明である。頭部は土圧を受けて左右につぶれている。

歯 上顎の右第3大臼歯歯冠や他の歯の破片が少数出土している。第3大臼歯はやや咬耗しており、萌出してからかなりの時間が経過しているらしい。壮年程度には達していたであろう。

年齢 この個体は壮年には達していたと思われる。性別は不明である。

④ **SK5823** (5b5142)

右を向いて埋葬されている。下肢骨は膝を強く曲げた屈葬であり、膝は左右ともに左に倒している。保存状態は非常に悪く、頭蓋骨の一部、歯、ならびに四肢骨の一部だけが残っている。発掘時の図面から屈葬であることがわかるが、四肢骨は断片化していて詳細は不明である。

頭蓋骨 歯が残っているだけで、頭蓋骨そのものは形骸となっており実体はない。

歯 歯の残りはよい。第3大臼歯まで萌出している。咬耗はそれほど顕著ではない。成人には達していたと思われる。切歯や犬歯は現代の日本人の平均値(権田1959)よりもやや大きめであるが、臼歯では一定の傾向は見られない。

四肢骨 大腿骨、脛骨、腓骨が確認できる。大腿骨も腓骨も細い印象である。性別の判定出来るような部分は残っていない。

⑤ **SK5790人骨** (5b491075)

頭蓋骨と肋骨のごく一部、および四肢骨の一部が残っているが保存状態は非常に悪い。発掘時の図から判断すると、顔を足方に向けた屈葬である。右上肢は失われており、左上肢は肘を軽く曲げて手を骨盤部においている。下肢は股関節をほぼ直角に、また、膝関節は強く曲げて膝を右に倒している。頭部は上方から土圧を受けてつぶれている。歯がわずかに残っている。頭蓋骨は存在が確認できるだけで詳細は不明である。四肢骨の観察は不可能である。

骨の厚さや歯の萌出状態から、幼児でないことはわかるがそれ以上は不明である。

⑥ **SK5833人骨** (5b484050) (表103・104)

頭蓋骨と歯が残っている。頭蓋骨の保存は非常に悪く、頭蓋冠という以外は不明である。

歯 乳歯列である。永久歯の第1大臼歯歯冠、上顎中切歯歯冠、下顎の切歯歯冠が形成途中である。乳歯は、上顎が右の第2乳臼歯、左の第1および第2乳臼歯が残っており、下顎は左の第1および第2乳臼歯が残っている。他に上顎乳切歯と思われる歯冠が出土している。乳臼歯には咬耗がなく、2歳前後の年齢と思われる。歯の大きさでは現代日本人(権田1959)と比べると切歯などが大きい、臼歯ではとくに一定した傾向は見られない。性別は不明である。

⑦ **SK5867人骨** (5b471023)

下肢骨が一部残っている。骨の表面はあれており、骨の種類の間定も困難である。他に間定不能の四肢骨片がある。

表103 高速道屋代遺跡群発掘の縄文時代人骨の上顎歯の計測値と比較資料 (単位: mm)

遺跡名	No.	時代	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		備考	
				m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l		
高速道屋代遺跡群	SK5589	縄文中期後葉	不明	左	9.1	7.5	8.0	7.8	7.0	8.2	6.8	8.7	9.9	11.4	9.1	11.8	8.4	10.3	3~5歳		
				右																	
北村遺跡 (茂原; 1984)	SK5833	縄文中期後葉	男性	左	9.1		8.0	7.8	7.1	8.7	7.1	8.9	10.6	11.9	9.2	11.4	8.4	10.4	3~5歳		
				右																	
関東地方縄文人 (松村; 1989) 現代日本人 (權田; 1959)		縄文	男性	左	8.4	7.0	7.6	7.7	6.7	9.0	6.2	8.6	10.0	11.3	8.5	11.3	8.0	11.0			
				右																	
				女性																	
				男性	8.46	7.41	7.4	7.3	6.7	9.2	6.5	9.1	6.52	9.17	10.16	11.71	9.22	11.59		8.23	10.88
現代日本人 (權田; 1959)		現代	女性	左	8.25	7.08	7.40	7.89	6.77	9.16	6.24	8.88	8.94	11.20	8.94	11.20	8.09	10.43			
				右																	
				男性	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85		8.94	10.79
				女性	8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31		8.86	10.50

表104 高速道屋代遺跡群発掘の縄文時代人骨の下顎歯の計測値と比較資料 (単位: mm)

遺跡名	No.	時代	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		備考		
				m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l			
高速道屋代遺跡群	SK5589	縄文中期後葉	不明	左	5.9		6.5	7.6	7.2	7.2	7.1	8.3	11.1	10.8	10.1	9.9	9.2	9.0				
				右																		
				左	5.5	6.3	7.2	7.3	7.3	7.8	7.2	7.3	7.3	7.8	11.1	11.1	10.9	10.6		10.2	9.5	
				右	5.7	6.1	7.2	7.3	7.1	8.4	7.2	7.3	7.3	7.8	12.1	11.1	11.0	10.6		10.5	10.0	
北村遺跡 津雲貝塚		縄文	男性	左	5.5	5.8	6.5	6.5	7.2	7.3	7.2	7.2	7.2	7.2	11.4	10.9	10.1	9.9	9.2	9.0		
				右																		
				女性																		
				男性	5.7	6.1	7.0	7.5	7.0	7.7	7.1	8.4	11.6	11.5	11.0	10.6	10.5	10.0	9.8	9.5		
関東地方縄文人 (松村; 1989) 日本人 (權田; 1959)		縄文	女性	左	5.28	5.94	6.93	7.66	6.93	7.95	6.98	8.40	11.59	11.19	10.94	10.51	10.47	9.94	9.65			
				右																		
				男性	5.19	5.70	6.71	7.74	6.76	8.24	11.26	11.01	10.65	10.24	10.15	9.65	9.65	9.65	9.65			
				女性	5.48	5.88	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28	10.65	10.28	10.65			
現代日本人 (權田; 1959)		現代	女性	左	5.47	5.77	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02				
				右																		

⑧ SK5589 (5b461015~5b471022、5b484051) (表103・104)

顔は左を向いて、下肢骨は膝を強く折った屈葬であり、膝は左右ともに左に倒している。骨の保存状態は非常に悪く、頭蓋骨については不明である。歯はよく残っている。

歯 上顎右側は第3大臼歯までが確認出来る。成人であろう。

四肢骨 大腿骨、脛骨、腓骨が確認出来る。大腿骨も腓骨も細い印象である。性別の判定出来るような部分は残っていない。

B 縄文時代中期後葉人骨のまとめ

骨の保存状態が悪い個体がほとんどで、骨の特徴は抽出できなかった。やはり屈葬で埋葬されていたようである。歯はかなり若い個体のものも残っている。

3 屋代遺跡群出土の縄文時代人骨の特徴

一般的に保存状態はさほどよくなく、遺構はあっても人骨であるかどうかを確認できないものもあった。その中で、縄文時代中期前葉の個体が8例、中期後葉の個体が12例確認できた。歯が残っているだけのものもある。人骨のほとんどは住居址から出土したものである。

埋葬姿勢は屈葬であるが、一例に全体の形が頭部と骨盤を両端にした楕円形の個体があった。このような埋葬の形式は明科村北村遺跡でも見られている。縄文時代人骨の特徴である下顎底が丸みを帯びたロッカー・ジョウのものが見られる反面、下顎枝角が大きい個体も存在した。エナメル質減形成がかなりの頻度で観察された。

本遺跡の貴重な資料を見る機会を与えて下さった長野県埋蔵文化財センターの方々に心から感謝いたします。また、この遺跡の人骨の写真撮影や整理に当たり、獨協医科大学第1解剖学教室の櫻井秀雄氏にお世話になった。厚く感謝する次第である。

引用・参考文献

- 馬場悠男 1991 「人体計測法」『人骨計測法. 人類学講座別巻1』雄山閣、江藤盛治編集 p.159~358.
- 藤井 明 1960 「四肢長骨の長さとの関係に就て」『順天堂体育学部紀要』3 p.49~61
- 藤田恒太郎 1949 「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61 p.1~6
- 権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』43(1) p.151~63
- 平本嘉助 1977 「日本人身長の時代的変化」『自然科学と博物館』44(4) p.169~172
- Matsumura, H. 1989 「Geographical Variation of Dental Measurements in the Jomon Population」『J. Anthrop. Soc. Nippon』97(4) p.493-512.
- 茂原信生 1993 「北村遺跡出土の人骨の形質」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 北村遺跡』p.259~402.
- Ubelaker, D. H. 1989 「The estimation of age at death from immature human bone. in "Age Markers in the Human Skeleton"」edit. by M. Y. Iscan, Charles C. Thomas Publisher, Springfield, p.55~70
- 山本美代子 1988 「日本古人骨永久歯のエナメル質減形成」『人類学誌』96(4) p.417~433

写真の説明 (図64: 屋代遺跡群出土の縄文時代人骨)

- 1) SB9009出土人骨の埋葬状況。太い矢印が頭部、細い矢印は上からそれぞれ上肢骨、下肢骨を示している。全体で楕円形に埋葬されている。
- 2) SB9011出土の頭蓋骨。保存状態が悪い。
- 3・4) SB9011出土の四肢骨。形態は判断できるが詳細な観察は出来ない骨の例である。

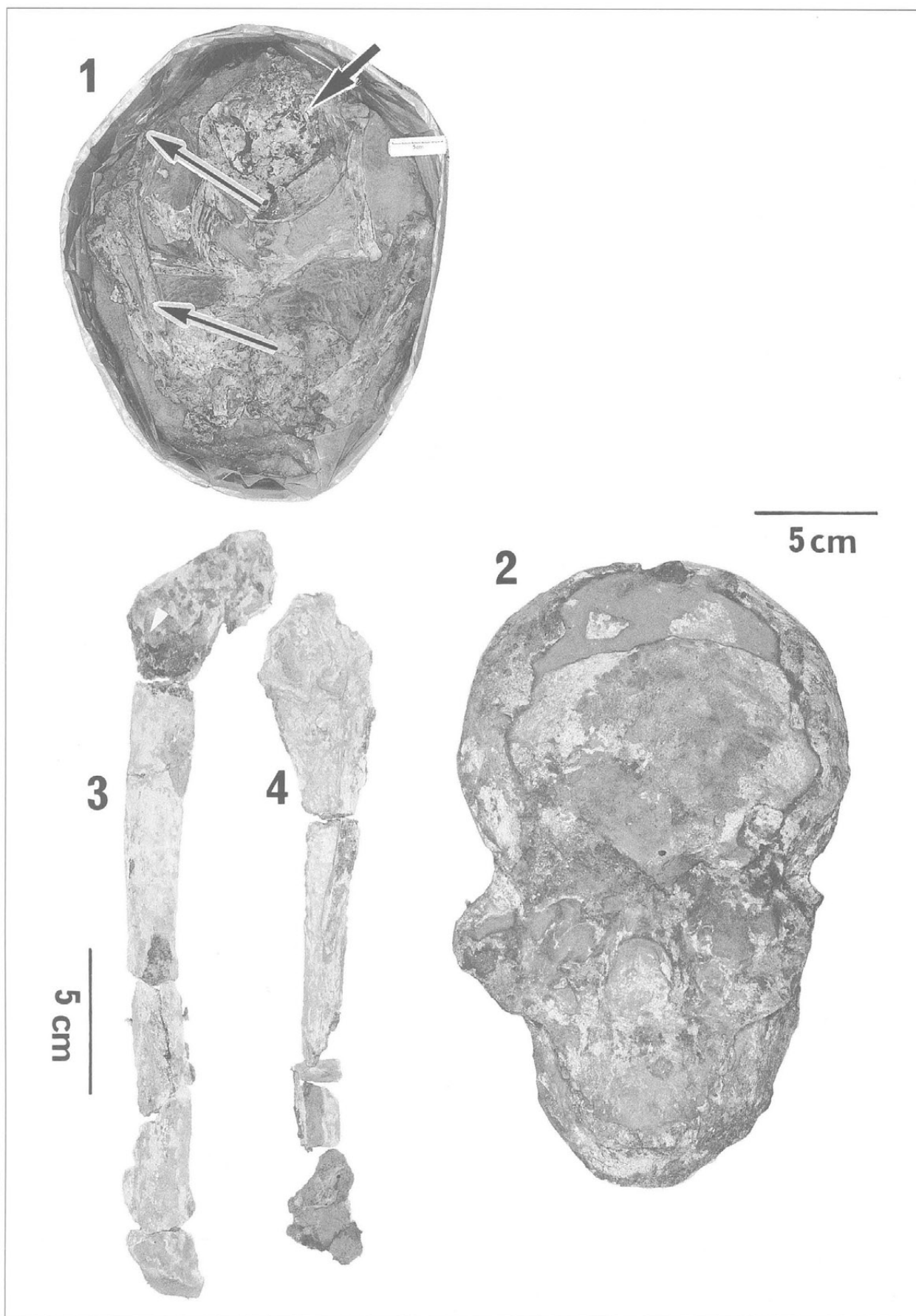


図64 屋代遺跡群出土の縄文時代人骨

第8節 屋代遺跡群出土の縄文時代漆関係資料について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部

永嶋正春

1 はじめに

ここでは、標記遺跡から出土した縄文時代資料のなかに、いかなる漆関係資料を見出すことができるのかについて、漆工技術的観点から報告する。具体的作業としては、主に出土土器資料を対象として網羅的な外観観察をおこない、漆製品や漆工用具のあり方を把握することになる。

ここに言う漆工用具とは、漆製品製作のために必要ないっさいの用具のことであり、在地の漆文化の存在を明白に示す資料として重要である。これら用具には、漆液容器、漆漉し布、へら、刷毛、筆などが該当するが、他にも漆工技術に必要不可欠な、あるいは密接なつながりを持つ用具、場合によっては素材までも包括して考えた方が、当時の文化的な実態把握にはより有効性が高いものと筆者は考えている^(註1)。

すなわち例えば赤色顔料であっても、赤色漆を調製し使用する観点から見れば、広義の意味で漆工用具(材料)と捉えることができるわけであり、また例えば石器・石製品であっても、漆の木から樹液(漆液)を採取するときに利器として使用したものや、赤色漆のために良質な赤色顔料を粉碎した用具であれば、立派な漆工用具といえる。このように、漆工用具としては一見すると広がりすぎた資料を包括することになるが、当時の漆文化の内容実態を体系的、立体的に捉えることを目的とするのであれば、その必要性が理解されよう。

多くの調査事例からすると、縄文時代の漆工用具の中で最も顕著なものは漆液容器である。これには、漆の木から樹液を採取したときの容器、漆のクロメ加工をしたときの容器、漆を塗るときに使用したパレット的な容器をはじめとして、下地漆や木屎漆のように漆にある種の混ぜ物を混和したときの調製容器、赤色漆を調製した容器などが含まれる。これらには概ね廃棄直前の土器が使用されるが、時にはこのために埴塙形をした小型の専用土器を作っており、また希には樹皮で容器を作る場合、あるいはいらなくなった漆製品そのものを使用している場合さえ認められる。漆作業環境において発生することが期待される漆汚れの付着した資料(石器、土器など)も、これに類するものとして扱うのが漆工技術の実態解明には必要である。

しかしながら、漆液容器以外の漆工用具の出土例は全国的に見てもきわめて乏しいものであり、漆漉し布がわずかに認められる他は、ほとんどその出土例を知ることができない。なかでも刷毛、筆の類にいたっては、現状では皆無である。縄文時代を通して漆文化が盛行していたことは、近年ますますはっきりしてきており、その内容実態に見合うだけの漆工用具が検出されてしかるべきである。たとえ縄文時代前期初頭であっても、漆漉し布は技法上の必然性から間違いなく存在したのであり、刷毛、筆も確実に使用されていたのである。これらの点に関しては、今後の発掘に期待すると共に、今までに発掘された資料についての丁寧な見直しも必要になるものと考えている。

ところで屋代遺跡群出土の縄文時代漆関係資料を調査するにあたっては、以上のような漆文化としての一般的状況を踏まえた上で、次のような特異的事実をも考慮する必要がある。

それは、長野県東部の御代田町に所在する遺跡から、縄文時代前期初頭に属する漆資料が検出されていることである。当該遺跡は下弥堂遺跡であり、住居址から出土した該期の深鉢の小断片に、筆者が漆の存

在を確認している^(註2)。本資料は漆液容器の可能性を有するもので、赤色顔料（赤色酸化鉄、 $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$ 、パイブ状ベンガラ）も混在する。屋代遺跡群から見た場合、同一水系である千曲川の上流部に立地する下弥堂遺跡に、縄文時代前期初頭という日本では今のところ最も古い漆資料のひとつが存在する意味合いは大きい。なお同町の宮平遺跡では、縄文時代後期に属する朱漆塗りの土器も確認されており^(註3)、縄文時代を通して漆文化が継続していた可能性が強く想定できるとともに、縄文時代後期段階での朱（赤色硫化水銀、HgS）の利用にも目が向けられる。

長野県東部の佐久地域に縄文時代前期初頭段階の漆文化が存在した事実は、屋代遺跡群においても大変古い時代から漆が使用されていた可能性を強く示唆するものであり、漆文化の存在を前提として漆製品や漆工器具を検出すべき状況にあることを示しているものといえる。

さらに付け加えて言えば、ごく最近の調査によって、島根県松江市に所在する^{それ}夫手遺跡から出土した土器の中に、縄文時代前期初頭の漆液容器（西川津式土器）を見出している^(註4)。この漆はクロメられた漆であり、優秀な赤色顔料も付着している。この資料の存在は、縄文時代前期初頭においてさえ既に優良なる赤色漆を使用した漆製品が松江市周辺に存在したことを意味するのである。前述の下弥堂遺跡の例とも合わせ考えれば、日本の漆文化は少なくとも縄文時代前期初頭にはほとんど完成段階に達しており、しかも全国的な広がりを持っていたと想定したとしても、あながち間違いではあるまい。なお、夫手遺跡の漆液容器については、付着漆を用いてAMS法による炭素14年代測定を実施しており、その測定値を元に補正して得られた実年代として、今から概ね6800年前のものとして判断されている^(註5)。

以上前置きが長くなってしまったが、これらの概況を踏まえた上で、以下に調査結果を述べることにする。

2 調査結果

漆製品のあり方 有機質系遺物としての漆製品については、その出土が確認されない。例えば、縄文時代の漆製品を多く出土する遺跡の場合、特に低湿地性遺跡では木胎漆器、籃胎漆器、飾り弓、櫛等の有機質系漆製品を出土する例は最近では必ずしも珍しいことではないが、本遺跡ではそれらの遺物は検出されていないのである。この点に関しては、遺跡の立地、遺構のあり方等の面から検討すべき点があると思われるが、今後周辺での発掘調査が実施される場合には、この種の製品の出土が期待できよう。

土器や土製品についても、顕著な漆塗り製品は認められない。ごく一部の土器片に、塗膜状を呈する漆様の付着物が僅かに残存している例はあるが、土器片の残存状態が良好ではないのでその判断については保留している。いずれにしても、出土資料の中に漆塗りを施した土器や土製品がほとんど存在しない状況については変わるところがない。

中期前葉の漆液容器 本遺跡出土の漆液容器としては、最も時代を遡ったものとして縄文時代中期前葉に属する土器をあげることができる。付着物の量が少なかったり、小断片のものがあったり、あるいは同一個体に属するものがあるため、個体数を正確に補足するのはやや困難であるが、概ね10点ほどの土器がここに分類されるものと判断している。いずれも現状で把握される漆の付着量は小さなものが多く、また典型的な生漆（木から採取したなりの漆液で、2～3割の水分を含む）の様相、すなわちかさ高で、成分内容が顕著に層分離したような外観を呈するものはほとんど認められない。それに対して、熱変質をした漆の外観を示す資料が多いのが特徴である。以下に、いくつかの例を紹介する。

No. 7 (SB5408 床直No. 1) (図版187-2) 小型筒形の深鉢で、出土当初は内底面部を中心に相当量の漆が付着していたとのことであるが、現況では底部近くの胴部内面を中心にして若干の黒色塗膜状付着物が認められるに過ぎない。光沢ある僅かに厚手の黒色付着物で、要所に細かな縮み皺が認められ、全体に細かな断

文と、断文に沿った浮き上がりが発生している（巻頭図版6-1）。その光沢と色調、断文と浮き上がりは、漆の熱による変質を示すものであるが、胴部中位の内面にまで付着している状況から考えると、そう多くはない量の生漆をこの容器に入れ、熱をかけながら動かすことにより、漆中の水分を少なくしたものと考えられる。いわゆる弱火によるクロメ作業である。外面の黒色汚れ（巻頭図版6-2）は、その時の漆汚れであろう。本資料については、漆を試料とした炭素14年代測定を実施中である。

No. 4 (SB5402 No. 1) (図版187-3) 小型筒形の深鉢で、内底面部周辺（巻頭図版6-3）と口縁部外面（巻頭図版6-4）に褐黒色～黒色の付着物が認められる。量は僅かであり、土様の汚れの付着も多いため、判断に迷うところもあるが、ここでは一応漆と見ておきたい。最終的には、採取した漆様付着物の層断面薄片試料により判断する予定である。

No. 6 (SB9010) (図版191-18) 小型筒形深鉢の胴部小断片で、内面全面に漆が付着している（巻頭図版6-5）。漆表面部のごく一部に赤色の微斑が認められるが、これは発色の良い良質なベンガラである。ベンガラ周囲の漆には微小クラックが発生しているが（巻頭図版6-6）、これは漆の外観性状から推察されたとおり、熱変質が進んでいる証拠である。なおベンガラの粒子形態は、パイプ状のものと思われるが、再確認する必要がある。

No. 9 (図版227-18) 小型深鉢の底部を中心とする断片で、胴部内面の一部に半光沢を有する黒色の塗膜状付着物が認められる（巻頭図版6-7）。土器の表面性状や付着部位からは漆塗装とは考え難く、漆パレット様の痕跡と判断される。

No.10 (図版229-48) 深鉢の小断片。一部に漆膜が残存しているが、その全面には縮み皺が発生している（巻頭図版6-8）。**No.13 (SB9010 3層)** No.6と同一個体破片 小型筒形深鉢の小断片で、内面にはやや厚手に漆が付着している（巻頭図版7-1）。漆は、内容物が顕著に層分離しているところから生漆と判断できる（巻頭図版7-2）。

No. 1 (SB5401 下層)・No. 2 (SB5402 1層)・No. 3 (SB5404 埋土) (図版186-11) 同一個体片で、内面部分に光沢ある黒色塗膜状の漆が付着し、その一部は赤色漆（ベンガラ漆）化している（巻頭図版7-3, 4, 5）。ベンガラ漆を調製したパレットと思われるが、被熱変色の進んだ個所も認められる。なおベンガラ粒子の形態は、パイプ状である（巻頭図版7-6）。

以上7点の他、No.8 (SB9011)、No.12 (SQ7003) (図版210-141)、No.15 (SQ7003下層) (図版224-371) の3点には、被熱痕跡を有する黒色の漆が付着している。

中期後葉の漆液容器 概ね11点ほどの土器が該当する。土器としては小断片であったり、あるいは完形土器であっても付着量が少ないものが大部分を占めている。

No. 8 (IS12 埋土) 中期後葉の人が、中期中葉の土器を再利用したものかと考えられている土器片で、外面に部分的に残る黒色塗膜状物は漆と推定できる。漆液容器とは思われるが、それらの漆がどちらの時期に属するものかについてははっきりしない。

No. 1 (SB5312 1層) (図版249-49) 深鉢の断片。内面の一部に、黒色で半光沢を有する薄手の付着物が認められる。細かい縮み皺や発泡痕跡を有するもので、被熱した漆と判断できる。なお赤色顔料（ベンガラ）も微量に付着している。

No. 9 (IS12J21 埋土) 深鉢の断片。内面に光沢ある黒色物が付着している（巻頭図版7-7）。細かな網状断文が発生しており、被熱した漆であることがわかるが、ベンガラの付着も観察される（巻頭図版7-8）。

以上いくつかの例を示したが、他の資料にも大方No.1やNo.9の様な漆が付着しており、漆と熱、漆と赤色顔料（ベンガラ）との密接な関係を示す資料となっている。ちなみに、上記の資料以外には、No.2 (SB5312 床) (図版246-11)、No.3 (SB5313a 1層) (図版251-31)、No.5 (SB5338 埋甕) (図版288-4)、No.6

(ST5114 埋土) (図版346 ST5114-1)、No.10 (IS17J48 埋土) (図版372 ⑥b区S-2)、No.11 (IS18J34 XII-2層包含層)、No.13 (SB5337 埋土) (図版287-17)、No.16 (SB5004 埋土) を漆液容器と判断している。

赤色顔料資料 以上に挙げた漆液容器の多くには、赤色顔料の付着を確認できるのであるが、それ以外の資料として赤色顔料のみが付着した土器、土器片が検出される。いずれも、蛍光X線的に見る限りベンガラである。

縄文時代中期前葉の資料としては、No.5、No.11、No.14 (SB9010、4層) が挙げられるが、No.11、No.14にはパイプ状のベンガラ粒子が確認されている。いずれも赤色顔料容器あるいはパレットとしての痕跡である。

これら以外の資料としては、赤彩土器片と分類された資料の中にも、むしろベンガラ顔料のパレットと考えた方が相応しい性状を呈するものが認められる。したがって、これらの資料についても、顔料の粒子形態等を把握すべきものと考えている。

3 おわりに

標記遺跡群より出土した縄文時代の土器、土器片類のなかに、20点以上の漆液容器を検出することができた。縄文時代中期に属する漆資料として、重要な意味合いを持つものと考えている。屋代遺跡群においては、少なくとも縄文時代中期前葉段階にはすでに充実した漆文化が存在した可能性を示唆する資料であり、今後は、本遺跡並びに周辺の遺跡においても、各種の漆製品が製作されていたであろうことを前提にして、発掘調査をする必要性を示すものとも言える。

付着漆による炭素14年代測定等、現在進行中の調査もあるので、これらの結果については別の機会に改めて報告するものとして、本稿を終わりにしたい。

註

- 1 漆関係資料、漆工用具の重要性や、それらが持つ文化的な意味合い、あるいはそれら資料の調査手法などについては、下記ものを参照されたい。
 - 1a) 拙稿「縄文時代の漆工技術—東北地方出土藍胎漆器を中心に—」国立歴史民俗博物館研究報告第6集、1985年3月。
 - 1b) 拙稿「漆から見た縄文・弥生時代」考古学ジャーナル401、1996年。
 - 1c) 拙稿「寺野東遺跡出土漆関係資料—その漆工技術的検討—」『寺野東遺跡IV』栃木県埋蔵文化財調査報告第208集、1998年3月。
- 2 拙稿「川原田・下弥堂遺跡出土の赤彩資料、漆資料について」『川原田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第22集、1997年3月。
- 3 拙稿「滝沢・宮平遺跡出土の赤彩資料、漆資料について」『滝沢遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第23集、1997年3月
- 4 拙稿「松江市夫手遺跡出土縄文時代前期初頭の漆液容器(土器)について」『夫手遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団、2000年3月。
- 5 今村峯雄・坂本 稔・永嶋正春「松江市・夫手遺跡出土縄文時代前期土器(漆液容器)の実年代」『夫手遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団、2000年3月。

第10章 成果と課題

第1節 中期の土器

1 中期前葉の土器

はじめに

これまで善光寺平（長野盆地）では、縄文時代中期前葉のまとまった資料が乏しかった。そのため、主体となる土器型式が何であるのか、あるいはその変遷過程がどうであるのか、といった問題に対しては、周辺地域の資料から類推するしかなかった。近年、沖積地深くまで発掘調査が達するに及んで、縄文時代中期の資料がようやく充実しはじめてきた。中期前葉（初頭）については、松原遺跡において、五領ヶ台Ⅰ式成立期の主体的な土器群の把握（松原式土器）や、前期からの流れをとらえることが可能となった（上田1998）。これに対し、今回、屋代遺跡群⑤・⑥区集落から出土した資料は、五領ヶ台Ⅱ式後半に並行する段階の状況を把握するのに良好な資料と言えよう。

(1) 屋代遺跡群出土の中期前葉土器の段階区分

土器資料は、竪穴住居埋土上層、および遺物廃棄場所（SQ7003など）から比較的多く出土した（図65）。埋没時点での新旧関係を示す資料としては、竪穴住居の重複関係や、住居間の土器接合関係がある。これらの検討や、その結果想定された竪穴住居の新旧関係については、本章第2節1で記した。ここでは、その結果（図82）を参考に時期区分を進める。ただし、中期前葉2期1段階とした地床炉を持つ住居においては、土器の出土が微量であった。唯一、出土量が多かったSB9011についても、すべてが最上層からの出土であり、2段階の住居に包含されていた土器との時期差は認められなかった。

図66は竪穴住居新旧関係想定図（図82）をもとに、炉に埋設されていた土器や埋土中の完形に近い土器を並べたものである。明確な切り合い関係にある例のうち、完形に近い土器を出土したのは、SB5407→SB5408、SB5412b→SB5412a、SB9014→SB9010、SB7502→SQ7003である。この中で最も多くの土器を出土したのはSQ7003である。しかし、ここは長期にわたる廃棄場所として使用された地点であり、数段階に区分されるべき土器が混在した状況を示している。そのため、住居の重複関係の事例数の割には、遺物の新旧関係を類推するための良好な資料は少なかった。ここでは、竪穴住居新旧関係の2期2段階（埋壘炉段階）の細別は、少数の遺構間接合関係を元に、SB9014（SB7502）→SB9010→SB9012→SB9009の4段階区分を暫定的に行い、これに則って、土器型式変化の流れをつかむこととした。

(2) 系統分類

この時期は、1遺跡の土器組成において、明確に装飾の構造や技法を異にした類型が共存するケースが多い。屋代遺跡群では、組成を構成する土器群を2つの系統に大別することができる。一つは、日本海側との関係を色濃く示す土器群で、灰白～黄橙色の色調を示し、半截竹管による平行沈線を多用する点を特徴とする。北陸の新崎式やその変容形、あるいは、北信地域を主体とする「仮称“深沢式土器”」（高橋1989）



図65 XIV-1層 (遺構、埋土を除く) 土器破片数

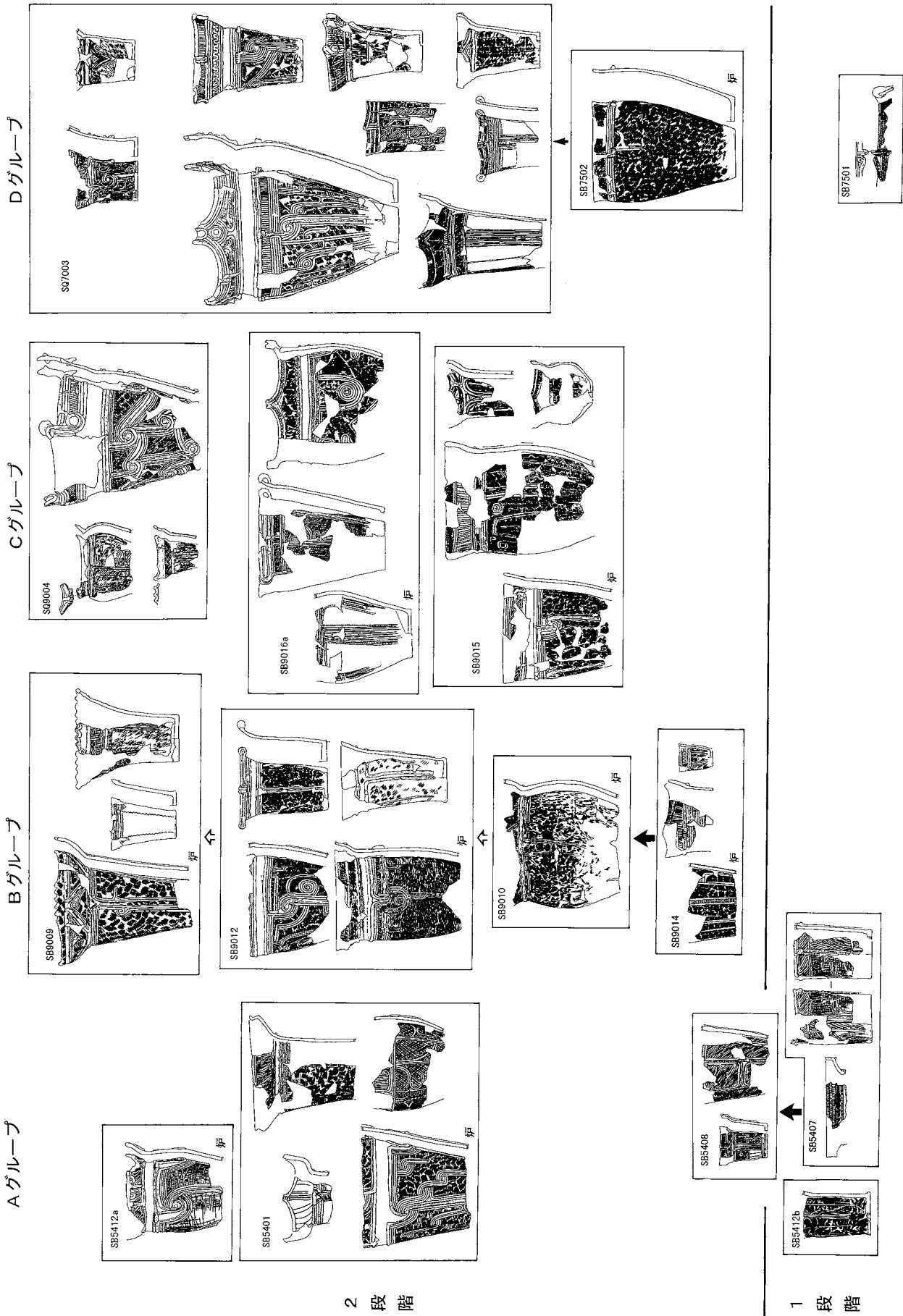


図66 中期前葉2期竪穴住居の新旧関係と主な出土土器

と呼ばれる土器が相当する。この内、純粋に北陸系統と判別された土器以外を在地土器Aとする。もう一方は、赤褐～黒褐色の色調を示し、単沈線を多用する土器群で、混和材として雲母を入れる例が多い。分水嶺以南の中部～関東地域の土器（五領ヶ台式土器）やその流れを汲む土器、さらに、千曲川上流域である東信地域を主体とする一群（在地土器B）の土器が当たる。斜行単沈線を多用する在地土器Bは仮に東信系土器と呼称する。また、五領ヶ台式系統の土器で在地の特徴を示すものを在地土器Cとする。

これに、赤褐～黒褐色を呈し、北信地域から越後方面にかけて少数見られる在地の土器（在地土器D）や、東海系土器などが加わる。

今回、整理期間の関係上、各系統毎の量比を算出するには至らなかったが、屋代遺跡群の組成上の比率を見ると、多い順に、在地土器A、次いで在地土器B・Cとなり、これらで組成の大半を占めているような感触を得ている。以下、主だった系統の土器について触れることとする。

(3) I群 a, b類土器（在地土器A）について

深沢系土器（I群 a類） 飯山北高校地歴部が調査した長野県飯山市・深沢遺跡の資料を基準とする（飯山北高校地歴部1966）。1982年、西沢隆治氏が位置づけを示し（西沢1982）、1989年には高橋保氏が仮称“深沢式土器”を提唱している（高橋1989）。近年、出土資料の増加に伴い五領ヶ台式土器との伴出関係から、編年的な位置づけが確定しつつある（寺内1997）。ただし、型式設定するだけの資料は整っておらず、ここでは仮に、深沢系土器と呼称しておく。第3章ではI群 a類に分類した土器である

屋代遺跡群出土土器では、胎土に白色粒子を多量に混入し、色調が黄灰～黄橙色を呈するものがほとんどを占める。

器種には、深鉢形、筒形、浅鉢形などが存在する。

深鉢形には、樽形に近いIII3-(Ba)型（第3章図9）と、筒状の体部に口縁が広がるIII2-Ba型、山形口縁を呈するIII3-Ca型などが存在する（図67）。筒形土器には継手文が認められないが、特有の胎土・色調や

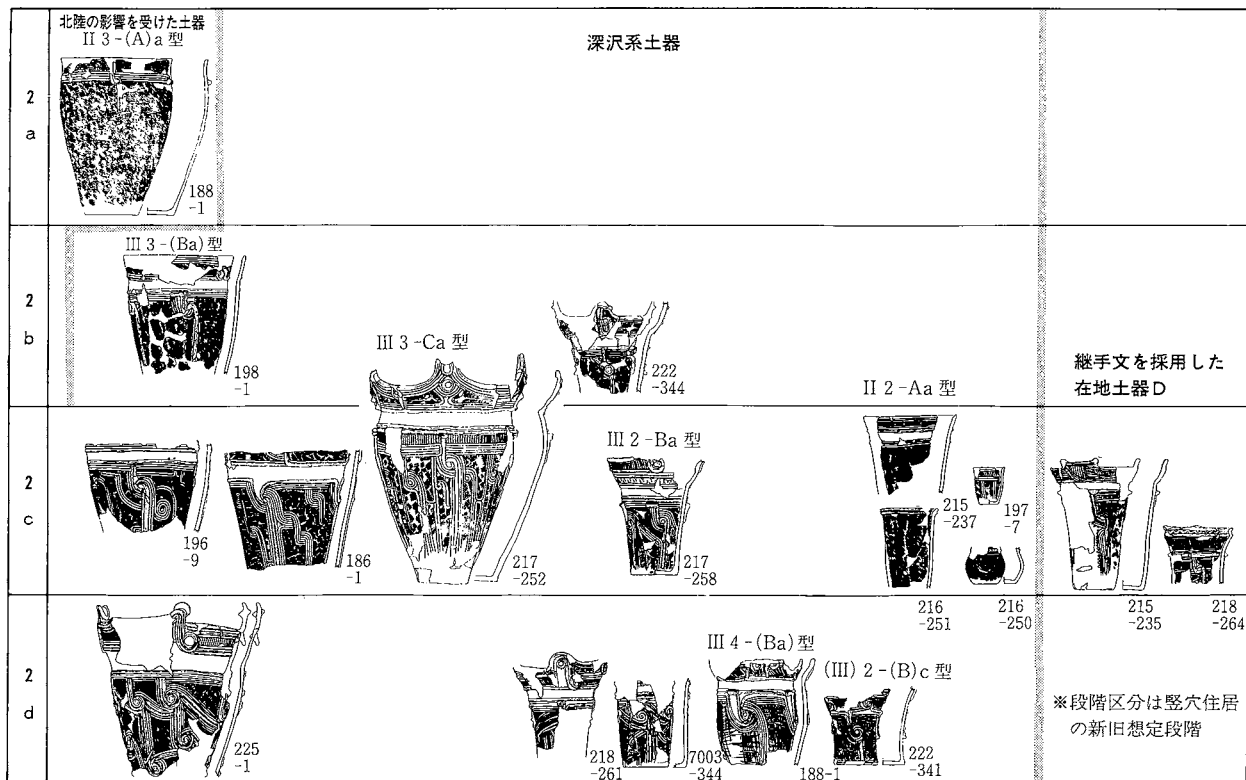


図67 深沢系土器の変遷

半隆起線の施文手法から深沢系土器と判断した。小型土器には沈線による継手文が認められた (No250)。また、浅鉢形土器 (図版230-70) は、特有の胎土・色調によってこの系統に属す可能性がある。

装飾には、断面カマボコ状隆線 (69) と半截竹管による半隆起線 (C3a) を多用する。隆線装飾では、体部に垂下する継手懸垂文を最大の特徴とする。沈線装飾では、I a文様帯の集合沈線、II a文様帯の横位集合沈線、隆線脇に沿う数状の沈線、体部の横「U」字文や継手文、大柄の「U」字文とセットとなった多重の円文などがある。

深鉢形土器の変遷 遺構から出土した資料を、住居の段階設定 (2 a段階～2 d段階) に則して並べたのが図67である。これによって、深沢系土器の装飾の変遷過程をある程度知ることができる。文様帯の変遷と主要な装飾要素を模式化したのが図68である。

屋代遺跡群で最も古い段階に位置づけられる継手文の資料は、SB7502の炉に設置されていた土器である。この資料は、継手懸垂文がII文様帯の上部に若干達する程度であり、深沢系土器と見るよりは、北陸系の土器を模倣して製作した例と見られる。I a文様帯が欠如しているが、後に無文帯となるI b文様帯とその直下の横位集合沈線といった配置、器形の類似性など、屋代遺跡群における深沢式土器成立に与えた影響は大きかったと見られる。ただし、北信地域のすべての深沢系土器の成立が、こうした土器からはじまったとは断定できない。深沢系土器に類似した文様帯分割を示し、直線的に垂下する懸垂文を持つ土器が存在していたと予想されるからである。

2 b段階には、I a文様帯と頸部無文帯、II a文様帯に横位集合沈線、そして体部に継手懸垂文、といった深沢系土器特有の文様帯分割と装飾の配置、主装飾の継手文が確立する。2 c段階には、継手文に沿う複数の沈線文と、継手文間を横方向に展開する沈線装飾が発達してくる。また、I文様帯の分割も進む。さらに、2 d段階に至ると、横方向に展開した沈線装飾に隆線装飾が加わる。一方、単独で貼付されていた隆線は、しだいに複列化するようになり、2 d段階では、2本1セットが一般化する。

深沢系土器に関連する土器群 (I群b類ほか) 継手文などを有し、深沢系土器の範疇で捉えられる土器のうち、地域性を考慮しなくてはならない土器がある。図69 (192-33)、図67 (222-341) は、地文に縄文を採用しておらず、縦位区画文、矢羽状沈線、三叉文によって空間を充填した例である。こうした例は、新潟県境に近い地域や越後側で散見される。特に後者は、複雑に展開する隆線の断面頂部が平坦に整形された部分があること、口縁部裏面にまで隆線装飾が入り込んでいることなど、新潟県十日町市横割遺跡 (石原・菅沼1996) に類例が存在する。

集合沈線によって器面を充填された図69 (223-362) は剥離した器面に継手文の痕跡が残存している。縦位沈線で充填された「U」字文が連続して配される手法は、深沢遺跡の深沢系土器にも一般的である。

これらは、継手文があり、胎土や色調も類似し、在地での類例が存在することから、深沢系土器の範疇で捉えるべきものと考えている。

また、斜行格子目文で器面が充填された土器のうち、胎土・色調が深沢系土器に酷似した例が存在する (186-2、200-13)。さらに、隆線による継手懸垂文は認められないが、胎土・色調、文様帯分割、器形において、深沢系土器に酷似する図69 (195-5) が存在する。図69 (190-7、200-2、214-227、215-232) は、胎土・

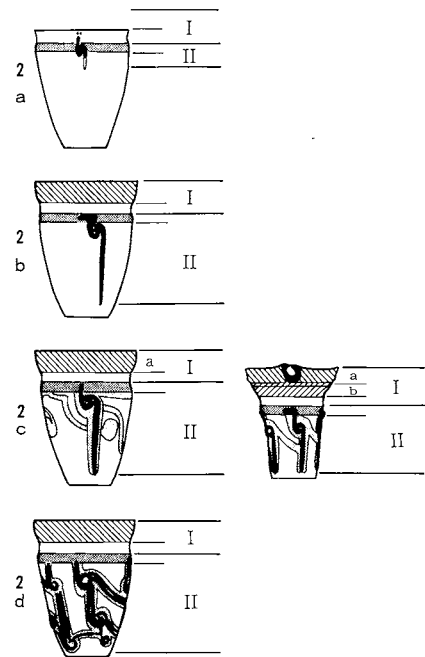


図68 深沢系土器変遷模式図

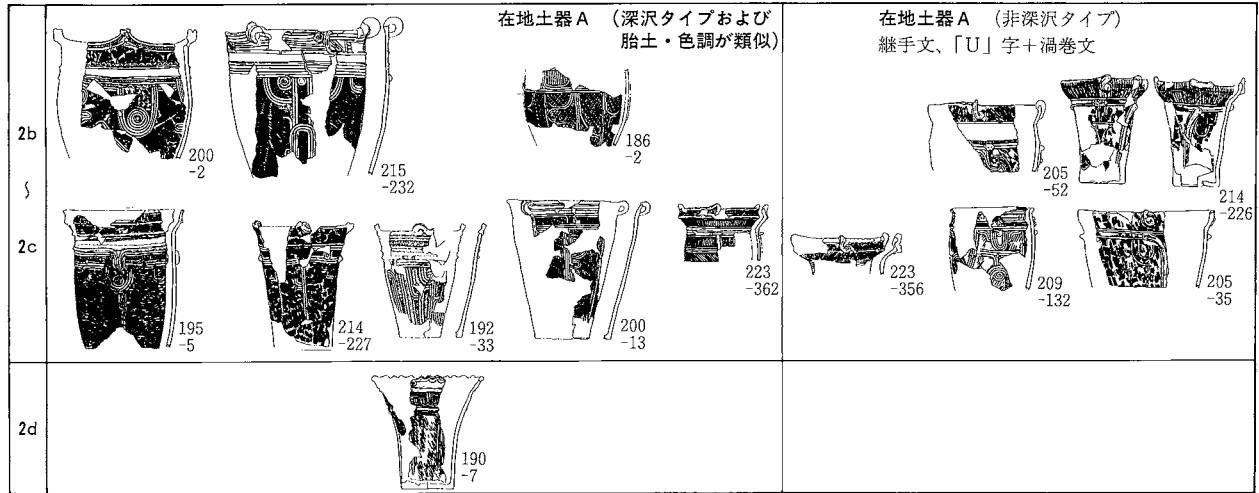


図69 深沢系土器に関する土器群

色調で深沢系土器に酷似し、装飾要素の一部にも共通する部分を有する。これらの土器を、深沢系土器に含めるか否かは、その範疇を巡って問題となる土器群と考えられる。今後、北信地域の資料の増加を待って、検討すべき点であろう。

継手文を採用した土器群 深沢系土器において継手文が発達する中、他系統の土器にも継手文が採用されてゆく。図67 (215-235、218-264) は、赤黒い色調を示す在地土器Dである。また、次の資料にも継手文が採用されている。体部装飾が不明のため、深沢系土器に含めるべきか否か判然としないが、図69 (223-356) はI a文様帯から継手文が垂下する例である。また、図69 (200-52~205-315) は、北信地域に見られる土器群であるが、205-52の体部では懸垂文が継手化している。209-132では、大柄の「U」字文に多重円文や渦巻文がセットとなる沈線装飾が見られ、深沢系土器の影響が認められる。

(4) 在地土器B=東信系土器 (II群b類の一部) について

装飾の特徴 千曲川上流域 (小県郡・南北佐久郡) に比較的多く見られる土器群である。本報告書では、II群b類の一部がこれに当たる。今回、便宜的に東信系土器として記述を進める。今後、良好な資料を出土する遺跡が発見された時点で、検討を加えたい。

器種では、確実に東信系土器と認められるのは深鉢形と筒形がある。深鉢形では、平縁で突起が付き、I a帯で屈曲し、体部は直線的となるV 2-Ba型が基本となる。これに、山形口縁となるCa型が加わる。

装飾の特徴は、単沈線 (A 1 a) を斜行施文した集合沈線を多用する点に集約される。幅狭のI a文様帯は斜行沈線などで充填され、頸部には間隔を開けて縦位沈線が配される。II a文様帯には充填された斜行沈線に、交差する沈線が少数施されるのが特徴となっている。体部懸垂文は沈線で描かれる場合が多い。

深鉢形土器の変遷 図70によって説明を加える。XV層から出土した184-5は、屈曲したI帯に、頸部に間隔を開けた縦位沈線、II a帯に斜行格子目文が充填されており、後の東信系土器に類似した構成を示す。沈線装飾は、半截竹管による平行沈線である。ただし、この土器は、口唇部が撚糸による側面圧痕で刻目文状に表現されており、越後地域の影響を受けた土器と考えられる。同様な器形、文様構成を有する土器で撚糸を持たない例は、中部高地地域にも存在しており、東信系土器が越後地域の影響下で成立したとは言い切れない。

図版229-42は、半截竹管によって装飾が施文されており、体部に縄文が認められる。東信系に先行する土器か、系統を異にすると考えられる。

単沈線を斜行施文した集合沈線が多用され、東信系として装飾特徴が明確となるのは、竪穴住居の段階

で2a段階（SB5408は炉が明確でないため古くなる可能性有り）からである。器面の大半が集合沈線によって充填される段階で、底部付近に横位の沈線が幾重にも施されるのも特徴の一つである。

その後、体部の沈線装飾が減少方向へ向かい、沈線装飾を施した帯状の懸垂文に集約される。189-2は、隆線の懸垂文が一部で屈曲した例である。さらに、2d段階に置いた土器は、斜行沈線の施文間隔が開き、粗雑になる点を指標とした。こうした点は、次期の後沖式（寺内1996）への移行をうかがわせる。

(5) 広義の五領ヶ台式系統の土器

広義の五領ヶ台式土器に含まれる土器は、深沢系土器などの在地土器Aに並んで、組成に占める割合が高くなっている。ただし、深沢系土器や東信系土器（在地土器B）が、屋代遺跡群内で装飾の変遷を追うことができるのに対し、広義の五領ヶ台式土器に含めた中のいくつかの類型では、変遷を追うことができない。このことは、継続的な製作や搬入ではなく、個別・単発的に搬入されたり、模倣された類型が存在していたことを示していよう。広義の五領ヶ台式でまとめてしまうと、組成に占める割合が高くなるが、個別の類型毎に検討してゆくと、搬入元、あるいは模倣された土器の祖形のある地域は複数にわたっていたと見られる。

屋代遺跡群内で装飾の変遷を追える類型 I文様帯に重三角（半楕円+三角形）区画文を有する土器のうち、隆線に沿う沈線文が半截竹管による平行沈線である例については、変遷を追うことが可能である（在地土器C）。これらの土器は、2b.c段階では、Ia縄文帯とIb文様帯間が密接しているが、新しい段階ではIa縄文帯の直下に狭い無文帯が巡るようになる。こうした特徴を持つ類型は、中部高地全体で見つかり、千曲川流域でも安定的に製作されていた類型と考えられる。

図70の筒形土器のうち、IIa文様帯に横位の沈線が複数重なり、IIb文様帯に渦巻文を持つ例は、出土量も多く、装飾の変遷過程を捉えることが可能となっている。

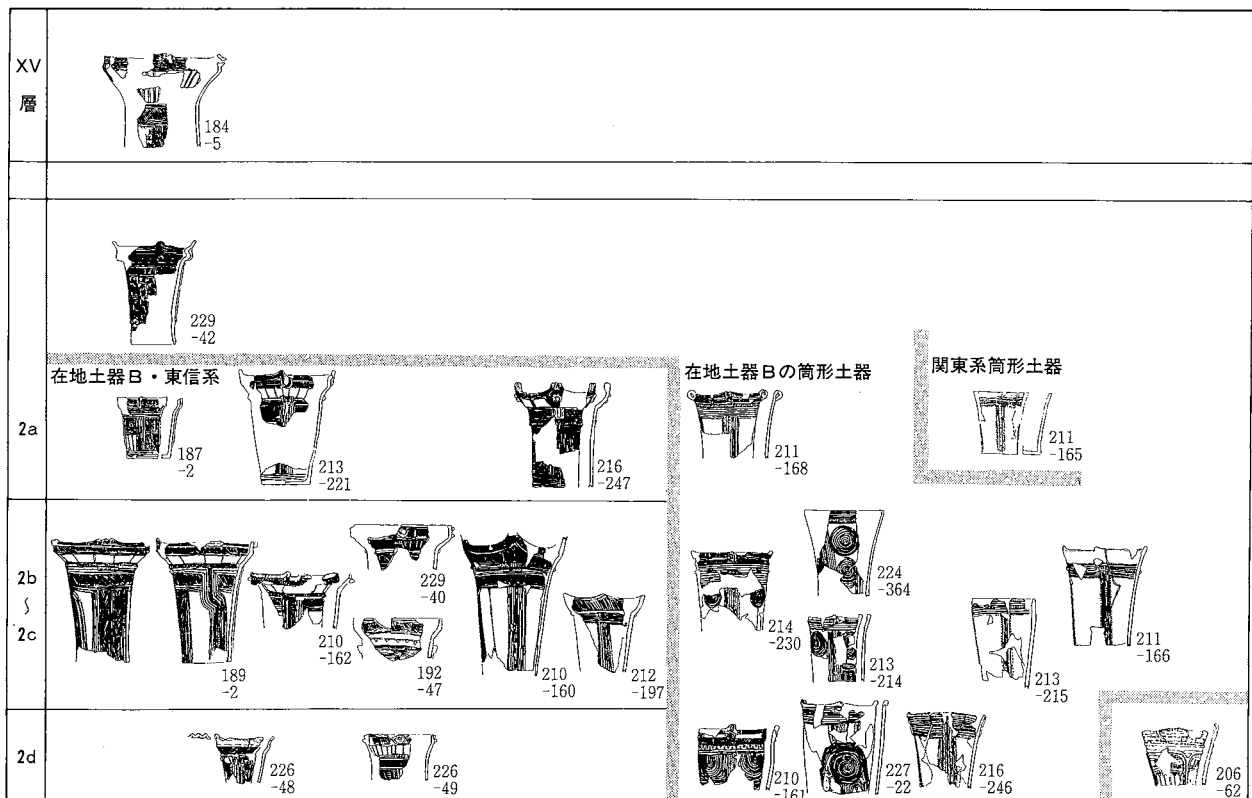


図70 東信系の深鉢形土器と沈線装飾を主体とする筒形土器

関東・東北地域に祖形が存在する類型 関東や東北地域から搬入、あるいは祖形が存在する例には、山形口縁を有する類型、幅狭のI文様帯を持つ深鉢形土器や樽形土器、沈線と交互刺突文などを簡潔に施したの筒形土器が存在する(図71)。

山形口縁となる土器は、図71に掲載した5点を見てもわかるように、各々装飾の配置や手法が異なっており、同一系統と見ることはできない。そのため、これらの土器は個々に異なった土器製作集団から持ち込まれたか、模倣された例と考えられる。223-355は、幅の広い山形頂部に貼付文が連続しており、その直下に縦位の楕円区画が見られる点、体部の径が大きく寸胴である点など、東北地域に点在する類型に類似する。肉眼観察による胎土も、在地系土器とは異なっている。

幅狭のI文様帯を有する土器には、沈線が押しき化したり、刺突が密接施文される例が多く認められる。これらも、個々に施文の特徴を異にしている。ただし、194-35には、継手文の特徴が認められるなど在地および近隣地域で模倣製作された可能性がある。肉眼観察による胎土も、190-2・220-303が在地と大きく異なって見えるのに反し、194-35や226-43は在地系土器の中に、類似した例を見ることができる。

型的に先行すると見られる図70(211-165)は、関東系の筒形土器である。ただし、刺突具は先端がやや細くなり、施文が安定していないことから在地で作られた可能性がある。211-166や213-215は、施文手法が半截竹管のハラを使用しており、在地化した土器である。

以上、これらの土器は、広義の五領ヶ台式土器のうち、関東や越後方面からの影響が考えられる土器群である。

関東・中部高地(分水嶺以南) 一方、八ヶ岳西南麓や松本平方面からの経路も考えられる。

図71(223-358)は、集合沈線系の土器であり、少量ながら出土している。I文様帯に単沈線による弧線文が施された例も千曲川水系や関東方面の土器と異なる可能性がある。

(6) その他の土器

北陸・越後系の土器 北陸の新崎式に比定される土器には、図版205-49・50、207-78、219-283などがある。この他、いくらか変形を受けたと見られる土器には図版185-12、216-240がある。さらに、変形した蓮華文や頸部の横位集合沈線など、個別の装飾要素が在地土器Aの中に多く採用されており、密接な関係

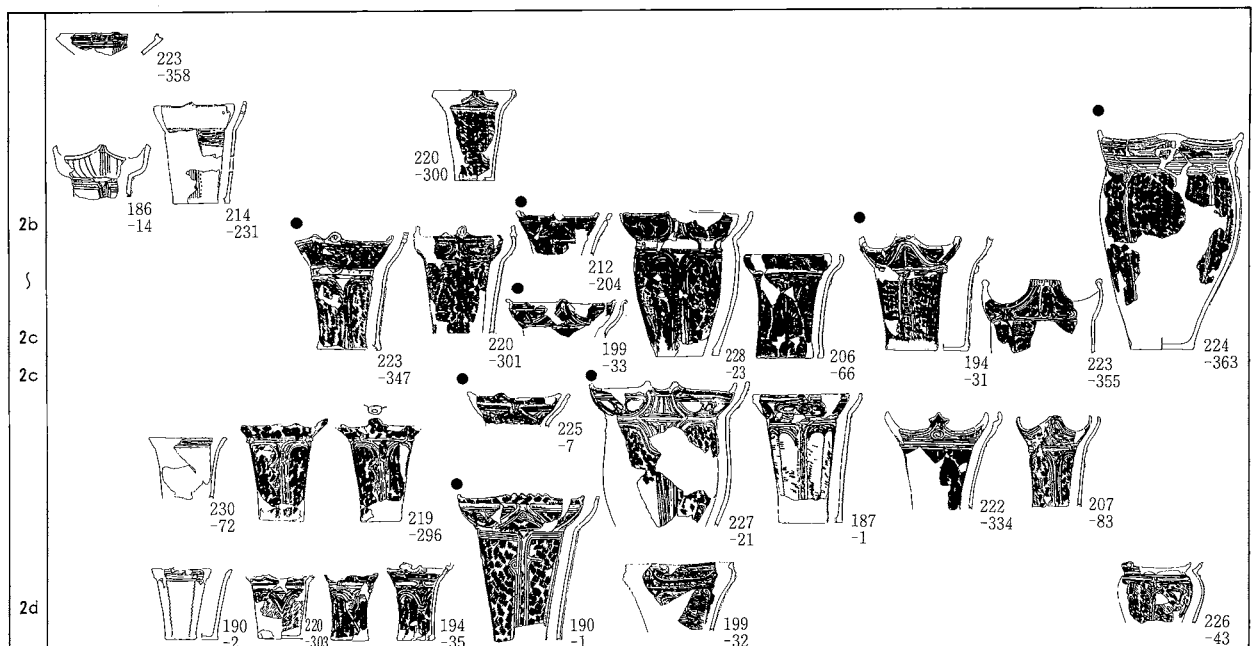


図71 五領ヶ台式土器群の一部

(●は在地土器C、あるいはその可能性が高い土器)

を示している。また、越後からの搬入品と見られる土器としては、撚糸側面圧痕（図版185-14）が存在する。

東海系の土器 図版192-45、199-35.44、206-70ほかは、器壁が薄く、低い隆線上を幅広の半截竹管による刻みが密接に施文されており、東海系の土器と考えられる。長野県内では、南信地域では一定量の搬入や模倣品が認められてきた（三上1998）が、北信地域において複数出土したのは稀である。

(7) 小 結

縄文時代中期前葉に対応する層位はXV層～XIV層全般に及んでおり、良好な層位資料であった。ところが、出土した土器量がXIV-1b層に偏っていたため、中期前葉1期～2期全体の編年を示すには至らなかった。さらに、XIV-1b層で検出された竪穴住居においても、土器の出土は偏っていた。そのため、編年的な検討は、五領ヶ台式土器の中でも新しい段階に相当する部分にとどめざるを得なかった。

一方、これまでこの地域ではまとまった資料がなかったため、こういった系統の土器で組成が成り立っていたのかを知る上で、貴重な資料となった。今回、系統毎の量比を算出できなかったが、大枠では、在地土器Aとした北信地域を主体とする深沢系土器などが最も多く、次いで東信地域を主体とする在地土器B、それに五領ヶ台式土器が在地化した在地土器Cや、在地土器Dが加わる状況が認められた。しかし、その差はわずかであり、深沢系土器が他を圧倒する状況ではなかった。屋代遺跡群の千曲川流域における位置や集落の性格が反映されているのかも知れない。今後の課題としたい。

また、第3章において、施文具や施文手法を細別、記号化して、系統間の差異や傾向を検討しようと考えたが、期限切れとなってしまった。今後、何らかの機会に取り組んでみたい。さらに、搬入土器や他地域の土器の模倣製作の問題などに取り組むため、胎土分析と型式分析を相互に検討する計画を立てていた。これについても、本報告には間に合わなくなってしまった。別の機会に公表する所存である。

引用・参考文献

飯山北高校地歴部 1966年『深沢遺跡』

石原州一 1998 「成果と課題—風呂屋遺跡縄文時代中期の土器について—」『牛出遺跡・葺山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷地遺跡・八号堤遺跡』長野県埋蔵文化財センターほか

石原正敏・菅沼 亘 1996 「横割遺跡」『十日町市史』資料編2 考古

今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』4

上田典男 1998 「前期末葉～中期初頭の土器群について」『松原遺跡 縄文時代』長野県埋蔵文化財センターほか

上田典男・三上徹也 1995 「各地域の諸様相 長野県」『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

小林謙一 1995 「各地域の諸様相 南関東」『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

佐藤雅一 1997 「城林遺跡出土土器の編年額考察」『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』新潟県津南町教育委員会

高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟県考古学談話会会報』4

寺内隆夫 1991 「長野県上水内郡三水村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・62合併号

寺内隆夫 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター

寺内隆夫 1997 「御代田町滝沢遺跡出土の縄文中期前葉（滝沢IV期）の土器について」『滝沢遺跡』御代田町教育委員会

寺崎裕治 1995 「各地域の諸様相 新潟県」『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

中山真治 1992 「五領ヶ台式土器—その段階設定と系統について—」『東京考古』10

西沢隆治 1982 「深沢遺跡」『長野県史』考古資料編 全1巻(2)

三上徹也 1998 「長野県における中期前半東海系土器」『シンポジウム 縄文時代中期前半の東海系土器群—北屋敷式土器の成立と展開 予稿集』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会

2 中期後葉の土器

屋代遺跡群は、縄文中期後葉の多系統の土器がまとまって出土した遺跡としては東北信地方で最大規模に属する。本項では遺構毎の出土状況をもとに、土器群の時間的位置づけを行い、系統毎の変遷を提示していく。

(1) 縄文中期後葉における時間軸の設定

A 時間セルの設定

中期後葉集落から出土するおびただしい数の土器群の、同時に製作され・並行して使用されていたまとまりを抽出することは果たしてできるのか^(註1)。土器の「型式学的属性」によって製作の前後関係を推測するという方法はある意味で正しいが、ブラインド状態で「型式学的」に前後にあたると推測される2型式が併存していたり、逆転している例が指摘された(古城1998)。また前後に考えられていた土器群が高い頻度で共伴してしまう事実から土器型式を見直す動き(谷井・細田1997)も始まっている。

屋代遺跡群中期後葉資料の場合、出土土器群はまずXII-2層の堆積という時間幅の中で作られ・使われ・廃棄されたものであるというまとまりを持ち、前後する時期の土器の混入は限りなく0に近い。更にXII-2層の上・-1・-2・下面のどこで出土したか、またどこで検出された遺構内に廃棄もしくは遺棄されたかによっておおまかな時間的な位置づけを行いうる。しかしながら例えば「住居跡出土土器」という「廃棄単位」は、実際は1軒の住居が埋まりきるまでの時間幅がかなり長いので、調査面単位よりは短い時間を反映するとしても、現実の1回の廃棄単位にはほど遠いものとなっている。そこで現場では、更に細かい時間幅における廃棄の同時性のより高い資料を埋積するための、「一括資料」収集を行ってきた。これは遺構内の、さらに1層内の小単位(上部、下部、灰中など)や、遺構外の小廃棄単位を含めると膨大な数に上る。そこで今回は土器に時間的な位置づけを与えるにあたって以下の3項目を基準にした。

- a. 遺構内の小単位を念頭に置いた層位的なまとまり^(註2)
- b. 遺構間の切り合い関係
- c. 遺構間の土器接合関係(図72)

具体的には、aを1つの「基軸時間セル」とし、それらをbとcによって前後、左右に並べていく。ただし1軒の住居跡で層位的に前後に連続する「基軸時間セル」毎の特徴が似通っている場合は、住居跡単位で「基軸時間セル」の統合を行い、「時間セル」を設定する。

B 時間セルの内容

時間セル 住居跡出土土器は、床面を除いて各層ともにまとまりの良い資料が多い。そこで今回はそのうち以下の58群を「時間セル」とした。ただしセル内には相当層も「層」として表記している。また、図73にセル内の代表的な土器のみを図示した。

SB5352埋甕・炉(図73-(1)左)、SQ4803a・b(図73-(1)左・図版134)、SB5313b 3層(図73-(1)左)、SB5313b 1層・1層下部(図73-(1)左)、SB5313a 埋甕とSB5313b 1層～SB5313a 3層出土土器(図73-(1)左)、SB5313a 3層(図73-(1)左)、SB5313a 2層(図73-(1)左)、SB5313a 1層(図73-(1)左)、SK9071 3層(図73-(1)左・図版127)、SK9071 2層(図73-(1)左・図版127)、SB9001 埋甕(図73-(1)左)、SB9001 4・5層(図73-(1)左・図版100)、SB9001 2層(図73-(1)左・図版100)、SB9001 1・2層(図73-(1)左・図版100)、SB9006 埋甕(図73-(1)左)、SB9006 ピット1(図73-(1)左)、SB5341 床下・埋甕(図73-(1)右・図版86)、SB5341 炉・7層上面(図73-(1)右・図版86・87)、SB5341 5層上面(図73-(1)右・図版87)、SB5341 1・2層(図73-(1)右)、SB5311 6層(図73-(1)右)、SB5311 5・6層(図73-(1)右・図版58)、SB5311 5層(図73-(1)右・図版58)、SB5311 4層(図73-(1)右・

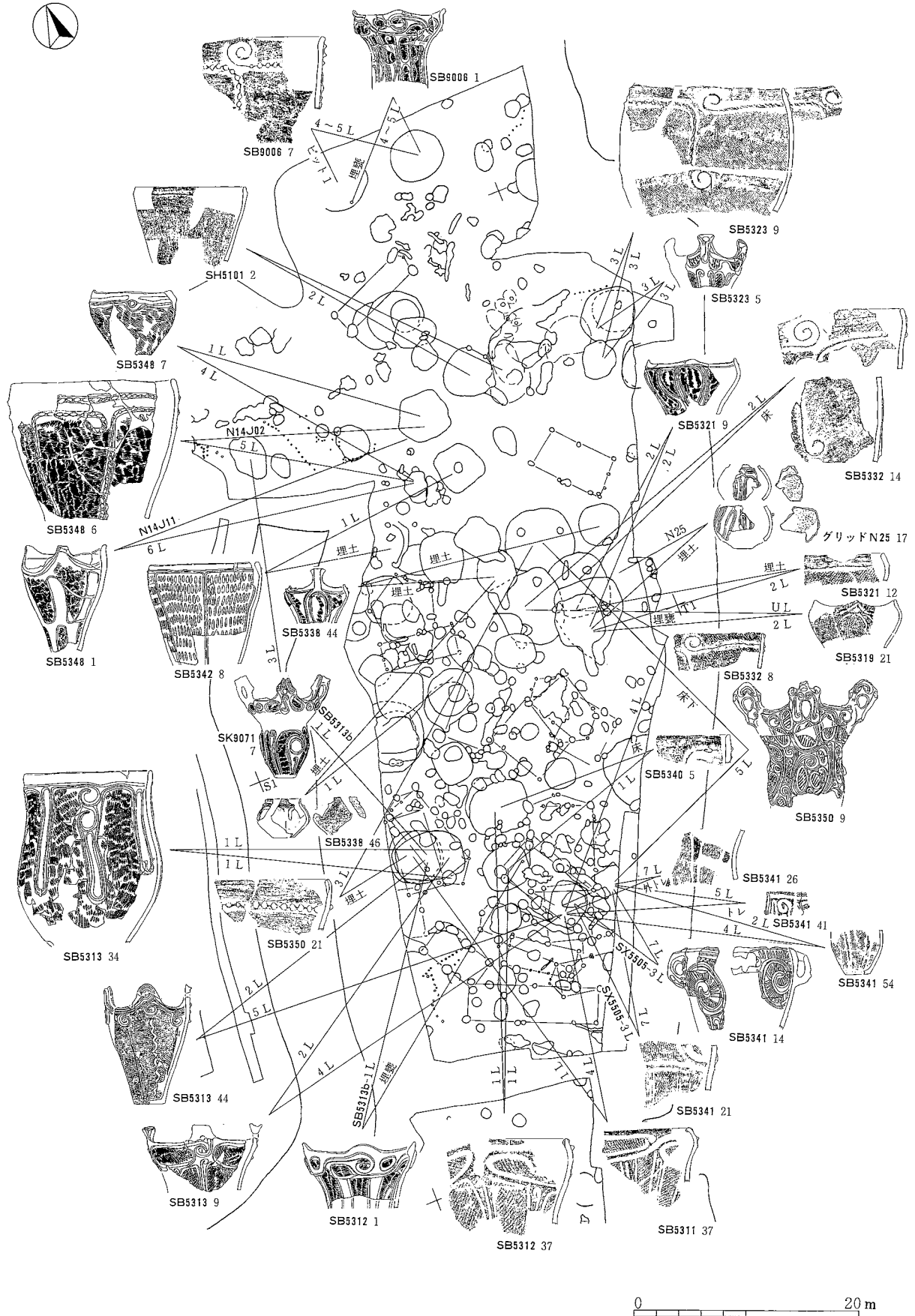


図72 屋代遺跡群出土土器の遺構間接合状況

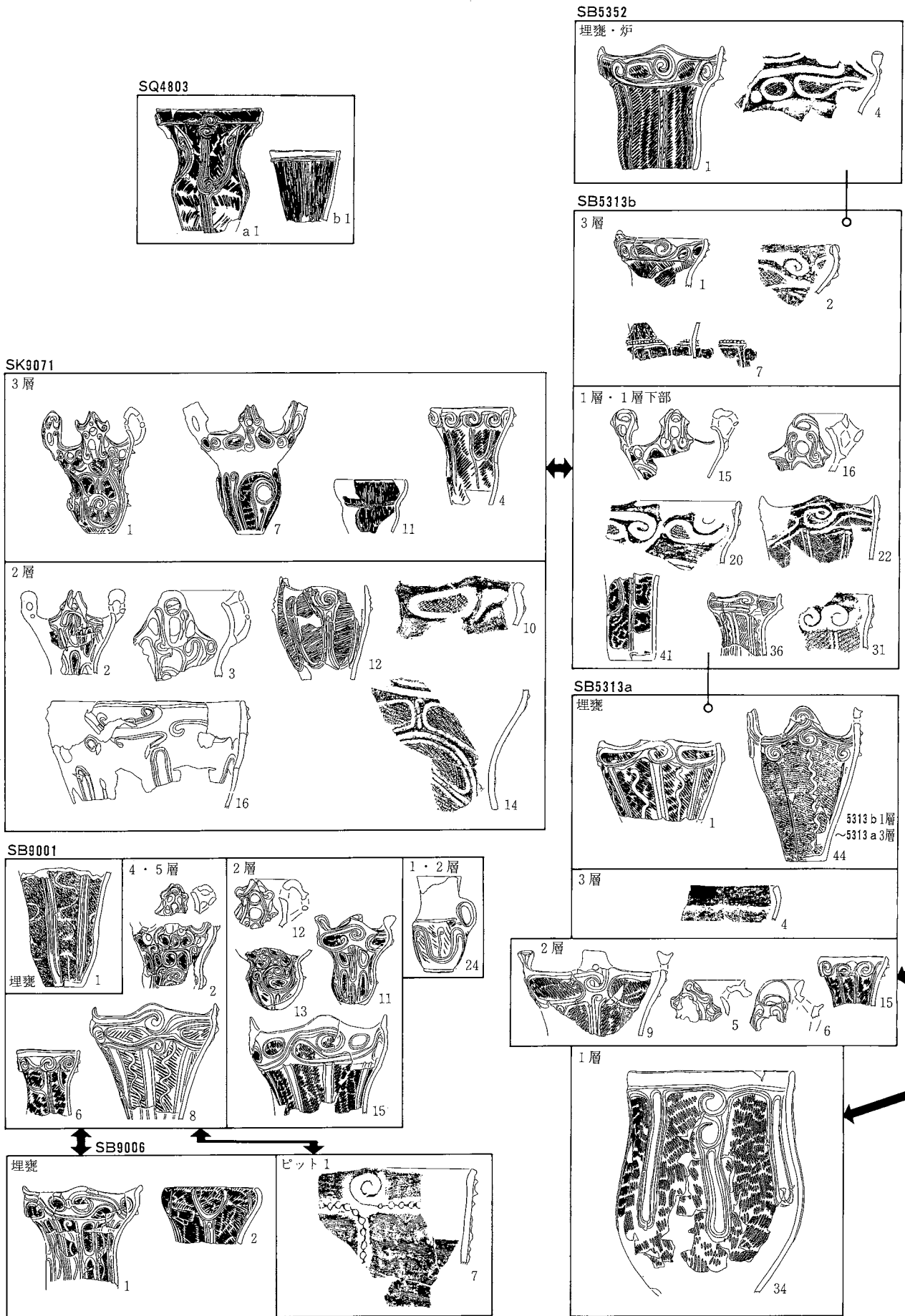
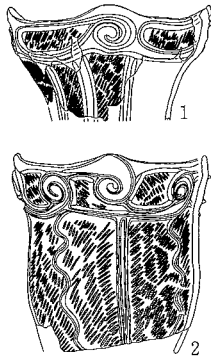


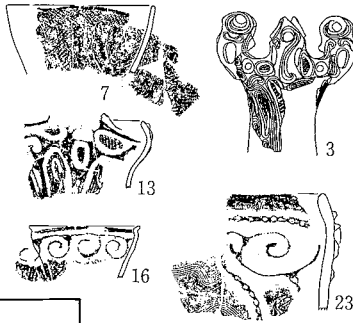
図73-(1) 接合関係と切り合い関係による時間セル

SB5341

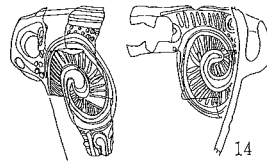
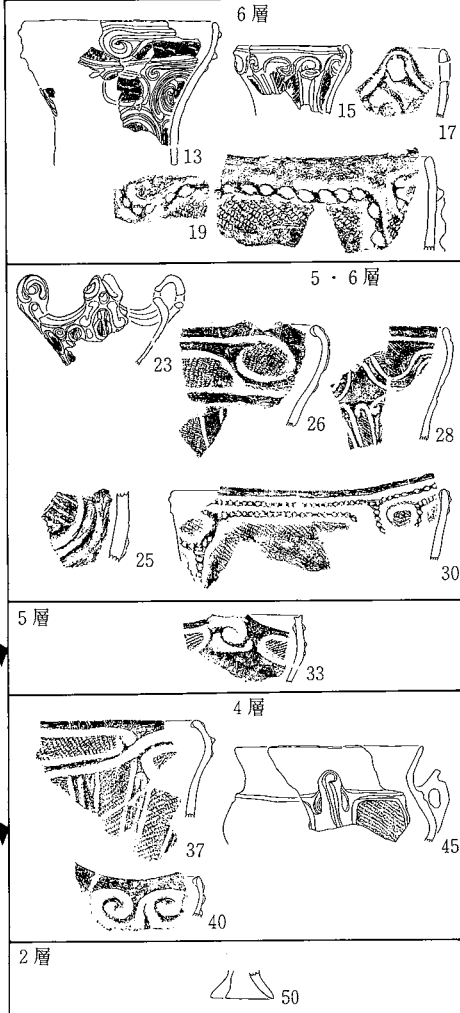
床下・埋甕



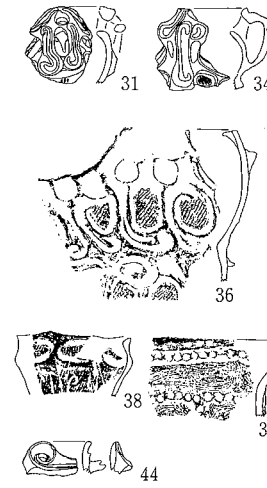
炉・7層上面



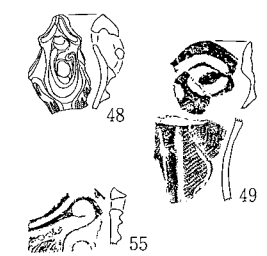
SB5311



5層上面

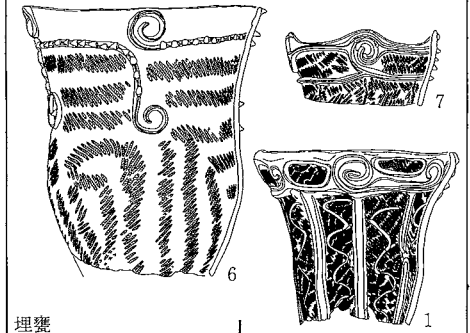
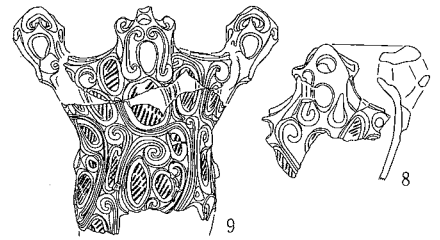


1・2層



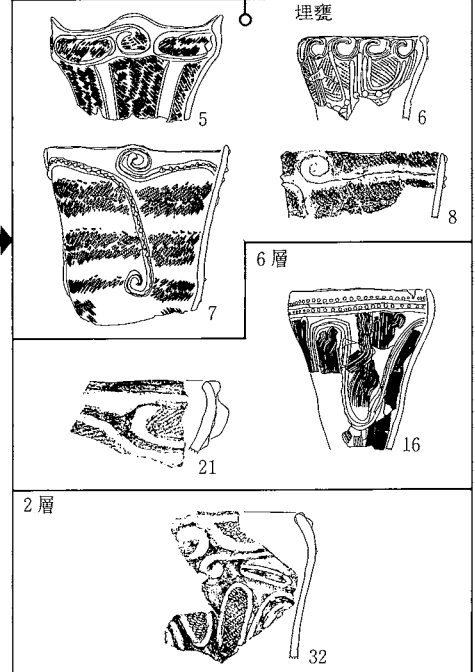
SB5350

床下



埋甕

SB5332

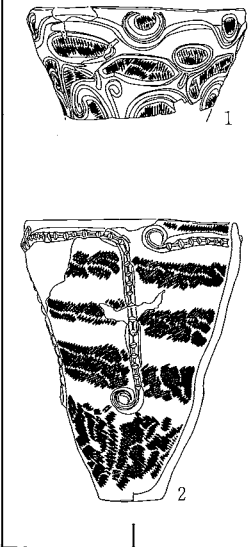


↔ 接合関係

○— 切り合い関係

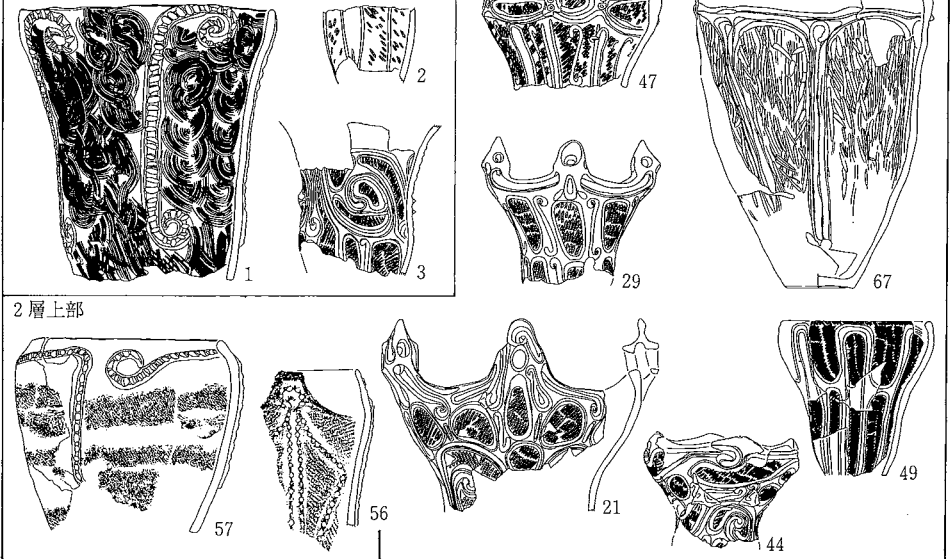
SB5346

埋甕



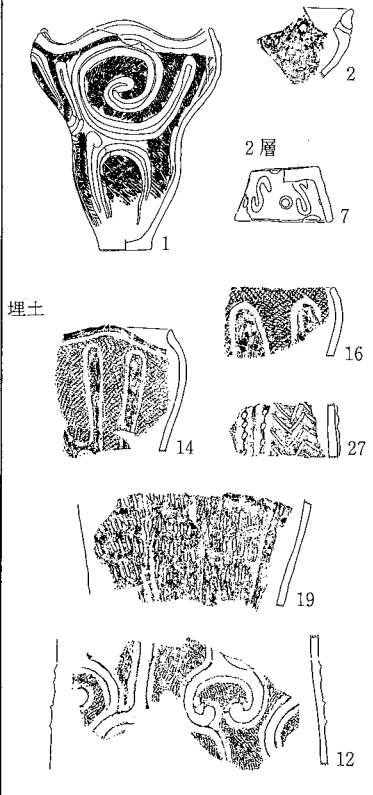
SB5345

埋甕

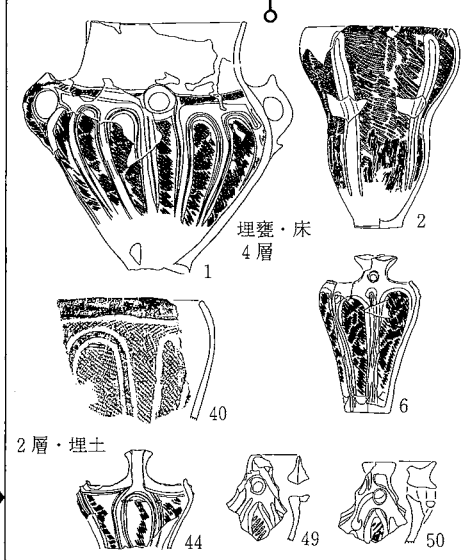


SB5344

埋甕

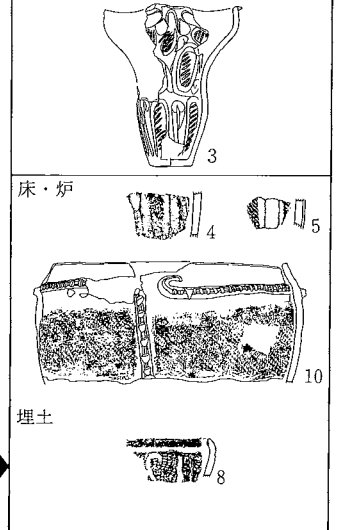


SB5338

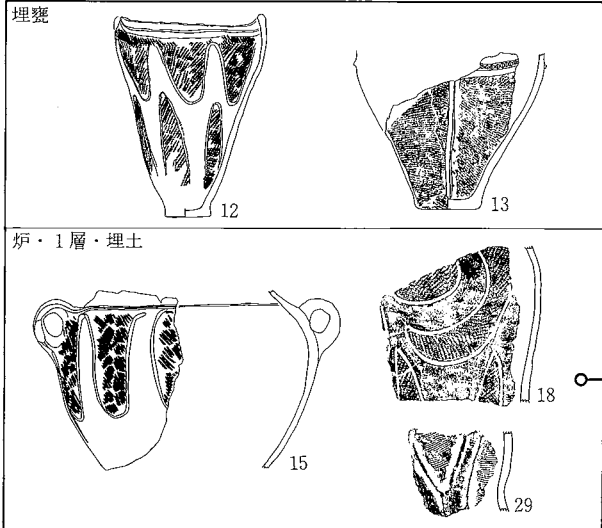


SB5318

石下埋甕



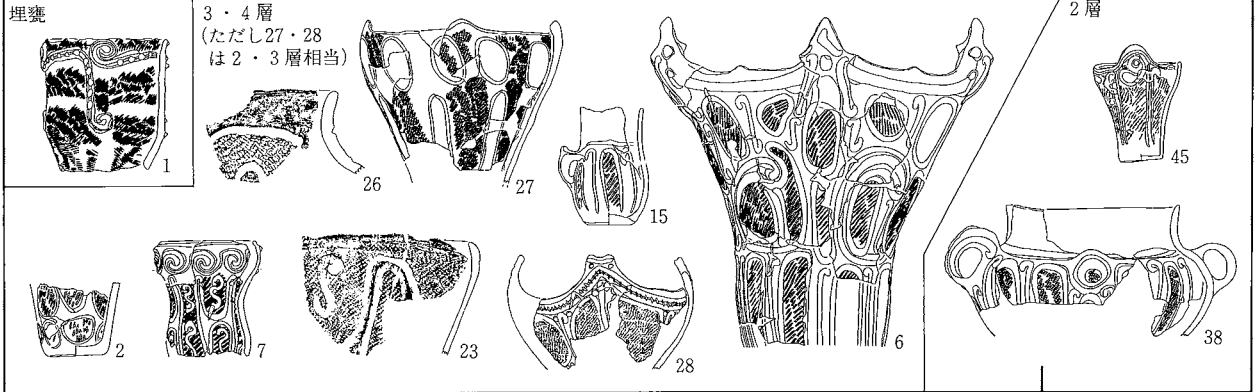
SB5337



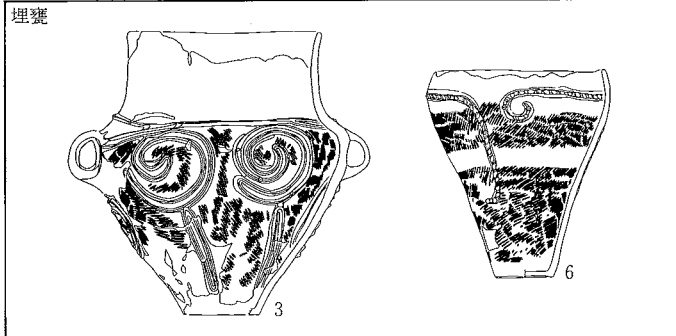
↔ 接合関係
○— 切り合い関係

図73-(2) 接合関係と切り合い関係による時間セル

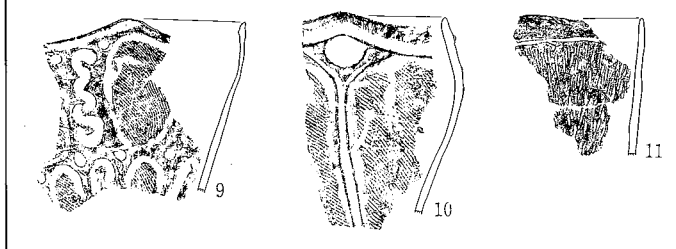
SB5328



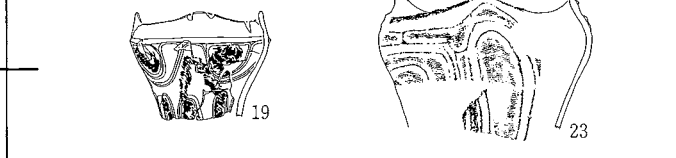
SB5325



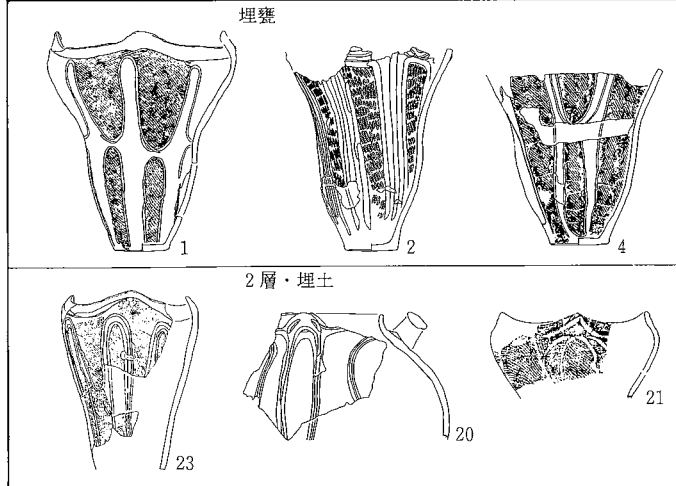
床・炉



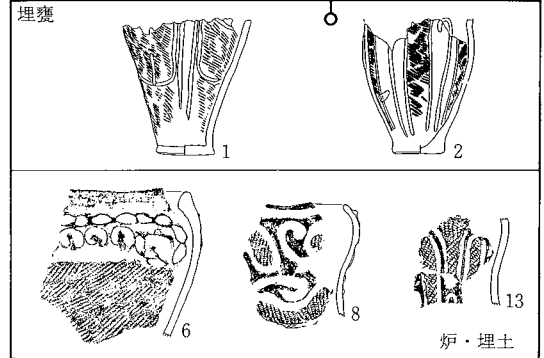
5~8層



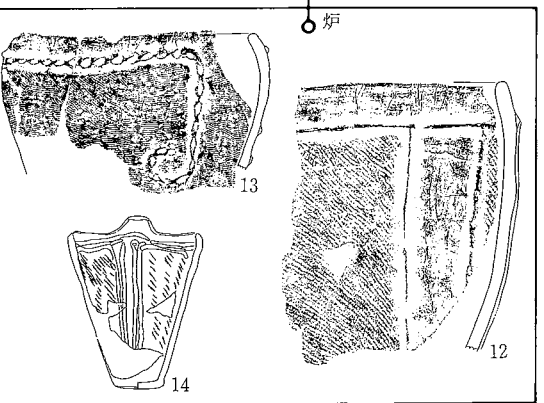
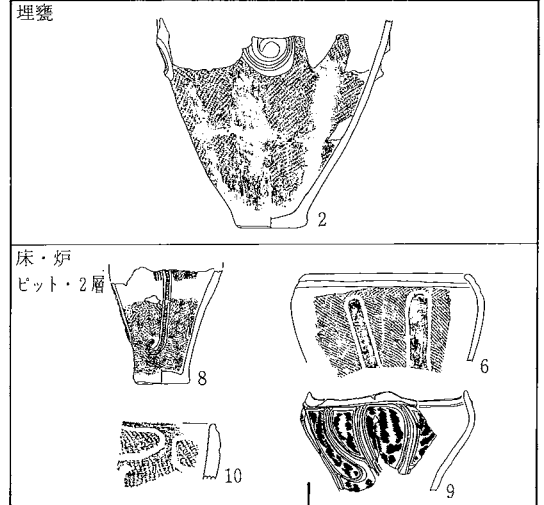
SB5319



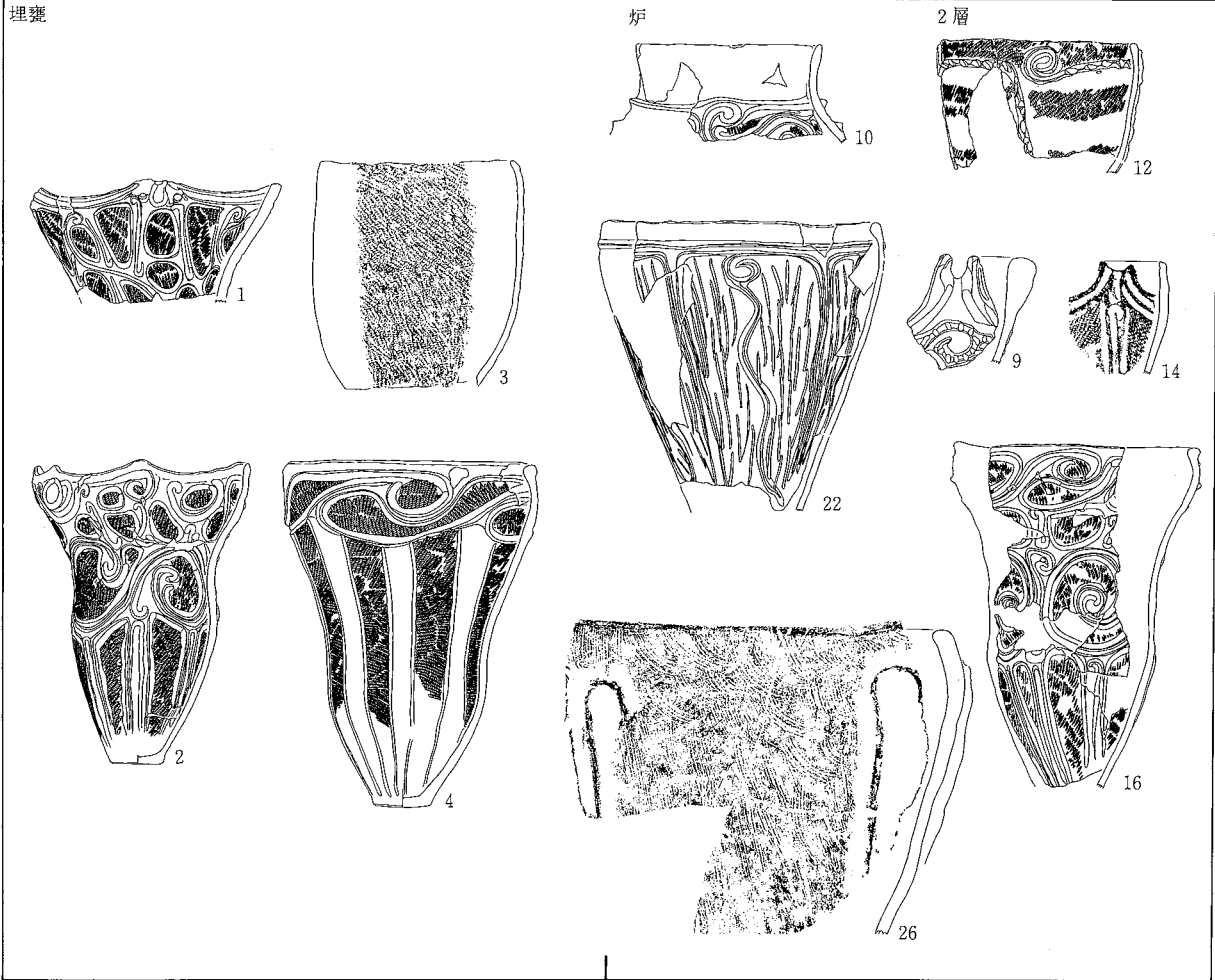
SB5336



SB5321



SB5351



SB5316

埋甕・床・ピット・炉

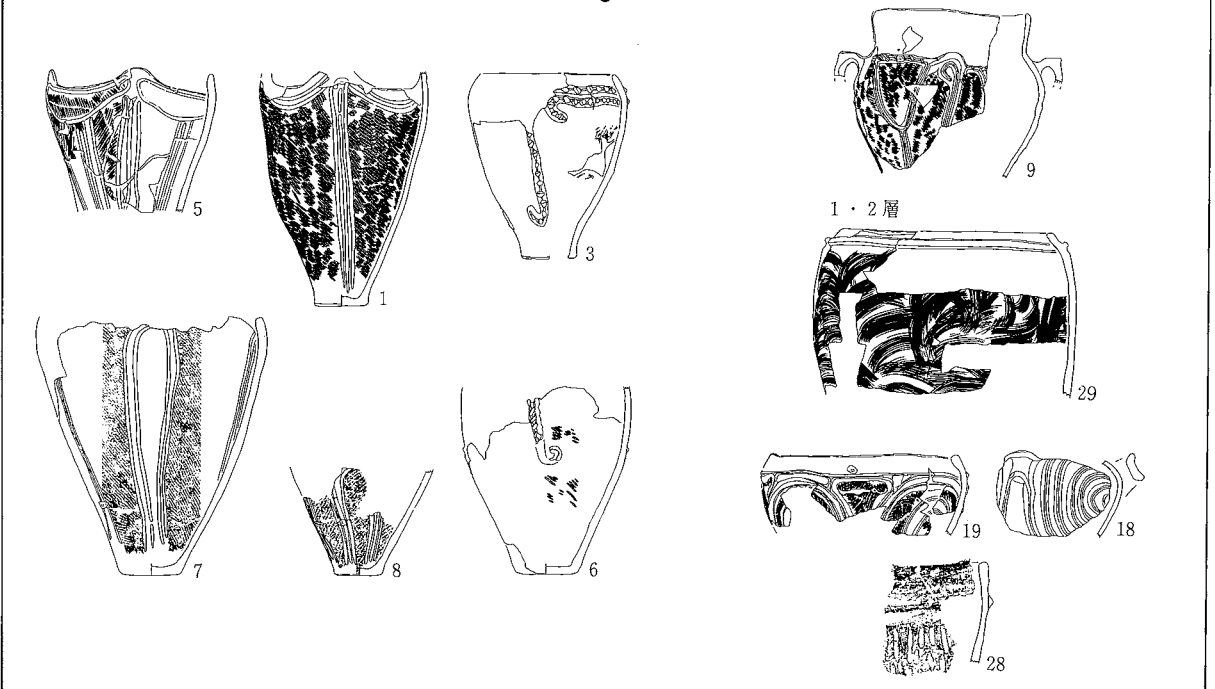


図73-(3) 接合関係と切り合い関係による時間セル

図版58)、SB5311 2層 (図73-(1)右)、SB5350 床下 (図73-(1)右・図版95)、SB5350 埋甕 (図73-(1)右)、SB5332 埋甕 (図73-(1)右) SB5332 6層 (図73-(1)右)、SB5332 2層 (図73-(1)右)、SB5345 埋甕 (図73-(2)左)、SB5345 2層上部 (図73-(2)左・図版92)、SB5338 埋甕・床・4層 (図73-(2)左・図版82)、SB5338 2層・埋土 (図73-(2)左)、SB5318 石下埋甕 (図73-(2)左)、SB5318 床・炉・埋土 (図73-(2)左)、SB5337 埋甕 (図73-(2)左)、SB5337 炉・1層・埋土 (図73-(2)左)、SB5346 埋甕 (図73-(2)左)、SB5344 埋甕 (図73-(2)左)、SB5344 2層・埋土 (図73-(2)左)、SB5328 埋甕 (図73-(2)右)、SB5328 3・4層 (図73-(2)右・図版75)、SB5328 2層 (図73-(2)右・図版75)、SB5336 埋甕 (図73-(2)右)、SB5336 炉・埋土、SB5325 埋甕 (図73-(2)右)、SB5325 床・炉 (図73-(2)右・図版73)、SB5325 5・6・7・8層 (図73-(2)右)、SB5321 埋甕 (図73-(2)右)、SB5321 床・炉・ピット・2層 (図73-(2)右・図版67)、SB5319 埋甕 (図73-(2)右)、SB5319 炉 (図73-(2)右・図版65)、SB5319 2層・埋土 (図73-(2)右・図版66)、SB5351 埋甕・炉 (図73-(3)上)、SB5351 2・3層 (図73-(3)上・図版97)、SB5316 埋甕・床・炉・ピット (図73-(3)下・図版63)、SB5316 1・2層 (図73-(3)下・図版63)。

C 時間セル同士の関係

①基本序列

「時間セル」毎の関係は、遺構同士切り合い関係にあるものを「○」で示し、「時間セル」内の土器片が他の「時間セル」内の土器片と接合している場合 (図72参照)、セル同士を「↔」で結んだ (図73)。集落中心部では、切り合い関係によってSB5350、SB5332、SB5345、SB5338、SB5337の順に新しい時期に構築されたことが解っている。さらにSB5321はSB5345を切り、SB5319がさらにSB5321を切ることから、これらも新旧関係を持って捉えられる。また、SB5325はSB5337に切られることからこれより古いことは確実である。さて、SB5341の5層出土土器はSB5350の床下出土土器9と接合しているため、SB5341の埋甕・炉・7層がSB5350床下以前の時期に位置づけられる。また、SB5341の2層出土土器54は、SB5311の4層出土土器と接合しており、両者が同時期に埋没段階にあったことが解った。さらに別のSB5311の4層出土土器はSB5332埋甕である8と接合したため、SB5311が埋没しているまさにその時期にSB5332は機能段階にある。またSB5313aの2層出土土器の9は、SB5311北西部4層下面出土土器と、SB5313aの2層出土44はSB5311の5層出土土器と接合している。さらにSB5313bの1層出土土器はSK9071の3層出土7と、別の

SB5313bの出土土器はSB5312埋甕1と接合した。このような諸関係を基に「時間セル」を縦横に並べたものが図74である。また、表105には大まかにこの序列に従って系統毎に各類型の出現状況を一覧表化した。

②周辺序列

次に上記の基本序列と直接関わりは持たないものの、接

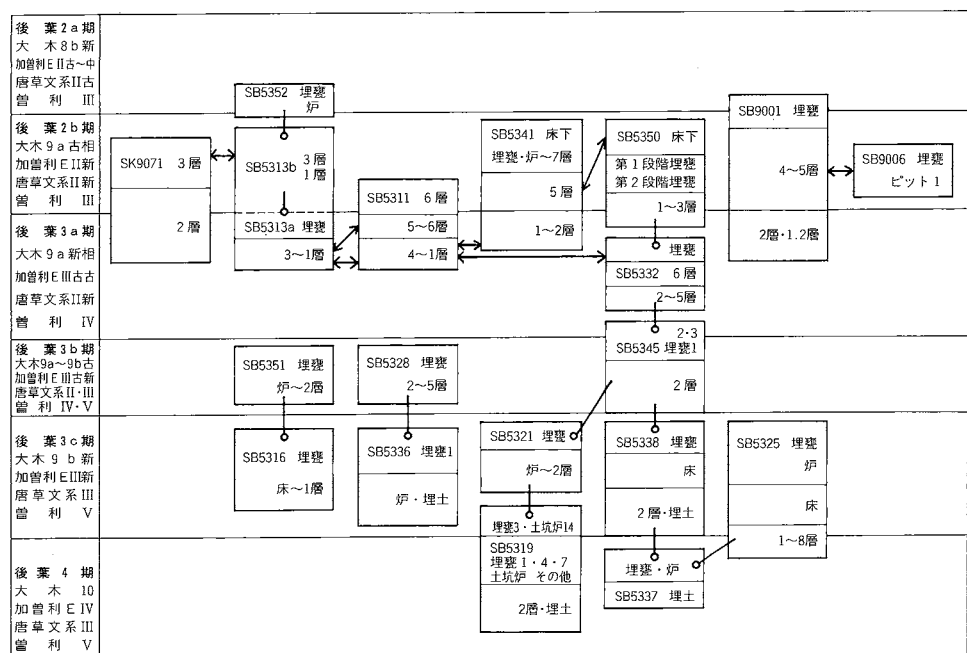


図74 時間セルと補正セル

表105 中期後葉主要5類型の時期別出現状況

時期	遺構	α (大木系)	β (加賀利巨系)	γ (丘陵系)	δ (過多連系)	ϵ (曾・唐系)	
後葉2a期	SB5352 埋甕・竈	1群1類	1群1類				
	SB9001 埋甕		1群か				
	SQ4801 a・b					1群1類・6群	
	SB5311 6層	1群2類・2群2類		2群1類	1群1類・2群		
後葉2b期	SB5313b 3層		1群2類			2類	
	SB5313b 1層	1群1類・2群1類	1群2類	+	1群1類・2群	4群4類	
	SB5341 床下・埋甕	1群3類・1群4類・2群1類・3群1	1群1類・1群2類				
	SB5341 竈・7層	1群1類・1群4類・2群1類・3群1	1群3類	3群2類	1群1類	+	
	SB5341 5層		1群2類・8群2類	3群2類			
	SB5350 床下	2群1類					
	SB5350 埋甕		1群1類・1群2類	1群1類			
	SB9001 4・5層	1群1類?・2群1類	1群2類・4群4類		1群1類		
	SB9006 埋甕		1群2類・3群1類				
	SB9006 ピット1			1群2類			
	SK9071 3層	1群1類・2群1類			1群1類		
	SK9071 2層	2群1類		2群		5群1類	
	後葉3a期	SB5311 5・6層	2群1類	1群3類・3群2類	4群		+
		SB5311 5層	1群1類		1群		
SB5311 4層			1群・4群3類・7群3類	3群2類	1群1類		
SB5311 1・2層							
SB5313a 埋甕			1群3類				
SB5313a 3層						4群4類	
SB5313a 2層		2群1類	1群3類・2群		1群1類		
SB5313a 1層		2群1類	1群3類・2群4類・7群3類	+			
SB5332 埋甕・床			1群3類	1群1類	1群1類		
SB5332 6層			2群2類・1群3類	2群3類			
SB5332 2層		1群2類・2群1類		2群1類		+	
SB5341 1・2層		2群1類	1群3類・6群	1群1類	2群		
SB5350 3層			1群3類		1群1類・2群2類・3群2類		
SB9001 2層		1群3類・2群1類	1群2類				
SB9001 1・2層	2群1類	10群					
SK9071 2層							
後葉3b期	SB5318 右下・埋甕	2群1類					
	SB5318 床・竈・埋土		2群1類?	2群1類	1群1類		
	SB5328 埋甕			1群1類			
	SB5328 2層		4群2類・7群3類		2群		
	SB5328 2~4層	1群1類・2群1類・4群1類・5群2		1群1類・2群4類・10群	2群1類・4群	1群1類	
	SB5335 床・竈	2群3類		4群1類		3群2類	
	SB5345 埋甕	1群1類	+	3群1類			
	SB5345 2層	1群1類・1群2類・1群3類・2群1類・2群2類		1群3類・2群5類・3群2類・7群1類・7群4類	2群1類・2群4・4群	4群1類	
	SB5351 埋甕・竈	2群1類・2群2類・5群1類	1群3類				
	SB5351 2・3層	1群2類・2群1類		2群1類・4群	4群2類		
	後葉3c期	SB5316 埋甕・床・竈・ピット		1群4類・4群2類・7群3類・8群3類	2群3類		
		SB5316 1・2層	2群1類	2群1類・4群3類・7群1類・7群2類・8群3類	2群3類		3群2類・4群4類
		SB5321 埋甕			+		
		SB5321 床・竈・ピット・2層		1群4類・2群1類・2群4類・7群2類	+		
SB5325 埋甕			2群3類	2群3類			
SB5325 床・竈		2群3類		4群1類			
SB5325 5・6・7・8層		2群3類・2群4類	2群1類・2群5類			4群4類	
SB5336 埋甕			あり				
SB5336 竈・埋土		2群	3群・3群2類か・5群1類	1群・2群3類			
SB5338 埋甕・床・4層		2群1類・4群2類	2群1類・3群1類	2群3類			
SB5338 2層・埋土			2群1類・2群4類・3群1類・7群・8群1類	2群			
SB5344 埋甕		2群3類					
SB5344 2層・埋土		2群1類	2群1類・2群4類・3群2類・7群1類・8群1類	2群	1群1類		
後葉4期		SB5319 埋甕		1群か・2群4類・2群5類			
	SB5319 竈	4群2類	2群4・5類・4群3類	2群			
	SB5319 2層・埋土		2群1類・2群4類・2群5類・8群1類				
	SB5337 埋甕		2群5類	2群5類			
SB5337 竈・1層・埋土		4群4類・7群4類					

合・切り合い関係にある、SB9001と9006、SB5328と5336、SB5351と5316の3つのグループを基本序列との比較によって時間軸の中に位置づける(図74)。

SB9001とその周辺(図73-(1)) SB9001 4・5層出土土器はSB9006埋甕1と接合し、同層出土の別の土器が、ピット1の7と接合することから、これらは併行関係で捉えられる。両者は β 1群2類が共通するが、更に両者の α ・ β ・ γ のタイプの出現状況と装飾技法から、これらがSB5350の床下~第一段階に並行すると推測した。また、SB9001の埋甕1は磨り消し縄文が未発達段階にあり、これらと並行するもしくは先行すると考えた。また、SB9001 2層出土土器には4・5層から継続する α 2群1類の他に α 1群3類が加わり、 β も口縁部文様帯の隆帯部分が扁平化し、SB5332埋甕に近似する。このことから、SB9001の4・5層段階に後続させた。

SB5328とSB5336(図73-(2)) SB5328の埋甕1はSB5332の埋甕と類似する γ 1群1類にあたる。5層と2・3層の中に、大木9b式古相にあたりと推測される27(α 4群1類)・2や、新相まで下がる可能性のある26(α 5群2類)が見えるが、大形化した α 1群1類・2群1類や把手のついた壺形土器の体部に、連結曲流蕨手文や区画曲線蕨手文が描かれるものも見られる(図版277-40)。反面、 β は2群が主体となる。このことから、

SB5328はSB5332に後続し、SB5338には先行する、SB5345-2層と近似した段階にあると推測した。SB5336はこの住居跡を切っており、埋土出土土器との比較では後続段階として考えたい。

SB5351とその周辺(図73-(3)) SB5351の埋甕は α 2群1類の1、2群2類の2と β 1群3類の4、地文のみの3の組み合わせである。埋土からは多量の土器が出土したが、特に一括性の高い2層出土土器には、 α 2群1類・1群2類、 γ 2群1類、 γ 4群を含む点で、SB5345の2層資料と類似した様相を持つ。また、この住居跡を切るSB5316とは殆ど共通する要素を持たないため、段階を異にするものと考えられる。次に、このSB5316と、SB5345に後続するSB5338との関係が問題になるが、SB5316の β は口縁部文様帯を持つ1群がなくなり、2群1類や壺形土器7群3類が見られ、その胴部文様が微隆起線化すること、 γ は下巻き渦巻きの2群3類が登場すること、 α は連結曲流蕨手文を持つものがなくなることなどから、両者が並行する可能性があると考えたい。

D 時間セルの補足資料

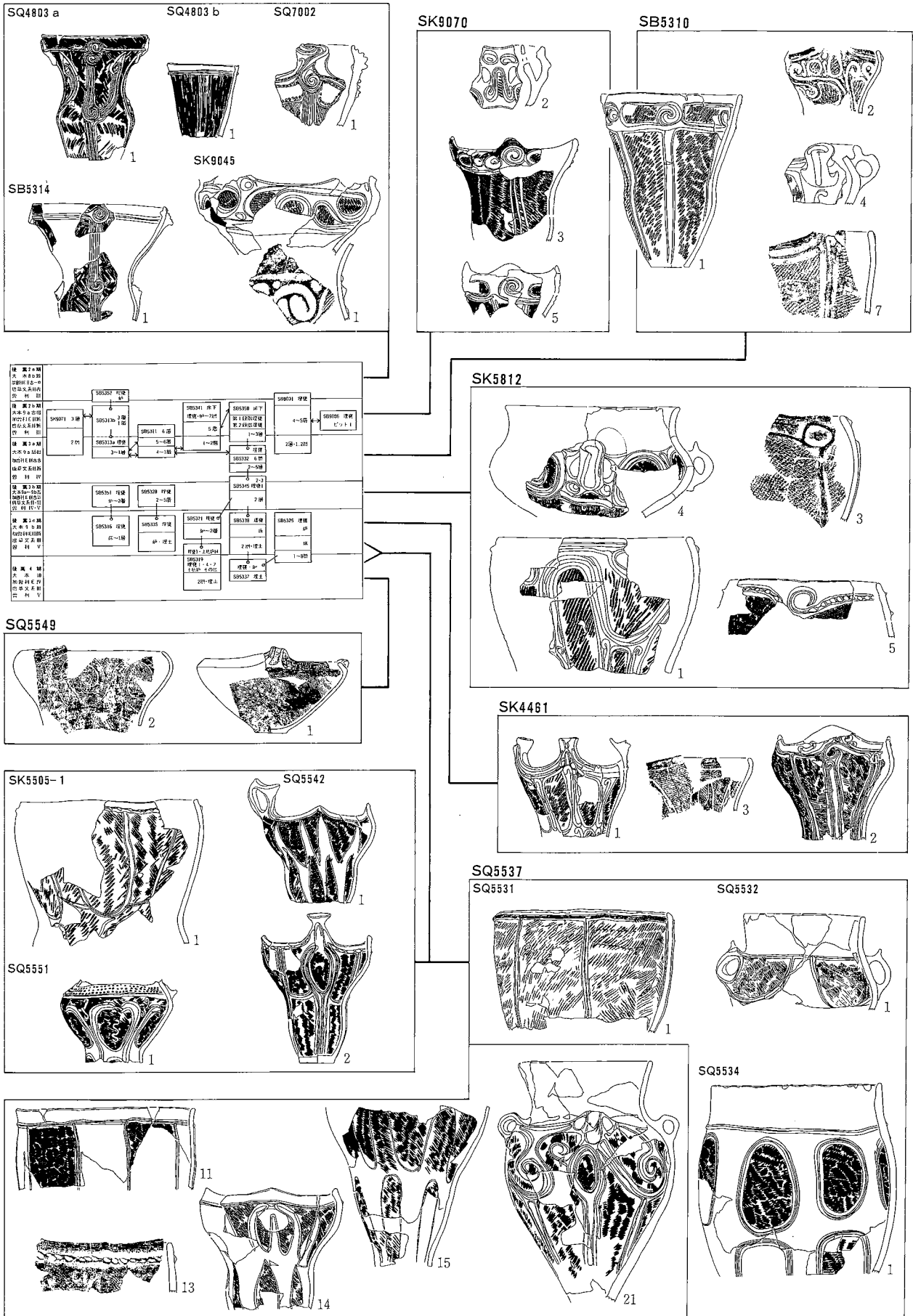


図75 補足セル

最後に、個々に一括性の高い資料や、「基本序列」、「周辺序列」のみでは現れなかった土器群を含め、前述のような各類型や文様間の比較検討操作によってその位置づけを検討した(図74・75)。SQ4803の補足資料としてSQ7002-1、SB5314-1が位置づけられ、また、 α 1群1類のSK9045-1は同時期もしくは後続すると推測される。SB5350・5313b・5341の補足資料としては、 β 1群2類や第一文様帯に区画文が連続し、胴部沈線間の磨り消しが全く見られない3を含むSK9070出土土器を掲げた。また、SB5310は埋甕1が β 1群2類に属するが、3層出土土器の様相からSB5332の補足資料とする。SK5812は β 7群1類(4)、 γ 2群1類(5)を含み、 β 2群4類(1)には区画蕨手懸垂文の副文様が付くことなどからSB53452層の補足資料とした。また、SQ5542-1と2は隣り合って出土し(図版135)、どちらも盃状突起を持つ点でも共通するが、1は β 2群5類、2は β 2群1類である。また、SK5505-1の1は γ 3群2類であるが、体部に磨消縄文によるU字文が描かれる点で特異である。SQ5551-1は屋外埋甕で、口縁部に3列の刺突列を持つ。これらは1時期に限定せずに、SB5338~SB5337にかけての補足資料とし、類例を集めて再考したい。最後に屋外埋甕群(SQ5531・5532・5534a)とその上に廃棄されたSQ5537であるが、SQ5531-1は口縁部微隆起線の上に縄圧痕があり、圧痕隆帯文土器 γ 2群5類として分類され、SQ5532の1は β 7群2類であるが、SB5314で見られるものと異なり、頸部文様帯が広い。SQ5534a-1は文様の構成は大木9b式と類似するが、微隆起線で区画文様が描かれている。これに対し、SQ5537出土土器には連結U字文対向型の β 2群5類(14)や15が含まれ、SB5337と併行する様相を呈する。このことから前者の埋甕群をSQ5537の破片よりもやや古いと考えたい。

E 中期後葉の段階設定

中期後葉の6段階 以上の検討結果から屋代遺跡群出土土器は時間的前後関係を伴って以下の6段階に配列された。

(屋代遺跡群XII-2層) 第1段階：4f区SQ4803を指標とする段階

(屋代遺跡群XII-2層) 第2段階：SB5350床下・埋甕を指標とする段階

(屋代遺跡群XII-2層) 第3段階：SB5332埋甕~2層を指標とする段階

(屋代遺跡群XII-2層) 第4段階：SB53452層を指標とする段階

(屋代遺跡群XII-2層) 第5段階：SB5338埋甕~2層を指標とする段階

(屋代遺跡群XII-2層) 第6段階：SBSB5337を指標とする段階

並行関係と中期後葉時期区分 次にこれらと既存の土器型式との併行関係を以下のように推測し、屋代遺跡群縄文時代全体の中での時期名称を決定する。

第1段階：**中期後葉2a期**……大木8b式新相・加曾利EⅡ式古~中相・唐草文系Ⅱ段階古にほぼ併行すると考えられる。

第2段階：**中期後葉2b期**……大木9a式古相・加曾利EⅡ式新相・唐草文系Ⅱ段階にほぼ併行すると考えられる。

第3段階：**中期後葉3a期**……大木9a式新相・加曾利EⅢ式古相の古手・唐草文系Ⅱ段階にほぼ併行すると考えられる。

第4段階：**中期後葉3b期**……大木9a式新相~大木9b式古相・加曾利EⅢ式古相の新手・唐草文系Ⅱ・Ⅲ段階にほぼ併行すると考えられる。

第5段階：**中期後葉3c期**……大木9b式新相・加曾利EⅢ式新相・唐草文系Ⅲ段階にほぼ併行すると考えられる。

第6段階：**中期後葉4期**……大木10式古相・加曾利EⅣ式・唐草文系Ⅲ段階にほぼ併行すると考えられる。

ただし中期後葉3c期は β 2群4類の出現時間差、中期後葉4期は β 2群5類の有無によって将来的に

細別できる可能性がある。

(2) 中期後葉土器群の時間的な変遷

後葉2 a期から4期にかけての主要な類型で代表される土器群の変遷を系統毎に概観し、各時期の様相に換えたい^(註3)(図76)。

A 圧痕隆帯文系土器^(註4)の変遷

圧痕隆帯文土器の出現は後葉2 b期である。SB5350埋甕や3層出土土器の中に、既に口縁部が直立もしくは外反し、口縁部無文、口唇部内側が肥厚するβ1群1類「基本構成」の圧痕隆帯文土器が見られる。地文は間隔を空けて横に回転された縄文で、括れ部以下に縄で文様が描かれる場合もある。同時に、尖った隆帯上に鎖状の圧痕が押捺される3群2類や、胴部に圧痕隆帯文土器と類似した隆帯が垂下するもの(図版324-29)も共伴する。これらの地文には横方向の波状条線が多用される。後葉3 a期になると、β1群1類でも垂下隆帯が括れ部を越えて下まで伸びる例が増加する。また、「基本構成」でありながら隆帯上に圧痕が押捺されない例(SB5332-8)が見られる。「基本構成」で、地文が横方向の波状条線のものも継承される。後葉3 b期になると口縁部が内湾する2群1類・2類や、胴部でかく括れる3群が出現し、1群が減少する。1群は口縁部まで縄文が施文されるが、2群1類は口縁部に縄文が施文されるものとそうでないものが存在する。胴部のかかる括れは「基本構成」をとるSB5346-2でも見られるが、本土器は底部まで残存している数少ない例であるため、本来2群に分類してしまっているものの中にこのような器形のものが含まれる可能性がある。縄は口縁部から括れ部まで間隔を空けて横方向に回転され、それ以下は縦方向に密接して施文されている。これに対しSB5345-1は口唇部から胴部にかけて扁平台形の隆帯がC字状に添付され、この時期以降に流行する下巻きの渦巻の先駆的な例となる。該期には沈線地文の2群4類や明確な波状口縁の4群も増加する。前者はSB5345-65に代表されるが渦巻の巻きが極めて強く、圧痕隆帯が2条垂下する。後者はSB5351-9・14に代表される。この時期は申田新系土器が最も盛行する時期にあたり、圧痕隆帯を有する土器との接触で変容したものとも考えられる。また、SB5328-28はその他に分類したものであるが、器形と口縁部沈線間の摘みだし部に沿って巡る刺突列は、これらとの関係が窺われ、体部文様は大木系・加曾利E系との関係の下にあると推定されよう。後葉3 C期には、渦巻が下巻きになる2群3類が増え、その中には口縁部を鉢巻状に1周する圧痕隆帯文が付加されるものが見られる。地文は部分的に施文されるのみもの(SB5316-3)、胴部のみ施文されるものがある。口縁部の圧痕隆帯と地文の間に勾玉状の沈線が連続的に描かれる(SB5336-6)例もこの段階である。また、口縁部の隆帯上のみ圧痕が付けられる2群5類はこの時期に出現する加曾利E系β4群3類との折衷であろう。後葉4期は前段階から継続する2群3類や2群5類で構成される。前者のSB5348-6はΓ字状の圧痕隆帯文が連続し、縄文は体部上方横回転・下方縦回転であるが、地文間に帯状の間隔は認められない。地文間の間隔が無くなる傾向はこの段階に顕著に見られる特徴である。

B 渦巻多連文系土器の変遷

1群 渦巻多連文土器の出現は後葉2 b期で、3 b期まで連続する。分類上1群1類として一括りにしたものには、器形の細部や体部文様の変異が見られる。器形は2 b期～3 a期までは口縁部の張り出しが比較的強いが、時期が下るにつれてくびれが緩いものが増える。体部文様は、2 b期には沈線間の磨消しが殆ど見られず、U字とUの一方の曲線に並行する懸垂文のセットを基調にした文様が、3 a期には多重U字文の間に懸垂文などが組み合う文様が出現し、3 b期にはU字文同士の間が磨り消されることによって連続U字文に類似した構成をとるようになる。地文は縦回転で、単節縄文、複節縄文、無節縄文が認められる。

2群 2群としたものの典型的な例であるSB5313a-44は2b～3a期に位置づけられる。懸垂文が隆帯であるSB5329-11はこれに先行するものであろうか。口縁部突起下に渦巻きを痕跡的に留めるSB5328-45を含めると3b期まで連続することになるが、多くは3a期に限定される短命な類型である。

C 大木系土器の変遷

変容過程 本報告では大木系土器として一括りにしたが、実際は大木式分布圏における大木式土器とほぼ同一步調で変化する本来の「大木系土器」と、大木9a式土器が大木9b式に変化した後まで前段階の様相を残し、本地域独自の折衷変容を遂げている「大木系土器取り残され型」とでもいうべきものに分けられる。加曾利E系に含めた「胴部隆帯文土器」はこの「取り残され型」がさらに変容したものである。

大木9a式の変容 大木系土器の出現は後葉2a期であるが、組成が明確になるのは2b期からである。2b期には頸部に無文帯を持つ1群1類、ヒレ状渦巻と摘み出し隆帯の併用による連結曲線蕨手文が胴部から口縁部に展開する2群1類が主体を占める。この時期は大木9a式古相にあたり、東北地方においてもこのような土器が最も盛行する時期にあたる。かなり直接的な情報の伝達が該期の土器群を生成したのであろう^(註5)。

頸部に無文帯を残す1群1類は、後葉3b期まで連続するがごく少数にすぎない。これに対し2群1類は3c期まで連続し、特に3b期にあっては本遺跡での主体を占めるまでに増加する。ただし3a期以降ヒレ状隆帯は低くなり、文様も区画曲線蕨手文に変化する。さて、3b期が大木9a式新相に並行し、3c期が大木9b式に並行するとすれば、屋代遺跡群出土土器中で本来の大木式土器に近似するものは、3a期が胴部に互い違いの区画が連続するSB9001-11、3b期が上下2段に渡る区画文を有するSB5328-27やステッキ状の区画を有するSB5328-26であろう。このような中での連続的な2群1類の存在は、度重なる本来の大木式土器圏からの新情報を受け入れる傍らで、後葉2b期の土器群を頑なに守り続け、独自の型式に昇華させた屋代遺跡群の人々の志向を反映するものと解釈されよう。後葉3a期～3b期的な特徴をもつ2群1類土器は屋代遺跡群以外の千曲川流域の複数の遺跡でも散発的に出土し、特に千曲川の支流の大門川右岸段丘上に立地する長門町大仁反遺跡では、良好な資料が出土している(斎藤他1987)。今回屋代遺跡群出土資料から、これらの土器が確実な大木9a式の変容過程の中で捉えられたことは、今後これらの遺跡と屋代遺跡群の関係を考える上でも重要である。

壺形土器 大木8b式古段階では、口縁部が外反し頸部で強く括れ、口縁部が無文の一群が常に組成するが、これが大木8b式新段階にかけて壺形土器へと変化する。その結果大木9a古相では長根貝塚第Vトレンチ出土土器や山前遺跡遺物包含層出土土器を典型例とする壺形土器が生成される。SB5353-1はこれらに類似する点からαに含めて2b期に位置づけ、SB5343-38をこの延長線で考えた。また、この他の壺形土器のうちA-I 1・A-II 1は加曾利E系に含めたが、大木8b～9式土器の中にも頸部文様帯を持ち、体部に渦巻文が描かれる両耳壺が存在するため、SB5328-40などはこのような系譜も考える必要がある。両耳壺の体部文様に多い区画蕨手懸垂文も、大木系の壺形土器との関連を予想させる。SQ5537-21は器形や文様構成からは曾利・唐草文系土器との関連が、文様表出技法的には「胴部隆帯文土器」との関連が窺えるが、胴部の2本1対の隆帯による長尾渦巻文とそこから垂下する隆帯の構成から便宜的に大木系土器に加えた。SQ5337の中では異質である。

D 加曾利E系土器の変遷

1群 口縁部文様帯を有する1群土器は、後葉2a期に口縁部文様帯の隆帯が極めて高い1群1類、2b期に隆帯内に沈線文が陰刻される1群2類、3a期～3b期に部分的に沈線が組み合う1群3類を経て、3c期には沈線による形骸化した区画のみの1群4類へと変遷している。特にSB5352-1は胴部の沈線間の磨り消しも未発達であることから2a期に位置づけたが、下る可能性も否めない。

2群・3群 2群・3群ともに土器は後葉3a期～4期まで連続する。沈線間が磨り消される波状文土器から「連結U字文入り組み型」を経て3c期には「連結U字文対向型」が成立する。3c期はその有無によって2分される可能性もある。3c～4期の中で「連結U字文」を有する土器が波状口縁化し、また文様ではU字間に楕円が入ったり、U字部分が屈曲するなどの変化が見られる。2群1類とした「胴部隆帯文」土器も3c期に出現する。大木系の2群土器の最終段階にあたる3c期には、南東北の大木10式に類似するSB5344-1が埋甕として現れるが、「胴部隆帯文土器」はこのような変容の中で初現期を迎える。隆帯は1本のもの、間隔の狭いもの、広いものが見られる。括れ部を有する器形で隆帯が口縁部を巡り逆U字状に垂下する2群3類は、垂下する隆帯が1条のもの(図版283-52)から2条で間隔が広いものへと変遷し、後者は3c期にあたる。

4群 沈線区画を有する2類は3c期、微隆起線区画が見られる3類は3c期～4期で認められる。

壺形土器 壺形土器のうち頸部に楕円区画を有する7群1類は3b期～3c期、 π 字状の微隆起線区画を有する7群2類は3c期～4期にかけて見られる。また7群3類のうち胴部逆U字状区画のものは3b～3c期、隆帯で渦巻文などが描かれるものは3c期である。沈線による連結U地文や充填渦巻文(7群4類)、地文のみのもの(7群5類)は後葉4期に下る。一方、赤彩壺形土器は2b期に出現する。

E 曾利・唐草文系土器の変遷

2a期には唐草文系II段階の深鉢、それも口縁部に渦巻文もしくは溝をもつ類型のみ見られる。後葉2b期には唐草文系II段階の4群3類や佐久系土器、曾利III式系土器が該当する。口縁部に渦巻文が添付され、胴部のU字状隆帯内に並行沈線地文が充填される5群1類は、3a期にあたり、真田町四日市遺跡(宇賀神1990)などに類例が認められる。4群の口縁部に隆帯が一周し、隆帯もしくは沈線が垂下する土器のうち、頸部に隆帯渦巻文が添付されるものは3b期に、懸垂文のみのものは3c～4期にあたる。後者の地文の多くは短沈線であるが、ほぼ同様の構成で地文が縄文に置き換わったものが加曾利E系の4群3類である。同様に4期には「連続U字文対向型」の地文として短沈線が充填されるものも見られる。

F 串田新系土器の変遷

遺構出土の串田新系で最古に属するものは、後葉2b期～3a期にかけて認められるSB5329-8であるが、口唇部の屈曲状況が本来の串田新系と類似するのみで変容を遂げている。同様に3b期にあたるSB5351-13も口唇部の突起形状が類似するものの、破片であるため詳細は不明である。また3b～3c期にあたるST5101-6は上越地方で変容した串田新式と推測された。これに対し、確実な串田新式の初現はSB5343出土土器との接合により後葉3c期に比定されたSF5176-3を待つことになる。しかしながら、変容した土器の存在は、より北陸的な串田新式が後葉2b期から存在した可能性を示す。そのような中で、遺物包含層でSF5176-3と酷似する⑤a区M-3が、後葉2b期に遡る可能性がある有孔頸付土器(⑤a区M-2)と共伴した事実は、この土器がより古く位置付けられる可能性を示唆している。

G その他の器種の変遷

口縁部から底部まで残存している浅鉢(注口の可能性もあり)であるSQ5549-1と、口縁部まで縄文が施文されている深鉢SB5340-9(注口の可能性もあり)は4期に位置づけられる。また、確実なジョッキ形土器は、3a期に波状文のものが、3b期に区画蕨手懸垂文のものが位置づけられる。釣手付き深鉢は3c期にあたるが、釣手のみは後葉3a期から継続する。ミニチュア土器や漆附着土器も3a期から4期へ連続する。

(3) 系統別出現比率とその課題

系統比率 以上各系統の土器について変遷の概要を述べてきたが、実際にはどのような比率で作られてい

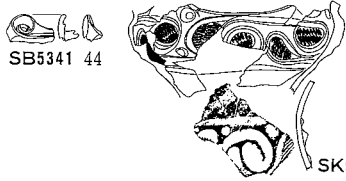
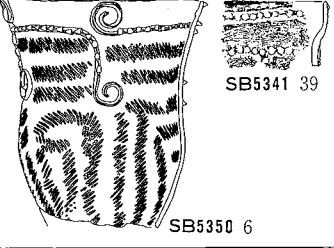
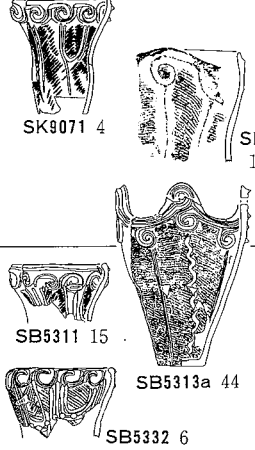
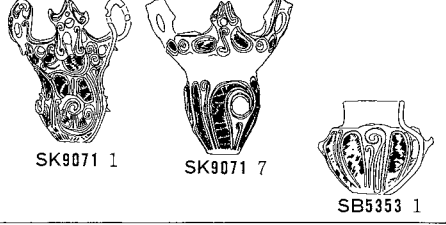
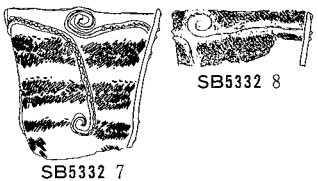
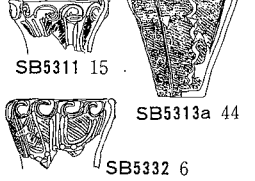
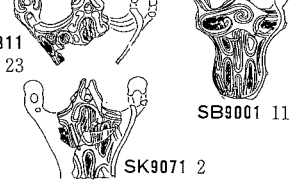
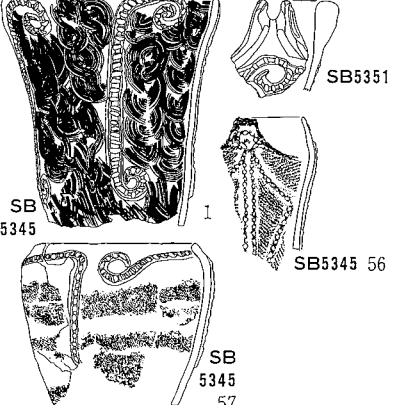
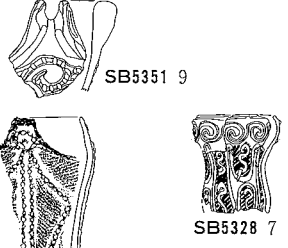
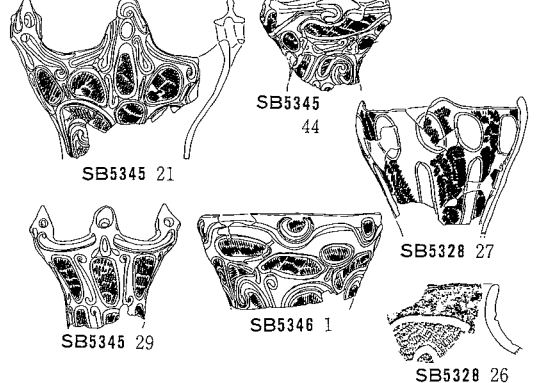
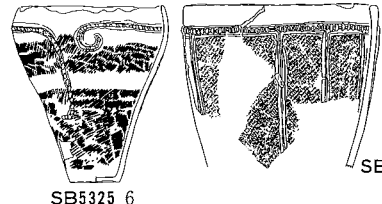
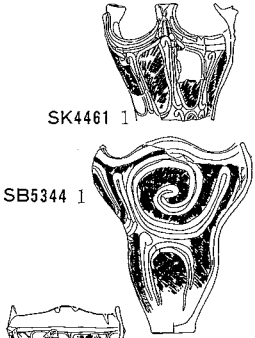
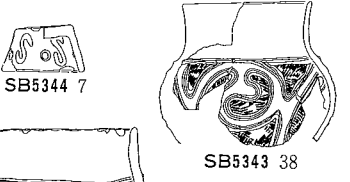
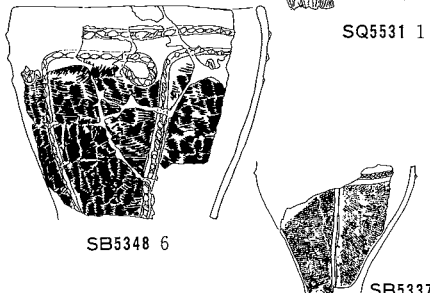

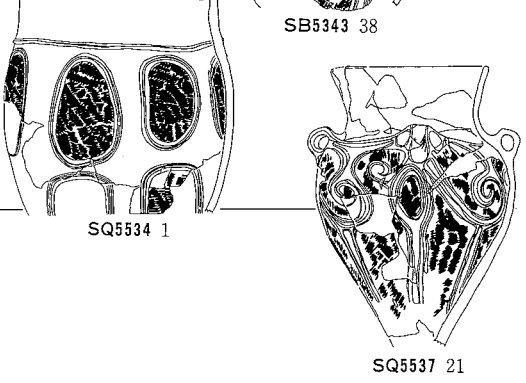
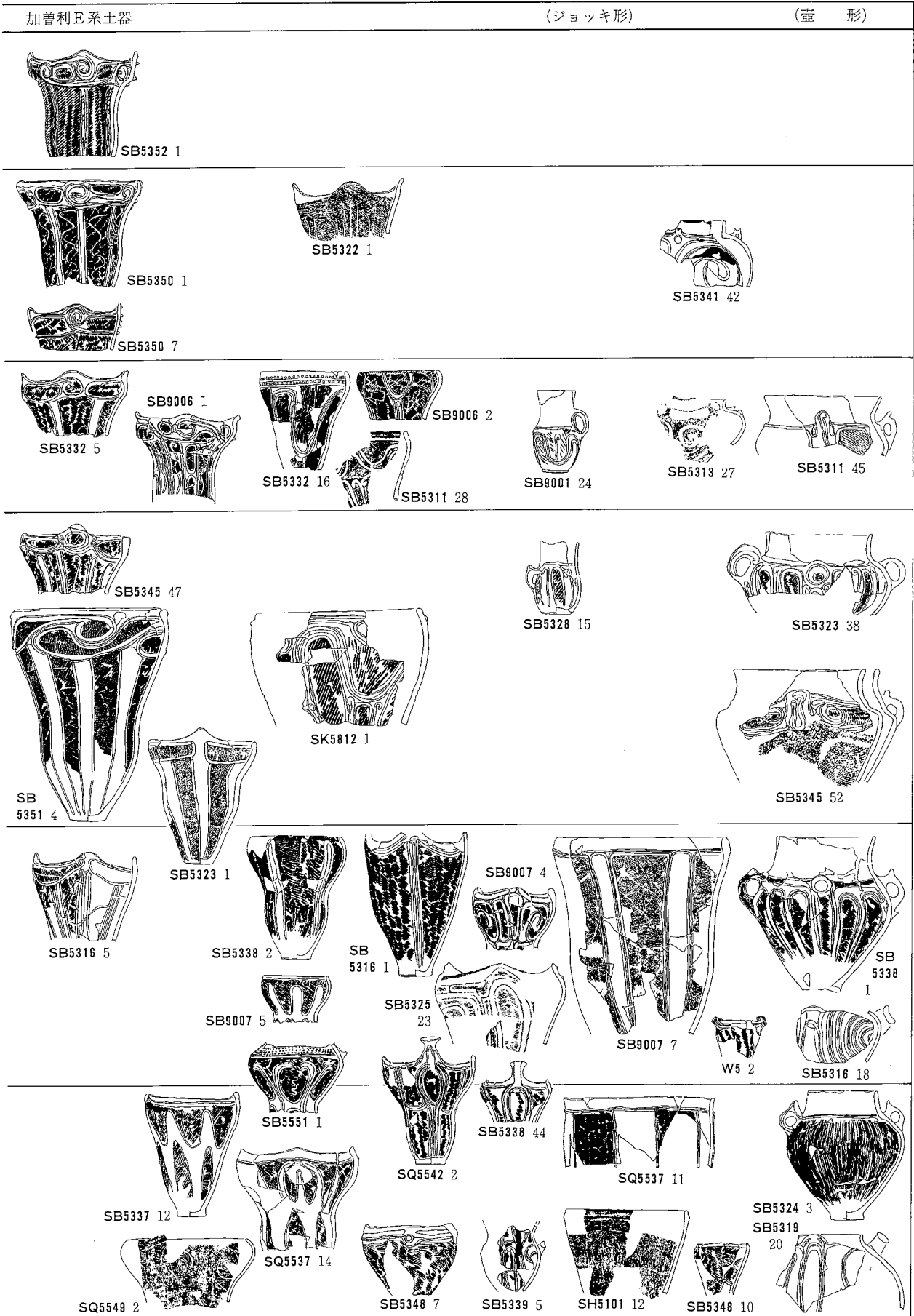
	圧痕隆帯文系土器	渦巻多連文系土器	大木系土器
後葉 2a 期			 SB5341 44 SK9045 1
後葉 2b 期	 SB5350 6 SB5341 39	 SK9071 4 SB5329 11 SB5313a 44 SB5332 6	 SK9071 1 SK9071 7 SB5353 1
後葉 3a 期	 SB5332 7 SB5332 8	 SB5311 15 SB5313a 44 SB5332 6	 SB5311 23 SB9001 11 SK9071 2
後葉 3b 期	 SB5345 1 SB5345 56 SB5345 57	 SB5351 9 SB5328 7	 SB5345 21 SB5345 44 SB5345 29 SB5346 1 SB5328 27 SB5328 26
後葉 3c 期	 SB5325 6 SB5343 23	 SK4461 1 SB5344 1	 SB5344 7 SB5343 38
後葉 4 期	 SB5348 6 SB5337 13	 SQ5531 1 SB5325 19	 SQ5534 1 SQ5537 21

図76-(1) 中期後葉の土器編年図



	曾利・唐草文系土器	串田新系土器	浅鉢・その他	ミニチュア土器	漆附着土器
後葉 2a 期	 SQ4803a 1 SQ4803b 1	 SQ7002 1			
後葉 2b 期	 SB5341 14 SB9003 18	 SK9071 11 SB9071 11			
後葉 3a 期	 SK9071 12	 SB5329 8		 SB5313 28 SB5313 31	
後葉 3b 期	 SB5345 67 SB5351 26	 SB5351 22 SB5351 13	 SB5328 28 SB5351 24	 SK9066 1 SK5773 1	
後葉 3c 期	 SB5343 40 SB5343 39	 SF5176 3 M15 3	 ST5101 6 ST5101 4	 ST5114 1 SB5338 4	
後葉 4 期	 SB5342 8 SQ5529 1	 SQ5549 1 SB5340 9	 SB5340 42 SB5324 15	 SB5324 9 SB5337 17	 SB5340 40 SB5324 10

図76-(2) 中期後葉の土器編年図

※ただしM15 3は2b期に遡る可能性あり

たかが最大の焦点になろう。千曲川水系では既に中野市栗林遺跡で系統別比率の算出が行われ、一定の成果をあげている（中島1994）。屋代遺跡群でも接合時に全遺構の土器を系統毎に記録したが、この時期、大木系と加曾利E系の口縁部破片がかなり類似することや、体部小片の帰属がカウント時に筆者の中で未消化であったため、今回は予察的に、各時期を代表する資料として、SB5350・5332・5328・5345・5343・5339の出土全土器の系統別比率のみを提示した（図77）。今後「不明」をいかに減少させていくかが本来の組成を考えて行く上での鍵となるだろう。

廃棄場所の偏り さらに全体の検討が進んだ整理の終盤になって同時期と推測される住居跡の中でも系統別比率に差異が認められることが解ってきた。炉に敷かれる土器に明らかな選択が認められたように土器の廃棄場所にも何らかの規制が存在した可能性が否めない。系統別比率の算出にはこのような点を考慮に入れ、住居全体や、包含層も含めた遺跡全体などのさらに大きな単位で行うことが望ましいだろう。

比率の概観 接合時の感触では後葉2a期は唐草文系土器のみ、後葉2b期は大木系・加曾利E系・圧痕隆帯文系が相半ばし、後葉3a期は加曾利E系・圧痕隆帯文が多く、後葉3b期になると大木系が増加し、それ以降は加曾利E系が大半を占めるようになるかと推測される。仮にこのような傾向があるとすれば、それは住居跡の埋甕の系統にそのまま反映されていることになろう。

系統別出現状態の背景 系統別出現比率の背景はいったい何であろうか。このような疑問に答えるためのより直接的な手段は土器の胎土の観察である。縄文土器の場合、大型の混和材が多量に混和される場合が多く、今後これらの偏光顕微鏡観察結果を示していきたい。

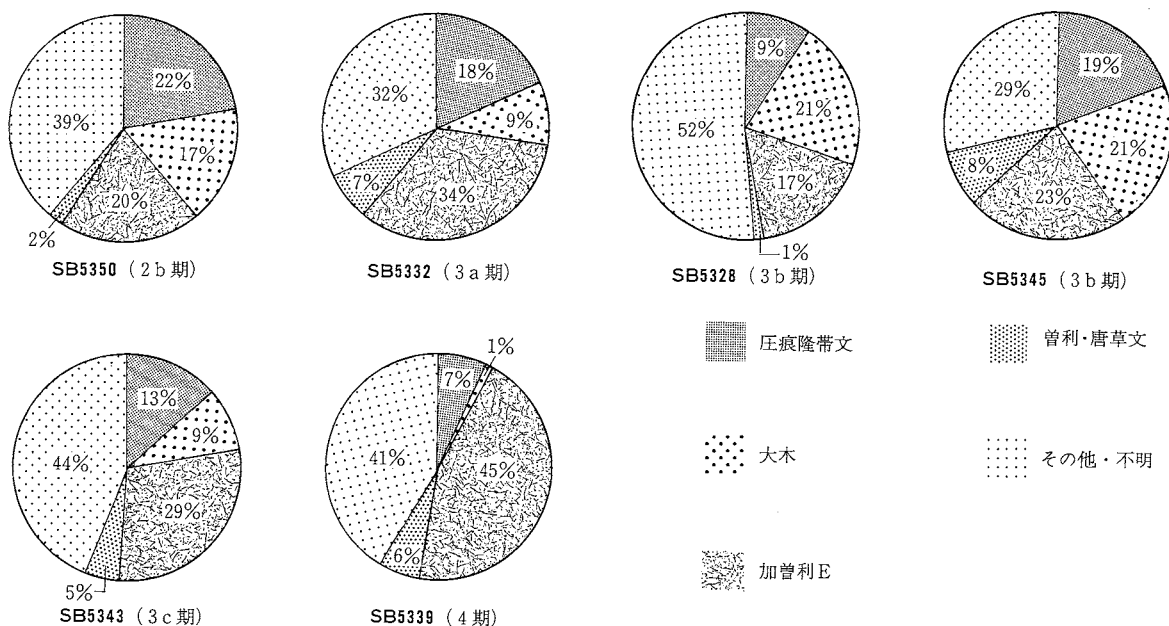


図77 中期後葉土器の系統別比率

(4) 土器に残った痕跡—土器の使用と廃棄方法—

土器に残った属性を「製作」、「使用」、「廃棄」の諸過程に分解した場合、屋代遺跡群では「使用」時の属性として赤彩・漆・焦げ・煤・炭化物の付着などが見られ、「廃棄」時の属性として強力な「被熱痕」や「切断痕」が見られた。ここでは特に「切断痕」を取り上げる。

埋甕の切断 切断が明確であるのは埋甕である。第5章で述べたように胴部上半や下半を故意に打ち欠くほか、頸部（SB5351-4）や胴部下半の一部を楕円形に穿孔する例（SB5316-6・SB5319-1・SB5338-2）や底部のみを切断する例も見られる。特に前者は底部に紐状の植物遺体が敷かれていたため、この点も含めて埋甕に係わる、機能時の何らかの祭祀的行為が予想される。

土器の切断 一方、埋甕以外でも切断の可能性がある。把手を有する土器の多くは大木系に属するが、把手のみが本体と離れて出土する例が極めて多い。それも比較的折れやすい透かし部分周辺ではなく、本体に連結する部分より若干下で割れている。特にSB9071-7は把手2つのみが欠損しており、その1つは50m離れたSB5313bの埋土中に廃棄されていた(図72)。反対に胴部が残存している土器で把手のみが欠落している例も多い。SB5351-1は胴部下半が切断されている他は把手のみが4つとも切断されており、切断部は摩耗していて埋設前に切断された可能性が高い。このような点から、把手が付いている土器の器面を観察したところ、把手下に縦・横方向に数条、鋭い刃器による傷が発見され、把手切断を目的としたためらい傷と推定される。このような点から、把手を故意に切断する行為が存在し、さらにそこには土器の使用停止に係わる何らかの意味があったと推測される。同様に底部のみが切断された土器に、SK9071-1・7、SB9001-11など、大木系土器が見られ、やはり同様な目的が考えられる。

(5) おわりに

1400箱の土器群の整理を考えた場合、せめて1年半程度は接合・復元などの基礎整理期間とし、全土器を見切ったところで、2年目の後半にそれらから必要なものを抽出し、類型や系統の検討、出土量の遺構別・系統別比率の抽出などができることが望ましかっただろう。今回は全部見切ることすらできないうちに時間切れとなった都合上、本来の考察的な部分は全て予察に留めざるを得なくなった。しかしながら、土器群の系統毎に、使用から廃棄まで何らかの使い分けが見られ、当時の人々が特別な意識を持って接していたことは、様々な側面から垣間見ることができた。今後、屋代遺跡群の基礎台帳を基にこれらのトピック毎の検討成果を順次公表し、今回行い得なかった千曲川流域の周辺遺跡との比較検討を含めて考察を進めていく所存である。

引用・参考文献

- 宇賀神 恵 1990 『四日市遺跡』真田町教育委員会
 斎藤幸恵他 1987 『大仁反遺跡』長門町教育委員会
 谷井 彪・細田 勝 1997 「水窪遺跡の研究」『財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第13号
 中島庄一 1994 「第V章第3節 縄文中期後葉から後期初頭の土器群」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19 栗林遺跡・七瀬遺跡』
 古城 泰 1998 「型式学的方法の再検討」『考古学研究』第44巻第4号
 三上徹也 1988 「唐草文系土器様式」『縄文土器大観』3
 綿田弘実 1999 「千曲川水系における縄文中期末葉土器群」『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論集—』

註

- 1 土器胎土の観察によって1回の製作を特定する方法も模索されるべきであろう。
- 2 ここでの「層」は現場で土の違いによって認識された本来の層と、「相当層」の両者を含み(第5章2・3節参照)、図73と表105には相当層も含めて「層」として表記している。
- 3 概略的なまとめは『総論編』第4章に記述した。
- 4 設定者の綿田弘実氏には土器全般に係わる多大なご教示をいただいている。1999年末に発表された「千曲川水系における縄文中期末葉土器群」では圧痕隆帯文土器を地域別に集成し、その出現と変遷を明らかにされたが、筆者の力不足と時間的な制約により本書に十分に反映させることができなかった。今後の考察に生かしていきたい。
- 5 このような土器は信濃川中流域の津南町や十日町市でも少数認められるが、寺崎裕助氏のご教示によると最近再整理が行われている新潟県上越市山屋敷遺跡では双翼状突起をもつ大木9a式が圧痕隆帯文土器を伴って多数出土しているという。情報の伝達ルートについてはこの報告を待って論ずるべきかとも考える。

3 縄文中期土器の胎土

(1) はじめに

胎土分析の目的 1・2で述べてきたように屋代遺跡群出土土器のなかにはいくつかの「系統」がある。これらの「系統」差の生じた背景は、①集落外のどこかからの土器の搬入、②集落外からの製作者の移動、③集落内の作り分け、などが考えられる。この問題に迫るための作業手順としてはまず①から着手する必要がある。「搬入品」を特定する手段としては土器の胎土分析が掲げられるがそこには以下のような問題がある。

胎土分析の問題 窯が特定できない土器の胎土分析を行う場合、土器編年網と同様に地域毎の「在地胎土」を時間軸に沿って表示する、「土器胎土網」の通時的・広域的整備が欠かせない。「土器胎土網」の整備が成されない地域で極少数の土器の胎土分析を行い、搬入品を特定するためには、その地域にあり得ない特殊な鉱物を見つけるか、表層のみを示す地質図の何千倍も深く地表下の状況を知り尽くさなければならない。このような前提のないデータは「在地製作」か「搬入品」かが曖昧なままとなろう。

「在地胎土」の確認 さて、「搬入品」の決め手は胎土の異質性である。それでは「異質」とは何か。胎土の異質が異質と認識できるのは、それがどのような側面から見ても「同質」の枠から外れることを証明できた時である。すなわち、Kという遺跡のある胎土母集団の中で一面異質なものをDを「搬入品」に昇華させるためには、それが在地内胎土の様々な変異の幅を越え、「在地」に属さないことを証明しなければならない。そのためには、一見回り道のように見えても、まず「在地胎土」こそを様々な角度から調査し、「在地」としてより確実性の高いものにする必要がある。そこで以下の2つが必要と考える。

あ)、歴史的人間活動のうち粘土採取作業がある程度等質であるという前提の下に、一遺跡において通時的な煮沸形態土器を段階的に抽出し、その主要となる胎土の変遷を把握する。これは一遺跡における「在地胎土」エリアのより重層的な把握へと通じる。

い)、Dと土器型式の細分時期が一致する遺跡を、Kと地質的に同質なエリア内でいくつかピックアップして胎土分析を行う。K遺跡で在地胎土としたものや異質胎土としたものが他の遺跡でどのような割合で、どのような型式の土器に現れてくるかを見極める。これはK遺跡の在地胎土がどのくらい「在地」として保証されうるのか、逆にK遺跡での「異質」な胎土が別の遺跡では「在地」胎土の一角を形成していないか確認することになる。

分析資料 屋代遺跡群は縄文中期前葉から中・近世までの集落が重層し、さらに各報告書では土器群の時間的な変遷が明確に確認されている点で、あ)の検討対象としては最高の条件をもつ。そこで、あ)を目的として縄文中期前葉土器59点、縄文中期後葉試料108点、縄文後期土器4点、縄文晩期土器3点、弥生土器19点、古墳時代試料54点、古代・中世土師器51点の、合計298点のプレパラートを作成してきた。時間的な制約から、今回はこれらのうち代表的な、中期前葉土器2点(図78-1・2)、後葉土器26点(図79)の偏光顕微鏡観察結果と中期前葉土器59点(図78)・中葉後葉試料83点(表36)、縄文後晩期土器7点、古墳時代試料1点、古代・中世土師器50点の建石氏による蛍光X線分析結果(表106)のみを掲載した。全体の成果と総括的考察は、今後数次にわたり『研究紀要』などにおいて追加発表していくことにする。発表が終了した時点で「在地胎土」と「搬入品」の問題を再論する予定である。

(2) 混和材の観察による在地胎土^(註1)

土器の鉱物組成 中期後葉資料の検鏡を行った結果、最も典型的な鉱物・岩石組成は、石英、斜長石、普通輝石、紫蘇輝石、角閃石、スコリヤ、軽石、黒曜石、輝石安山岩、ガラス質安山岩、流紋岩、凝灰岩、

シルト、砂岩、チャート、(火山灰)などを含むグループで、燐灰石や少量の黒雲母が含まれるものもある。特に石英は融食形が多く、殆ど全てが破片状である。斜長石は累帯構造が発達し、石英とともに火山岩起源が推測される。土器型式は大木系、加曽利E系ともに含まれる。しかしながらこれらは、さらに①鉱物が大きいものから非常に小さいものまで混在するか、比較的大きいものに限られるか、②石英の多寡、③絹雲母が生じた斜長石(265)、カリ長石(281)など深成岩起源が推測される鉱物の有無、を基準に細分し得る。今後のこのような視点から、細分グループを設定し、再度土器型式との対応関係を考えていきたい。さらに、③に含まれる262には石英片岩が含まれており、搬入品の可能性が考えられる。

一方圧痕隆帯文土器の胎土は肉眼観察の結果大形の白色岩石が目立っていたが、岩石・鉱物組成は大枠で上記のグループに含まれる。特に大形の岩片は、裾花(流紋岩質)水冷破碎岩^(註2)起源の石英や斜長石と推測され、水冷破碎によって割れた様子が明確に観察される(巻頭図版8)。上記の大木系、加曽利E系土器には水冷破碎の様相が明確なものは圧痕隆帯文土器の場合よりも少ないが、石英に見られる破片状形態の成因が水冷破碎によると考え、さらに他の岩石・鉱物組成が似通っている点に注目すると、これらも裾花水冷破碎岩に起源が辿れる可能性が高い。ただ、同グループの中でも、①で提起したように粒度が比較的揃っているものが若干あり、これが篩い分けによるものか、火山灰など別の起源を考えるべきなのかを今後検討していく必要がある。

中期前葉の資料では、特に344で火山岩起源の石英と非常に大形で多量の黒雲母が共存し、同様に流紋岩起源の可能性があるが、雲母の成因は特に注目される。

在地混和材の獲得 在地胎土の一部は裾花水冷破碎岩を粘土に混ぜた可能性が推測された。これらは千曲川の左岸(屋代遺跡群の対岸)の盆地周縁部に沿って上山田町から豊野町にかけて分布する。特に圧痕隆帯文土器に関しては石英がバラバラに壊れていないこと、軽石が発泡した形態を止めることなどから、露頭で現地採取した可能性が高い。ただし、裾花水冷破碎岩に含まれない角閃石安山岩や輝石安山岩の細粒は、千曲川に流れ下ったものを河川沿いで採取したと推測される。一方、後葉4期の周礫住居であるSB5324の床面から直径20cmほどの岩塊が出土し、観察の結果、黒雲母を含む珪化花崗岩と推定された。今回検鏡した範囲内には直接この岩片が含有されているものは見あたらなかったが、混和材としてストックされていた可能性もあろう。このように土器の混和材には、集落対岸や千曲川流域の素材を巧妙にブレンドしながら用いていた様子が看取される。今後これらの傾向性をより数量的な形で明示していきたい。

(3) 粘土の蛍光X線分析による在地胎土と異質胎土

分析の視点と目的 土器胎土の原料が、マトリクスである「粘土」部分(以下、粘土とよぶ)と、河川砂などの「混和材」部分(以下、混和材とよぶ)の混合土(以下、素地土とよぶ)であると仮定する。本研究は、胎土の地球化学的特徴を根拠に、土器や情報の移動に関する基礎的情報を蓄積することを主な目的とするが、特に粘土の由来を検討することで、この課題と取り組むこととする。これは筆者が、縄文土器製作技術の多様性、複雑性を認める一方で、粘土と混和材では、粘土の方が、より製作地付近から採取される可能性が高いと考えていることを前提としている。粘土の由来を検討することが、製作地を検討するうえでも有効であると考えたい。しかし、粘土と混和材を明瞭に識別、分離することは困難である。ここでは、肉眼で確認できる大型粒子(混和材に由来する可能性が高い)を分析の対象から極力除外することで問題に対応した。

分析の原理と方法 本研究では、エネルギー分散型蛍光X線分析法(EDXRF)を採用、実施した。

分析装置はセイコー電子工業製、エネルギー分散型SEA-2001を用いた。分析条件は次の通りである。X線発生部のターゲット…Rh管球、電圧…15kV、電流…80~170 μ A(試料ごとに変更)、照射径…3mm、

検出器…Si (Li) 半導体検出器、室内雰囲気…真空、測定時間…300秒。

半定量分析は、装置装備のファンダメンタルパラメーター法によった（標準試料なし）。試料を超音波洗浄し、乾燥させた後、分析に供した。分析対象とした元素はSi、Ti、Al、Fe、Mg、Ca、K、Mnの8元素である。土器胎土の主成分元素組成は、地球化学の慣例にしたがい酸化物として、重量濃度の比（8元素の総和を100とする）で表記した。本研究では標準試料を用いなかったため、定量性には優れないが、各試料間の比較や傾向を知るというレベルでは影響ないものと判断した。また、Naについては本条件での定量が困難なため測定しなかった。

胎土の不均一性の問題 過去の筆者らの研究と同様、本研究でも同一個体内の胎土の不均一性を考慮し、各個体ごとに測定位置を変えて5回ずつ測定をおこなった。分析に供した194個体をすべて5回ずつ分析した後、個体ごとの結果のまとまりをみるために、970回（5回×194個体）の測定結果をクラスター分析（最長距離法）に供した。この結果、5回の測定結果が同一のクラスターを形成した個体については、5回の平均値を計算し、これをその個体の主成分元素組成とした。5回の測定結果がばらつく個体については、さらに6回目、7回目の分析をおこない、5つの測定結果が同一のクラスターを形成した段階で5回の平均値を計算し、これをその個体の主成分元素組成とした。本研究では8回以上の測定が必要だった個体はなかった。クラスター分析には、SPSS社製多変量解析ソフト SPSS 7.5.1 J を使用した。

分析結果 表106に蛍光X線分析の結果を示した。

分析結果には様々な興味深い情報が含まれているものと考えますが、時間や紙面の制約からここで考察をおこなうことはかなわなかった。今後、型式学的情報や水沢氏による混和材の分析との相関などを検討したうえで、本研究の成果（考察）を適宜、公表していきたい。

参考文献

- 黒田吉益・諏訪兼位 1987『偏光顕微鏡と岩石鉱物』第2版 共立出版株式会社
植村武・山田哲雄 1988 『日本の地質4 中部地方I』共立出版株式会社

註

1. 本稿をまとめるにあたり河内晋平氏に多大なご教示をいただいた。
2. 海底に噴き出した溶岩が、多量の海水によって急冷されて、一見すると凝灰岩状の細粉となったもの。組成粒子（結晶）は破片状であり、爆砕されたことを示す。bubble wall 型の火山ガラスを欠く。構成粒子、鉱物種は、マグマの組成により異なるが、裾花流紋岩の場合は、石英、サニディン、斜長石、黒雲母のほか、少量の普通輝石、紫蘇輝石、角閃石などと、軽石、少量の黒曜石（質の悪いピッチストーンを含む）など。

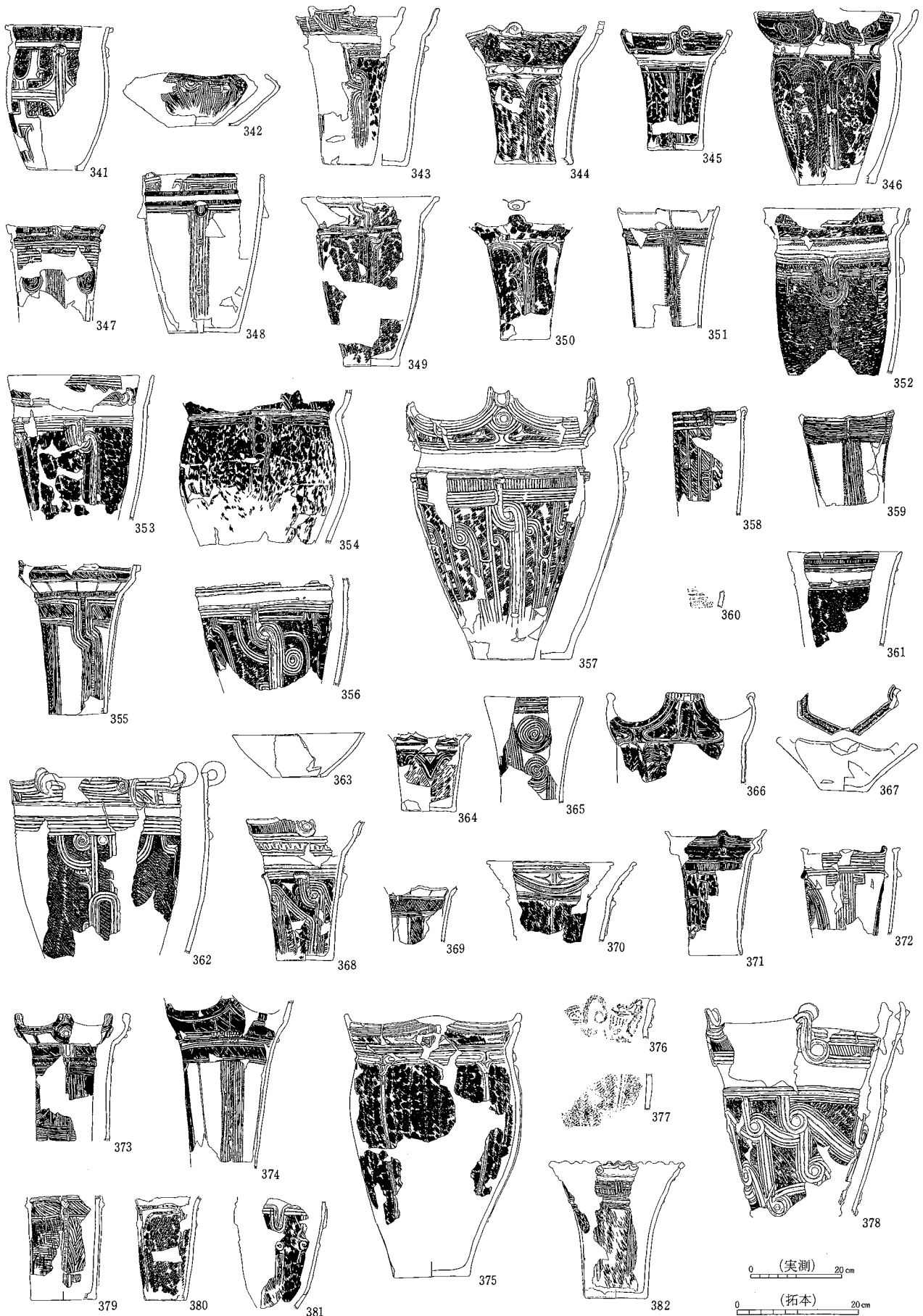


图78-(1) 中期前葉胎土分析試料

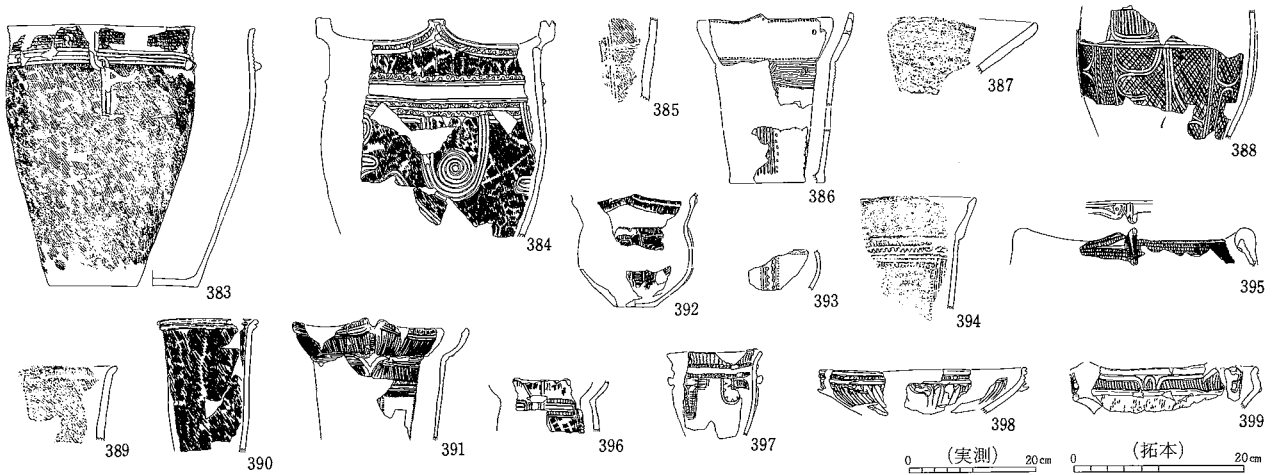


図78-(2) 中期前葉胎土分析試料



図79 中期後葉胎土分析試料

表106-(1) 蛍光X線分析結果 (重量%)

胎土分析 No.	図版番 号	遺構名	図版掲載 番号	時期等	種類	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
201	285	SB6027	5	7c前半~ 9c後半	土器片	1.3	19.5	70.6	1.4	1.3	0.5	0.1	5.3
202	294	SB6119	4	7c前半~ 9c後半	土器片	1.1	21.9	66.1	2.0	1.7	0.7	0.1	6.5
203	294	SB6119	3	7c前半~ 9c後半	土器片	1.2	22.6	66.0	1.1	1.5	0.8	0.1	6.8
204	283	SB5177	6	7c前半~ 9c後半	土器片	0.9	21.9	67.4	1.6	1.1	0.7	0.1	6.3
205	325	SD7056	6	7c前半~ 9c後半	土器片	1.3	20.6	71.0	1.1	1.0	0.7	0.1	4.8
206	281	SB5109	10	7c前半~ 9c後半	土器片	0.5	21.7	69.4	1.2	0.7	0.4	0	6.1
207	270	SB4521	3	7c前半~ 9c後半	土器片	1.3	21.9	68.2	1.4	1.7	0.5	0	5.2
208	287	SB6053	7	7c前半~ 9c後半	土器片	1.4	20.5	71.5	1.4	2.1	0	0	3.1
209	278	SB5079	5	7c前半~ 9c後半	土器片	1.0	21.1	67.5	2.3	1.5	0.5	0.1	6.0
210	285	SB6036	4	7c前半~ 9c後半	土器片	1.0	20.3	67.4	1.8	2.4	0.5	0.2	6.3
211	291	SB6099	7	7c前半~ 9c後半	土器片	2.0	21.4	69.4	1.2	0.7	0.4	0	4.7
212	292	SB6104	12	7c前半~ 9c後半	土器片	2.1	21.4	69.1	1.4	1.0	0.7	0	4.3
213	292	SB6104	13	7c前半~ 9c後半	土器片	2.4	22.9	66.2	1.9	1.1	0.5	0	5.1
214	276	SB5037	10	7c前半~ 9c後半	土器片	1.2	22.2	66.6	2.7	0.8	0.8	0	5.7
215	232	SB9011	5	7c前半~ 9c後半	土器片	1.8	21.3	66.3	1.4	1.5	1.1	0	6.7
216	232	SB9011	2	7c前半~ 9c後半	土器片	1.7	21.7	65.5	1.2	1.3	1.0	0.2	7.5
217	232	SB9011	4	7c前半~ 9c後半	土器片	2.6	24.1	61.7	1.7	1.1	1.1	0	7.8
218	242	SB9081	8	7c前半~ 9c後半	土器片	1.9	21.5	67.7	1.4	1.0	0.4	0	6.1
219	253	SB73	5	7c前半~ 9c後半	土器片	1.4	22.1	66.6	1.6	0.9	0.7	0	6.7
220	255	SB126	2	7c前半~ 9c後半	土器片	2.8	22.8	65.1	1.2	1.0	0.5	0	6.6
221	233	SB9012	4	7c前半~ 9c後半	土器片	2.0	23.3	64.9	1.1	1.0	1.0	0	6.7
222	276	SB5044	7	7c前半~ 9c後半	土器片	-	-	-	-	-	-	-	-
223	261	SB3034	12	7c前半~ 9c後半	土器片	2.5	22.9	63.4	1.4	1.9	0.9	0	7.0
224	293	SB6118	9	7c前半~ 9c後半	土器片	1.7	21.7	68.1	1.2	0.9	0.7	0	5.6
225	293	SB6118	10	7c前半~ 9c後半	土器片	1.4	22.0	69.5	1.4	0.9	0.8	0	3.9
226	283	SB6002	6	7c前半~ 9c後半	土器片	2.0	23.0	67.7	1.2	0.7	0.7	0	4.6
227	257	SB3013	7	7c前半~ 9c後半	土器片	3.3	20.7	65.0	1.9	1.1	1.0	0	7.1
228	269	SB4514	3	7c前半~ 9c後半	土器片	2.5	21.3	63.6	1.5	1.7	0.9	0.1	8.4
229	293	SB6118	8	7c前半~ 9c後半	土器片	1.5	21.3	67.0	1.5	1.4	1.0	0	6.4
230	250	SB57	5	7c前半~ 9c後半	土器片	2.3	20.7	70.3	1.2	0.3	0.6	0	4.7
231	248	SB52	12	7c前半~ 9c後半	土器片	1.8	22.5	62.7	1.3	0.8	1.7	0.1	9.2
232	249	SB54	20	7c前半~ 9c後半	土器片	0.6	22.7	66.3	1.8	0.9	0.8	0.2	6.6
233	248	SB53	11	7c前半~ 9c後半	土器片	2.0	23.7	62.6	1.4	1.0	1.0	0	8.4
234	246	SB44	11	7c前半~ 9c後半	土器片	-	-	-	-	-	-	-	-
235	264	SB4030	11	7c前半~ 9c後半	土器片	2.4	23.1	64.5	1.6	1.0	0.9	0	6.5
236	116	SB827	14	10c後半~ 11c後半	土器片	1.4	22.0	68.7	1.1	0.8	0.6	0	5.5
237	114	SB810	6	10c後半~ 11c後半	土器片	2.3	23.5	65.7	1.5	1.0	0.6	0.1	5.4
238	118	SB843	13	10c後半~ 11c後半	土器片	-	-	-	-	-	-	-	-
239	113	SB806	24	10c後半~ 11c後半	土器片	2.2	21.2	67.9	1.4	0.4	0.7	0.1	6.1
240	132	SB9054	5	10c後半~ 11c後半	土器片	0.6	20.9	68.4	2.3	1.0	0.7	0.1	6.1

胎土分析 No.	図版番 号	遺構名	図版掲載 番号	時期等	種類	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
241	129	SB9035	9	10c後半～ 11c後半	土器片	1.3	25.2	65.3	1.1	0.9	0.7	0	5.5
242	129	SB9033	5	10c後半～ 11c後半	土器片	2.1	25.3	65.1	1.4	0.6	0.7	0	4.8
243	140	SB3022	11	10c後半～ 11c後半	土器片	1.4	24.2	62.1	0.8	1.1	1.0	0.1	9.4
244	142	SB4004	26	10c後半～ 11c後半	土器片	1.1	29.9	56.9	1.2	1.7	0.9	0	8.3
245	140	SB3022	10	10c後半～ 11c後半	土器片	0.7	23.4	66.0	1.0	1.7	0.7	0.1	6.4
246	133	SB01	24	10c後半～ 11c後半	土器片	1.3	22.7	64.3	1.0	1.7	0.8	0.1	8.1
247	136	SB23	5	10c後半～ 11c後半	土器片	1.1	25.4	62.6	1.0	1.6	0.9	0.1	7.2
248	138	SB105	5	10c後半～ 11c後半	土器片	1.4	30.3	54.8	1.0	2.0	0.9	0.5	9.1
249	—	SB02	—	10c後半～ 11c後半	土器片	0.7	24.0	64.7	1.2	0.7	0.6	0.2	7.9
250	137	SB40	19	10c後半～ 11c後半	土器片	1.0	20.8	67.4	0.8	1.6	0.7	0.1	7.6
251	321	SB5350	1	縄文中期後葉	土器片	1.3	21.5	68.5	1.0	0.9	0.5	0	6.2
252	322	SB5350	7	縄文中期後葉	土器片	1.1	19.5	70.2	1.2	1.0	0.6	0	6.4
253	322	SB5350	6	縄文中期後葉	土器片	0.7	20.7	70.0	1.2	1.2	0.5	0	5.8
254	321	SB5350	2	縄文中期後葉	土器片	1.2	21.0	68.0	0.7	2.6	0.5	0	5.9
255	323	SB5350	23	縄文中期後葉	土器片	1.0	20.7	69.8	0.9	1.0	0.6	0	6.0
256	325	SB5350	39	縄文中期後葉	土器片	1.9	21.4	68.6	1.1	1.2	0.7	0	5.1
257	322	SB5350	8	縄文中期後葉	土器片	1.3	21.5	68.7	0.9	1.3	0.6	0	5.6
258	324	SB5350	31	縄文中期後葉	土器片	2.1	29.7	59.1	1.0	1.3	0.6	0.1	6.2
259	323	SB5350	22	縄文中期後葉	土器片	0.7	20.5	70.1	1.1	1.1	0.5	0	6.0
260	322	SB5350	9	縄文中期後葉	土器片	0.8	22.0	67.1	1.0	1.2	0.6	0	7.2
261	310	SB5345	3	縄文中期後葉	土器片	1.1	20.7	69.1	1.1	1.6	0.6	0	5.9
262	310	SB5345	2	縄文中期後葉	土器片	1.2	21.5	68.5	0.8	0.7	0.6	0	6.6
263	310	SB5345	8	縄文中期後葉	土器片	2.0	21.3	67.9	1.2	1.1	0.5	0	6.0
264	311	SB5345	19	縄文中期後葉	土器片	1.6	20.5	68.0	1.3	1.5	0.5	0.1	6.6
265	310	SB5345	5	縄文中期後葉	土器片	1.3	23.8	64.7	0.9	1.5	0.7	0	7.2
266	310	SB5345	6	縄文中期後葉	土器片	0.8	19.3	70.3	0.7	1.4	0.5	0	6.9
267	311	SB5345	16	縄文中期後葉	土器片	0.9	23.7	64.6	0.6	1.3	0.8	0	8.1
268	311	SB5345	18	縄文中期後葉	土器片	1.9	22.0	66.6	0.8	1.9	0.7	0	5.9
269	314	SB5345	51	縄文中期後葉	土器片	0.8	23.4	63.9	1.1	2.9	0.8	0.1	7.1
270	314	SB5345	49	縄文中期後葉	土器片	2.1	21.5	66.0	0.8	0.9	0.7	0	7.9
271	314	SB5345	44	縄文中期後葉	土器片	1.9	22.0	68.3	0.9	1.4	0.7	0	4.8
272	313	SB5345	38	縄文中期後葉	土器片	2.0	21.5	67.7	0.9	1.1	0.5	0	6.2
273	313	SB5345	35	縄文中期後葉	土器片	1.3	23.4	65.8	0.7	1.1	0.7	0	6.9
274	312	SB5345	24	縄文中期後葉	土器片	1.6	22.0	66.6	1.1	1.3	0.7	0	6.8
275	318	SB5345	79	縄文中期後葉	土器片	1.8	24.4	61.3	0.9	2.8	0.7	0.1	8.1
276	311	SB5345	13	縄文中期後葉	土器片	1.4	22.0	65.8	0.7	1.8	0.7	0	7.6
277	313	SB5345	40	縄文中期後葉	土器片	1.5	19.9	68.9	1.2	1.6	0.6	0	6.2
278	313	SB5345	41	縄文中期後葉	土器片	1.4	24.7	63.9	0.8	1.2	0.6	0	7.4
279	312	SB5345	28	縄文中期後葉	土器片	1.8	21.8	69.6	0.7	1.2	0.5	0	4.4
280	314	SB5345	47	縄文中期後葉	土器片	1.5	23.9	62.5	1.1	1.6	0.7	0.2	8.6
281	315	SB5345	54	縄文中期後葉	土器片	0.8	25.0	61.4	1.0	3.3	0.8	0.1	7.5
282	316	SB5345	65	縄文中期後葉	土器片	1.6	22.9	68.0	0.7	1.3	0.6	0	4.8
283	318	SB5345	77	縄文中期後葉	土器片	2.0	20.8	70.0	1.4	1.0	0.4	0	4.2
284	256	SB5316	1	縄文中期後葉	土器片	1.5	23.6	64.8	0.7	1.7	0.7	0	7.0
285	256	SB5316	3	縄文中期後葉	土器片	1.3	20.3	70.7	1.2	1.1	0.4	0	4.9
286	256	SB5316	5	縄文中期後葉	土器片	2.2	23.8	64.4	0.8	2.3	0.7	0	5.7
287	256	SB5316	6	縄文中期後葉	土器片	1.3	22.7	66.2	1.0	1.9	0.8	0	6.1
288	257	SB5316	7	縄文中期後葉	土器片	1.1	23.8	63.9	0.7	1.8	0.8	0.1	8.0
289	256	SB5316	4	縄文中期後葉	土器片	0.7	19.7	67.4	2.0	1.3	0.7	0	8.2
290	257	SB5316	18	縄文中期後葉	土器片	0.8	22.6	67.9	0.9	1.2	0.8	0	5.8
291	287	SB5337	14	縄文中期後葉	土器片	1.8	19.0	72.2	1.0	1.1	0.5	0	4.3

表106-(2) 蛍光X線分析結果(重量%)

胎土分析 No.	図版番 号	遺構名	図版掲載 番号	時期等	種類	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
292	287	SB5337	13	縄文中期後葉	土器片	2.1	20.6	70.3	0.9	0.9	0.5	0	4.6
293	286	SB5337	12	縄文中期後葉	土器片	1.3	20.4	70.8	1.0	1.0	0.6	0	4.9
294	287	SB5337	15	縄文中期後葉	土器片	1.7	18.1	73.6	1.7	0.9	0.5	0	3.5
295	287	SB5337	16	縄文中期後葉	土器片	1.6	23.1	62.5	2.9	1.3	0.8	0	7.7
296	260	SB5319	4	縄文中期後葉	土器片	1.6	20.7	69.6	1.1	0.9	0.5	0	5.6
297	261	SB5319	13	縄文中期後葉	土器片	2.0	18.9	70.6	1.6	1.5	0.5	0.1	4.9
298	262	SB5319	18	縄文中期後葉	土器片	2.2	19.7	67.1	1.2	2.1	0.7	0	6.9
299	261	SB5319	12	縄文中期後葉	土器片	1.7	23.1	65.4	1.0	1.2	0.6	0.1	6.8
300	262	SB5319	17	縄文中期後葉	土器片	0.8	21.5	68.3	0.8	1.5	0.6	0	6.5
301	288	SB5338	1	縄文中期後葉	土器片	0.8	20.9	68.4	0.8	1.3	0.7	0	7.0
302	288	SB5338	2	縄文中期後葉	土器片	1.7	20.0	70.7	0.9	1.1	0.5	0	5.1
303	333	SB9001	2	縄文中期後葉	土器片	1.3	25.5	65.1	1.0	2.0	0.8	0	4.3
304	354	SK9071	11	縄文中期後葉	土器片	2.2	23.5	66.4	0.8	1.3	0.6	0	5.2
305	354	SK9071	12	縄文中期後葉	土器片	1.8	24.3	66.0	0.5	1.6	0.7	0.1	5.1
306	372	XII-2層5bS11	13	縄文中期後葉	土器片	2.1	25.4	64.0	0.7	1.3	0.7	0	5.8
307	370	XII-2層5aM15	3	縄文中期後葉	土器片	1.7	2.01	69.7	0.8	1.1	0.5	0	5.2
308	370	XII-2層5bN13	3	縄文中期後葉	土器片	—	—	—	—	—	—	—	—
309	365	SQ5537	21	縄文中期後葉	土器片	2.0	21.7	66.9	0.7	1.5	0.6	0.1	6.5
310	344	ST5102	10	縄文中期後葉	土器片	2.3	27.9	61.4	0.4	1.1	0.8	0	6.0
311	372	XII-2層5bS12	17	縄文中期後葉	土器片	1.8	25.0	62.1	1.2	0.7	1.0	0	8.3
312	369	XII-2層5aM15	2	縄文中期後葉	土器片	2.2	23.3	67.3	0.5	1.0	0.9	0	4.9
313	360	SQ4803b	1	縄文中期後葉	土器片	2.0	20.5	70.3	0.9	1.0	0.5	0	4.7
314	333	SB9001	1	縄文中期後葉	土器片	1.7	19.6	70.7	0.4	0.6	0.5	0	6.4
315	325	SB5351	1	縄文中期後葉	土器片	2.0	21.6	68.9	0.9	1.1	0.5	0	5.0
316	326	SB5351	4	縄文中期後葉	土器片	1.1	23.8	65.8	0.7	1.1	0.7	0.1	6.8
317	339	SB9005	1	縄文中期後葉	土器片	1.5	22.2	65.0	0.9	0.6	0.7	0	9.0
318	285	SB5336	1	縄文中期後葉	土器片	1.7	20.8	67.0	1.1	1.3	0.6	0.1	7.5
319	303	SB5343	1	縄文中期後葉	土器片	2.3	21.8	68.1	0.9	0.6	0.9	0	5.3
320	302	SB5342	1	縄文中期後葉	土器片	0.8	22.9	66.8	0.8	1.2	0.6	0	6.9
321	302	SB5342	2	縄文中期後葉	土器片	2.3	20.1	67.2	0.8	1.5	0.5	0.1	7.4
322	302	SB5342	4	縄文中期後葉	土器片	0.9	21.7	67.9	0.9	2.0	0.5	0	6.0
323	255	SB5314	1	縄文中期後葉	土器片	0.9	19.0	71.9	1.9	0.7	0.4	0	5.2
324	—	SB5319	—	縄文中期後葉	焼粘土	1.3	21.0	65.8	1.2	2.3	0.7	0.1	7.7
325	—	SB5351	—	縄文中期後葉	焼粘土	1.1	20.0	65.5	1.6	2.6	0.7	0.1	8.4
326	—	SB5345	—	縄文中期後葉	焼粘土	0.7	18.7	68.2	1.4	2.8	0.6	0.1	7.5
327	—	SB5341	—	縄文中期後葉	焼粘土	0.8	19.4	68.1	1.2	2.8	0.7	0.1	6.9
328	—	SB6048	—	古墳	焼粘土	1.2	21.3	65.3	1.0	2.3	0.7	0.1	8.2
329	—	SB5340	—	縄文中期後葉	石器	1.4	20.0	65.1	1.4	4.5	0.7	0.1	6.8
330	—	SB5343	—	縄文中期後葉	石器	2.5	17.0	73.8	1.4	1.0	0.4	0	3.9
331	292	SB5339	1	縄文中期後葉	土器片	1.4	19.9	70.4	0.8	1.4	0.5	0.3	5.3
332	346	ST5111	1	縄文中期後葉	土器片	—	—	—	—	—	—	—	—
333	292	SB5339	3	縄文中期後葉	土器片	—	—	—	—	—	—	—	—
334	401	XII-1層包含層	12	縄文後期	土器片	0.8	22.2	64.6	1.0	2.1	0.6	0.2	8.5
335	401	SF7005	2	縄文後期	土器片	1.4	22.2	66.9	0.8	1.7	0.6	0.1	6.4
336	402	XII-1層包含層	24	縄文後期	土器片	1.2	23.8	66.5	1.0	1.2	0.8	0	5.3
337	402	XII-1層包含層	23	縄文後期	土器片	1.3	22.6	65.2	0.4	1.3	0.9	0	8.4
338	403	SF1021	7	縄文晩期	土器片	1.0	23.3	64.3	0.7	1.1	1.0	0	8.5
339	406	J地区	100	縄文晩期	土器片	1.1	26.1	57.6	0.9	1.9	0.8	0.1	11.4
340	407	⑤・⑥他	117	縄文晩期	土器片	1.3	26.4	62.1	0.8	1.4	0.8	0	7.2
341	185	SK9113	12	縄文中期前葉	土器片	0.6	18.6	72.7	1.4	1.6	0.3	0	4.8
342	199	SB9015	44	縄文中期前葉	土器片	1.9	25.1	61.0	0.7	1.2	1.5	0	9.7
343	215	SQ7003	235	縄文中期前葉	土器片	1.3	22.9	64.6	0.9	1.5	0.6	0	8.2
344	223	SQ7003	347	縄文中期前葉	土器片	1.3	22.7	64.8	1.3	2.0	0.7	0.1	7.0
345	223	SQ7003	353	縄文中期前葉	土器片	0.9	22.6	65.1	1.5	2.5	0.6	0.1	6.9
346	228	XIV-1b層包含層	23	縄文中期前葉	土器片	1.2	26.8	60.2	0.8	1.6	0.8	0	8.6

第1節 中期の土器

胎土分析 No.	図版番 号	遺構名	図版掲載 番号	時期等	種類	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
347	214	SQ7003	230	縄文中期前葉	土器片	1.0	25.4	60.7	0.9	3.5	0.7	0.1	7.7
348	213	SQ7003	213	縄文中期前葉	土器片	1.1	21.4	68.3	0.9	2.0	0.6	0.1	5.6
349	192	SB9010	41	縄文中期前葉	土器片	0.7	24.7	63.6	0.6	2.0	0.7	0	7.8
350	219	SQ7003	296	縄文中期前葉	土器片	1.4	22.6	65.4	0.5	1.9	0.7	0	7.5
351	211	SQ7003	166	縄文中期前葉	土器片	0.9	20.8	69.4	1.2	1.3	0.4	0.1	5.9
352	195	SB9012	5	縄文中期前葉	土器片	2.3	18.5	71.7	1.4	1.5	0.2	0.1	4.2
353	198	SB9015	1	縄文中期前葉	土器片	1.2	17.4	70.7	1.8	1.3	0.3	0.1	7.2
354	191	SB9010	1	縄文中期前葉	土器片	1.1	22.4	65.4	0.9	1.4	0.7	0.1	8.0
355	189	SB9008	2	縄文中期前葉	土器片	1.1	21.3	67.8	1.1	1.4	0.7	0.1	6.5
356	196	SB9012	9	縄文中期前葉	土器片	1.7	18.2	72.1	1.1	1.4	0.3	0	5.2
357	217	SQ7003	252	縄文中期前葉	土器片	1.4	25.8	62.3	0.8	0.8	0.6	0	8.2
358	216	SQ7003	240	縄文中期前葉	土器片	0.7	22.0	67.4	1.2	1.6	0.4	0.1	6.5
359	216	SQ7003	246	縄文中期前葉	土器片	1.5	24.9	62.2	0.8	2.4	0.7	0	7.5
360	—	SQ7003	—	縄文中期前葉	土器片	1.2	21.4	66.2	1.6	2.1	0.6	0	6.9
361	215	SQ7003	237	縄文中期前葉	土器片	1.2	19.6	71.3	1.7	1.5	0.3	0	4.4
362	215	SQ7003	232	縄文中期前葉	土器片	2.4	19.8	71.8	1.0	1.6	0.2	0	3.2
363	222	SQ7003	339	縄文中期前葉	土器片	6.7	17.6	55.3	0.2	3.4	0.6	0.1	16.1
364	220	SQ7003	303	縄文中期前葉	土器片	1.2	22.9	65.0	2.2	0.9	0.7	0.1	7.1
365	224	SQ7003	364	縄文中期前葉	土器片	1.3	22.3	63.2	0.8	1.7	0.8	0.1	9.7
366	223	SQ7003	355	縄文中期前葉	土器片	1.2	24.3	63.7	0.7	1.8	0.6	0	7.5
367	216	SQ7003	248	縄文中期前葉	土器片	1.0	21.7	67.2	0.9	2.2	0.5	0	6.5
368	217	SQ7003	258	縄文中期前葉	土器片	1.0	22.3	65.9	1.3	1.7	0.4	0	7.3
369	203	SK7670	12	縄文中期前葉	土器片	1.7	22.9	63.8	1.4	2.7	0.6	0.1	6.8
370	199	SB9015	34	縄文中期前葉	土器片	0.6	18.8	72.1	1.0	1.5	0.5	0.1	5.3
371	229	XIV-1b層包含層	42	縄文中期前葉	土器片	1.6	25.2	63.3	0.6	1.3	0.6	0	7.3
372	213	SQ7003	220	縄文中期前葉	土器片	1.1	21.3	69.1	1.5	1.6	0.4	0.1	4.9
373	216	SQ7003	247	縄文中期前葉	土器片	0.3	24.4	64.9	0.7	2.3	0.5	0	6.8
374	210	SQ7003	160	縄文中期前葉	土器片	1.2	22.9	65.6	0.7	2.5	0.5	0.1	6.6
375	224	SQ7003	363	縄文中期前葉	土器片	0.8	18.7	70.3	0.5	1.6	0.6	0.1	7.4
376	198	SB9015	28	縄文中期前葉	土器片	2.2	19.2	71.5	1.7	1.1	0.4	0.1	3.9
377	198	SB9015	4	縄文中期前葉	土器片	1.1	23.4	61.0	2.3	0.9	0.9	0.1	10.2
378	225	SQ9004	1	縄文中期前葉	土器片	1.5	17.9	74.3	1.6	1.4	0.2	0	3.0
379	187	SB5407	3	縄文中期前葉	土器片	1.8	25.3	62.1	1.2	1.8	0.6	0.1	7.1
380	208	SQ7003	87	縄文中期前葉	土器片	0.9	20.5	69.3	1.0	1.5	0.4	0	6.3
381	204	SQ7003	12	縄文中期前葉	土器片	1.7	17.8	74.5	1.4	1.2	0.3	0	3.1
382	190	SB9009	7	縄文中期前葉	土器片	2.0	19.3	71.6	1.8	1.1	0.3	0.1	3.7
383	188	SB7502	1	縄文中期前葉	土器片	2.0	18.8	72.5	1.3	1.3	0.3	0.1	3.6
384	200	SB9016	2	縄文中期前葉	土器片	2.5	17.1	73.5	1.7	1.4	0.2	0	3.6
385	191	SB9010	18	縄文中期前葉	土器片	2.3	21.9	65.8	1.3	1.7	1.5	0.2	6.2
386	214	SQ7003	231	縄文中期前葉	土器片	1.0	24.2	62.6	0.7	2.7	0.8	0.1	7.9
387	—	SQ7003	—	縄文中期前葉	土器片	0.8	22.5	65.9	0.7	1.2	0.8	0	8.0
388	186	SB5401	2	縄文中期前葉	土器片	1.9	19.4	71.8	2.1	1.7	0.2	0	2.9
389	—	XIV-1b層包含層	—	縄文中期前葉	土器片	0.9	19.5	70.7	1.1	1.3	0.6	0	5.9
390	216	SQ7003	251	縄文中期前葉	土器片	2.3	17.9	71.8	1.8	1.2	0.2	0	4.7
391	221	SQ7003	315	縄文中期前葉	土器片	1.5	25.8	60.6	0.9	2.1	0.6	0	8.4
392	199	SB9015	35	縄文中期前葉	土器片	1.7	21.0	71.6	1.7	0.8	0.4	0	2.8
393	229	XIV-1b層包含層	46	縄文中期前葉	土器片	1.7	21.6	70.1	2.6	0.9	0.6	0.1	2.5
394	204	SF7034	1	縄文中期前葉	土器片	1.1	20.6	66.8	0.8	1.8	0.7	0.3	7.9
395	188	SB7501	2	縄文中期前葉	土器片	1.2	18.6	71.7	0.8	1.7	0.4	0.1	5.4
396	192	SB9010	37	縄文中期前葉	土器片	4.6	17.7	55.9	0.3	4.3	1.5	0.2	15.5
397	227	XIV-1c層包含層	1	縄文中期前葉	土器片	1.5	18.5	72.6	1.1	1.9	0.3	0	4.2
398	207	SQ7003	78	縄文中期前葉	土器片	2.2	24.1	67.8	1.1	0.7	0.7	0	3.5
399	—	SQ7003	—	縄文中期前葉	土器片	2.0	17.1	73.6	1.9	1.5	0.3	0	3.6
400	—	—	—	縄文中期後葉	石塊	1.6	14.9	78.1	2.2	1.9	0.1	0	1.1

※「—」は試料の状況により分析できなかったもの

第2節 中期集落の構造

1 中期前葉の集落

はじめに

中期前葉（五領ヶ台II式併行期）の集落は、層位的に下位（XIV層）に位置していたため、平成5・6年度のいずれの調査においても、期間が差し迫った段階でようやく着手できた。そのため、個別の遺構については十分なデータを収集できていない。例えば、重機によるXIV-1b層上面までの掘削・剥ぎ段階では、周堤が⑥区の竪穴住居跡の多くで確認できた。しかし、遺構内の土量、XIV-1c層以下の遺構が未知数であったこと、などから極一部分の選択調査とせざるを得なかった。また、地下水の浸み出しによって、床面精査は指先の感触による硬化面と軟弱部（柱穴など）の確認しかできなかった住居も存在している。

そのため、ここでは集落内施設の細部については触れず、施設の種類やその配置についてのみ取り上げる。また、集落立地や段階区分の検討を行い、中期前葉集落の特徴を明らかにしたい。

(1) 集落形成に至るまでの地形環境の変化

微高地の形成 縄文時代中期の屋代遺跡群⑤・⑥区は、善光寺平南部の低地内に位置する微高地であり、隣接した場所に旧千曲川の流路が存在していたと予想される。

この地区は、縄文時代前期の段階（XVI層）ですでに微高地化しており、焼土跡などの遺構や遺物が認められている。中期前葉1期（XV層）までの間、粗い土砂の堆積は認められず、比較的安定した時期が続いたと考えられる。中期前葉1期には墓坑も認められることから、中期前葉2期の集落に先行した集落が、調査区西側外に成立していた可能性が考えられる。

その後、中期前葉2期集落成立までの間に、約80cm前後におよぶ堆積が認められ、大きな環境の変化が起こったことを示している。こうした中、個々の砂層上面には焼土跡や遺物が認められており、洪水の合間を縫って、この地がキャンプ地として利用され続けていたことをうかがわせる。

地表面の安定期 中期前葉2期後半に入り、ようやく地表面の安定期を迎える。前段階までの砂の堆積によって、⑤・⑥区はさらに周囲との比高差を増していった。このことによって、氾濫低地の中でも、最も集落を設営しやすい条件が整ったと言えよう。

(2) 集落を構成する施設

遺構の類別と配置 中期前葉2期集落は、その北半部を古墳時代・古代の河道によって削平されている。また、東西については調査区外にまで遺構が広がるため、集落の全貌をつかむことはできない。

検出された遺構は、居住施設としては竪穴建物跡（以下竪穴住居）のみであり、掘立柱建物跡は検出できていない。竪穴住居跡は22軒、可能性があるものを含めると28軒が見つかった。

竪穴住居跡の配置から、集落後半期（2b段階以降）の中心部は調査区北東外側と考えられるため、調査区外に掘立柱建物跡や広場が存在していた可能性がある。竪穴住居跡の周辺には焼土跡が点在しており、屋外での調理やその他の火を使う行為が行われている。埋葬施設は、廃屋を利用した例が見つかっており、前述の通り中央土坑群の有無は不明である。廃棄物の処理では、竪穴住居凹地への廃棄は少量に止まっており、多くの土器、石器片、石屑、獣骨などは集落北西部に廃棄される傾向が認められる。

検出遺構の特徴 次に、集落内で検出された各種の遺構について、特徴的な点を記しておく。

竪穴住居 隅丸長方形を基調としている。柱穴は検出が難しかったが、壁際に近い位置に9～10本が巡るSB5412例が基本と考えられる。掘り窪められた竪穴部の周囲には周堤が積まれていた。竪穴内の施設は少なく、床面が段状となるSB5401以外では、炉が存在するのみである。炉は地床炉と埋甕炉の例があり、後者が時期的に後出である。本遺跡で特徴的な施設には、床下に礫を集積、あるいは床下ピット内に礫を充填した例があり、4軒に認められた。

埋葬施設 環状集落を想定した場合、調査区内には中央土坑群にあたる位置が含まれていない。そのためか、土坑墓は確認されていない。出土した人骨の多くは、廃屋を利用した埋葬施設に伴っていた。土質の関係上、掘り込みや埋め土、盛り土などは確認できなかった。また、廃屋への埋葬が終わった後、時間の経過とともに、住居凹地は土器などの廃棄場所に代わっており、埋葬骨が攪乱される事例が認められる。

屋外炉 竪穴住居の周囲に点在する地床炉である。微細な焼骨を伴う例があり、調理施設と考えられる。また、集石を伴う炉が1基見つかった。

廃棄場所 竪穴住居凹地への廃棄は全体的には少なく、主に調査区西寄りの竪穴住居の凹地やSQ7003に集中する傾向が認められる。SQ7003では、土器、石器、獣骨などの廃棄のほか、黒曜石剥片が集中して廃棄された箇所が6ヶ所存在していた。

(3) 集落の変遷

22(28?)軒におよぶ竪穴住居が密集して検出されたが、住居内から出土した遺物は少なく、土器型式によって新旧関係を限定できる資料はごくわずかであった。そこで、ここでは、重複関係、炉の変遷傾向、住居間の土器接合関係、住居主軸方向、住居間の位置関係などから、新旧関係と同時存在の可能性を検討した。以下、その手順を述べ、最後に想定された段階区分による集落の変遷過程を提示する。

A. 新旧関係の認定

切り合い関係 重複した住居の堆積状況の観察から、以下の新旧関係が認められる。SB5402→SB5401、SB5410→SB5407→SB5408、SB5411→SB5408、SB5412b→SB5412a、SB7503→SB7501、SB9014→SB9010、SB9016b→SB9016a。

炉・周堤による新旧の想定 これらの切り合い関係の中で、炉形態を見てゆくと、地床炉から埋甕炉へ変化してゆく傾向が読みとれる。この時点で少なくとも4段階区分が想定される。

次に、各竪穴住居に周堤が存在したとすると、SB9011—SB9012—SB9013—SB9010、SB9015—SB9016は、位置が近接しすぎており、新旧関係にあった可能性が想定される。

遺物接合関係による新旧の想定 土器の接合関係において、一方の竪穴住居は埋まりきっておらず、他方が埋まりきっていた場合、前者を新しい建物と想定することを基本とする。ただし、埋設土器の選定や土器片の移動にはあらゆる要因が考えられ⁽⁴¹⁾、新旧関係を確定する証拠とはなり得ない。また、今回、遺構間の接合関係に費やす時間が少なかったため、いずれの建物間での接合関係も資料が少なく、決定的な根拠とはなり得ない。あくまで、仮説として論を進めることとする。

図80上段の例 遺物図版186-11は、SB5401下層とSB5402上層、SB5404埋土で接合した。SB5401が床近くまで開いていた時点で、SB5402は埋没しており、SB5404もその可能性がある。また、図版186-4はSB5401床面、SB5402上層、SB5408最上層、SB9016上層出土土器と同一個体と見られる。これらの関係は、やはりSB5401が床近くまで開いていた時点で、SB5402とSB9016はある程度埋まり廃棄場所となっていたと考えられる。SB5408に至っては、ほぼ埋まりきった状況を示している。さらに、図版187-1のSB5404炉体土器では、底部付近の破片がSB7502の上層(SQ7003)より出土している。よって、SB5404がSB7502より新しい可能性が大きい。

図80中段例 図版191-1はSB9010の炉体土器であり、接合する細片がSB5408の下層より出土している。SB9010炉に土器を埋設する時点で、不要となった破片をSB5408に投棄したと想定すると、SB9010がSB5408より新しいと考えられる。SB5408の最上層出土土器にはSB5401下層との接合関係があり（前述）、SB5408の埋没期間を考慮すると、SB9010よりSB5401が新しい可能性が大きい。また、図版192-33は、SB9009-3層とSB9010上層で接合した。これにより、SB9009の埋没がSB9010より進んでおらず、SB9009が新しい可能性がある。次に、図版192-41は、SB9010上層とSQ7003で接合関係にある。SQ7003はSB7502上層に形成された廃棄場所であり、このことから、SB7502とSB9010は、この土器の廃棄段階には、ほぼ同様の埋没状況を示していたと考えられる。

新旧・並行関係の想定 上記の作業に、集落内の位置関係と出土土器の様相から図81に示した新旧関係と並行関係を想定した。破線で囲った住居番号については、並行関係に確証が得られなかったものである。SB5401とSB5412に関しては、住居の主軸方向や配置から見ると、SB5412 aをSB9016 aと並行関係に置いた方が整然とする。ただし、炉に埋設されていた土器の型式的な特徴からは、SB5412 aが新しいと考

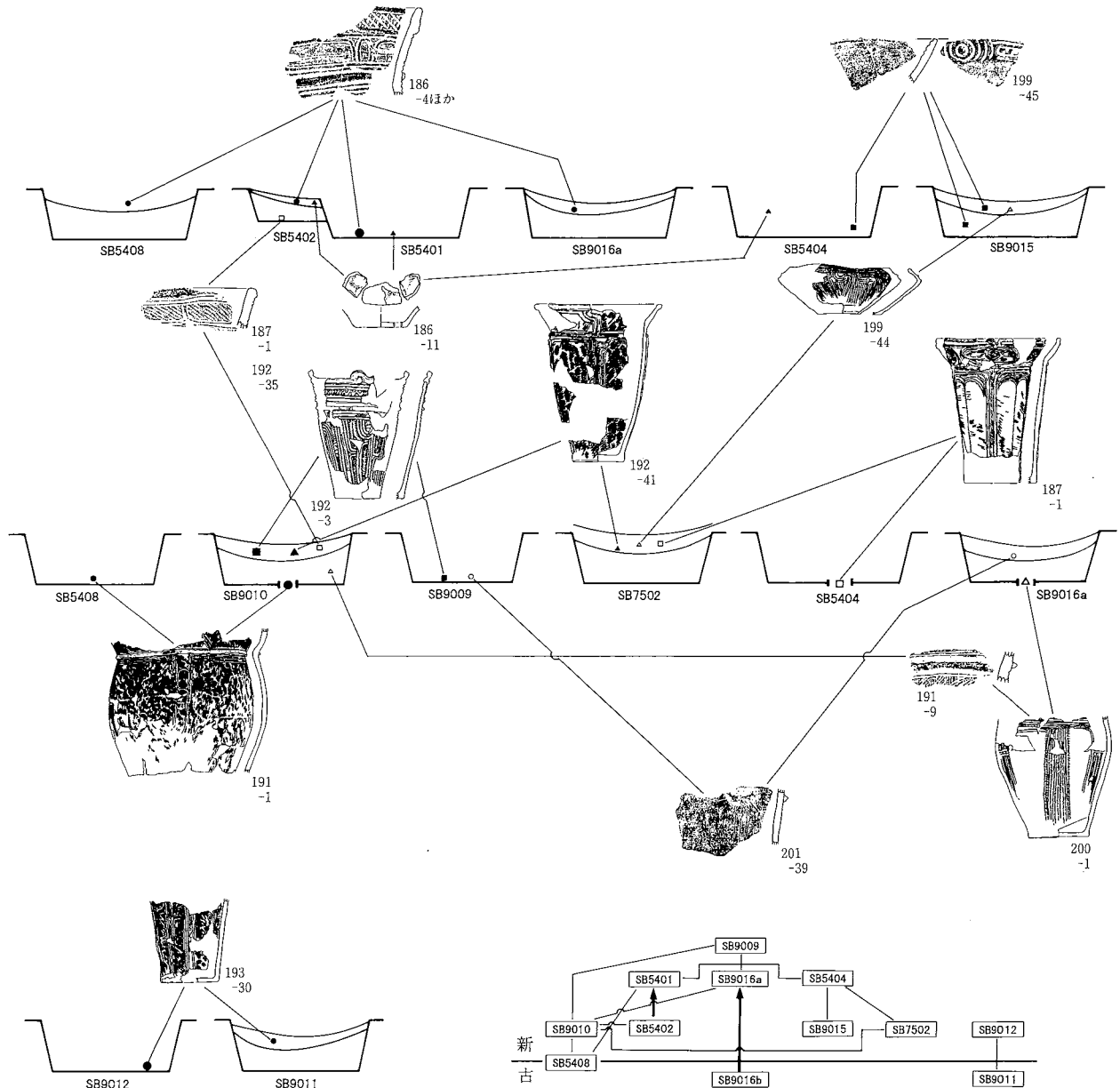


図80 竪穴住居跡間土器接合関係図および新旧想定図

えられるため保留した。また、地床炉を持つ段階の住居については、出土土器がほとんどなく、しかも住居プランの大半が失われていたか、あるいは、調査区外であったため並行関係はほとんど不明といわざるを得ない。

いずれにせよ、建て替え時期は個々の住居により異なっていたと見られ、住居の配列から見ても、実態はさらに時期細分が可能であろう。

B. 竪穴住居のグループ分け

この時期の竪穴住居の配置を概観すると、重複・接近関係にある竪穴住居群が存在しており、重複関係が認められない住居群と分離することによって、グループ分け（A～D）することが可能である。これは、集落内の場の占有に関わっていた可能性も想定できよう。

Aグループは、調査区内の南東側にあり、SB5412～SB5410を含み、さらに東側調査区外に続くと考えられる。SB5404とは重複関係がないため、南東側にもう1グループが存在した可能性もある。SK5939が竪穴住居であれば同じグループに入る。

BグループはSB9011～SB9009で、東側調査区外へ続く可能性がある。

Cグループは竪穴住居の可能性のあるSQ9004北落ち込み～SB9015で、北側へ続くと思われる。

Dグループは西側調査区外～SB7501で、便宜的にSB7502を加えておく。

C. 各段階における集落内遺構配置と集落変遷

これまでの作業を通して想定された新旧関係をもとに、中期前葉2期集落の変遷を段階毎に追って行くこととする（図82）。

1段階 地床炉を持つ段階を大きく1段階とし、さらに切り合い関係から細分の可能性を示す。ただし、この段階の竪穴住居の遺物量は極端に少なく、同時存在の竪穴を抽出することは困難である。ここでは、いくつかの可能性の一つとして以下の段階区分を試みた。

1a段階 中期前葉2期の中でも古手の土器を床面から出土したのはSB7501であり、それに切られたSB7503が、集落の最古段階の竪穴住居と考えられる。遺物は皆無であり明確な時期は不明である。切り

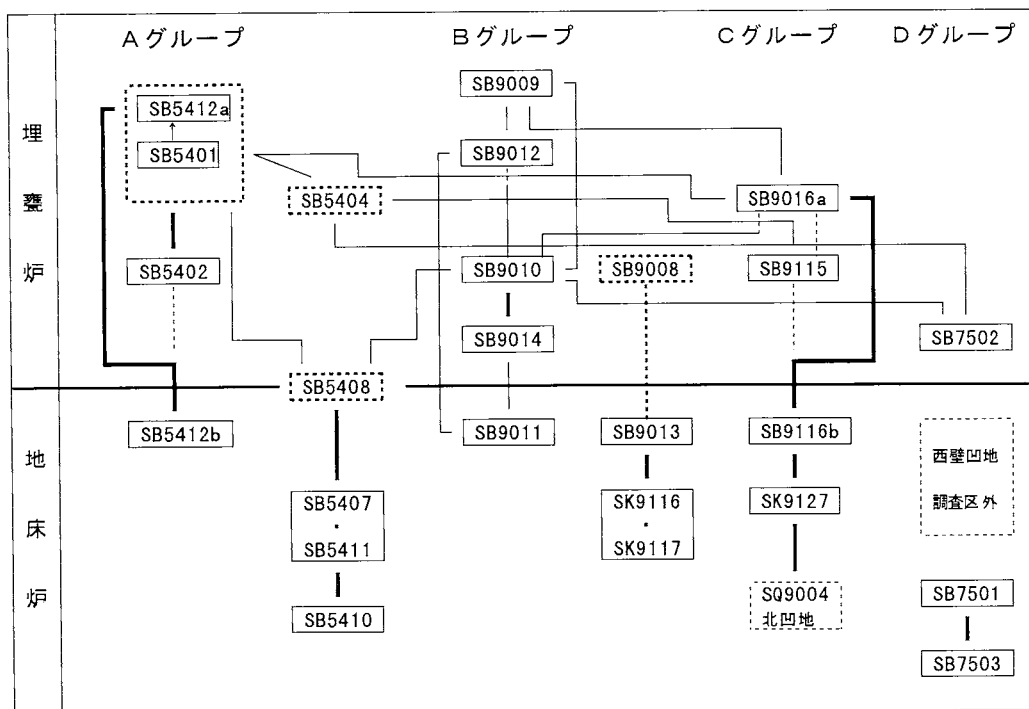


図81 中期前葉集落竪穴住居新旧関係想定図

合い関係から、SB5410も古くなる可能性が大きいですが、こちらも出土遺物が皆無であり、判然としない。

SB5410が、SB7501かSB7503と同時存在であったと想定すると、集落は緩やかな尾根状の微高地に比較的距離を置いて点在していた様相を呈する。また、SB7503が先行したとすると、初期集落の中心は標高の高い西側に偏っていた可能性がある。

1 b段階 SB7501を1 b段階とした。遺物が皆無である遺構が多く、同時存在の抽出はできない。あえて想定すると、Aグループの切り合い関係で最古に位置づけられるSB5410や5411に可能性がある。また、小型の竪穴住居SB9013に切られ、土坑として報告したSK9116、あるいはSK9117が竪穴住居の一部残存であったとすると、この時期にさかのぼるかも知れない。同様の想定からCグループのSQ9004北側凹地が竪穴住居の一部残存と考えることができれば、切り合い関係からこの時期にさかのぼる可能性が出てくる。BグループのSB9011床下検出の集礫ピットのうち、P1とP2は南側の壁際で検出された。他竪穴住居での状況から推察すると竪穴中央部付近に設置するのを基本としている。発掘所見には、SB9011立ち上がり不明確であったとされており、南側に古い竪穴住居の一部が残存していた可能性がある。このSB9011南側未検出住居は1 c段階の可能性もある。

上記の操作によって、同時存在の竪穴住居を最大限に見積もるとA・C・Dグループに各1軒、Bグループに2軒の可能性が出てくる。仮定があまりにも多いが、この時期の住居配置を想定すると、調査区北西側を中心として弧状を呈していた可能性が高い。

1 c段階 1 c段階と1 d段階は、SB5407とSB5408の新旧関係を軸とした。しかし、両住居とも炉形態が不明であり、SB5408が2段階に下がる可能性もある。

1 c段階の並行関係も不明確であり、1 b段階の遺構を切り、1 d段階とした住居に切られた遺構の全てに可能性がある。BグループのSB9011南側の未検出住居、SK9116か9117のいずれか、CグループのSK9127に可能性がある。また、Dグループでは、SB7501北側の調査区西壁に落ち込みが認められており、西側調査区外に竪穴住居が存在した可能性がある。

1 d段階 竪穴住居の凹地を活用して、埋甕炉段階の住居が再構築されているSB5412 bとSB9016 bを、埋没時期が埋甕炉段階に近いと想定し、この時期に置いた。

SB9011はこれらの竪穴に近い主軸方位を持つことから、この時期に置いてみた。また、SB9013はSK9116などとの切り合い関係からこの時期とした。

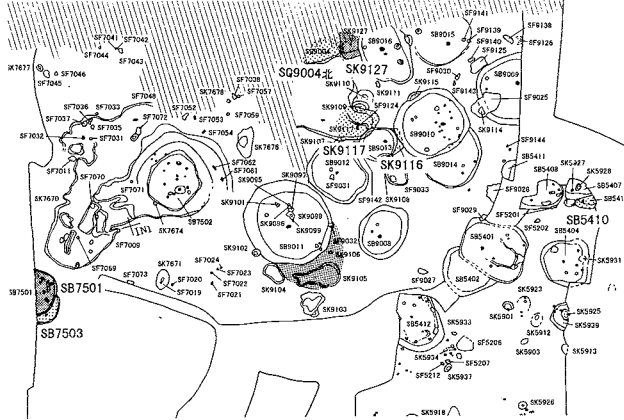
仮定の多い想定ではあるが、これに則って見ると、Aグループ、Bグループに大・小の竪穴住居が各1軒ずつ存在したこととなる。北側を削平され1軒しか検出されていないCグループも同様であったと考えられる。また、これらの竪穴住居の位置から、集落構造は、調査区東側を中心にして竪穴住居が弧状に配置されていた可能性がある。

2 段階 埋甕炉を持つ段階を2段階とし、さらにBグループに属する竪穴住居の切り合い関係と遺物接合関係、土器の型式的特徴を加味して4細分した。

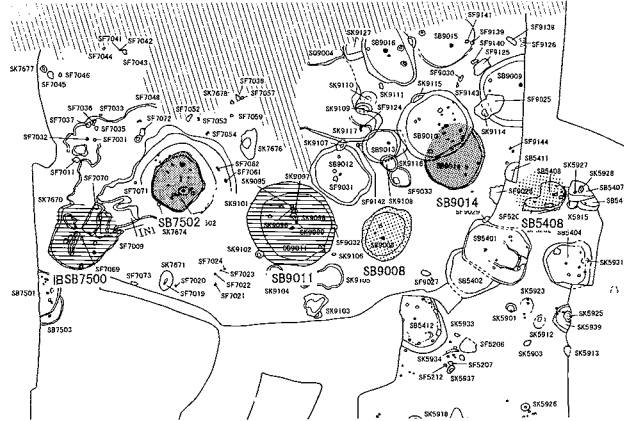
2 a段階 Bグループで最古段階に位置づけられるSB9014を軸として、主軸方位が類似し、土器型式からも古いと判断されたDグループのSB7502を同時期と想定した。軸方向の類似からSB9008にも同時存在の可能性もある。調査範囲内で見ると、竪穴住居は微高地の尾根筋に並存しており、調査区北側に集落の中心があった可能性が想定される。

2 b段階 BグループでSB9014を切るSB9010を基準に据えた。主軸方位が類似し、伴出した土器の型式が近接するCグループのSB9015をほぼ同時期ととらえた。炉が確認できていないが、主軸方位の類似するAグループのSB5402も同時期の可能性があろう。SB9008にも、この時期の可能性が残っている。この段階以後、集落の中心は東側に移っていったと見られ、竪穴住居群の西側は、竪穴住居に隣接する廃屋を

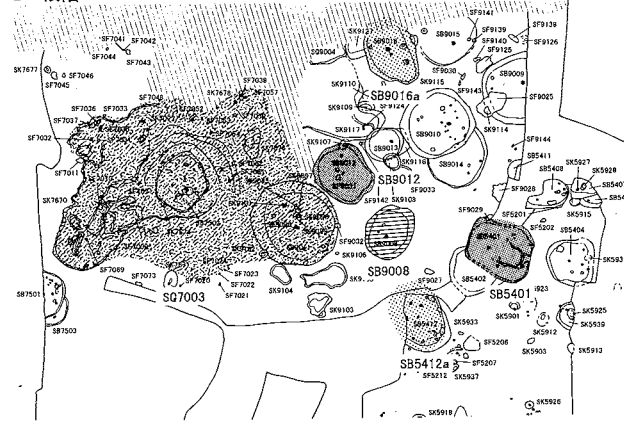
中期前葉 2期 1a~C段階



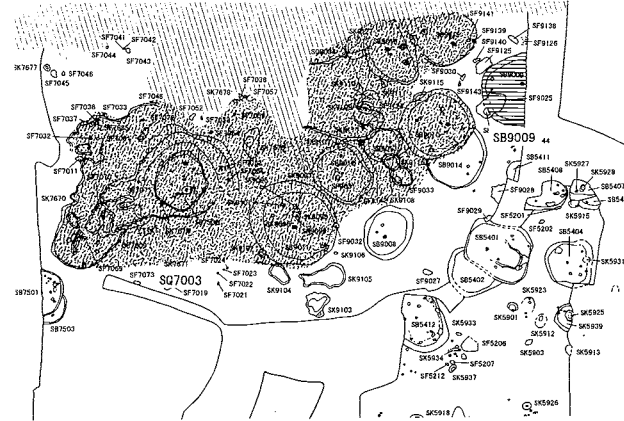
2 a 段階



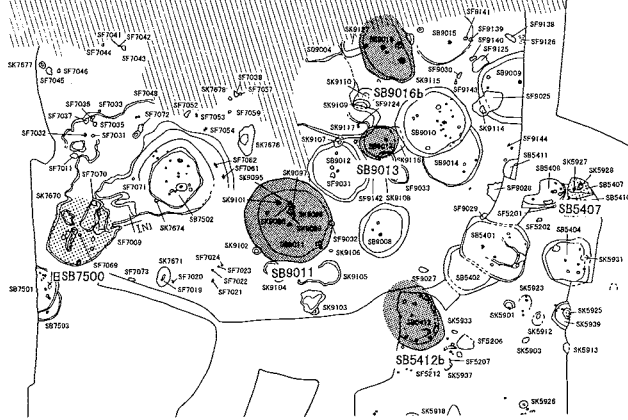
2 c 段階



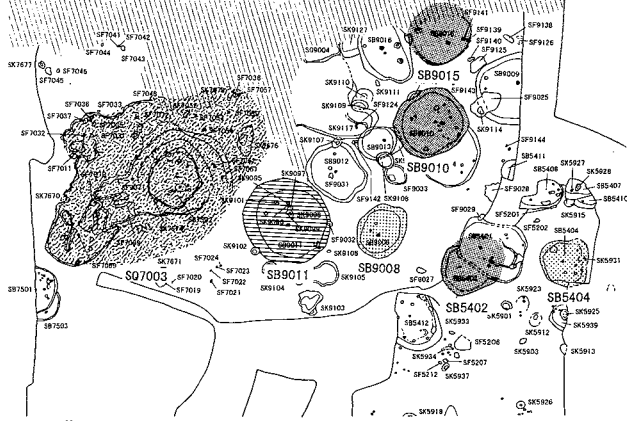
2 e 段階



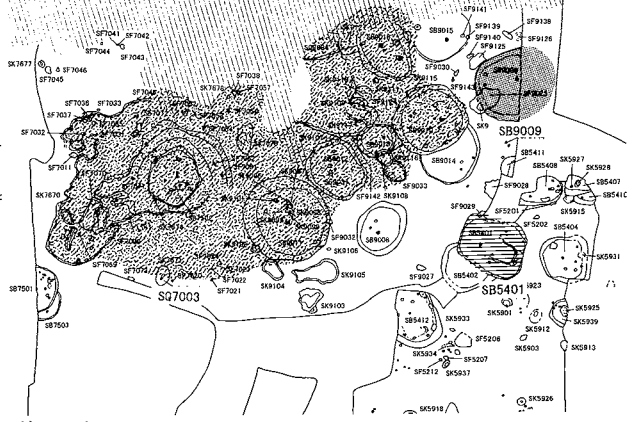
1 d 段階



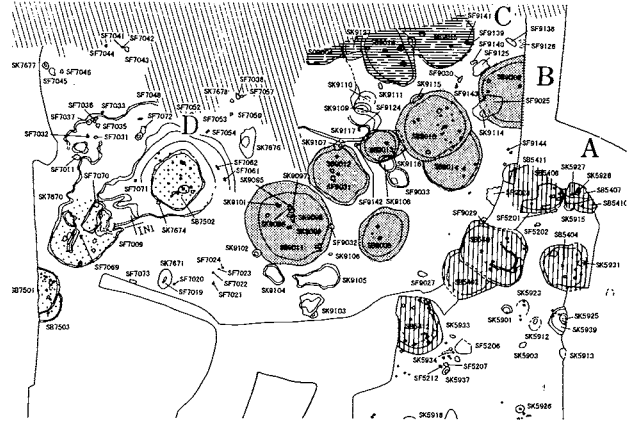
2 b 段階



2 d 段階



グループ分け



該当時期の竪穴建物
 可能性あり
 埋葬用廃屋
 廃棄場所

図82 中期前葉集落変遷想定図

墓地に、それ以西を廃棄場に利用するようになる。

2 c段階 Bグループでの新旧関係は、遺物接合関係からSB9010→SB9009を想定し、伴出した土器型式の特徴からSB9012をその中間段階に置いてみた。これに主軸方位が類似するAグループのSB5401を同時期と想定した。この前後の段階に、SB9016とSB5412 aが存在したと見られるが、新旧関係の確証は得られなかった。

2 d段階 BグループのSB9009を最も新しい段階ととらえた。ただし、この竪穴住居埋土中には埋葬人骨が認められており、集落自体は調査区外などで存続していたと考えられる。

このように、2段階では、当初調査区北側に集落の中央部が存在した可能性が考えられる(2 a段階)。その後、東へ中心が移り、SB7502の存在していた地点は廃棄場所に変化する。さらに、集落の中心は調査区外東側へ移動して行き、それに伴って廃棄場所や廃屋墓の位置も東へ移っていったようである。

(4) 小 結

A. 屋代遺跡群⑤・⑥区、中期前葉2期集落の特徴

前述してきた中期前葉2期集落の変遷の特徴を、個条書きすると以下ようになる。

- ① 地床炉段階(1段階)から埋甕炉段階(2段階)へ大きく変遷する。
- ② 集落の位置は、西から東へ徐々に移動し、2期b段階にDグループが消滅する。
- ③ 消滅したDグループの位置は廃棄場となり、集落が東へ移動するのに連動して東へ拡大して行く。
- ④ 集落に中心部が存在したとすると、1段階では、調査区北西から北部であったと考えられる。ただし、細別段階においては竪穴住居の配置に変動があり、集落の中心が一定であったとは考えられない。また、竪穴住居が弧状に配置されていたとも断定はできない。2 b段階以降は、A～Cグループ内の各1、2軒が調査区東外側を中心にして、住居が配置されていた可能性がある。
- ⑤ 2 b段階以降の細別段階において、各グループ1、2軒の竪穴住居が存在していたと仮定すると、集落全体は、数軒～最大30軒位の住居で構成されていたと推定される。
- ⑥ 埋葬施設は、各細別段階毎に、その都度、住居域外側に隣接する竪穴住居凹地を活用しており、墓域として固定されていない(ただし、中央墓坑群が想定される場合は調査区外になってしまうため不明)。

B. 中期前葉2期集落の成立基盤と若干の問題点

屋代遺跡群周辺の同時期の資料が乏しい中で、この集落がここに立地した要因を明確にすることは難しいが、予想される観点についてあげておく。

豊富な食料資源 一つは、大河川を抱えた氾濫低地が、食料資源の確保にとって有利であったことである。今回の調査においても、量は多くないものの動・植物遺体が確認されている。千曲川での漁撈を想定できるサケ科に加え、ドジョウ科魚類の骨が出土している点は、後背湿地側の網状流路や沼沢地での魚資源が豊かであったことを予測させる。また、植物遺体ではクリが確認されている。中期後葉ほどではないが、集落周辺の自然堤防上や周辺山間地には、堅果類が茂っていたとみられる。さらに、イノシシやシカといった狩猟対象獣も氾濫低地内に生息していたと考えられる。しかし、集落が成立する最も主要な要因は、千曲川を遡上するサケ科魚類の存在であったと予測される。

交易ルート もう一点は、千曲川などの河川沿岸を結ぶ交易ルートの拠点としての位置づけである。小形石器の原材料である黒曜石の主要原産地が千曲川を遡上した地点にあることから、黒曜石石材や製品が越後方面へ運ばれる状況、あるいは、ヒスイや蛇紋岩といった垂飾具・磨製石斧の原材料や製品が上越地域経由で内陸部へ運ばれる状況などが想定でき、いずれも屋代遺跡群の位置する千曲川中流域は、中継地点として重要な役割を担ったと考えられる。

今回の調査では、北陸や中部・関東といった従来から密接な関係が指摘されていた地域に加え、東海系の土器が複数出土した。どのような交易関係があったのかは不明であるが、長野盆地では、この時期の東海系土器ははじめての出土であり、屋代遺跡群が重要な交易ルートの拠点になっていたことを示している。

このように、豊富な食料資源や交易上の拠点として、屋代遺跡群は恵まれた立地条件にあったと考えられる。しかし、出土人骨の歯には、栄養失調に伴う場合の多いエナメル質減形成が確認されており、必ずしも生活が安泰な時ばかりではなかったことを示している。

竪穴住居のみが密集する集落 拠点的な集落であったと想定した場合、長期にわたって、あるいは通年を通して、多数の住人が生活を維持できたのであろうか。

XVI層～XV層においても、この地区には遺構・遺物が広がっており、調査区外に集落が存在した可能性もある。とすれば、度重なる洪水砂の堆積はあるものの、縄文人にとって生活のしやすい場所であったことは確かであろう。中期前葉2期に限っても、地床炉の段階から埋甕炉の段階まで長期にわたって集落が存在していたと見られる。

長期に利用されていたとしても、継続性については問題が残っている。1つは、集落の中心が細別段階毎に変動していること、2つめには廃屋墓が短期間のうちに攪乱されていること、そして、3つめには、竪穴住居が密集しているにも関わらず、掘立柱建物が皆無であったこと、などによる。2b段階以降については、集落の中心部が調査区外になるため、掘立柱建物も調査区外に存在していた可能性がある。しかし、それ以前については集落の中心は北か北西に想定でき、掘立柱建物が検出できてよいはずである。

竪穴住居が冬の住まいであり、掘立柱建物などが夏の住まいである、という設定は、万人の賛同を得てはいない。しかし、同じ地点(XII-2層)に存在した中期後葉集落と比較すると、掘立柱建物の質と量の差は歴然としている。夏季の集落のあり方が問題となってこよう。

さらに、中期後葉集落内やその周辺に存在する定住のための施設や環境(集落用地の平坦化と墓域などの地区割設定→集落内の機能性を確保、祭祀用具や施設の充実→人間関係の保持や精神面の安定、クリの急増→植生への干渉を行い食料資源の安定供給、イノシシ・シカの大量捕獲→一時的な飼育の可能性も含め食糧資源の確保)の整備状況に対し、中期前葉集落のあり方は、いずれの面でも発展途上にあり、一ヶ所で長期間、大人数で暮らすのに適しているとはいえない。

あくまで感想の域は出ないが、屋代遺跡群の中期前葉集落は、周辺山間地よりも少ない積雪量と、冬場に遡上してくるサケ科魚類を頼りに、冬季に人口が増大する集落であった可能性が考えられよう。今後、一時期に存在した竪穴住居軒数をより厳密に絞り込むこと。そして、掘立柱建物が多数存在するにも関わらず竪穴住居が少ない和泉A遺跡(新潟県埋蔵文化財事業団1999)のような集落との比較や、キャンプ地的な遺跡との比較を行うこと、さらに、周辺遺跡の調査が進展するのを待って、再度、検討を加えたい。

註

- 1 こうした問題については、小林謙一氏や黒尾和久氏らのグループが積極的に取り組んでおり、ここでも両氏らの研究成果を参考にした点が多々ある。しかし、調査期間などの制約もあり、表面的にしか取り入れられなかった。

引用・参考文献

- 小林謙一 1999 「縄文時代中期集落における一時的集落景観の復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』82
- 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会 1995 『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平(発表要旨・資料)』
- 縄文集落研究グループ 1998 『シンポジウム 縄文集落研究の新地平2(発表要旨)』
- 谷口康浩 1998 「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』14

新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会ほか
 武藤康弘 1995 「民族誌からみた縄文時代の竪穴住居」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』6
 山本典幸 1995 「五領ヶ台式土器様式期の季節移住性—石器組成の民族誌学的解釈—」『先史考古学論集』4

2 中期中葉の集落

中期前葉2期の集落が廃絶し、XIV-1a(砂)層が堆積した後は、集落跡の開地を利用して、短期間の逗留(キャンプ)地となっていたと考えられる。それを裏付けるように、中期中葉の各細別時期の土器が少量ずつ出土し、焼土跡が点在する状況を示している(図83)。

こうした状況の中、中期中葉2期(勝坂II式・新道式並行期)には、竪穴住居1軒が建てられている。この時期の遺物も包含層中からは微量にとどまっております、継続的な集落には発展しなかったと見られる。単独の竪穴住居であったか、調査区外を含めて数軒が点在する一時的な集落であったと考えられる。

また、XIII-2層で検出された焼土跡の内、火床を伴うSF9021を中央として、その東と西に直線的に並ぶ焼土粒混入のSFを繋げ、SF9020東側の小ピット、SF9128とSF9129内に存在するピット状の凹部を壁芯材痕と仮定すると、焼失した掘立柱(平地式)建物を復元することが可能である。伴出遺物が細片であり時期の特定はできない。キャンプ地として訪れた集団の中で、簡易な小屋を建てて滞在期間を延ばした場合があったのかも知れない。全て、仮定の上の論にすぎないが、今後、このようなキャンプ地的な遺跡の調査に際して、簡易な建物の存在にも心がける必要性を示すため、あえて記載しておく。

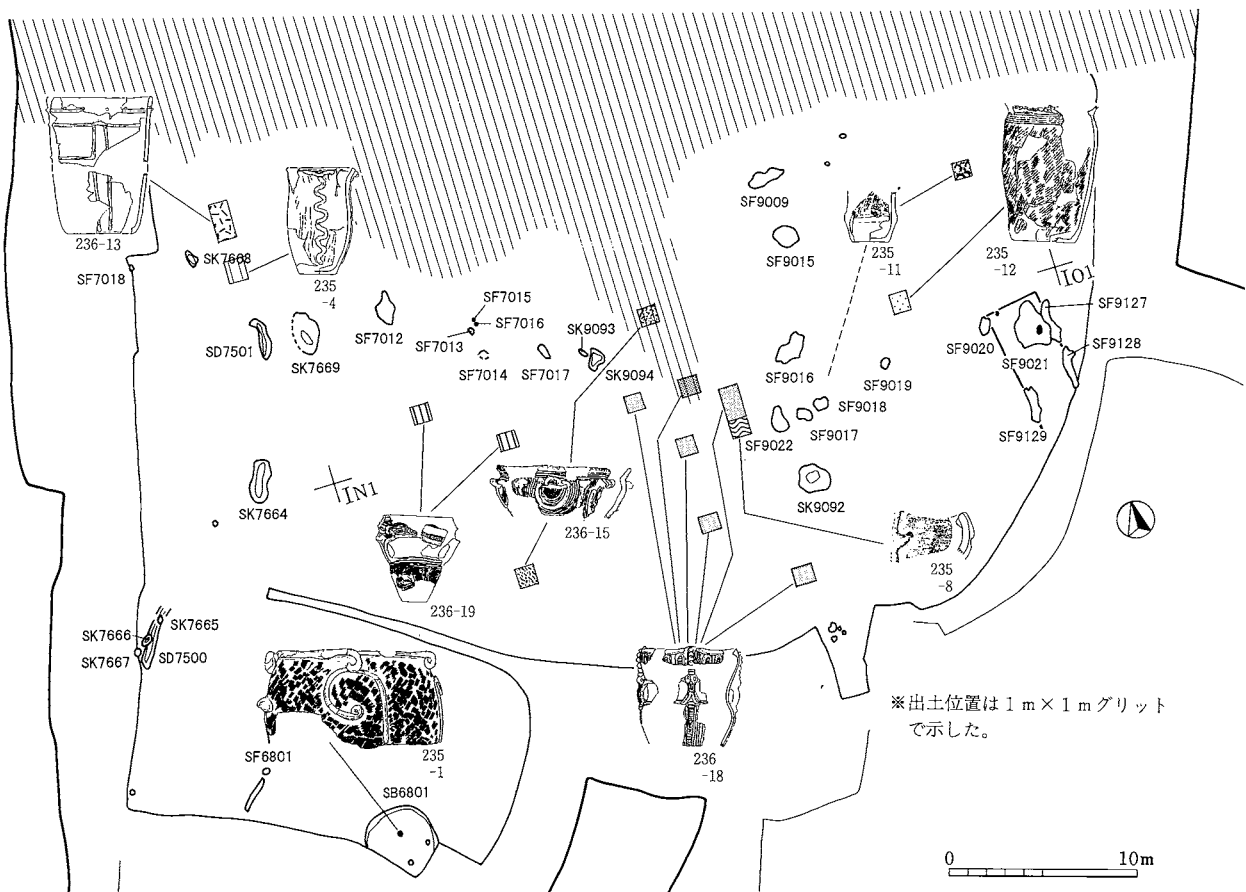


図83 XIII-2層検出遺構と遺物分布

3 中期後葉の集落

(1) はじめに

信州の縄文文化といえば八ヶ岳山麓に代表される中期の集落と中葉の土器群が挙げられる。これに対し千曲川水系は縄文時代の遺跡が比較的希薄で、東西の丘陵を中心に小遺跡が確認されていた。そのような中で、長野市松原遺跡（上田他1998）と、それに続く本遺跡の発見があり、千曲川の沖積低地も含めた縄文集落が注目され始めた。特に屋代遺跡群XII-2層集落は、調査部分が環状集落全体の半分にすぎず、さらに東側に連続していること、中期後葉の終わりの一定期間継続的に営まれていたことなどから、単に千曲川の自然堤防上の立地に止まらず、地域の拠点的な大集落であったことは、極めて重要である。そこで本節では、第5章で提示してきた遺構・遺物に係わる諸情報を基に、中期後葉集落で展開されていた人々の生活を、更に広い視座から一步踏み込んで素描していくことにする。

順序としては、個々の遺構の機能に係わる微視的な視点から、それらを統合した集落景観の変遷、さらには集落を拠点とした人や物の動きの様相という巨視的な方向へむけて考察を進めていく。

(2) 居住空間—竪穴住居と柄鏡形（敷石）住居、掘立柱建物の機能差を中心に—

A 時期の確定

住居跡の時期 住居跡では（表30）、遺構の最古時期を反映する土器をもとに「観察最古時期」を設定し、その推定の根拠となった遺物の出土位置を「根拠」の欄に記載した。また、埋土もしくは埋土中一括単位の出土土器のうち、推計で7割以上を占める土器群の時期をもとに「観察最新時期」を決め、その根拠となった遺物群の出土位置を「根拠」の欄に記載した。後者の根拠の多くは1～2層の埋土出土土器であるが、SB5325・5340・5341のように埋甕を根拠とした観察最古時期よりも1段階新しい例がある。各住居が機能していた時期を「観察最古時期」で代表させた場合、後葉2b期には11軒、3a期には13軒、3b期には10軒、3c期には12軒、4期には7軒が該当し、そのうち柄鏡形住居は、後葉3b期に初現形態が1軒、後葉3c期に5軒、後葉4期に3軒を占める。棒状礫や小礫も含めると、これらはすべて敷石住居の範疇に含まれる。これに対し、柄が無いが石が敷かれている住居は後葉3c期に3軒、後葉4期に3軒で、SB5340は両時期に共通する。全住居に占める石敷きの割合は、後葉2b・3a期は0%、後葉3b期は10%、後葉3c期は75%、後葉4期には100%と順次増加する。特に3c・4期の住居を形態と石の位置を基準に分けた住居系統別に変遷を概観すると（表107）、後葉4期には非柄鏡形住居のうち炉周辺敷石系列と全く石が敷かれない系列が脱落することがわかる。

掘立柱建物跡の時期 掘立柱建物跡では（表31）埋土中の「一括土器」に付属各施設出土土器を加えた「土器概要」のうち確定率が高いもののみを（ ）なしで記載し、他遺構との切り合い関係（「備考」参照）との照合によって時期を確定していった。その結果、約80%の時期が幅をもって捉えられた。最新時期を採った場合、3a期4軒、3c期6軒、4期9軒となる。2b期の例は無いが、切り合いからはST5102のみが3a期以前に遡る可能性がある。掘立柱建物跡のうち中央に炉を伴うことから平地式住居跡と考えられるもの15棟は、3b～3c期1棟、3c期2棟、3a～4期1棟、3c～4期3棟、4期1棟、時期未確定7棟に分けられる。また、炉の無いものは、2b～3a期1棟、3a期以降1棟、2b～3c期1棟、3a期2棟、3

表107 住居跡の系譜

住居系列\時期	後葉3c期	後葉4期
柄鏡形全面敷石系列	SB5325	SB5337
柄鏡形部分敷石・周礫系列	SB5316・(SB5319)・ SB5321・SB5338	SB5319・SB5324
非柄鏡形壁際(立石周辺)敷石系列	SB5317・SB5340	SB5314・(SB5340) ・SB5342
非柄鏡形炉周辺敷石系列	(SB5318)	
非柄鏡形非敷石系列	SB5343・SB5344	
類型不明	SB5336・SB6703	
竪穴状遺構	SB5315・SB9007	SB5339・SB5348
S B 合計	12 (14)	7 (8)

a～3c期以前1棟、3b～3c期1棟、4期1棟、時期不明4棟で、やや古手が多いようである。

B 居住形態の変異の背景

変異の背景 時期が解る範囲内では、後葉3c期には竪穴住居と柄鏡形敷石住居、非柄鏡形敷石住居、平地式住居が併存し、後葉4期には柄鏡形敷石住居、非柄鏡形敷石住居、平地式住居が共存する。時期未確定のもの動向が気になるところではあるが、現時点では、柄鏡形敷石住居の成立に伴い、従来倉庫として機能していた掘立柱建物が居住形態の1つに加わって平地式住居となったとも見て取れる。そこで注意されることは、構造上平地式住居が夏、竪穴住居が冬の居住に適するという知見である。もしそうであれば、逆に平地式住居が無かった時期は夏冬ともに竪穴住居が使われていたか、夏場は別の場所に居住したことになる。前者の場合、後葉末に向かう時期は気温が低下する傾向にあり、夏が従来より暑くなったため平地式住居に切り替えたとは俄には考えられない。また、後者は現状では証明が難しい。それでは3c期に発生し、4期には住居形態の主流になる柄鏡形敷石住居の機能との関係はどうであろうか。

敷石住居の機能 柄鏡形敷石住居の機能について論じた研究史を紐解くとまず、住居か祭祀遺構かという問題が主に論じられた時期があり、つづいて一般住居か特殊家屋かという論争があった。現時点での調査状況から判断するに、柱穴を持つ例が増え、さらに柄鏡形(敷石)住居が出現した時期に依然として竪穴住居が併存することや祭祀的色彩の濃い遺物が出土することから「なんらかの特殊な性格を帯びた住居」とするのが妥当なところであろうと考える。特に初期のものは、南関東を起源とする考え(本橋1995)と、甲信上州から南関東西の山よりの地域に同時多発したという見解(石井ほか1997)が出されている。また、上屋構造に関しては柄部を含めた全体に垂木が1点で交差する形態の屋根が架けられていたとする見解(笹森1977)をさらに進めて、入口から主体部にかけて遮蔽施設による2重の壁を持つ、より密閉性の高い構造が指摘されたことは注目される(秋田1995)。それでは今回屋代遺跡群で検出された初期柄鏡形敷石住居といわれるものはどうであろうか。

屋代遺跡群検出柄鏡形(敷石)住居の特徴 そこでまず第5章第2節1に示した、屋代遺跡群における柄鏡形(敷石)住居の諸施設について注目された点をおさらいしてみる。

- a. 床面の平石は集落の東方約2kmで採取された石英閃緑岩であり、挟み石は千曲川の河畔で採取される安山岩が主体である。
- b. 石を敷く場所が不統一であり、北村遺跡例から石の無いところに板が敷かれていた可能性がある。
- c. 炉は、SB5316・5321を除く全てが土坑炉→石囲炉、もしくは旧炉から「炉縁石の移動」行為を経た「燃焼部調節炉」という変化を経ており、両者とも壁面の被熱が極めて激しく、強力な焚き火は確実である。
- d. 柄部の脇に柱穴があるものと無いものがあり、また第一埋没土の様相から周堤が想定されるものもある。
- e. 周礫や床面に散乱した石の中から石棒、ミニチュア土器などの特殊な儀礼に使われたと推測される道具が集中的に出土することが多い。
- f. 住居の外にも強力な焚き火施設が数多く存在する。
- g. 遺跡が千曲川の沿岸に立地している。

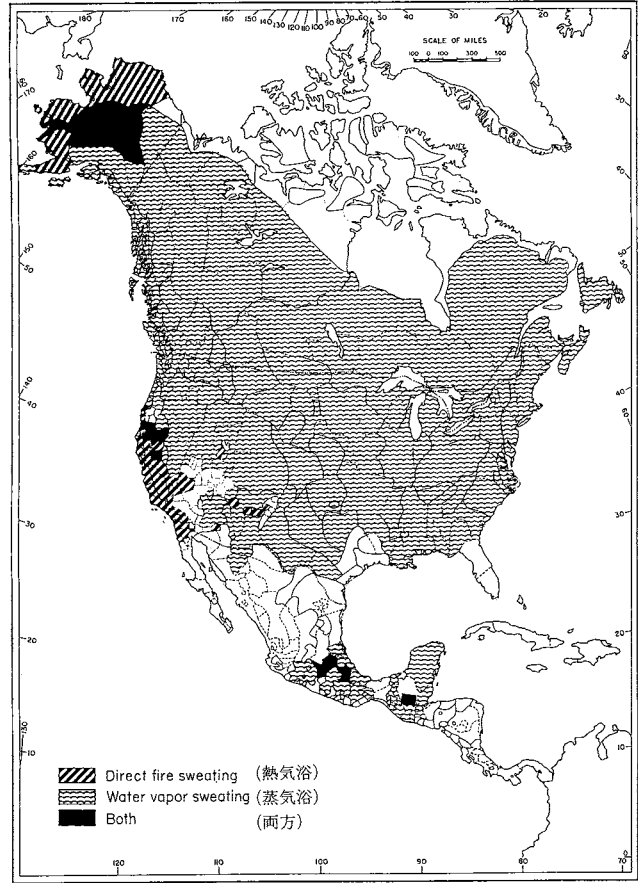
発汗浴小屋の可能性 このような屋代遺跡群での観察結果の中で、従来の観察で積極的に指摘されなかった項目として炉の特異性が挙げられる。そして、実際に柄鏡形住居の壁が2重構造であったとすると、鍋を架けることもできないくらい強力な焚き火^(註1)を密閉した住居の中で行う必要があったことになる。さらに一人の力では抱えることのできないくらいの重量の敷石を2kmも離れた石切場から運び込む必要性は、確実に、住居跡の機能に従来の竪穴住居とは異なる要件が加わったことを暗示していよう。調査時点

で筆者は、このような複合的な特徴に類似した施設として「発汗浴小屋」を考えてきた。時空を超越した両施設間の対比の前には更にいくつかのミドルレンジの手続きが必要であることは十分承知しているが、ここでは出現期の柄鏡形(敷石)住居を観察しつづけてきた視点から、「発汗浴小屋」を見直し、その特徴を検討していきたい。

発汗浴小屋の2類型^(註2) 発汗浴小屋が観察された初期の例に、鳥居龍三の千島アイヌの住居の紹介文の一節がある(鳥居1919)。「アイヌの小屋はほとんど地下に埋まって密封されているので、冬でも暖かい。しかも灼熱させた多量の石の上に水をかけ、部屋中に心地よい水蒸気を立ちこめさせるので、一段と暑くなる。こうして清潔を保つには身体を拭う以外の方法の無かった彼らに、たっぷりと発汗させるのである」。

さて、North American aborigines についてまとめた『INDIANS OF NORTH AMERICA』(H. E. Driver 1961)には2つの発汗浴方式が紹介されている。1つめは「Direct fire sweating」(熱気浴)で、火を建物の中に閉じこめて直接火に当た

って発汗する方式である。2つめが「Water vapor sweating」(蒸気浴)で、まず石を火で熱してその後に石の上に簡易的な屋根を架けるか石を施設の中に持ち込んで、その後に石の上に水をかけて蒸気を発散させ、その湯気で発汗する。後者は超自然的な力を求めたり病氣平癒を願う儀式のために行われるとされる。その分布は図84のようにメソアメリカを除いたほぼ全域である。一方、Navajoの発汗浴小屋でのより詳細な記述によれば(G. B. Page1937)、床には杉の樹皮が敷かれ、建物端に炉がある。建物の外で、近くの河原で集められた丸石が材木の山の中に何時間か入れられ強く熱せられた後に建物の炉へくべられる。その熱によって発汗浴が行われるのである。この方法は両者の中間であるが、熱気浴の一種である



SWEATING. Driver and Massey (H.E. Driver 1961を引用)

図84 発汗浴小屋の分布

表108 発汗浴小屋の諸類型

部族	生業	種類	規模	形	床面	熱源	目的	出入り口	性格	後の行動
マリコパ族	網漁採集	-	10.67×9.14	円形、草葺き、土で被覆	-	-	-	-	男子の社交場	-
ユロク族	-	熱気浴	3.66×3.35	竪穴式厚板小屋	厚板か平石	焚き火	網漁の成功に必要な儀礼として朝夕行う	川か海に面している	冬の成人男子の寝所を兼ねる(夏もしばしば使用)	川(海)で沐浴
フバ族	ドングリ・サク主食	-	5.49×4.57	壁の必要な場所を丸石で土止め	炉の周りから第2出口にかけて石敷き、その他は板敷き	-	-	川に面している	男子専用	川で沐浴
クイノルト族	サク常食とする狩猟採集民	蒸気浴	2.13×1.52	矩形竪穴式	-	屋外で熱した石を室内に持ち込み、薬草入り水をかけて蒸気発生させる	-	屋根に設けられ、川に面している	一種のゲームで、誰が熱気に耐えられるか競う。女性も利用するが回数少ない	川で沐浴
カフィラ族	狩猟採集民	-	3.66×2.44	小形楕円形	-	-	-	側方の地面	発汗浴専用	-
パイウト族	-	熱気浴	長径7.26	円形竪穴式土小屋	-	住居中心にある炉で火を焚く	狩猟その他激しい仕事の後	入口東方の板戸	年長者と未婚の男の家。集会所	手近な水流に入る
ミウォーク族	-	-	小形	ダンスハウスより小形の竪穴式土小屋	-	-	治療と狩猟の祈願	-	寝泊まりはせず、男子の発汗浴専用	-
ポモ族	ドングリ食の狩猟採集民	熱気浴	長径4.57~6.1	円形竪穴式土小屋で柴と土で覆われる	-	室内の焚き火の焰	-	側方出入り口	男子専用で、寝泊まりもする	-
アコマウイ族	-	-	9.14×6.1	竪穴式土小屋	-	-	-	-	-	-
インガリック族	夏は夏集落で漁労、冬は冬集落で越冬	熱気浴	-	方形柄鏡形竪穴	桁材の上に割木が平坦面を上にして敷き詰められる	人間が膝をついて張るほどの深さの炉穴に割り木を積んで火を焚く	-	柄部分に設けられている	未婚の若者の生活の場・祭礼場を兼ねる。炊事は行われない	-

(渡辺 1981 から必要項目を抜き出し、一覧表化)

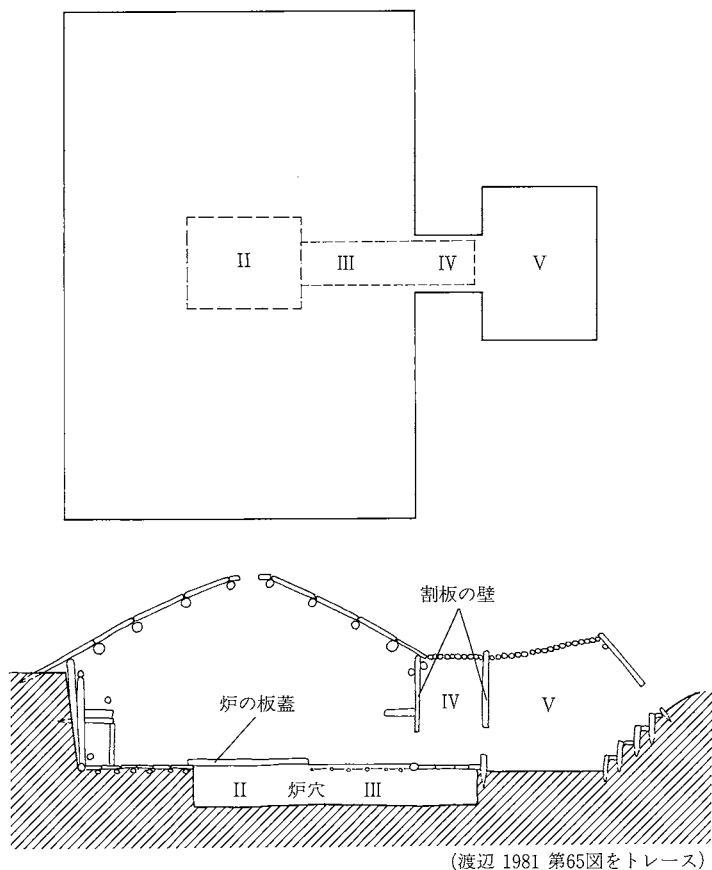


図85 インガリック族の発汗浴小屋

る(図85)。発汗浴の目的は単なるゲーム的なものもあるが、前述のようなマジカルな力を授かるための儀式的な要素が強い場合が多い。とりわけ狩猟儀礼と関係することから、男子が対象となるようである。また、施設の用途は発汗浴に限らず、成人男子の未婚の若者の生活の場や集会場を兼ねていることは特に注目される。また、発汗浴の後には通常、川に駆け込んで沐浴をするが、逆にいえば、発汗浴小屋自体が川から至近距離にある必要がある。北米の発汗浴小屋の多くは、たとえ生活の場を兼ねても男子に限られる点は、家族の生活の場である千島アイヌの場合とは異なる。

C 発汗浴小屋を擁する村の風景

発汗浴小屋の住人 第5章で問題提起した、北側炉縁石の移動による炉の縮小や土坑炉から石囲炉への変遷は、共通の上屋をもつ建物が発汗浴小屋から一般住居へ変化する過程に対応するのではないだろうか。端的に言えば、発汗浴を行わない折は普通の炉を持つ住居として使用していたというだけのことなのではないか。しかしながら、後葉3c・4期をとおして非柄鏡形の住居や、石が部分的にしか敷かれない住居も残存しているため、これらが家族の主要構成員が寝起きしていた場所で、発汗浴小屋は本来の目的のほかに若者小屋や集会場など特別な目的で使われた可能性も否めない。たとえば発汗浴小屋の可能性のあるSB5324では男性的な祭祀を象徴する石棒が5本密集しているのに対し、隅丸方形の竪穴住居であるSB5343からは女性的な祭祀を象徴する異形凹石が出土している(図86)。今後住居形態の組み合わせを更に広い地域で検討する必要がある。

夏と冬の居住 さて仮に発汗浴小屋が居住の場を兼ねていたとしても、冬場はともかくとしても夏場はどうだろうか。炉内で火を焚かない場合も、二重構造からなる密閉度の高さによって、外気の温度が高い季節の常態居住には不向きであったと考えられる。そこで、夏場は、折に触れて発汗浴を行う以外はマジカルな要素をもつ無人空間であり、居住の場は別に移ったと推測される。話は元へ戻るが、平地式住居こ

う。

発汗浴に早くから注目し、北米からユーラシアにかけて広く発汗浴の風習があるとし、発汗浴小屋についてまとめたのは渡辺仁である(渡辺1984)。氏は北米からユーラシアの北方にかけての竪穴住居の構造について膨大な資料を収集している(渡辺1981)が、ここでは特に発汗浴小屋のみに限定して彼の記述の中からいくつかの属性をピックアップして一覧表化してみた(表108)。表中「-」となっているものは、記載が無い項目である。構造的には竪穴式の土小屋が多く、床に石や板が敷かれている例が注目される。理由は述べられていないが、これは類焼の防止や保温、あるいは水の使用に起因するのであろうか。そして熱気浴の熱源は建物内の焚き火である。特にインガリック族の例では、「土坑炉」に類似した蓋付きの深い炉穴がみられ、ここに割木を積んで焚かれた強い火が熱源となる。

本例は構造が図示されており、柄鏡形を呈す

そがその候補たりうる。

屋代遺跡群の発汗浴小屋? 屋代遺跡群の柄鏡形(敷石)住居の場合、特異な炉が装備されているものは「Direct fire sweating」(熱気浴)との関係が注目される。特に土坑炉をもつ4期の住居は炉自体で強く火を焚き、熱くなった小屋に人がはいるような形態が推測される(SB5319・5324・5337)。一方それよりも浅い「燃焼部調節炉」をもつSB5325・5338は外の熱源を利用し、後に石を転がし入れるような可能性もあろう。周礫は、小屋の密閉性を増すために構築されたと解釈できるが、石に焼けたものが目立つことも事実であるため、このような転がし入れられた焼け石が残存しているような場合もあったのではないかと推測される。そして、発汗浴の後には戸口と別の小穴から外に駆け出し、川に飛び込んで沐浴する例が報告されているが(A. L. KROWBER 1925)、屋代遺跡群の場合、何れの柄鏡形(敷石)住居の場合も、入口と反対側の方向の先には大河千曲川があったと推測される。発汗浴小屋発生メカニズムは定かではないが、元来SB5332の奥壁土壇の石や、SB5335・5351の壁際の石、SB5345に代表される埋甕の蓋石のように石を多用する指向性があったことが注目される。そしてその背景の1つには気候の冷涼化とそれに伴う様々な困難を克服するための祭祀の必要性が推測されることは従来の研究成果になんら違うことはない。今回時間的な制約から構造上の検討が不十分であったことが否めないが、今後原書に基づいて表108の補足を行い、千曲川流域の初期柄鏡形(敷石)住居との比較検討を進めていく予定である。

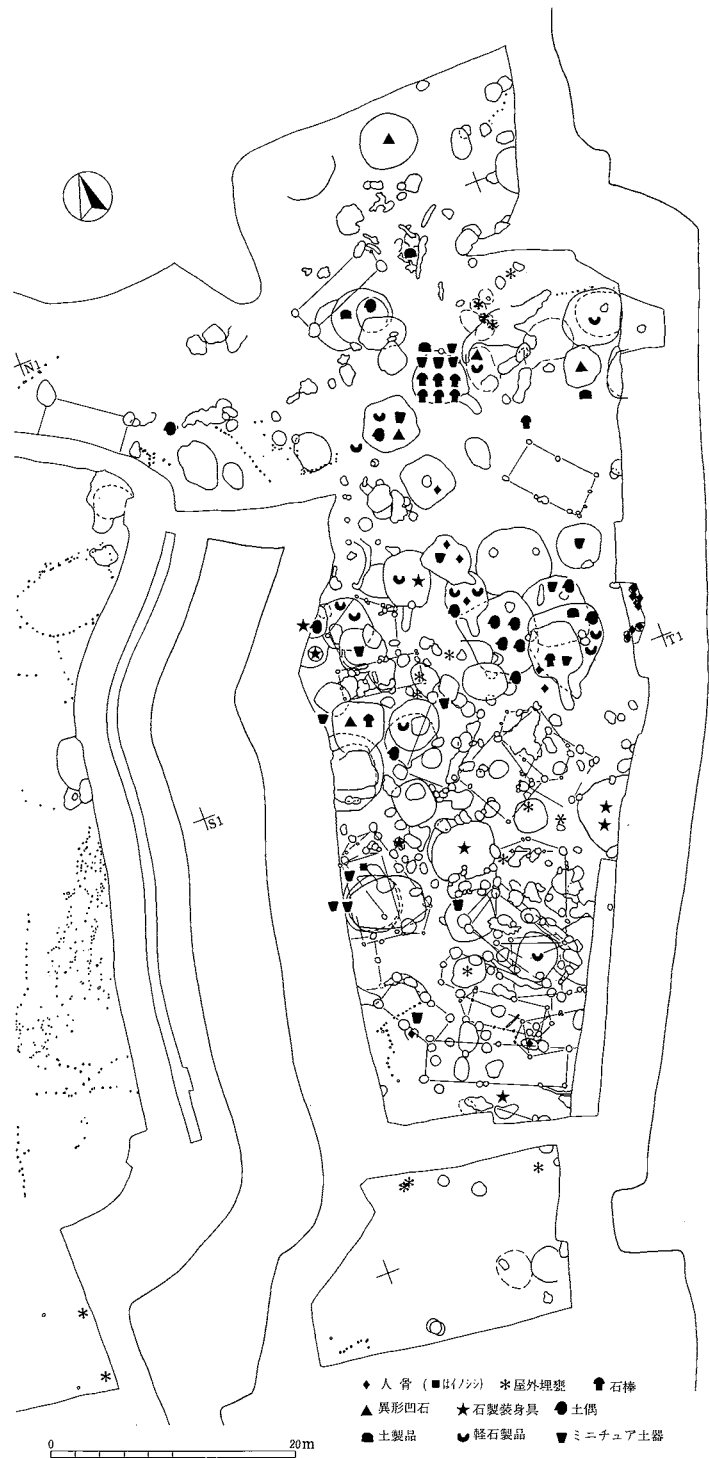


図86 屋代遺跡群中期後葉の墓・屋外埋甕と祭祀遺物の分布

(3) 居住外空間

A 焼土跡

焼土跡の時期 焼土跡の通時的な位置関係を概観すると(図28)、住居跡が密集する集落中央より南側に大規模なものが多い。そこで、焼土跡も埋土中の「一括土器」のおおまかな「土器概要」のうち確定率が高いもののみを()なしで記載し、他遺構との切り合い関係との照合によって時期を推測し、30%の時期

を捉えた。内訳は3a期1基、3a期以降1基、3a～3b期1基、3a～3c期2基、3b期2基、3b～3c期9基、3c期10基、3c期以降1基、3c～4期2基、4期以降1基となる。

焼土跡の機能 ピークを迎えた3c期の焼土跡の機能は、焼骨が検出された調理施設以外に、埋甕を囲む焼土跡群(SQ5507a周辺)や、逆に溝や遺物集中に囲まれた焼土跡(SF5121)など、祭祀の場での火の使用が推測される例が増加する。さらにSB5335 1層直上焼土跡群やSF5112のように強力な被熱痕跡が重層して確認されたものも認められる。これらがいずれも該期の住居の南側に位置する背景には、風向きを考慮したこともあつただろうが、例えばSB5319・5321とSB5335直上SF群、SB5316とSF5112というようなセット関係は、石を熱するために外で焚かれた焼き火跡と、その石を転がし入れた発汗浴小屋という関係を連想させる。

(4) 居住空間と居住外空間の境界

5章で検討した埋設位置から、埋甕は集落と外、あるいは住居の内外を画する境界的な役割を担っていたことが推測される。そこでここでは機能も含めた埋甕の集落内での役割に考察を進める。

A 埋甕の機能

内容物 埋甕の中から検出された遺物には、植物繊維状遺体(SB5316-1、SB5344-1、SB5351-4)、オニグルミの炭化核(SB5316-1ほか7軒、SQ5551・5542・5540)、硬骨魚綱骨片(SB5345-1、SB5338-2、SQ5551)、不明魚骨片(SQ5531)、獣骨^(註3)、大形削器(SB5325-6、SB5338-2)、他の土器などがある。このうち、特に注目されるのは埋甕底部の紐状植物遺体である。これは意図的に敷き詰められた可能性が高く、さらに脂肪酸分析を実施したSB5344内の遺体は、堅果植物由来の脂肪酸が多く検出された^(註4)。この植物遺体は本来広がっていたものが土で圧搾されたとも考えられ、何かを包む、もしくは敷く用途が推測できる。埋甕の中には、胴部下半を穿孔する例が多く見られるが、SB5351-1は口縁部下に径5cmの穴が、SB5344-1は口縁部下に当時の打ち欠き痕があり、底部付近に埋納されたものが外に出ないようにしつつも、何らかの意味を込めた打ち欠きを行った様子が窺える。また、打ち欠きの認められなかったSB5316-1からはオニグルミの炭化核が出土している。一方、同様にオニグルミの炭化核が出土した体部上半以下切断屋外埋甕SQ5551からは同時に硬骨魚綱の骨片が出土しており、同様に被熱?した硬骨魚綱は胴部下半穿孔埋甕SB5338-2で大形削器と伴っている。そしてさらに上記すべての資料内に不明獣骨片が含まれていた。これらは植物繊維状遺体とは異なり、他の住居跡埋土からも多数検出されている。

土器型式 屋内埋甕の土器型式は後葉2b・3a期は加曽利E系・圧痕隆帯文土器、渦巻多連文土器、後葉3b期に大木系が加わり、後葉3c期には再び加曽利E系・圧痕隆帯文へと変化する。1軒の住居内の組み合わせも同様の様相が見られ、特にSB5345では3系統の埋甕が埋設されていたように、排他的な組み合わせは無い。ただし、SB5318では大木系の埋甕が炉辺敷石により完全に封印された状態で検出されたことは特異な例である。

使用痕と機能 埋甕に穿孔が認められる例は、SB5338のように正置で垂直に埋設されている屋内埋甕に多い。後葉3b期以前の土器、もしくは後葉3c期でも柄部ではなく主体部に埋設された土器が該当する。後葉3c期の柄鏡形敷石住居の斜め埋設埋甕との間には、機能上の差異が推測される。また、屋外埋甕は、胴部下半もしくは上半が切断される例が多いが、SF群に囲まれたSQ5507aのように完形のまま埋められた土器も稀に認められる。推測をたくましくすれば、①植物繊維状遺体埋納土器も含めて正置で埋設され、穿孔や切断が認められるものは屋内の、それも居住空間で再生を願う祭祀に、②柄鏡形(敷石)住居の入口に埋設されたものは、外界と発汗浴をおこなう神聖な空間との境界の祭祀に、③火床の側もしくは火床に取り囲まれて埋設された屋外埋甕は、火を使う集落全体の祭祀に、④これら以外集落主体部からや

や離れた空間に一部を切断した状態で埋納されたものは、集落外と集落内の境界の祭祀などが推測されるが、さらに科学的な証明の手続きが必要であろう。

時期的には、集落の開始期から南西隅の境界を示す埋甕が埋設されていたが(④)、3c期になって集落内での集落全体の埋甕祭祀が盛んになり(③)、それが大型化したことにより、3c～4期には集落の南北隅に特別の祭祀空間が形成されたと考えられよう(③)。そして集落の終焉時、その周りでは土器を壊す形態の祭祀が活発化したのではないだろうか。

(5) 縄文中期後葉における時期的な集落景観の変遷

A 自然堤防の安定化と集落の形成

縄文時代中期前葉、千曲川の急速な活動によって形成された微高地は、中期中葉～後葉にかけて堆積と地表面化を繰り返しながら、やがて緩やかで安定的な居住空間を形成していく。集落内に運び込まれた植物遺体群から推測される周辺植生のうち、木本はヒノキ属、カヤ、オニグルミ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、キハダ、ケヤキ、ヤマグワ、カツラ、トチノキ、ミズキ、カエデ属、アワブキ属、ブドウ属、ニワトコ属、草本は、カラムシ属、ギシギシ属、タデ属、アカザ属、マメ科などが同定されている。集落内にはギシギシ属やタデ属などの乾燥した環境を好む雑草が繁茂し、周辺には主に落葉広葉樹林が広がるような景観が復元されようか。これに対し、集落南端から約990m南の更埴条里遺跡J・I地区ではヨシ属のプラントオパールや湖沼浮遊生指標種群や湖沼湿地指標種群、中～下流生河川指標種群の珪藻が出現していることから、ここが水深のある沼であったことが解っている。

このように屋代遺跡群の縄文中期集落は千曲川と湖沼で挟まれた氾濫低地内の微高地に形成され、その立地は落葉広葉樹林帯の中の動・植物資源を利用した八ヶ岳・浅間山麓の中期集落よりも、湖沼資源により依存した縄文貝塚集落群に類似している。

B 集落の時期別景観

① むらの始まり(後葉2a期)(図87-1))

XIII-1層上面は少数の土坑や焼土跡から短期的な滞在地と考えられるが、この直後、遺跡は再び、シルト・砂の堆積層であるXII-3層に覆われる。ここに再び人々が戻るのが中期後葉2b期である。特にXII-3層上面埋設土器からここが当時地表面であったことが解る。遺構はSQ4803 a・b屋外埋甕と土坑などのみで、活動は全般に低調である。土壌の黒色化もほとんど進んでいない。この2基の埋甕の両方からは、粗い砂が検出されているが、周辺の堆積層中には見られないため、氾濫による埋積物ではなく、埋甕埋設に伴う儀礼的要素が考えられる。また、屋外埋甕の設置位置からは未発掘の東側に集落が営まれていた可能性もあるが、詳細は不明である。

② むらの発展(後葉2b期)(図87-1))

集落の景観 XII-2層下面検出遺構のうち、より下部で検出された遺構が多い。居住形態は竪穴式住居で、SB5341・5352・5350などから構成される内帯とSB5322・9002などから構成される外帯の2重構造をとる。SK9070・9071などの大型廃棄土坑や、ST5122の環状柱列が付随することはこの時期早くも集落の安定化が進み、恒常的な村としての機能が始まったことを示す。住居はSB5350第一段階→第二段階、SB5352→SB5313 b、SB9002→SB9003のように同じ場所に少し改変を加えて住み続けるパターンが見られる。住居内の炉は石囲炉で、入口には埋甕がほぼ垂直に埋められる。

後葉2b期の生業 住居跡埋土の1/4を全て採取して選択的に水洗したSB5341からは、オニグルミ核9点、クリ果皮3点、ニワトコ属種子3点、コイ科椎骨2点、イノシシの各部位19点、シカ3点が出土した。まさに森林資源と河川資源を利用した生業活動が開始された。また、炉内からもクリの炭化材が出土してお

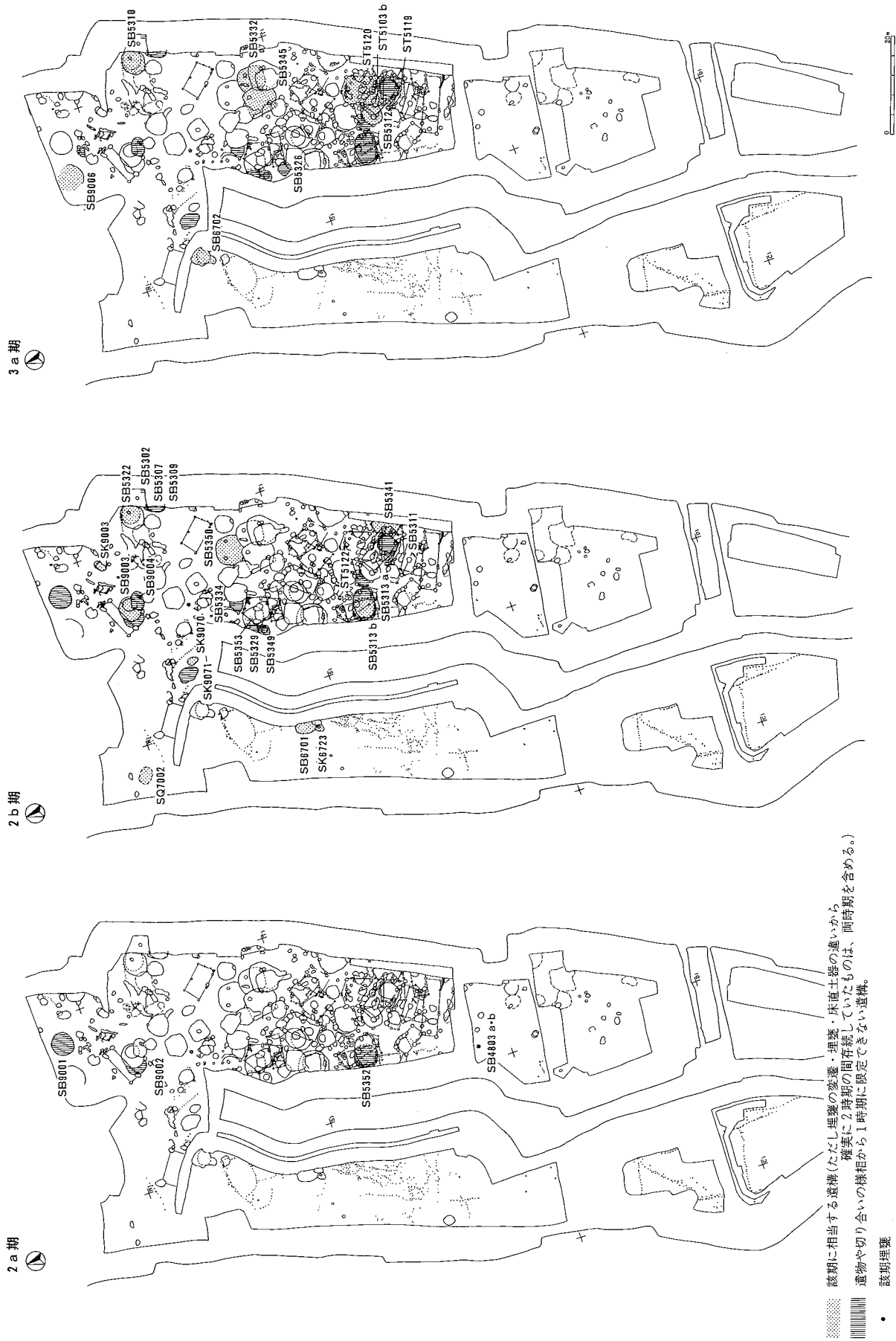


図87-(1) 屋代遺跡群④～⑥区集落変遷図

該期に相当する遺構(ただし土器の変遷・埋蔵・床直土器の違いから
 確率に2時期の間存続していたものは、両時期を含める。)
 遺物や切り合いの様相から1時期に限定できない遺構。
 該期埋蔵

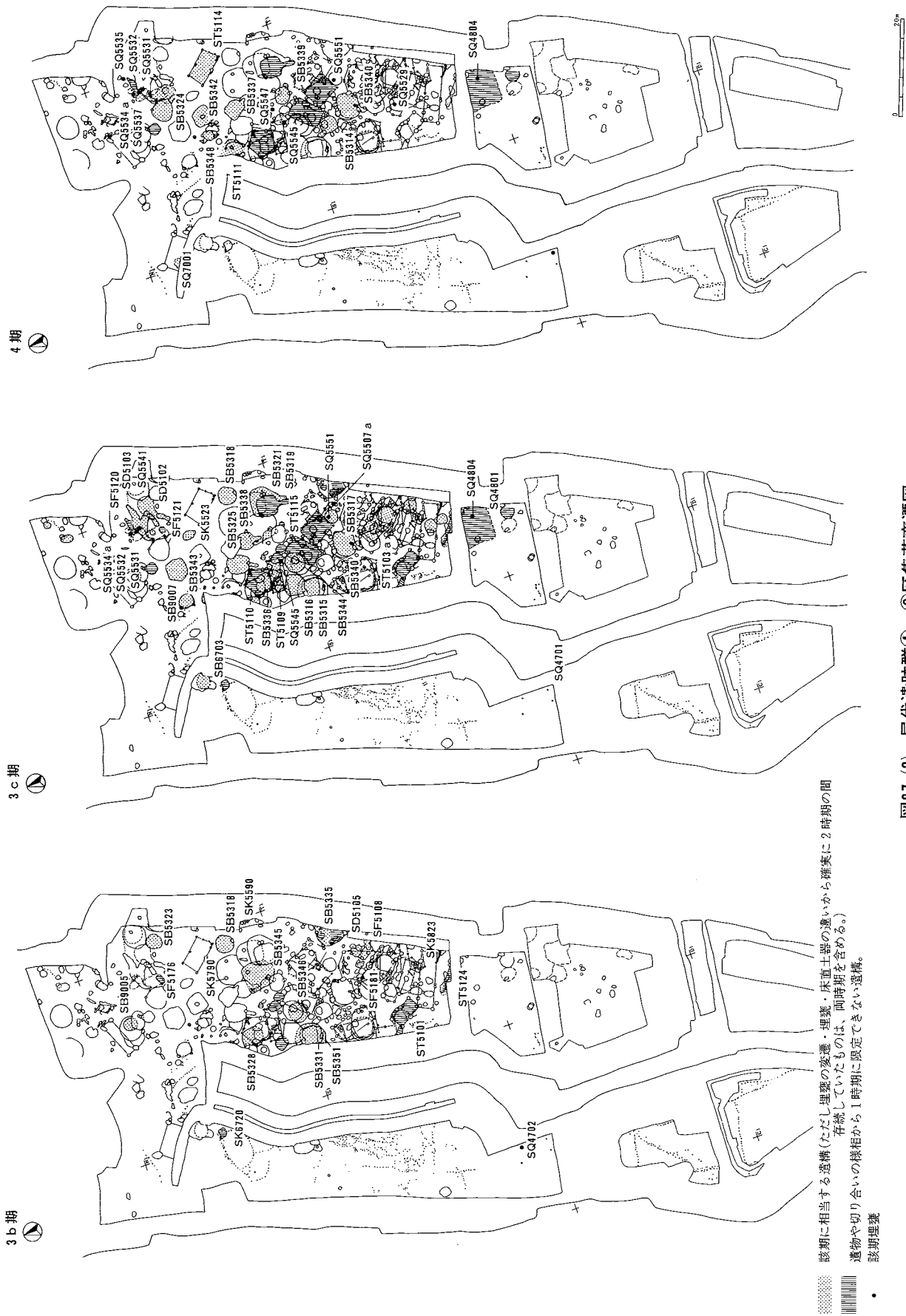


図87-(2) 屋代遺跡群④～⑥区集落変遷図

り、クリは食用と同時に建物の用材や燃料材としても使われていたことが解る。該期の動物骨はSB5307からかなり集中して検出されたが、イノシシ、シカ以外にキツネ、ガンカモ科や種不明の鳥骨が出土している。石器はこの時期少ないが、黒曜石製の石鏃が目立ち、弓矢獵が活発に行われていたことが解る。

後葉2b期の土器 埋甕の土器型式は加曾利E系が多く、圧痕隆帯文土器も見られる。大木系は炉中や土坑内、住居の床下からほぼ完形の状態で出土する例が多く、埋甕には成り得ない。ただし、底部と突起の一部のみが打ち欠かれて出土する様子は、単なる廃棄ではなく何らかの祭祀的な意味が考えられるが、埋甕祭祀とは異なる系統を考慮する必要があるのかもしれない。前段階で埋甕として登場し、集落の主体になるかに見えた唐草文系土器は極少数に止まる。

遠隔地石材 石器石材は、黒曜石・ガラス質安山岩・チャート・粘板岩が主体を構成する。チャートや粘板岩は、千曲川に流れ下った転石を採取することも可能と考えられる。それ以外は素材の搬入、もしくは直接採取が必要であったことになろう。これに対し、SB9002の透緑閃石岩製の磨製石斧は、製品として搬入された可能性も考慮する必要があるであろう^(註5)。透緑閃石岩製の製品は中期前葉から搬入され、そのルートに沿って継続的にもたらされたものとみられる。中期後葉にあつては、大木式の類似性から、上越地方を通過していた可能性が浮上している。

③ 安定化と漆文化（後葉3a期）(図87-(1))

集落の景観 土器型式から分けることが難しい時期であったが、一応の傾向性から1時期を画した経緯があり、全体の構成はやはり2b期を継承している。住居は、竪穴住居のみである。周溝をもつ掘立柱建物のST5103bが該当する可能性があるが、SB5312と重なる点や方向性から、むしろ次の時期に送るべきかとも考える。この時期、竪穴住居に特徴が見られる。SB5332では奥壁に土壇が構築され、SB5313aは入口付近に炉をもつ楕円形^(註6)を呈する。

漆工芸の継承 SB5312では、床面から内面底部に漆が付着したミニチュア鉢形土器が出土している。漆の使用自体は中期前葉から確認されており、この地域の人々が漆技術を継承していたと考えられる。また、同住居では黒曜石の碎片集中と鹿角が検出されている。黒曜石製の石器は、原礫・石核・完成品・剥片・碎片ともに集落内で出土しており、集落内で、原礫から段階的な石器作りが行われていたことが解る。

SB5311の埋土中資料 SB5311では調査時に住居1/4分の全ての土壌を採取し、整理時に各土嚢袋から2000ccずつ二次サンプリングを行い、52000ccの水洗選別を実施した。その結果、植物遺体としては小麦属胚乳^(註7)、キビ胚乳、イネ科炭化胚乳、オニグルミ核、クリ果皮、カラムシ属果実、ギシギシ属果実、タデ属果実、サナエタデ近似種、アカザ属種子、キハダ種子、マメ科種子、スミレ属種子、ミズキ核、ニワトコ属種子が検出された。これらの中には食用をはじめとする有用植物として利用されたものも多く、注目される。魚骨ではドジョウ科1点、コイ科4点、サケ科2点が出土し、動物骨ではイノシシとニホンジカが確認された。またヤスの先端と考えられる角器が1点確認され、河川における漁撈活動が継続的に行われていたことが解る。

④ 南北文化の交通路（後葉3b期）(図87-(2))

集落の形態 この時期には集落中央にSB5345・5351・5335の大形の住居が現れ、それらの間にやや小振りの住居が点在する。竪穴住居の形態は大形・小形を問わず主軸がほぼ南北方向で、南側が張り出す5角形を呈するものがみられ、特にSB5345は壁板材の残存からプランが明確である。これに対し、やや主軸が東に振れるSB5346は、南側に小柄部が張り出し、主軸方向とともに後葉3c期の柄鏡形(敷石)住居展開への先駆的な存在となっている。さらに、SB5335とSB5351で階段状竪穴部壁構造が見られ、壁際に石が置かれる。住居跡の形態は前時期に比べて確実に変化を遂げている。

この時期は屋外での焚き火も活発化する。最も顕著なものはSB5345で、家財道具の片づけが終了した時点で焼却行為が行われている。SB5335でも埋土内に、幾重にも重なった火床が形成され、巨大な屋外火床であるSF5108もこの時期である。調理や各種の加工作業に伴う以外の強力な焚き火は、祭祀に伴うものや、後続期の発汗浴に用いる火種の他に、狼煙が考えられる。屋代遺跡群の場合、千曲川河川交通の中継地点として機能していた可能性が高く、河川を航行する丸木船の目印として狼煙をあげたような可能性はないだろうか。いずれにしても火床自体の詳細な観察と実験が必要であろう。

墓は、集落南側のSK5823、中央群のSK5790と東側トレンチ内のSK5590が見られ、墓域が特に固定化されていなかったことが解る。

土器系統の変異 SB5345の埋甕は、頸部以上と胴部下半を打ち欠いた大木9a系、混和材から関東方面からの搬入の可能性がある加曾利E系、石蓋をもつ巨大な圧痕隆帯文土器が並ぶ。住居は柱の配置から2度の立て替えが予想され、大木系と圧痕隆帯文土器の時期差から、改築に伴って後者が追加された可能性がある。埋土中出土土器の系統別比率は圧痕隆帯文1に対し大木系：加曾利E系がそれぞれ2倍を占める。SB5328では大木系が加曾利E系をわずかに上回り、前者が集落全体としても主体となる。

新出住居形態の系譜 階段状竪穴部壁や五角形プランの系譜を考える場合、信濃川中流域で指摘されている「卵形住居跡」が注目される(阿部1998)。「卵形住居跡」と呼ばれているものの中には奥壁が弧を描き、楕円形に近い形態をとるものと、奥壁が平坦で入口部が張り出し、五角形に近い形態をとるものがあり、階段状竪穴部壁構造は特に前者に多いようである。柱穴配置も含めて屋代遺跡群例との類似点が多い。この時期、大木系土器が増加するが、住居形態の変革の背景も千曲川から南下してくる大木系の情報を取り入れた結果であったのではないだろうか。ただし炉形態などは中部高地との共通点もあるため、今後の課題としたい。

柄鏡形(敷石)住居の端緒 このような住居跡群の変革の延長線上に位置するのが小形の柄部を持つSB5346と考えられる。というのは、同住居の主軸方向が次期に盛行する柄鏡形(敷石)住居であるSB5316・5325と類似してくる上、3b期に盛行する埋甕の石蓋を広げる形で、主体部南側のみに石が敷かれているからである。ただし石の90%は扁平な川原石で、柄鏡形(敷石)住居特有の閃緑岩平石は蓋石を含めて2点だけである。そして同住居の埋甕がほぼ完形の圧痕隆帯文土器の上に胴部下半が切断された大木系土器が覆い被さる点は、まさに柄鏡形敷石住居の出自を物語るようである。

3b期の生業 SB5345炉中やSB5328・5335からは、若年個体も含むイノシシやニホンジカがまとまって出土している。種実ではオニグルミの炭化核以外は目立ったものはないが、石器では打製石斧が増加し、3c~4期へと連続していく。3c~4期にかけては、敷石住居が普及し、床標高の高くなる傾向の中での打製石斧の増加は、施設構築以外の掘削、例えば根茎類の採集などに使われる頻度の高さを示すとも考えられるが、使用痕の詳細な観察が必要であろう。

⑤ あらたなる居住形態の着地(後葉3c期)(図87-(2))

集落の変容 従来の竪穴住居を主体とした集落構造が崩れるのがこの時期である。竪穴住居と祭祀施設から成る北群、南側に入口が配置される柄鏡形(敷石)住居が半円を描く中央群、竪穴住居と平地式住居からなる南群に分けられる(図88)。時期の明確でない平地式住居の中にはかなりこの時期に相当するものがある。柄鏡形(敷石)住居は、主軸の方向からSB5316・5325→SB5321・5338→SB5336へ変遷する可能性が高い。屋外での焚き火は相変わらず盛んに行われ、その中に埋甕に伴う祭祀的な要素が加わる。屋外祭祀場は集落北側(1群)、南側(4群)が対峙し、集落内に個別の小祭祀場が分布する(2・3群)。時期が限定された墓壇は無いが、SB5338床面で埋葬人骨が検出され、屋内葬が取り入れられている。また、南側の平地式住居周辺は、建物の廃絶後から次の4期にかけて、集落全体の廃棄場として機能していたよ

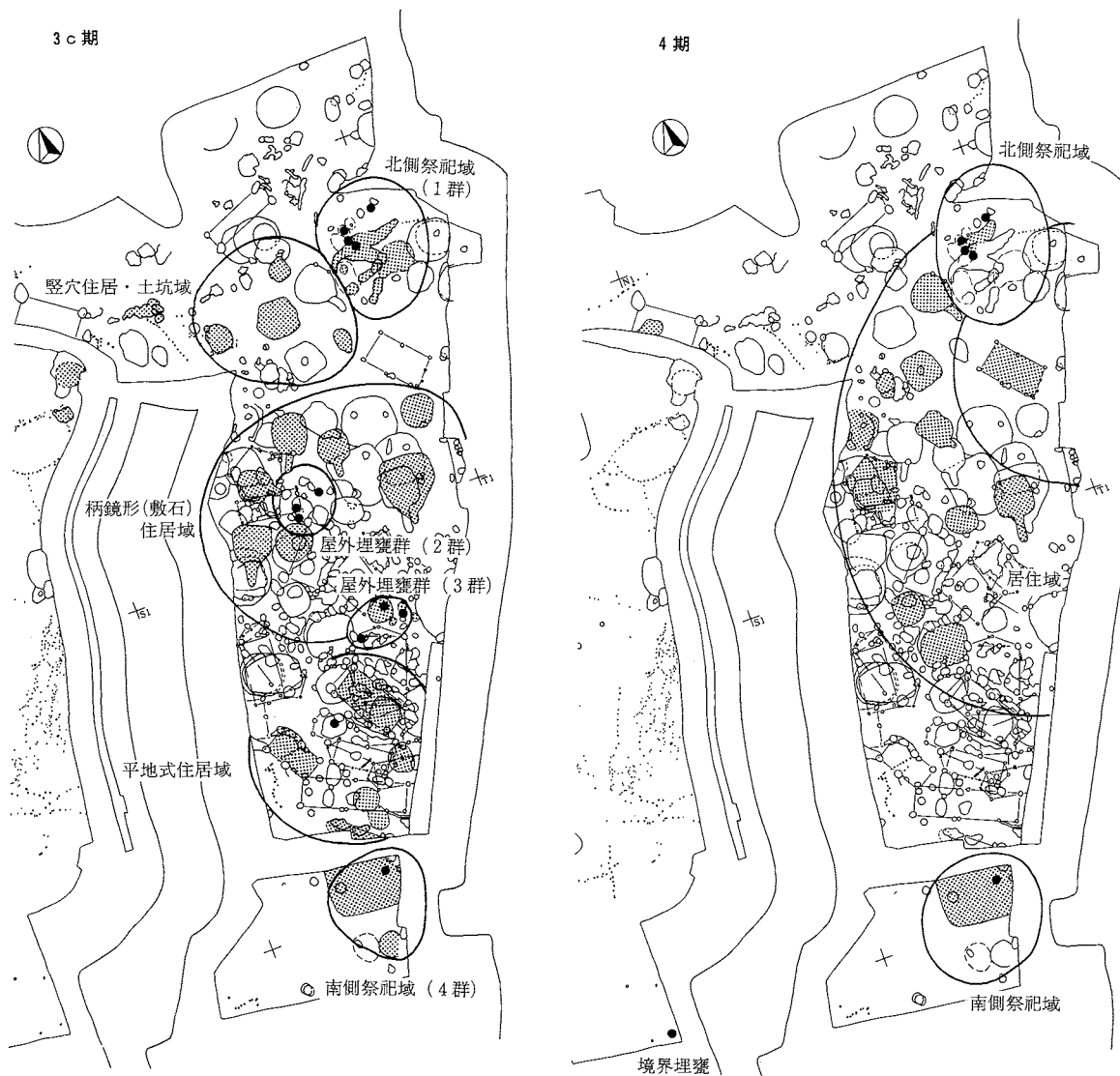


図88 3c・4期の集落構造

うである。

集落の祭祀 この時期、集落内での祭祀も複雑に分化する。前述した屋外埋甕の祭祀、住居主体部埋甕祭祀に加え、外へ突出した入口部の祭祀が加わる。住居毎に土偶・異形凹石と石棒の出土状況を見ると(図86)、顕著な集中がみられるのは、石棒6点と三角罫形土製品が1点が集中する4期のSB5324で、これに対峙するのは土偶1点と異形凹石が出土した該期のSB5343である。この中間は、SB5324と同一の石材と推測される有頭石棒と異形凹石が出土したSB5316、三角罫形土製品と土偶が出土したSB5321である。ただし周礫中で出土したSB5324石棒以外は埋土中に廃棄されたものであるために、祭祀実体を反映しているものとして即断はできないが、4期へ向けて祭祀が活発化していく様相は窺えよう。

生業の変化 該期の動物遺体としては、SB5316炉内からサケ科の歯とコイ科椎骨が出土したが、種名の解る獣骨の住居跡内からの出土は極めて少ない。この状況と呼応するかのようにこの時期石鏃の減少が顕著であり、弓矢による狩猟活動が低調であったと推測される。植物遺体はSB5316埋甕内からオニグルミ核、カラムシ属果実、トチノキ種皮、マメ科種子が出土し、これらが食用などとして利用されたことが解る。特にトチノキ種皮は遺跡全体でもこの1点のみであるが、該期は調理具の出土量が各時期を通じて最も多く特に、SB5316で磨石類69点、石皿類26点、SB5336で磨石類16点、石皿類27点と群を抜く。この背景に粉碎、灰汁抜きなどの工程を必要とする果実利用の高まりがあったのではないだろうか。また、仮に

狩猟が不活発化したとすれば、それは柄鏡形住居での狩猟儀礼の始まりや、植物食への依存と何か関係はありはしないだろうか。

土器文化の変貌 この時期になると加曽利E系と圧痕隆帯文土器が出土土器の主体を占めるようになり、埋甕もそのような傾向をもつ。ただし、SB5325の埋甕1や、SB5344の埋甕のように大木系土器の要素をもつものも認められる。また、大木系土器が独自の変容を遂げ、胴部隆帯文土器に変貌したとも考えられる。ただし、大木9a式に類似させた形態は殆ど作らなくなっていったようである。

石器石材の変化 この時期石器石材にも顕著な変化が見られる。小形石器の素材としては、黒曜石の半減とチャートの増加、大形石器の素材としてはガラス質安山岩の減少と粘板岩の増加^(註8)である。この傾向は4期へと連続する。転石採取か原産地採取かという問題が残るもののこれは小県～佐久地方からの石材流通網の一時的な停滞とも捉えられる。これに対し、磨製石斧や石製装身具の石材は従来の透緑閃石岩や角閃岩に加え、SB5325ではヒスイ輝石岩製の装飾も出土しており、原産地遺跡との交流が逆に活発化したようである。

⑥ 集落の終焉（後葉4期）（図87-(2)）

集落の景観 4期になると柄鏡形（敷石）住居、非柄鏡形住居が一定の間隔をおいて中央にまとまる。特に柄鏡形（敷石）住居は掘立柱建物を中心に半円を描き、調査区外に連続する（図88）。前時期のSB5321の系統上にSB5319が構築され、4期へ継続するため、この時期に新しく作られた柄鏡形（敷石）住居はSB5337とSB5324で、いずれも主軸がやや西に振れる。類似した入口方向をとるものに非柄鏡形住居のSB5343と掘立柱建物のST5114がある。一方五角形住居のSB5340や、隣接する隅丸方形敷石住居のSB5314の主軸はさらに西に振れてほぼ東西を向く。また、柄鏡形（敷石）住居や非柄鏡形住居の一部には、隅に立石を有する例が増加する。その他の施設としては前時期に集落南北に作られた屋外埋甕の祭祀場が継続し、周りに該期の土器が割り捨てられるようになる。また、集落内外の境界にSQ4701が埋設される。屋内埋葬は前時期に引き続き行われ、SB5319・5342で見られる。さらにSB5337では床面敷石上に人間の頭蓋骨を置くような、特異な祭祀が始まる。

柄鏡形住居での祭祀 SB5324の石棒や土製品、ミニチュア土器の集中からも解るように、より強力な熱気浴の風習に伴って、住居の性格も変化したようである。3c期には柄鏡形住居からは土偶・石棒の双方が出土する例も見られたが、4期になると石棒に限られてくる。

終末期の生業 該期の植物遺体としてはオニグルミ核、マメ科種子、ブドウ属種子が検出されている。動物遺体としては、魚骨が確認されず、獣骨もSB5340を除いてはSB5319とSB5339でイノシシが1点ずつ出土したのみである。SB5340では取り上げ67点のうち、30点がイノシシ、3点がシカと確認されたが、四肢骨は全く無く、全て顎骨と歯であることは特異な状況である。イノシシの頭蓋骨のみの埋納はSK5602で確認されているため、頭蓋骨を切断して儀礼の中で取り扱う傾向があるようである。一方、この時期の土器群が廃棄されている遺物包含層からは四肢骨も含めたイノシシ・シカが出土しており、石鏃もこの時期全体ではかなり多いため、狩猟自体が低調であったわけではない。

集落の消滅 集落最末期の柄鏡形住居であるSB5324の柄部分を取り壊した後に、人々は村を去っていった。その後は長い間一時的な逗留地になりこそすれ、再び人々がこの地に戻るのには弥生時代後期に下る。本時期まで動植物資源は比較的豊富であり、遺物量も多く、少なくとも集落の諸活動が低迷したことに起因する移動ではなさそうである。そこで考えられる要因としては千曲川の河川活動が活発化し、人々に脅威を与えた可能性が推測される。集落を埋めている直上のシルト～粘土層のXII-1層は、⑤a区北壁の植物珪酸体結果から、それ以前には見られなかったヨシ属、ウシクサ属が出現し、湿地的環境に変化した様子が窺える。仮に後葉3c～4期に展開した発汗浴小屋の出口が川の方向を向いていたとすれば、住居

の主軸方向が徐々に北から西へ振れていく過程は、集落からみた千曲川の方向の変化を示し、活発な流路の移動が垣間見られるようである。屋代遺跡群の人々にとって生活のよりどころの一端であった千曲川は、逆にいつの時代にも脅威でもあったことが推測されよう。

引用・参考文献

- 阿部昭典 1998 「縄文時代の卵形住居跡」『新潟考古学談話会会報』第19号
- A. L. KROWBER 1925 『HANDBOOK OF THE INDIANS OF CALIFORNIA』SMITHSONIAN INSTITUTION BUREAU OF AMERICAN ETHNOLOGY BULLETIN 78
- 秋田かな子 1995 「柄鏡形住居の一構造」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集
- 石井寛ほか 1997 『敷石住居の謎に迫る 記録集』神奈川県埋蔵文化財センター・働かながわ考古学財団
- 上田典男他 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4 松原遺跡 縄文時代』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 川崎 保 1999 「第14章 成果と課題」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書20—東部町内—』長野県埋蔵文化財センター
- G. B. PAGE 1937 「THE NAVAJO SWEAT HOUSE」『NEW MEXICO ANTHROPOLOGIST』
- 笹森健一 1977 「縄文時代住居址の一考察」(上)・(下)『情報』2・3
- 鳥居龍藏 1919 「考古学民族学研究・千島アイヌ」『東京帝国大学理科大学紀要』第42冊第1編
- H. E. DRIVER 1961 『INDIANS OF NORTH AMERICA』THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS
- 本橋恵美子 1995 「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集
- 渡辺 仁 1981 「竪穴住居の体系的分類、食物採集民の住居生態学的研究 (I)」『北方文化研究』第14号
- 渡辺 仁 1984 「北方系狩猟採集民のすまい」『日本のすまいの源流』文化出版局

註

- 1 炉の使用実験から、屋代遺跡群での火床の形成の様相から炉内部に土器を架けずに強力な火を焚いていたのではないかという指摘を、翠川泰弘氏からいただいた。
- 2 SWEAT HOUSE 関連の文献収集には山田しょう氏に大変お世話になった。ただし時間的な制約から未消化の部分も多い。今後さらに北米の様相の検討を進めた上で屋代遺跡群例との比較を行っていきたい。
- 3 水洗された土壌内容物の仮分類中に、部位不明の焼けた骨片が、多数の埋甕の中から見つかった。
- 4 SB5316・5323・5344、SQ5534 a・SQ5551の埋甕の脂肪酸分析を、株式会社ズコーシャに依頼した。ただし包含層全体に、高い密度で炭化物・焼土・焼骨片などが散在しており、単純に埋甕内の土壌の分析だけで判断することは危険であったため、すべての試料に、同一条件で採取した埋甕外の、埋甕から数十cm離れた地点の土壌を添付して送付した。その結果、「ヒトの胎盤試料とも類似している」ものや、「動物遺体または動物由来」の脂肪が残存しているものが指摘されたが、いずれも埋甕の内双方に該当し、特に埋甕内のみで脂肪酸の値が高いなどの見解は得られていない。今回、紙面の都合上割愛したが、分析報告は『屋代遺跡群から出土した土器に残存する脂肪の分析』として、当センターで保管している。
- 5 今回未検討であった包含層出土石製遺物中に、原石・未製品・碎片があるかどうかを確認する必要がある。
- 6 信濃川中流域で検出されている卵形住居(阿部1998)と関連する可能性がある。
- 7 特に小麦属胚乳、キビ胚乳、イネ科炭化胚乳に関しては、今回は1点ずつであったが、極めて注目される。この結果を現在手元にある残りの土壌の水洗選別に生かしていく所存である。
- 8 粘板岩の産地としては先第3系の関東山地が川崎保氏によって指摘されている(川崎1999)。本遺跡も母岩も含めて多量の石製遺物が出土しているため、入手方法の実態の解明を今後の課題としたい。

第3節 縄文時代の環境と開発

1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史(4)

国立歴史民俗博物館歴史研究部

辻 誠一郎

縄文時代の生態系 縄文時代前期から晩期にかけて、発掘調査域では人の活動の痕跡が確かめられている。とくに屋代遺跡群の⑤区においては、縄文時代中期を中心とする竪穴住居など居住を示す遺構群が氾濫によってもたらされた洪水堆積物に埋積されており、千曲川流域の氾濫低地における人の活動が明瞭に残されていた。人の活動を主体に据えたとき、氾濫低地の環境はどのように位置づけられるであろうか。堆積環境とそこに成立する植生を考えてみよう。

氾濫低地にある屋代遺跡群一帯の堆積物からみた縄文時代は、基本的には河川の営力によって埋積が急速に進んだ時代であったといえるが、細かく層相を見ると、縄文時代前期のシルト層堆積期、縄文時代中期の有機質シルト層堆積期、縄文時代後・晩期の砂・シルト層堆積期の三つの時期におおむね分けることができる。この中で縄文時代中期は、有機物量がとりわけ増大するわけではないが酸化電位下にさらされやすいか、植生をもった景観であった可能性を示唆する有機質シルトの定常的な堆積があり、相対的ではあるが住環境として安定していたと見ることができる。これはまた自然堤防の固定期に入ったことも併せ考えると、氾濫低地での人の活動を促した一因と考えることができる。人の居住は、多数の竪穴住居そのものがものがたっており、その中にクルミ属に同定される立ったままの埋没株が見いだされていることから、居住域に木が生育していたことも明らかである。

植物遺体群からはオニグルミ、ケヤキ、コナラ亜属コナラ節、クリ、カツラ、クマシデ属といった落葉広葉樹を主とする温帯落葉広葉樹林が周辺域に存在したことが分かっているが、これは夏の降水量も冬の降水量（積雪量を含む）もそれほど多くない乾燥した土地環境を反映している。もし冬の積雪量が多く、年間の降水量がおおむね1600mmを越えるような湿潤な環境であったなら、ブナが落葉広葉樹林の主体となっていただろう。このことは現在の善光寺平南部とより上流の千曲川流域の環境と類似していて、縄文時代から現在まで降水環境が大きくは変動していないことを示している。

オニグルミやケヤキ、コナラ節などからなる森林植生は、武蔵野台地に接する東京低地縁辺の中里遺跡や大宮台地縁辺の川口市赤山陣屋跡遺跡の縄文時代中期から後期にかけての森林泥炭からの復元からもよく知られており、低地といった幾分湿った環境においても成立する。気候的に乾燥した環境ではあっても、氾濫低地といった環境では成立するのである。したがって、人が活動していた一帯、あるいは人の居住域に、そのような落葉広葉樹林が成立していた可能性は十分にあるのである。

屋代遺跡群の竪穴住居内の堆積物からは、クリやオニグルミなどの植物遺体群とともに、コイ科やサケ科などの動物遺体群も検出されており、少なくとも食料資源としては河川と森林植生の双方の利用システムが考えられる。ここで屋代遺跡群の人主体一環境系という生態系の構造を考えると、縄文時代の人社会にとって、千曲川という河川と氾濫低地における落葉広葉樹林は主要な環境要素として位置づけることができる。屋代遺跡群の立地を考えたとき、これら主要な環境要素が近距離の範囲に存在し、かつ地形的に固定期に入っていた自然堤防一帯に居住域が存在することは偶然の一致とは考えにくいのである。

ところで、資源として有用な落葉広葉樹林が、まったく人手のかからない植生であったかどうかは分からない。というのは、クリもオニグルミも、人手をかければ意図的にいくらでも選抜淘汰が可能である

し、高度な技術なしでもクリやオニグルミの純林をつくることはさほど難しくはないからである。加工木材にクリやオニグルミが含まれていたように、用材資源としても利用したならば、単に自然の資源を一方的に利用するというのではなく、里山の資源維持のように人為的に維持したことも考慮しておかなくてはならない。

縄文時代の人と植物のかかわり 弥生時代以降の遺構や河川・溝から検出された植物遺体群に比較すると、縄文時代のそれは、栽培植物としての穀類やモモなど果樹をほとんど含まず、雑草の種類もさほど多くない。植物遺体群を検出した堆積物が主として竪穴住居内であったことも関係しているのかも知れないが、それにしても分類群と種数の違いは明瞭である。このことは人と植物のかかわりが大きく異なり、また人主体—環境系という生態系の違いを反映している。

植物遺体群の中で際立って特異な産状を示すものはオニグルミの核である。オニグルミ核の産出例はもっとも多く、住居内と埋甕内からはほぼ同件数が確かめられている。埋甕内から産出する植物遺体にはその他に数種があるものの、オニグルミ核の産出例は圧倒して多く、埋甕との密接な関係を示唆している。つまり、食料残渣としてのオニグルミ核ではなく、埋甕とセットになったオニグルミ核が考えられるのである。時代は異なるが、屋代遺跡群からは古代のオニグルミ核がモモ核といっしょに祭祀遺構と周辺から多量に産出しており、モモ核と同様に食用としてのオニグルミ核だけでなく、燃焼による割れ方によって占うという利用の可能性があった。埋甕の中から検出されたオニグルミ核はすべて炭化したものであり、人との精神的なかがわりが十分に推測されるのである。もっとも、埋甕そのものが何であるのか、何のための容器であるのかが一方では検討されなければならない。

一方、住居内での炭化種実類が多様であることも注目される。クリやオニグルミのほかキハダやアカザ属なども食料植物として取り上げられるものであるが、そのことより、こうした多様な植物群が住居から炭化種実類として検出されることがおもしろい。すなわち、居住空間の中での住居がどのようなものであったのかを考える上で興味深い。調理中か食事中の食料がたまたま炉に落ちて残りえたのか、何らかの意図で炭化して残りえたのかは問題となるところである。こうした問題を明らかにするには、住居内での産出状況が捉えられる必要があるだろう。多量の堆積物から植物遺体群を検出するだけでなく、どのような産出状況を示すのかを捉える方法を工夫しなければならない。

環境復元は、まだ、別々に実施された遺跡発掘調査と自然科学分析の総合というレベルにとどまっている。というより、遺跡発掘調査と自然科学分析が一体であることによって達成されるべきところを、あえて切り離し、分担していることによって、人の活動の中身を切り刻んでいるようにさえ思われる。検出された植物遺体群を同定するだけでは見えてこないことが多々あるのである。もちろん植物遺体群だけにかぎったことでなく、環境復元や人と環境のかかわりの読み解きは、取り上げられた遺体群から始まるのではなく、遺体群をもつ遺構や堆積物を観察することから始まる。更埴条里遺跡・屋代遺跡群の縄文時代から中世・近世をとおしての環境史は、人を主体に据えたときの、人と深くかかわる環境要素についての読み解きが十分でないのは、そのあたりに反省すべき点があるからだろう。

参考文献

- 辻 誠一郎・小杉正人・遠藤邦彦・宮地直道・南木睦彦・能城修一 1987 「川口市赤山陣屋跡遺跡をとりまく古環境」『赤山・古環境編』川口市遺跡調査会編。
- 辻 誠一郎・南木睦彦・能城修一・鈴木三男・吉川純子・橋屋光孝 1986 「東京都中里遺跡の縄文時代以降の古植生」『中里遺跡：遺跡と古環境2』東北新幹線中里遺跡調査会編

2 縄文時代の環境と開発

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻本 崇夫

屋代遺跡群・更埴条里遺跡、窪河原遺跡の土地利用変遷に関して、現段階で判明していることを表4にまとめた。今回は、縄文時代を中心とした部分について述べる。

縄文時代の土地利用 縄文時代は、河川作用の影響が活発であり、氾濫を繰り返しながら自然堤防Ⅰが形成された時代である。自然堤防Ⅰには、土坑や焼土など生活の痕跡が残されており、洪水の合間に一時的な生活の場として利用していたと考えられる。特に、縄文時代中期に相当するXIV層～XII-2層は、自然堤防の高い場所（屋代遺跡群④・⑤・⑥区）を中心に集落が営まれるようになる。このことから、自然堤防や流路が固定化してきたものと考えられる。縄文時代後期になると、再び河川の活動が活発になり、氾濫の影響をうけるようになる。この傾向は縄文時代晩期まで続き、自然堤防Ⅱが形成される。なお、縄文時代後・晩期～古代の時期は、気候が悪化し冷涼・多雨になったことが各種の調査成果で明らかにされており、古気候学的には「ネオグレイシェイション」(Denton and Karlen 1973)、日本では「弥生の小海退」と呼ばれている。

弥生時代・古墳時代の土地利用 弥生時代には自然堤防Ⅰが安定したため、更埴条里遺跡が立地する場所は後背湿地化する。そのため、表土が植生に覆われて土壌化し、VI層が形成される。低湿地にはヨシなどの水生植物からなる湿地が、自然堤防上にはタケ亜科やススキなどのイネ科草本やクルミ、ケヤキなどの河畔林がそれぞれ成立していたとみられる。このような土地条件の中で、自然堤防上には集落が、後背湿地は水田が形成されている。VI層より上位で、イネ属の植物珪酸体が高率で検出されるようになることから、弥生時代の比較的早い段階から稲作が始まった可能性がある。しかし、明確な水田遺構が見つかっていない、その様態に関しては不明な点が多い。弥生時代中期に入ると、自然堤防縁辺部での河畔林（ケヤキなど）の伐採や、水路の整備など水田開発が本格化する。古墳時代になると、水路の再編が行われ、水田開発さらに進行する。このような開発が進むなか、森林が伐採されて草地が拡大していったと考えられる。

参考文献

- Denton, G. H. and Karlen, W. 1973 「Holocene climatic variations—their pattern and possible cause.」『Quaternary Resurch.』3-7-2

第11章 結 語

2年間で3000箱 接合開始から2年間で、3000箱を越える縄文資料を整理し、報告書を刊行する。調査から4年のブランクの後の平成10年の早春、上田整理棟の倉庫にうずたかく積み上がった遺物と調査図面の山に再会したおりに先ず出たのは、重いため息であった。さらに接合・復元・図化を並行して進めていたその冬には周囲が徐々にあわただしくなってきた。上田整理棟の閉所に伴う引っ越しである。ようやく開きかけた資料を早々にしまい込み、連日輸送。篠ノ井整理棟でそれらを開いて体制が整ったのが5月。遺物の散逸を始めとする幾多の困難を乗り越えて約11ヶ月。報告書が完成した。

第2楽章で燃え尽きる 1992年の12月3日、中世の溝の底から縄文土器を発見したあの日の感動も束の間、発掘調査から報告書刊行までの道のりは変口短調の旋律で蘇る。調査は第1楽章。約60人の調査研究員が同時に2.3kmの各区へ展開し、アンダンテで進む。第2楽章は整理の基礎作業。現場の調査記録を同一レベルに高めながら統合する。そして破片でしかない遺物に名前と時間軸を与える。超アレグロである。本来ならそれらを集成して第3楽章、考察へと導かれる。できればモデラートで。しかしながらその時間は無かった。しからば第2楽章で燃え尽きよう。そのかわり調査の記録をつぶさに明示すること。これこそが地表下4メートル以下、後世の攪乱を免れた遺跡を報告する者の責務ではないか。

現位置の提示 十分な接合の時間も綿密な分類の時間もない。しからばそれを逆手にとろう。土器の型式を例としよう。遺跡からあるいは遺構から出土した土器群を「型式学的な」という名目の中で「分ける」作業がある。しかしながら当時の型式がそのような順序で推移するといった保証がどこにあるのだろうか。最近そここで指摘されているように本来同時並行で使われていたスタイルを前後に振り分けてしまっていることはないのか。本書では「攪乱のない」という前提の下に資料をありのままに、すなわち遺構に返した形で示した。そのかわり漫然と遺物の点を示すのではなく、より同時性が高い「埋土毎の位置分布」を目指した。しかしながら、無論これは勝手ないいわけにすぎず、今後、将来的に丹念な（他の縄文遺跡で成されてきたように精密な）接合作業によってこの分布図が更に生きる日を待つしかない。

縄文集落概観 屋代遺跡群は、遺跡そのものが地表下8mに向かって続く大年表である。人間活動の痕跡は縄文中期前葉以降ほぼ連続的にみられる。XIV-1b層面からは五領ヶ台II式土器の中でも新しい段階に属する22軒の住居跡が検出された。短期間の居住ではあったものの、住居外周には周堤が検出され、土坑群や廃屋墓を伴う集落景観が復元された意義は大きい。また、土器群も深沢系土器、東信地域を主体とする在地土器、五領ヶ台式土器が在地化した土器という組成が提示された。自然堤防が安定するXII-2層面では、中期後葉の53軒の住居跡と27棟の掘立柱建物から構成される環状集落が確認された。さらに居住区西側では80mにわたる杭列が検出され、追い込み猟を始めとする様々な機能が推測された。土器群は圧痕隆帯文土器に代表される在地系を主軸に、大木系や加曾利E系が時期的に組成比を換えながら伴う。後・晩期になると一時的な滞在地となり、主要な活動の舞台は更埴条里遺跡へと移動する。ここでは26棟の掘立柱建物が検出され、周辺から中ノ沢式、佐野式と、模倣品以外に搬入品の可能性を秘めた大洞系土器が出土した。

サケの遡った川のその先に たった一片でもいい、サケの骨と栽培植物を探して。そう言いながら採取した土は土嚢袋300に上る。整理期間1年の中で実際に篩うことができたものは、残念ながらそのうち200袋の更に一部であったが、そこから4点のサケ科の骨と24分類群の炭化種実が同定された。このような動・

植物遺体の分析によって屋代縄文人達の活動の実態を、より具体的な景観の中に位置付けることができた意義は大きい。特に屋代遺跡群の立地の背景の一つには同時に見つかったコイ科、ドジョウ科をも含めて千曲川での漁撈活動があることは間違いないだろう。またその川は、生業活動の場であると同時に、中期後葉には発汗浴の後に駆け込む聖水の場であり、さらに中期前葉から後葉、縄文晩期を通じて東北・北陸系土器に係わる情報や、石製装身具・磨製石斧などの威信材を南下させ、黒曜石や、関東圏の土器に係わる情報を北上させた交通路であった。南北の交易の中継地。屋代遺跡群の立地の背景をこの点にも求めたい。逆に屋代遺跡群から独自に発信された情報はあるのか。それこそが、例えば大木系土器に代表されるようにストレートに着地した北の情報を各地の小集落に変換分配することであったのではないだろうか。

語ったこと語り足りないこと 掲載土器の「類型」の提示、土器の系統比の算出、系統毎の土器群の鈎物・岩石量比の検討、遺構外出土の石器の分類と石材、動・植物遺存体と石器の機能の関係、土坑炉と発汗浴小屋の出自、晩期掘立柱建物の機能……。語り足りないことはあまりにも多く、それだけで数頁を費やすだろう。全遺物の詳細な検討という点では本報告書は未完である。しかながら、問題点の洗い出しという点での一応の目処を立てることはできた。そしてそのような疑問に答えるに足る遺跡であるという感触も十分掴めた。今後、遺跡の規模に即した時間をかけて、この遺跡の底知れない可能性のままに、遺跡をして語らしめていきたいと考える。それはそれとして、今はここで静かに筆を置くことにしよう。

おわりに 今、4年間の現場と、2年間の整理作業の様々な場面がよみがえる。すなわちそれは更埴・上田・篠ノ井の風景でもある。ついに梅雨の明けなかった集落主体部調査年度の夏、毎朝水浸しの地表下4メートルの現場をポンプを片手に飛び回ってくれた人達、住居の全土器をメッシュ片手に毎日毎日実測してくれた人達、1ヶ月で500箱整理の目標を達成するため防塵マスクをして倉庫にこもってくれた人達、そして慣れない凶面を休み時間も忘れて検討してくれた人達。そんな作業員さん達に囲まれて過ごすことができた。さらには、度重なる引っ越しで散逸し続けたサンプルの数度にわたる送付にも良心的に対応して下さった自然科学分析担当の先生方がいた。語り尽くせないほど多くの皆さんに支えられたからこそ、無事、調査・整理を締めくくることができたと思う。もう永遠に戻らない遺跡と、そして人々の期待と努力に報いられたかどうかは甚だ心許ないが、何よりも更埴条里遺跡・屋代遺跡群の発掘調査・整理作業に携わられたすべての皆さんの末永いご健康と、本書が何らかの形で、ふるさと信州の地域史の解明に役立つことを祈念して、つたない報告を閉じたい。



整理作業風景

報 告 書 抄 録

書 名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書							
ふりがな	こうしよくじょうりいせき・やしらいせきぐん (おおざかいせき・くほがわらいせき) じょうもんじだいへん							
遺 跡 名	更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡) — 縄文時代編 —							
巻 次	2 4							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
NO	5 1							
編・著者名	市川桂子、寺内隆夫、鳥羽英継、水沢教子、百瀬長秀							
編集機関名	長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒387-0007 長野県更埴市屋代字清水260-6 長野県立歴史館内 Tel 026-274-3891							
発行年月日	2 0 0 0 年 (平成12年) 3 月 3 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
こうしよくじょうりいせき 更埴条里遺跡	なかのけんこうしよくしやしろ 長野県更埴市屋代	20216	29	36°31'50"~ 36°32'20"	138°8'30"~ 138°8'40"	1991~1993	70,000	上信越自動車道 建設に伴う事前 調査
やしらいせきぐん 屋代遺跡群	こうしよくしあめのみや やしろ 更埴市雨宮・屋代	20216	31	36°32'20"~ 36°32'50"	138°8'30"~ 138°8'40"	1991~1994	46,000	
おおざかいせき 大 境 遺 跡	更埴市屋代 (屋代遺跡群内)	20216	31-13	36°32'45"	138°8'35"	1993	500	
くほがわらいせき 窪河原遺跡	更埴市雨宮 (屋代遺跡群内)	20216	31-17	36°32'50"~ 36°33'00"	138°8'25"~ 138°8'45"	1990、1993 ~1994	20,000 上信越道 5,500 中央道	
所収遺跡名	立 地	種 別		時 代	主 な 遺 物		特 記 事 項	
更埴条里遺跡	千曲川の後背湿地 I群	滞在地		縄文時代 後期~晩期	土器・石器		晩期 ・佐野式併行期の短期滞在地	
屋代遺跡群 (含む大境遺 跡)	千曲川の自然堤防 I群	集落		縄文時代 前期~晩期	土器・土製品・石器・石 製品・骨角器		中期前葉 ・五領ケ台II式併行期の集 落 中期後葉 ・大木9a・加曾利EII ~EIV式併行期の環状集 落	
窪河原遺跡	千曲川の自然堤防 II群	—		—	—		縄文時代対応層なし	

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

報告書No.	書名	収録遺跡	刊行年
1	長野線1—岡谷市	大久保B 大洞 中島A・B他	1986
2	長野線2—塩尻市1	御堂垣外 上木戸 吉田向井 他	1987
3	長野線3—塩尻市2	吉田川西	1988
4	長野線4—松本市1	総論	1989
5	長野線5—松本市2	神戸 上二子 中二子	1988
6	長野線6—松本市3	下神	1989
7	長野線7—松本市4	南栗	1989
8	長野線8—松本市5	北栗	1989
9	長野線9—松本市6	三の宮	1989
10	長野線10—松本市7・豊野町	北方 上手木戸他	1988
14	長野線11—明科町	北村	1993
15	長野線12—坂北村・麻績村	向六工 古司 子尾入他	1993
16	長野線13—長野市1	鳥林 塩崎城見山岩他	1994
17	長野線14—長野市2	鶴前	1994
26	長野線15—長野市3	石川条里	1997
22	長野線16—長野市4	篠ノ井遺跡群	1997
11	上信越1—佐久市1	下茂内	1991
12	上信越2—佐久市2	木戸平A 吹付 栗毛坂遺跡群 西赤座 枇杷坂遺跡群他	1990
13	上信越3—長野市1	大室古墳群	1992
27	上信越4—長野市2	松原—縄文時代—	1998
36	上信越5—長野市3	松原—弥生・総論—	1998~2000
53	上信越6—長野市4	松原—古代・中世—	2000
20	上信越7—長野市5	北平 大星山	1996
44	上信越8—長野市6	村東山手	1999
43	上信越9—長野市7	小滝 北の脇 前山田	1999
47	上信越10—長野市8	川田条里	2000
45	上信越11—長野市9	春山B 春山	2000
37	上信越12—長野市10	榎田	1999
24	上信越13—小布施町・中野市1・2	飯田古屋敷 玄照寺跡 がまん淵 清水山窯他	1997
28	上信越14—中野市3・豊田村	牛出 葺山 風呂屋 大谷地 八号堤 対面所 飛山他	1998
48	上信越15—信濃町1	旧石器時代 日向林B・A 七ツ栗 大平B	2000
49	上信越16—信濃町2	縄文時代—近世 星光山荘A・B 西岡A他	2000
38	上信越17—佐久市3・小諸市1	栗毛坂遺跡群 長土呂遺跡群 前田 宮ノ反A遺跡群他	1999
39	上信越18—佐久市4・小諸市2	芝宮遺跡群 中原遺跡群	1999
52	上信越19—小諸市3	岩下 三田原 郷土他	2000
40	上信越20—東部町	真行寺遺跡群 桜畑 森下 中原他	1999
41	上信越21—上田市・坂城町	陣馬塚古墳 東平古墳他	1999
25	上信越22—更埴市1	清水製鉄 大穴	1997
21	上信越23—更埴市2	屋代遺跡群出土木簡	1996
51	上信越24—更埴市3	更埴条里 屋代遺跡群—縄文時代編—	2000
29	上信越25—更埴市4	更埴条里 屋代遺跡群—弥生・古墳時代編—	1998
42	上信越26—更埴市5	更埴条里 屋代遺跡群—古代1編—	1999
50	上信越27—更埴市6	更埴条里 屋代遺跡群—古代2・中世・近世編—	2000
54	上信越28—更埴市7	更埴条里 屋代遺跡群—総論編—	2000
30	新幹線1—佐久市他	県 金井城 砂原 中平田中島他	1998
31	新幹線2—上田市・坂城町	国分寺周辺遺跡群 風呂川古墳 開畝 弥勒堂他	1998
32	新幹線3—更埴市	更埴条里 屋代遺跡群	1998
33	新幹線4—長野市1	篠ノ井遺跡群 石川条里 築地 於下 今里	1998
34	新幹線5—長野市2	浅川扇状地遺跡群 三才	1998
35	国道18号線(野尻バイパス)—信濃町	貫ノ木 西岡A	1998
23	あずみの公園1—穂高町	穂高古墳群	1997
18	県道長野大町線(オリンピック道路)—美麻村	千見 米山	1994
19	県道中野豊野線(オリンピック道路)—中野市	七瀬 栗林	1994
46	国道403号(土口バイパス)—更埴市 蓼科ダム	屋代遺跡群 蓼科ダム埋蔵文化財発掘調査報告書	2000

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 51

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 24

—更埴市内 その3—

更埴条里遺跡・屋代遺跡群

(含む大境遺跡・窪河原遺跡)

—縄文時代編—

本文

発行 平成12(2000)年3月31日
発行者 (財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007 更埴市屋代字清水260-6
長野県立歴史館内
TEL 026-274-3891
FAX 026-274-3892
印刷 信毎書籍印刷株式会社

付図1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群全体図および基本土層図

